

NHK放送予定(平成21年1月~2月)

- NHK-FMラジオ能楽鑑賞(毎週日曜日7時15分~8時)
1月25日 楽謡「鉢木」(再)金春流
2月1日 楽謡「源氏供養」親世流
2月8日 楽謡「善知鳥」宝生流
2月15日 楽謡「隅田川」金春流
2月22日 楽謡「屋島」(再)親世流
教育テレビ(午後3時~午後5時)
1月25日 狂言「土筆」大蔵流
狂言「箕被」和泉流
能「西行桜」親世流 梅若玄祥(六郎改め)ほか

演能カレシダ

名古屋能楽堂

(能・狂言演能関係) (TEL 052-231-0088)

- [平成21年1月]
24日(出) 万作を 見る会 (有料)
25日(日) 名古屋宝生会定式能 (有料)
31日(出) 宝生流第二十代宗家継承披露能 (有料)
名古屋城本丸御殿復元祝賀能 (有料)
[2月]
1日(日) 青陽会定式能(番組②面) (有料)
7日(出) 現代狂言Ⅱ名古屋公演能 (有料)
8日(日) 名古屋親世会定例公演(番組②面) (有料)

能楽の友

発行能楽の友社
名古屋千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393
購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円

観世寿夫記念法政大学能楽賞

浅井文義氏受賞 トーマス・ヘヤ氏

法政大学(増田寿男総長)は、一九七九年(昭和五十四年)に「観世寿夫記念法政大学能楽賞」を設け、すでに二十九回の贈呈

を重ねているが、平成二十年も各方面の識者の推薦による候補者について、選考委員(徳安彰法政大学国際学術支援本部担当専務理事、野村萬、みなもところ、松本雅、表章、西野春雄、山中玲子)が慎重に審議した結果、第三十回の受賞者として、親世流シテ方・浅井文義氏、能楽研究者のトーマス・ヘヤ氏を決定した。両氏の受賞理由は次のとおり。

浅井文義氏

[贈呈理由] 近年の氏は、2006年12月の(鶴鳴小町)、2008年12月(定家等、シテとして優れた舞台成果を見せるだけでなく、地頭としても多くの舞台に欠かせない存在になっている。氏が地頭を勤める地謡はよく筆率がとれ、作品の興行きを感じさせるが、特に2008年6月の(松風)

河村総一郎氏

[贈呈理由] 氏は16歳での入門以来60年、誠実・着実に石井流大鼓の筆遣に精進し、東京の大鼓とは異なる柔らかな打音や軽みなど、石井流の流泉をよく守り伝えてきた。東京や関西での活躍の場も多いが、名古屋での秘曲・大曲上演には欠かせない難子方として多くの能の成功に寄与しており、長年にわたり名古屋の能楽界を支えてきた功績は大きい。「催花賞」は法政大学が服部廉治氏からの親世新九郎家文庫受贈を記念して、一九八八年(昭和六三年)四月に「服部記念法政大学能楽振興基金」を設け、同基金

催花賞

河村総一郎氏受賞

法政大学は、第十九回の催花賞の決定に当たって、各方面の識者から推薦された候補者について、法政大学能楽研究所と能楽賞選考委員とが慎重に選考した結果、受賞者として、大鼓方・河村総一郎氏を決定した。

トーマス・ヘヤ氏

[贈呈理由] 氏の近著「Seibei Performance Notes (Collected University Press, 2008)」は、日本

日本能楽会公演 168日

能楽協会名古屋支部主催 平成21年度の演能予定

能楽協会名古屋支部による平成21年度の演能予定は次のとおりである。
◎名古屋能楽堂定例公演
能・狂言でたどる天下統一の道

- (前編)平成21、22年度2カ年
6月6日(出) 午後2時開演 市
7月5日(日) 午後2時開演 市
民能楽セミナー
9月6日(日) 初秋能・2部制

- 第1部 午前10時開演
第2部 午後2時開演
10月23日(金) 午後6時30分開演
12月13日(日) 12時30分開演
1月3日(日) 午後2時開演
3月6日(出) 午後2時開演
◎名古屋能楽堂芸術鑑賞会
7月2日(休)3日(金) 午前9時30分~午後1時30分
12月1日(休)3日(内) 午前9時30分~午後1時30分
◎親子能楽教室
8月4日(休)5日(休)
◎若鷺能(能楽後継者育成会および

- 協会)の若手の研究会)
6月20日(出) 午前9時30分開演
会・午後1時若鷺能
◎日本能楽会名古屋公演
8月16日(日)
◎豊田市中学生のための能楽鑑賞教室
7月30日(休)31日(金) 宝生流▽8月4日(休)5日(休)親世流▽8月6日(休)7日(金)夢多流
◎小牧山新能
9月5日(出)

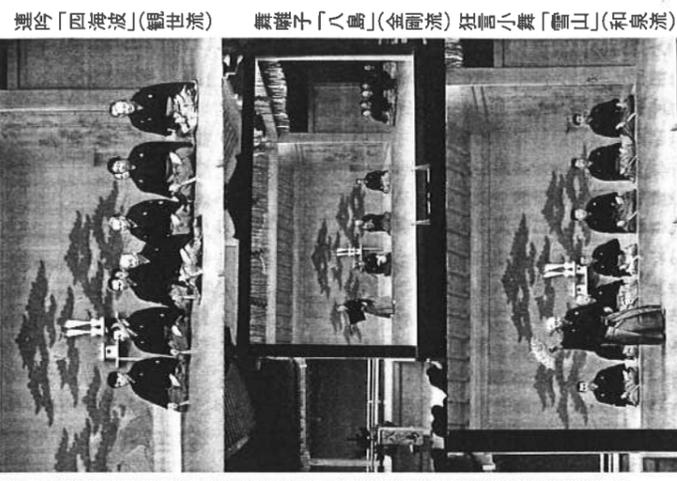
新年 新 賀 謹

Table with 4 columns and 10 rows listing various clubs and members. Columns include club names like '名古屋観世会', '幽花会', '梅若吉之丞', etc., and member names like '片山九郎右衛門', '大槻文蔵', '武田友志', etc.

名古屋城本丸御殿 復元着工記念 新春謡初め 2日名古屋能楽堂で開催

名古屋城本丸御殿復元着工を記念して、名古屋市文化振興事業団(名古屋能楽堂)、能楽協会名古屋支部では、新春一月二日(金)午後二時から名古屋能楽堂で「新春謡初め」を催し、シテ方五流、狂言和泉流により、舞囃子、連吟、小舞などにまやかに平成21年の門出を祝った。

【写真】杉浦賢次氏撮影



連吟「四海波」(観世流) 舞囃子「八鳥」(金剛流) 狂言小舞「雪山」(和泉流)

演能案内

青陽会定式能(第53期)

二月一日(日) 午前十二時半開演
名古屋能楽堂

仕舞 老松 近藤 幸江 地謡 今久野 三津子
星野 隆子 美和 希
三村 輝希

能 胡蝶 前野 郁子 高安 勝久 帆 嵐一 児頭 義命
物置 後藤 孝一郎 竹市 学

後見 久野 隆子 地謡 久野 隆子 武田 大志
久野 隆子 加賀 敏彦
久野 隆子 加賀 敏彦

仕舞 難波 八神 孝充 松山 幸親
龍田 須部 甫 地謡 古橋 正邦
船井 慶 武田 邦弘 祖父江 修一

狂言 末廣がり 佐藤 融 今枝 郁雄
井上 敬次 後見 井上 敬次

能 雲林院 清次 一政 杉江 元 河村 眞之介 加藤 洋輝
橋本 幸 柳原 富司 忠 大野 誠
間 佐藤 友彦

後見 前野 郁子 地謡 八神 孝充 近藤 幸江
梅田 邦久 武田 大志 梅田 大志 祖父江 修一
武田 大志 梅田 大志 祖父江 修一

〔附祝言〕 主催 青陽会
当日券三〇〇〇円、学生一〇〇〇円
取り扱いニケクトびあ TEL05770112999
Pコード7880112999
名古屋能楽堂 出演教師宅

予 告 予
第 二 回 平成21年 第53期 予定
五月九日(土)
川 星野 隆子
第 四 回 十二月十九日(土)
紅葉狩 八神 孝充
野 守 武田 大志 松山 幸親

名古屋観世会定例公演能

二月八日(日) 十二時半開演
名古屋能楽堂

素謡 神歌 観世 芳伸 八神 孝充 地謡 高橋 正邦
梅田 大志 高橋 正邦

能 高砂 清次 一政 久野 隆子 河村 眞之介 加藤 洋輝
高安 勝久 柳原 富司 忠 大野 誠
橋本 幸 井上 敬次

後見 小島 一英 地謡 吉沢 久 梅田 大志
松山 幸親 祖父江 修一

狂言 宝の笠 興 井上 敬次 太郎 尊者 今枝 郁雄
スッパ 佐藤 友彦
後見 大野 弘之

仕舞 笠之段 武田 邦久 地謡 吉沢 久
春日龍神 古橋 正邦 武田 大志

能 楊貴妃 観世 清和 河村 眞之介 加藤 洋輝
福王 茂十郎 大倉 次郎 藤田 六郎 兵衛
間 佐藤 融

地謡 八神 孝充 古橋 正邦
加賀 敏彦 観世 芳伸
清次 一政 久野 隆子
(終演五時頃)

附 祝 言 主催 名古屋観世会
事務所 名古屋市昭和区台町2-16-5
電話/FAX(052)84114632

〔入場料〕
年間指定席(年五回分) 三〇〇〇円
年間自由席(年五回分) 二〇〇〇円
当日券六〇〇円

新年 祝

怡楽会 山階彌右衛門
観芳会 星野路子
観世芳伸

藤井 徳三

上田観正会能楽堂
上田観正会 TEL0781-691549

上田 貴弘 大 介 威司 弘

大垣浦声会 稽古場 大垣市佐馬町大垣別院
電話〇五八四七三三三三

浦田 保利 浦田 保浩 浦田 保親
〒606-0014 京都市左京区鴨芝町五六
電話〇七五六一七〇三〇

名古屋修 梅若 修一

久田観正会 松音会
久田 勤 田 舞 一 郎 鷗
前野 郁子 星野 路子
〒460-0001 名古屋市中区二丁目3-1
電話〇五二七〇五二八五

泉 泰 孝
〒100-0001 東京都杉並区宮前四一九四
電話〇三三三三二八八〇番

泉 雅一 郎
〒201-0001 東京都狛江市東野山四六六八
電話〇三三四八八一四八五番

春 鶯 会 梅若 善高
〒500-0004 豊中市新千里南町三丁目18-12
電話〇六六八三二七八五四
〒106-0003 東京都杉並区高円寺南4-27-7
電話〇三三三三二二一〇五七〇

梅 春 会 井戸 和男 良 祐
〒545-0004 大阪市阿倍野区文の里3-16-17
電話〇六六六二二二二一九

笙月会 中川 雅章
〒506-0001 長狭市地蔵寺町八ノ二九
電話〇七五七〇六三〇番

賀水会 桑名賀水会 名鉄百貨店友の会 加賀 敏彦
〒463-0001 名古屋市中区森三丁目七〇九
電話〇五二七七一八四九番

名古屋淡交会 三橋 岡 慈 観
三 交 会 久田 三津子
〒460-0001 名古屋市中区二丁目3-1
電話〇五二七〇五二八五

松 盛 会 小松 勝 憲
松舞台
〒511-0001 三重県桑名市西別所一〇六二の五
TEL:FAX〇五九四二三四五八二

初 陽 会 武田 宗 和

舞謡会 橋 岡 久太郎
山上小宮半松吉塚小宮山島荒坪
岸原倉内澤原田田出下岸田木内 苅路之
健美 重 要友三郎亮之
登一富樹健章彦功吉

洗心会 奥村 富久子
〒690-0001 京都市左京区永観堂西二〇
電話〇七五七七二〇七六七番

観修会 祖父江 修一
〒501-0001 多治見市日ノ出町2の2
電話〇五七三三二二二五六

当地の各流儀・流派・結社 社中の消息を辿る

竹尾 邦太郎

一「名匠鑑賞能」④

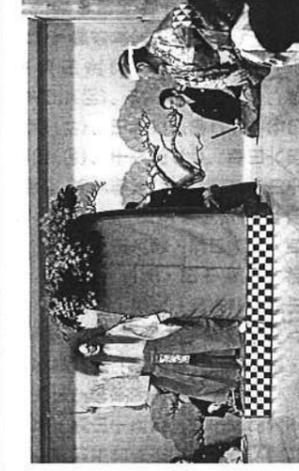
第二回は昭和二十九年一月七日、金春と観世流の重鎮が来演。先回が夏・七月三日だったので、此の年は春・秋に加え年三回の公演。番組は舞子「高砂」本田秀男、能「通小町」桜間昌川・龍馬・榎王茂十郎、能「鱈丸」蒼装束・梅若六郎・観世尊之・榎王茂十郎、狂言「釣狐」井上松次郎

・河村兵造、仕舞二番「井筒」山中信之「花屋クルト」山中信義、一調「女郎花」春本直治、桜間龍馬、能「文豪」龍馬片山九郎右衛門・杉浦義明(師長)片山博太郎(徳)慶次郎(龍神)、高安滋義滋、大鼓山本敬一郎。なお番組の案内に「狂言大習 釣狐を井上松次郎師お披露此曲はお能道成寺と同じ秘曲で御座います」とあるが、すれは四〇歳での披露。但し

平成二十一年一月二日、葬儀。告別式の際に配布された「偈ふ故 井上兩次郎(重兵衛)殿」と題するパンフレットの略歴には昭和十六年「釣狐(つりぎつね)」を披露、とあるが日時、催会名の記載が無く詳細は不明。
第二三回は昭和三〇年三月六日、野口兼資先生追善能、の副題のある宝生大会。番組案内に次のようにある。「能楽界の名人 野口兼資先生は、当地出身又当地宝生流研究会は明治四十四年同先生を主として設立、以来四十年間流儀の為のお披露お稽古を頂きました。御縁故深い先生で誠に残念で御座います。又本鑑賞会も毎年御披露頂きます名技を鑑賞、昨年三月末縁が当地での最後になりました次第、就而は今回 家元九郎、英雄

高師、禰子孫久師、辰巳孝、清阿師又久方なりに宝生の元老近藤乾三師、昭方松本謙三師、葛野流大敵方齋田喜兵衛師、其他在名全業師御出演でお手向け頂きます。追善大能どうか皆機御光栄、故先生のお冥福をお祈り下さいませ」
宝生流研究会については田鍋惣太郎著「小鼓茶話」に次の記述がある。「(明治)四十五年五月には宝生流研究会記念能を行い、近藤乾三、松本良の諸氏等をお招きしました。この宝生流研究会というのはその頃私と長谷川、長尾、永田の諸氏として作ったもので此会では宝生家元を初め同流の大家を順次招へいしました。これはそれ以来中絶せず今日までも続いており、

金剛流、朋の会(羽多野良子師主宰)では「五色の会 能を観る」観賞会を旧暦12月23日、岡崎市大西町の「花朋会歌舞台」で公演。金剛流宇高通成、広田幸松師らが来演。能「紅葉狩」(シテ羽多野良子・ワキ高安勝久)はじめ、狂言「井杭」(野村小三郎)仕舞「説法師」(宇高通成)が上演された。
「五色の会・能を観る」は毎年開催され、今回は10回目の記念講演で、熱心な鑑賞がつけられた。岡崎市教育委員会後援。



「写真は能「紅葉狩」川杉清賢次氏撮影」

五色の会 「紅葉狩」上演 岡崎・花朋会舞台

浅井文義氏(あさいふみよし) 観世流シテ方。1949年1月1日、大阪府生まれ。シテ方観世流職分故竹谷文二の長男。1953年(敏馬天狗)の花見で初舞台。12歳(岩船)で初シテ。高校卒業後、辨仙会に入門し、観世寿夫、八世観世鏡之丞に師事。1972年(石橋)、1977年(狸々乱)、1980年(道成寺)、1982年(翁)を披露。1980年黒テント

作業場での佐藤信演出・構成「乱拍子」をはじめ、他ジャンルとの共同作業にも早くから取り組んできた。栗谷能夫(喜多流)、櫻間金記(金春流)とともに流儀を超えた同人組織「三鈴の会」を結成し、1988年(鷹姫)、1991年の練肉工房との提携公演「水の声」、1992年(幻)、1995年(壱子みだれ髪)を上演。1997年から1998年にかけて自ら主宰の「五能之会」で、夕顔・野宮・井筒・芭蕉・定家)を連続上演。2001年には(卒都婆小町)、2006年には(鶴鳴小町)

催花賞受賞

河村総一郎氏(かわむらこういちろう)

本名・河村幸治(かわむらこうじ)。石井流大鼓方。1933年2月19日、名古屋に生まれる。2月19日、名古屋市に生まれる。1977年の(卒都婆小町)披露以来(鏡捨、鶴鳴小町、松垣・閑寺小町)をすべて勤めており、名古屋での大曲・秘曲上演には欠かせない存在。長男の大、次男の眞之介も後継者として育っている。1991年度愛知県芸術文化選奨文化賞受賞。重要無形文化財総合指定保持者。日本能楽会会員。

トーマス・ヘヤ氏

プリンストン大学教授。専攻トーマスは、日本中世文学(特に詩歌・演劇)、日本の仏教文化・思想、古代エジプトの文化等。1952年3月13日生まれ。1975年、プリンストン大学卒業。1977年、ミシガン大学にて修士、1981年同大学にて博士(D. Ph. D. Far Eastern Languages and Literatures: Japanese Literature)を

を披く。そのほか海外公演にも多く参加し、海外でのワークショップなど意欲的な活動をしている。「朋の会」主宰。重要無形文化財総合指定保持者。日本能楽会会員。社団法人辨仙会理事。社団法人能楽協会理事。

取得。1978、80年には東京芸術大学音楽学部楽理科に研究生として留学し、横道萬里雄、藤田大五郎、安福建雄、野村四郎の指導を受ける。1983、84年、国際交流基金の奨学金による来日の際は、京都の前川光長・杉和にも師事。1981年よりスタンフォード大学専任講師、准教授を経て、2001年よりプリンストン大学教授。能楽関係の主な著書としては、受賞理由となった「Zeami-Performance Notes」のほかに「Zeami's Style: The Nob Plays of Zeami Motokiyo. (Stanford University Press, 1986)等がある。プリンストン大学では実演者と組んで尺八と禪に関する講義もおこなっている。



猶惠会 熊沢 恵美子
〒465 001 名古屋市東区平和ヶ丘3-176

幸誦会 近藤 幸江
〒444 012 岡崎市鴨田本町十一番地ノ三
電話(〇五七四) 〇五五九

千早会 八神 孝充
〒464 001 名古屋市中区錦町3-60-1-201
電話(〇五二) 七六二二二〇一

恵誦会 三村 徑布
〒465 001 西尾市住吉町三十一番地
電話(〇五三) 五七二五九四番

桜月会 加藤 春枝
〒500 001 可児市鼻ヶ丘3-1-113
電話(〇五七四) 六四一三〇六

宝生流 嘉宝会
〒465 001 名古屋市昭和区川名本町二ノ五二

司安城司宝会 佐藤 耕司
〒465 001 名古屋市天白区島田二丁目三〇一
島田橋住宅二二三〇電話(〇五三) 〇七三七二

金剛流 永龍謹
〒465 001 名古屋市昭和区南秋葉三丁目17-16
電話(〇三三) 三三二二五七二番

近藤 乾之助
〒170 0002 東京都豊島区東鴨五丁三三八
電話(〇三三) 九二五二二七六番

名古屋 栗会 橋 巽会
〒150 150 東京都渋谷区東2-1-14
〒921 001 金沢市泉野町4-15-181-30121

辰巳 満次郎
〒170 0002 東京都豊島区東鴨五丁三三八
電話(〇三三) 九二五二二七六番

佐野 由 於
〒150 150 東京都渋谷区東2-1-14
〒921 001 金沢市泉野町4-15-181-30121

櫻風会 倉本 雅
〒658 001 神戸市東灘区田中町1-13-2780
電話(〇七八) 四四一五五六五番

惠美寿会 衣斐 正宜
〒465 001 名古屋市東区平和ヶ丘3-176

衣斐正宜後援会
〒465 001 名古屋市昭和区御器所3-23-19
御器所パークマンション802号
電話(〇五二) 八八二一五六〇番

宝生流 嘉宝会
〒465 001 名古屋市昭和区川名本町二ノ五二

司安城司宝会 佐藤 耕司
〒465 001 名古屋市天白区島田二丁目三〇一
島田橋住宅二二三〇電話(〇五三) 〇七三七二

金剛流 永龍謹
〒465 001 名古屋市昭和区南秋葉三丁目17-16
電話(〇三三) 三三二二五七二番

近藤 乾之助
〒170 0002 東京都豊島区東鴨五丁三三八
電話(〇三三) 九二五二二七六番

名古屋 栗会 橋 巽会
〒150 150 東京都渋谷区東2-1-14
〒921 001 金沢市泉野町4-15-181-30121

辰巳 満次郎
〒170 0002 東京都豊島区東鴨五丁三三八
電話(〇三三) 九二五二二七六番

佐野 由 於
〒150 150 東京都渋谷区東2-1-14
〒921 001 金沢市泉野町4-15-181-30121

菊扇之会 廣田 泰三
〒164 001 東京都杉並区善福寺二丁目二七二
電話(〇三六) 七六五六一四四番

廣田 泰三 能
〒164 001 東京都杉並区善福寺二丁目二七二
電話(〇三六) 七六五六一四四番

廣田 泰三 能
〒164 001 東京都杉並区善福寺二丁目二七二
電話(〇三六) 七六五六一四四番

豊嶋能の会 豊春会
豊嶋 三千春

松野恭憲能の会 松野 恭憲

宇高 通成 成
〒616 001 京都市右京区鴨堀殿町一八三
TEL〇七五(四六) 二二四八番
FAX〇七五(四六) 二六〇九八番

徳竜 成成

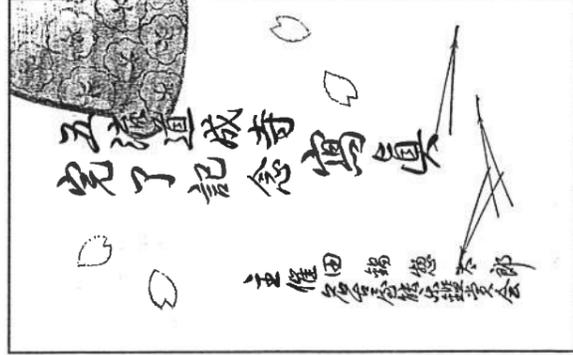
金剛流 名古屋周星会 岐阜周星会 吉川 周子
〒464 001 名古屋市中区西橋町三二六
電話(〇五三) 七六一二二二五七

シテ方金春流宗家 金春 安明
〒167 001 東京都杉並区南秋葉三丁目17-16
電話(〇三三) 三三二二五七二番

金春 信高
〒167 001 東京都杉並区善福寺二丁目二七二
電話(〇三六) 七六五六一四四番

本 田 光 洋
〒164 001 東京都杉並区善福寺二丁目二七二
電話(〇三三) 三八六二二五二番

廣田 泰三 能
〒164 001 東京都杉並区善福寺二丁目二七二
電話(〇三六) 七六五六一四四番



五流道成寺演能写真を収めた量紙

第二四回は昭和三〇年一〇月一六日、金春と親世でシテ方は一年前と同じ顔触れ。番組は舞囃子「八島」桜間龍馬、能「小袖曾我」親世喜之・梅若六郎・親世武雄・狂言小舞「田植」山脇保之・能「花旦」桜間戸川・岡治郎右衛門

さて、番組は舞囃子「竹生島」辰巳孝、能「経政」宝生英雄・高安滋郎、能「松風」見留」宝生九郎・野口禄久、松本謙三、狂言「無布流経」井上松次郎、河村丘造、仕舞「権之段」宝生九郎、一調「三井寺」田鍋惣太郎、野口禄久、能「山姥」白頭」近藤乾三・畑富次・松本謙三・義。

また、流誌「寶生」平成三年七月号に鬼頭嘉男(宝生流職分)の「幕藩時代と維新後百年の名古屋能楽界(特に宝生流)」にも次の記述がある。「四十五年に田鍋惣太郎、長尾藤造、永田虎之助の協議に依って宝生流の更なる興隆を願って他地域に見ない画期的な活躍を見せた名古屋宝生流研究会」を創立しました。本会は宗家を始め数名の師に就き、高度な素謡を限定的な会員制で稽古を戴く態勢をとり、当初野口政吉、桐谷正治、今井竹二で始まり、間もなく宗家宝生重英の年に四、五日の来名を得ました。年間十五回位の稽古日と、素謡会を年一回公開にて大いに励みになりました。当初世話役は長尾藤造、亀井市治で後に服部卯助、高橋辨三郎が交替しました。

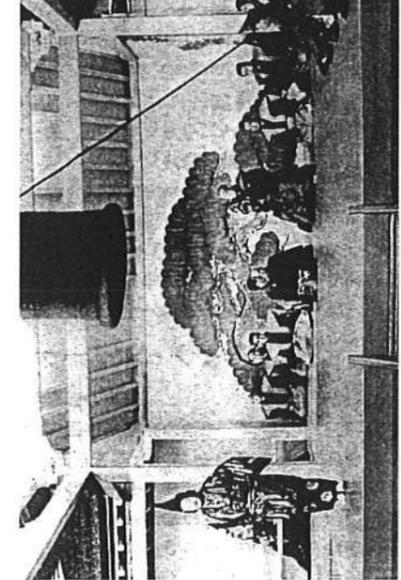
③面よりつづき) 宝生流の組織としては全国的に見ても非常に独特な存在となっております。

主催の田鍋惣太郎は「小鼓芸話」の中で喜びを次のように語っている。「熱田神宮能楽殿が落成したため道成寺が上演出来ることになりましたので、私は五流宗家を順次招聘して五流の道成寺を打つて見たいと思ひ立ちましたの

番組は能「竹生島」宝生英雄・畑富次・西村欽也、舞囃子「八島」辰巳孝、狂言「素袍落」茂山千五郎・千之丞・田中廣皓、能「蟬丸」武田光雲、野口禄久、西村弘敬、能「道成寺」宝生九郎(56)、高安滋郎(39)、アと茂山千五郎(60)、千之丞(33)、藤田六郎兵衛(48)、田鍋惣太郎(72)、谷口豊代三(59)、奥頭喜太郎(31)、地頭武田光雲(61)、後見辰巳孝(41)、鐘後見宝生英雄(36)。

第二五回は昭和三二年三月四日、五流道成寺の第一回。番組案内に「謹啓 皆様よりお協力お援助により能楽殿立派に落成お慶びに存じます。就かねて計画の五流道成寺いよいよ各楽師のお快諾を頂き第一回を左記催能の次第とうかお後援お知己お快諾を願上ます。宝生流の道成寺は大正十一年五月二十一日 宝生別会、それ以後同流の道成寺は当地では一度も出ず今回三十四年目で御座います。尚ほ狂言素袍落 道成寺間は京都・茂山十五郎、同千之丞父子の出演で御座居ます」とある。

第二二回は昭和三二年一月二七日、五流道成寺・第四回は金剛流で京都から一門が大挙して来演。能「竹生島」女体」豊嶋弥左衛門・種田治郎、高安滋郎、仕舞二番「山姥」豊嶋訓三「花籠」今井幾三郎、舞囃子「盛久」山田仁三郎、能「道成寺・古式」金剛藤(33)、岡治郎右衛門(59)、アと三宅藤九郎(56)、和泉保之(20)、杉市太郎(68)、田鍋惣太郎(73)、谷口勝三(52)、小寺金七(58)、地頭今井幾三郎(44)、鐘後見種田治郎(52)、狂言「木六駄」三宅藤九郎・井上松次郎(42)、佐藤弘三郎(65)、藤田六郎兵衛(48)、田鍋惣太郎(72)、飯島在六(46)、前川善雄(41)、地頭梅若武久(46)、後見五木田武計(35)、鐘後見梅若六郎(49)。



田鍋惣太郎氏主催の「五流道成寺」(第一回)、シテ宝生九郎師

第二七回は同年一〇月一四日、五流道成寺・第三回は金春流、親世流の能一番と仕舞二番を挟む。舞囃子「養老」桜間道雄、能「放下尊」桜間戸川・本田秀男・高安滋郎、狂言「茶壺」大蔵弥太郎、茂山幸四郎・圭五郎、能「班女」孝、能「清経」音取」宝生英雄・畑富次・高安滋郎、狂言「鶴賀」井上藤秀雄・友彦、能「隅田川」宝生九郎・辰巳孝門子方松本謙三・義、能「土蜘蛛」大平十喜雄・野口禄久・松本謙三、金沢から大蔵飯島佐六。

第二六回は同年五月三日、五流道成寺・第二回は親世流。番組は能「小袖曾我」梅若武久、梅若春之、五木田武計、狂言「隠狸」河村丘造、井上松次郎、能「頭取」梅若六郎・宝生岡 仕舞二番「笠之段」親世武雄「熊坂」永島誠安滋郎、能「道成寺・三度」次第、無鬘崩・赤頭替装束」親世喜之(54)、宝生弥一(48)、アと井上松次郎(42)、佐藤弘三郎(65)、藤田六郎兵衛(48)、田鍋惣太郎(72)、飯島在六(46)、前川善雄(41)、地頭梅若武久(46)、後見五木田武計(35)、鐘後見梅若六郎(49)。

第二八回は昭和三二年一月二七日、五流道成寺・第四回は金剛流で京都から一門が大挙して来演。能「竹生島」女体」豊嶋弥左衛門・種田治郎、高安滋郎、仕舞二番「山姥」豊嶋訓三「花籠」今井幾三郎、舞囃子「盛久」山田仁三郎、能「道成寺・古式」金剛藤(33)、岡治郎右衛門(59)、アと三宅藤九郎(56)、和泉保之(20)、杉市太郎(68)、田鍋惣太郎(73)、谷口勝三(52)、小寺金七(58)、地頭今井幾三郎(44)、鐘後見種田治郎(52)、狂言「木六駄」三宅藤九郎・井上松次郎(42)、佐藤弘三郎(65)、藤田六郎兵衛(48)、田鍋惣太郎(72)、飯島在六(46)、前川善雄(41)、地頭梅若武久(46)、後見五木田武計(35)、鐘後見梅若六郎(49)。

で、兼々準備いたしその第一回を三月四日宝生九郎氏のシテで勤めました。宝生流の道成寺は大正十一年名古屋では上演されていなかったという事と立派な能舞台での本格的演能であるとの理由で非常な好評を得まして見所は立錫の余地もありませんでした。殊に新しい舞台は音響も照明も申し分なく、皆様の御期待に十分に添う事が出来ました事を喜んでおります」と。

第二九回は同年三月三日、恒例の宝生大会。舞囃子「高砂」辰巳孝、能「清経」音取」宝生英雄・畑富次・高安滋郎、狂言「鶴賀」井上藤秀雄・友彦、能「隅田川」宝生九郎・辰巳孝門子方松本謙三・義、能「土蜘蛛」大平十喜雄・野口禄久・松本謙三、金沢から大蔵飯島佐六。

第二八回は昭和三二年一月二七日、五流道成寺・第四回は金剛流で京都から一門が大挙して来演。能「竹生島」女体」豊嶋弥左衛門・種田治郎、高安滋郎、仕舞二番「山姥」豊嶋訓三「花籠」今井幾三郎、舞囃子「盛久」山田仁三郎、能「道成寺・古式」金剛藤(33)、岡治郎右衛門(59)、アと三宅藤九郎(56)、和泉保之(20)、杉市太郎(68)、田鍋惣太郎(73)、谷口勝三(52)、小寺金七(58)、地頭今井幾三郎(44)、鐘後見種田治郎(52)、狂言「木六駄」三宅藤九郎・井上松次郎(42)、佐藤弘三郎(65)、藤田六郎兵衛(48)、田鍋惣太郎(72)、飯島在六(46)、前川善雄(41)、地頭梅若武久(46)、後見五木田武計(35)、鐘後見梅若六郎(49)。

第二七回は同年一〇月一四日、五流道成寺・第三回は金春流、親世流の能一番と仕舞二番を挟む。舞囃子「養老」桜間道雄、能「放下尊」桜間戸川・本田秀男・高安滋郎、狂言「茶壺」大蔵弥太郎、茂山幸四郎・圭五郎、能「班女」孝、能「清経」音取」宝生英雄・畑富次・高安滋郎、狂言「鶴賀」井上藤秀雄・友彦、能「隅田川」宝生九郎・辰巳孝門子方松本謙三・義、能「土蜘蛛」大平十喜雄・野口禄久・松本謙三、金沢から大蔵飯島佐六。

第二六回は同年五月三日、五流道成寺・第二回は親世流。番組は能「小袖曾我」梅若武久、梅若春之、五木田武計、狂言「隠狸」河村丘造、井上松次郎、能「頭取」梅若六郎・宝生岡 仕舞二番「笠之段」親世武雄「熊坂」永島誠安滋郎、能「道成寺・三度」次第、無鬘崩・赤頭替装束」親世喜之(54)、宝生弥一(48)、アと井上松次郎(42)、佐藤弘三郎(65)、藤田六郎兵衛(48)、田鍋惣太郎(72)、飯島在六(46)、前川善雄(41)、地頭梅若武久(46)、後見五木田武計(35)、鐘後見梅若六郎(49)。

翌22年、喜多長世が名古屋で「道成寺」を舞った。能力はオセが幸四郎、アトは彼であつた。もうこの時、釣鐘をつるす天井の鎖が見えなくなつてた。

田鍋惣太郎が念願の五流道成寺上演の壮挙は能楽界に大きな影響を与え、立派な成果を得て無事完了、シテ方五流の記念の舞台写真五葉を取めた量紙(写真)が残る。

以下次号

昭和二年、喜多長世が名古屋で「道成寺」を舞った。能力はオセが幸四郎、アトは彼であつた。もうこの時、釣鐘をつるす天井の鎖が見えなくなつてた。

田鍋惣太郎が念願の五流道成寺上演の壮挙は能楽界に大きな影響を与え、立派な成果を得て無事完了、シテ方五流の記念の舞台写真五葉を取めた量紙(写真)が残る。

以下次号

昭和二年、喜多長世が名古屋で「道成寺」を舞った。能力はオセが幸四郎、アトは彼であつた。もうこの時、釣鐘をつるす天井の鎖が見えなくなつてた。

田鍋惣太郎が念願の五流道成寺上演の壮挙は能楽界に大きな影響を与え、立派な成果を得て無事完了、シテ方五流の記念の舞台写真五葉を取めた量紙(写真)が残る。

以下次号

昭和二年、喜多長世が名古屋で「道成寺」を舞った。能力はオセが幸四郎、アトは彼であつた。もうこの時、釣鐘をつるす天井の鎖が見えなくなつてた。

田鍋惣太郎が念願の五流道成寺上演の壮挙は能楽界に大きな影響を与え、立派な成果を得て無事完了、シテ方五流の記念の舞台写真五葉を取めた量紙(写真)が残る。

以下次号

謹

賀

新

年

高安勝久

福王茂十郎
知和登幸郎

和谷栄太朗

喜多流
和谷衡市

長田驍後援会

伊勢金春会
宇仁田吉邦

春敲会
名古屋春茶会
金春
廣瀬春穂
廣瀬雅瑞
高弘

桂会
後藤孝一郎
嘉津幸

幸友会
涛華能
福井四郎兵衛
福井良治
福井聡介

藤田舞台
藤田六郎兵衛

清水利宣

宝生欣哉

橋本宰樹

西村同門会
飯富雅介
杉江元正
相元正樹

◆秋の舞台から(その二)◆

「久田勘鷗の会 二十回記念特別公演」
「第二九回 名古屋金春会」
「名古屋能楽堂定例公演」

竹尾邦太郎

「小鍛冶」 勅諭で御剣を打つよう命じらる勅使(ワキツレ正樹)に、優れた相棍が居らず当惑する小鍛冶宗近(ワキ元)、苦しい時の神頼み、と稲荷明神へ赴けば、既に祈願の趣を承知する口ありけな置子(シテ勸吉郎)が出現(直面・黒頭・襟浅黄・赤地縹着付・濃緑水衣)、和漢の名剣の奇特を説く地(芳伸・直長・義高ら)が迫り、就中、日本武尊が草薙剣の靈験を誇示するクセ。シテは未だ中学生、これまで土方を数多く勤め舞台脚は満点、六月には能楽後継者育成研修発表会で「小鍛冶」は半能を勤めてをり、前シテの輩も心得たもの、へ導は剣を抜いて、と立つと、へ四方の草を、と薙き払う敏捷さ、へ夕雲の稲荷山、できりく小廻りのあとのへ行方も知らず、と静かに構態を往くところなど心憎い。

後シテ稲荷明神、直面・赤頭・狐戴・紅入段厚板着付・法被(袖折込)・半切の姿。鍛冶増上、ワキ宗近の相棍へ打ち重ねたる鍵の音、に弾かれた様に飛び下りるや頭取ルところ、如何にもへ天地に響きて聴しや、への風景、鮮やかだった。今後、器用徴乏に躰ち入らぬよう更なる精進を期待したい。初面の舞台が待ち遠しい。(57分)

「砧」 訴訟で国を留守に在待女夕霧(ツレ徑左)を遣る葺屋来(ワキ勝久)。夫の帰国を知り暮る思いの北ノ方(シテ三津子)は待女との掛合に愚痴を奪い、へ郎の住居に秋の暮、と思いを吐露する初同(徳三・芳伸・貴弘ら)、シラル北ノ方に待女はただ見守るだけ。と、そこへ、北ノ方

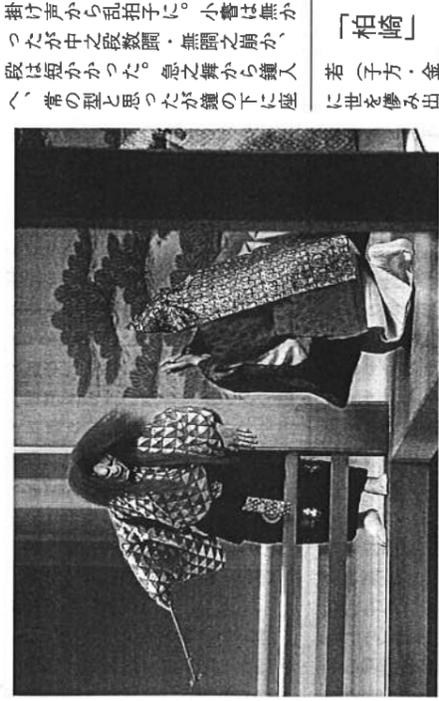
と敬称される身には無縁の、普段は気にも止めなかつた物音、それが里人の構つ砧と教えられれば、そこは高貴の教養人たる北ノ方、唐土の故事に思いを致し、自身も砧を構つと言い出すところ、「いや砧など浅しき者の業」と進言する待女にも止められない頑なな気位の高さ、前場の出だしが惹きつけ、物着あと、眼目の砧之段は、へこれは東の空なれば、とワキ柱上を、へ西より来る秋の風の、で兼へ見ると、へ君が其方に吹けや風、で作物(砧)へ指して拍子一ツ踏むところ、思いの丈を風に托す心情も切ない。虫の音に物の哀れを知るのも上流階級の案業、砧之段のキリへほろくはらへ、と待女と構つ砧に落ちる涙に心憎も尤進する。そこへ漸されるこの年の暮にも御下りあるまじき、の便り、クドキの懸帳はへ変り果て給ふそや、の双シテリに心摩極まる心臓麻痺の死。哀調を帯びた重厚な地話がシテを支え、シテも好演。

後シテは面深井から泥眼・襟白二・浅黄大口・縹散シ文白綾壺折。成俣するキリ前、夫の不実を厳しく責め、へ思ひ知らずや怨めしや、と夫に詰め寄るところ、凄まじい気魄に然もありなんを思わせた。トメ拍子は踏まなかつた。(1時間39分)

「鬼瓦」 訴訟無事着着して帰国の叶った大名(シテ友彦)、太郎冠者(アト弘之)を伴い暇乞に因幡業師に参詣。そこで国許にも御室を、の思いで入念に普請を観察するうちに目に付いた高い所の黒い物。鬼瓦と教えられ、国許の妻に「その依ちや」と懐かしさに泣き出す大名。そう言えはとこやらが、と笑

いをこらえて遠慮がちに同意する太郎冠者が可笑しければ、「どこやらが似たといふ事があるものか」と剣突を食らわす大名の、丸つきりそのままではないか、の口吻が可笑しさを増幅、シテとアトの持ち味が小品ながら充分に出た好舞台だった。(17分)

「道成寺・赤頭」 住僧(ワキ勝久) 欄角帽子・襟浅黄・白綾着付・白大口・紫水衣・小刀の俵容に自から風格。鐘の供養に急ぐ白拍子(シテ勸助)は面若女・襟白赤・浅黄地金鱗箔着付・黒地紋紅縹箔・腰巻・紅入唐織襷折の姿。出て直ぐ三ノ松、一旦止まり、何事も案する心から静かに運出せば、既にして胸を固めた気配が。道行へ急ぐ心か、の高い調子に左手で襷を取るところ、逸る心は能力(アヒ菊次郎)に女人禁制と阻止されはしても怯まな得意気込み。物着から一ノ松へ、鐘を見込む執心の目付きの凄まじさ、昂ぶる鼓動は、大鼓(真之介)の一調に煽られ、舞台へ入つて来るところは正に舞が舞える狂喜。その熱気が寸時鎮まるようにへ暮初めて鐘や響くらん、と吹かれる嬌々たる一管(六郎兵衛)の妙、その余韻を破る小鼓(舜一郎)の裂帛の掛け声から乱拍子に、小倉は無かつたが中ニ段教訓(無師之傳)が、段は短かつた。急之舞から鐘入へ、常の型と思つたが鐘の下に巫



「能」久田勘鷗の会・20回記念特別公演
「道成寺」シテ友彦、アト弘之、ワキ勝久、ツレ徑左、ウケ勝久、ハシ勝久、シテ三津子、アヒ菊次郎、大鼓真之介、小鼓舜一郎、腰巻勝久、唐織襷折勝久、欄角帽子勝久、白綾着付勝久、白大口勝久、紫水衣勝久、小刀の俵容勝久、面深井勝久、泥眼勝久、襟白二勝久、浅黄大口勝久、縹散シ文白綾壺勝久、成俣するキリ前勝久、夫の不実を厳しく責め、へ思ひ知らずや怨めしや、と夫に詰め寄るところ、凄まじい気魄に然もありなんを思わせた。トメ拍子は踏まなかつた。(1時間39分)

り、鐘がするく降りて来たので吃驚した。
昭和四二年(一九六七)一〇月二八日、金春流の桜間道雄が古希つきりそのままではないか、の口吻が可笑しさを増幅、シテとアトの持ち味が小品ながら充分に出た好舞台だった。(17分)

鐘が上がるも赤頭・大元結・白敷若、着付だけ赤地金鱗箔に替えた安座の蛇体、折りに紺地打板を持ち、立つと前シテの唐織でなく白綾を腰に巻き、烈しい住僧の折りに追い立てられ、一ノ松で白綾を捨て、盛り返しシテ柱越しにキツと鐘に面ヲ切ル凄味は、腰を落としてシテ柱に背を付けると右へ伸び上がりながらキリく柱を巻いてゆく柱巻、蛇体の執心の怖さを如実に見せる。キリは折伏され一ノ松へ、怨めしげに鐘を見込みに、三ノ松へ逃れへ飛んでそ入り、ワキのユウケン留メ。桜間道雄は自署で「私が二度目に演じたとき、飛べないなら道成寺など舞わぬ方が良いという声がありました。能に対する認識の度合いが違ふので、これはしかたがないと思います」と言うが、古希には未だ間のある勘助、飛んで欲しかった。(1時間49分・10月19日・久田勘鷗の会20回記念特別公演)

「柏崎」 訴訟の事で鎌倉に在る柏崎殿と息、花若(子方・金春祥妙、父の病死に世を傳み出家遁世した花若の文と柏崎殿の形見の品を携え、越後へ下る侍臣小太郎(ワキ雅介)、名宣から道行へ、身の様子、状況を重い胸の中に吐露、説得力も上々。案内を乞い、花若の母(シテ穂芭)の声

に「や、これは」と笠を捨て一ノ松に平伏する小太郎。シテは面曲見・襟浅黄・白地露文文襷着付・無紅萌黄地秋草文帯巻。問答は「あら心許なや」と不安の暮るシテに、口重にならざるを得ないワキ、雰囲気がよくでる。シテのクドキは二ノ松、ワキを中へ招き入れる間も惜しむかに佇立のまま。観世流のようにシテは先に地謡歴の床几に掛かつて居り、そこへ案内を乞うワキを招き入れるのとは趣を異にして、演出でシテの気持ちの在りようが違ふのが面白い。シテとワキ掛合のロンギ、へ歎きを止めおはしまし、とワキが立つて運ぶと、シテもへげにや歌きても、と舞台へ。へ形見を見るからに進む涙は腫きあらず、はシテ、ワキ連向、シテは常座、ワキはワキ座前に下居する。シテが吾子の健康な心境に思いを馳せる文、母を思い遣る文末でへ書いたる文の怨めしや、と手をハツと文から放したが込み上げる愛しさ、印象的。母に逢わず遁世の吾子、恨めしくはあるが無事を祈らずには居られない母心の哀れは中人地の哀調、退いて往くところ余情一入である。

後場、狂乱して柏崎を出てさ迷う花若の母は、唐織を茶地小菊文縹襷腰巻に替え、浅黄水衣の旅装、狂と狂を持つ。古歌にてらし、今の身の上は夫や子の所為、へ怨めしや憂き身は、と泣懐するサシの部分へ怨め、とシテが、へしや憂き身は、と地(安明・廣明・忍ら)が切つて語つた(と聞こえたが)のが珍しい。道行は里々をさ迷う風情、へ降れども積もらぬ淡雪の、と正丸、狂と狂で指し廻すのは雪深い越後に比べる感慨。善光寺に至り下居に合掌、夫の菩提を弔うところ、住僧(ワキツレ幸)に内陣の立入りを咎められると、問答に女人禁制は「如来の仰せ」と居立ちへありけるか」とすつくと立つ不退転の勢い。へ頼もしやく、と誇む教拍子に力が入り胸が透く。阿弥陀如来を崇め、夫の形見を寄進する傍ら、物着でその前折烏帽子と水衣に替えて長袴を身に着ければ、歌増す追慕の念、立つと(◎へくつづく)

年 新 賀 謹

富 耀 会
柳 原 富 司 忠
船 戸 昭 弘
小鼓教室 名古屋市中区栄 朝日神社内(丸道前)
〒466-0881 名古屋市中区栄区瀬川町47-1
サザンビル八事211番703147
電話(八三三)一〇三二番

飯 島 六 之 佐
〒920-0801 金沢市香林坊2-1-8-17
電話(〇七六)二六二一四三四〇

大 倉 源 次 郎
叶石会 河村 総一郎
河村 真之介
〒466-0801 名古屋市中区前山町一丁目三三
電話(〇五三)七六一四八八二

河 村 大
〒603-0803 京都市北区紫雲下柏野町五九一
電話(〇七五)四六二四二一五

亀 井 俊 一
保 忠 雄 一
実 雄

呉 竹 会
伝統文化(能楽)こども教室
寛 鈺 一

谷 口 正 喜
〒602-0915 京都市上京区中立売通室町西入
室町スカイハイツ610号

谷 口 有 辞
〒520-0221 大津市緑町二四一一〇

金春流太鼓
青 耀 会
上 田 悟
〒591-1133 和泉市青葉台2-1-17-25
電話(〇七二五)八五二二
名古屋 名古屋市中区栄5-1-6-4
稲古場 栄能楽堂
電話(〇五二)二六二一八三

長 生 会
鬼 頭 義 命
〒490-0801 愛知県稲沢市平和町城西19
電話(〇五六七)一九六〇番

大 蔵 狂 言 会
大 蔵 彌 太 郎
千 太 郎
基 誠
〒215-0077 神奈川県川崎市麻生区岡上38-1
TEL 〇四四一九八七一一八七

茂 山 千 作
千 五 郎
七 五 三
千 三 郎

茂 山 忠 三 郎
茂 山 良 暢
〒606-0806 京都市左京区北白川東小倉町28
電話(〇七五七〇)二二〇二番
FAX(〇七五七〇)二二三二

葵 心 庵 舞 台
尾張旭市東大瀬町原田二四九三ノ二
若杉ビル(旭市役所西)
電話(〇五六)一五〇六九八
能舞台 電話(〇五六)一五〇六九八



名古屋能楽堂定例公演
「止動方角」井上菊次郎・馬(今枝郁雄)・佐藤友彦
(杉浦賢次氏撮影)



名古屋能楽堂定例公演
「張良」泉嘉夫、古橋正邦、高安勝久
(杉浦賢次氏撮影)

阿弥陀如来を讃仰し浮世を憂える
クリ・サシ・クセへ。クセ中、へ
罪障の山高く、上を眺め、正先で
へ生死の海深し、と腰を屈め下を
覗くところが浮世の憂苦の養育な
ら、へ(たなびく山や)西の空
の、と雲ノ廓にワキ柱上を眺める
ところは極楽浄土への渴仰、へ願
ひを叶へ給へや、と下居合撃する
の思い切実。キリは阿弥陀如来
を本尊とする善光寺に仕える花若
が、佛を介して母と再会、傳形の
幼い子が健気に終始行儀よく立
派、二段クセの長戸を緊張して動
時間40分

「鐘の音」 伴の元服に贈る
黄金遣の太刀を詠
えるため、金の値を尋ねに太郎冠
者を鎌倉へ運る主(アト友彦)。
鎌倉が名刀止赤で知られる相州物
の本場なら、鎌倉五山の寺処で
も。粗忽な太郎冠者、寺々を回り
鐘の音色を聞き分けるところ、声
帯模写中々。戻れば当然叱責さ
れ、「口調法をもつて御機嫌を直
さう」と囁子にかかつて小舞を舞
うが、「退りをらう」と更に怒り
を買い折角の小舞が役立たず。愚
直な太郎冠者と、多分説明不足だ
つたと気付いているであろう主が
そこを衝かれ奇立つ気持ちがよく
出た。(25分)

「黒塚・雷鳴之出」 シテ光
洋、前は
面妮・襟茶・襪セタ白摺箱着付・
紺地樽垣文無紅唐織。宿をどう山
伏(ワキ勝久ワキツル元)の窮状
にへさずが思へば、と立ち、へさ
らは、と庵を出る。梓梓はスミ
近くでなく正面階の右、へ月もさ
し入る、と端近に伸びる月の光を
見る心に右へ目をやり、直つてへ
真麻李の糸を、と繰り始める。ふ
と手を止めれば、己れの境涯を託
ち、へ身を苦しむる悲しさ、にシ
ラれば、山伏の殿めに両手を下ろ
し放心の様子。が、人間の傳さを
自嘲するかのクセで再び糸を繰り
始めると、止めては繰りしてへ恨
みてもかひなかりけり、とシラル
ところ、現の夢の哀れ強く印象づ
ける。
ロンギは地(汎、忍、俊之ら)
とシテ掛合の糸良シの誹い物。糸
繰りの労働歌は糸之段。へ長き命
のつれなさや、の地の返シに再び
糸を繰ると手を早めへ音のみ、
とクルく廻す杵を左に見てへひ
と泣き明かす、と双シラリの激
しさも、はつと気持ちが変わる
と、「いかに客運達」と山伏と問
答になる心境の、意味深長。薪を
採りに出る中入は、「やがて帰ら
うするにて候」と山伏にアシラフ
と、「や」は立ち上がる時が珍しく、
立つと静かに橋懸へ。一ノ松
で踏み止り運疑渡巡、ちらと山伏

を振り返えるや足早に入る。
山伏と能力(アと郁雄)の問答
は、好奇心からくる軽薄な言動の
能力に味がある。
後シテは白頭・大元結・赤般若
で義着調。早苗で出ると二ノ松で
「乱」の様に頭を振り(所謂いや
〜)忿怒をみせるのが珍しく、
また、へ鳴神稲妻天地に満ちて、
では頭を取つたが、これが小書
「雷鳴之出」の調れであろう。祈
りの中、山伏に追われ幕際まで退
ると逆襲に転じ、シテ柱に掴まり
身を据つて手向かうところなど凄
味充分、キリは地を残して走り込
みワキがトメた。(1時間10分、
10月25日、第29回名古屋春會)
「止動方角」 当時流行の
茶鏡べは主の
社交の場、「お茶は御座りますが
お華が」と、そこは行き届く太郎
冠者(シテ友彦)、見劣りがして
はと主(アト菊次郎)の体面を配
慮する優しさ。元々暴君の見栄っ
ぱりの我儘は、伯父(小アト融)
に輩のほか太刀を、また方々が馬
だから馬と口取りも借りてこい
と。
「これは秘蔵の壺なれども貸
す」と伯父、「さて行くか」と問
われ、「ハハハハハ」と軽い笑
いになめらいを紛らし、「まだあ
ります」と太郎冠者。「何ちやい
ぞ」と答える伯父には、はて、茶
鏡べで外に何が、の口物が。この

刃り、シテ・小アト親子共演の阿
吽の呼吸の妙味。主を立てつつ苦
心して無事三色を借用して戻れ
ば、「己れ今迄何をしていた」と
主の罵声。これには流石の太郎冠
者も我儘の限界、咳払いに暴れ出
す借りた馬の轡を活かし主を翻弄
にかかす。「落ちさせられました
か」と氣遣いはしても、それが皮
肉とは分からない主、再三落馬さ
せられ「それがしは最早嫌ぢや」と
舌を上げれば、借りる時に伝授
された鹿馬鎮めの呪文、「疫蓮重
子六万毒鎮鎮まり給へ止動方角」
を繰る太郎冠者は此処ぞとやりた
い放題、主徒転脚は主が茶壺を持
たされる破目(写真)に。
キリはまた主を振り落とした馬
は舞へ逃げ、馬と間違ひ主を取り
押さえて叱責される太郎冠者。馬
体の大きさを考えれば、いくら象
徴性が云々されようと、あり得な
いことに納得はし難いと思うが。
ここは馬を追つて太郎冠者も入
り、主が独り取り残されて嘆息す
る留置メとはならないものだろう
か。ただ舞台はシテ・アト長年の
コンビの力演で充実していた。
(34分)
「張良」 馬上の老翁に、落
した香を履かせよと
命じられ、長上を敬う気持ちで履
かせれば、真心を見込み、再会の
日を約し、兵法の奥儀を授けると
老翁、この様な夢を見た張良(ワ
キ勝久)、約した日に出掛け
ればそれは正夢、選刻を責め
激怒した老翁(シテ嘉夫)は
改めて五日後を指定して消
え、張良も兵法の師とならん

の渡居の程を披露し、両手を大き
く構え馬を踏して中人する。短か
い前場だが、名倉から連行へとワ
キ方の重い留らしい厳しさ。
後場、装束を改めた張良が再度
まみえた相手は老翁に非ず黄石
公、重々しい大蔵(守・藤幸幸・
眞之介・洋陣)の出は威風凛りを
払う。黄石公、再度張良の心を試
そうと、この度は故意に香を川に
脱ぎ捨て捨てる。後見(邦久)
が見事にスミ近くに香を捨てる
と、鮮やかな流し足で拾いに出る
張良に、早苗で走り出た龍神(ツ
レ正邦)が香を奪わんと激進に働
(写真)。へ張良願はず剣を抜き
持ち、迫れば、龍神は恐懼、膝を
つき香を返上する。香は無事黄名
公に戻り、へ馬より静かに下り立
ち、と台を下りた黄石公はへ善き
哉と巻物を張良に渡す。キリはへ
石公遙かの、の地のうちに一ノ松
へ。へ金色の光を、放つ心に阿彌
を掛け黄石公を、張良は遙かに
仰ぎ見る心に眺め、二ノ松でへ黄
石と現し、と左袖返々黄石公を、
張良は正中に出て膝をつき黄石公
に合掌、黄石公は二ノ松でトメ拍
子踏んだ。
勝久の「張良」披露は昭和五七
年(一九八二)観劇会先代六郎兵
衛三回忌追善でシテは玉生流大母
十喜雄、二六年振りの再演で力量
充分にみえた。(1時間11分、10
月31日、名古屋能楽堂定例公演)

謹 賀 新 年

ウシマド写真工房
牛 窓 正 勝
雅 之
〒602-0801 京都市上京区北野上七軒
TEL 075-546-1123 四二
FAX 075-546-1157 七七二
連絡は 名古屋市中区川名町一〇五
電話 (八三二) 三四九一番

謹

賀

新

年

朝日カルチャーセンター
雛子教室
小鼓 後藤孝一郎
丸栄スカイル10階

鳳の会
林 和 利
井上 菊次郎
佐藤 友彦

狂言やるまい会
野村 小三郎
松 田 高 義
野 口 隆 行
奥 津 健 太 郎
〒460 名古屋市中区平和一〇一〇一四
野村事務所 気付
電話 052(3550)7971
FAX 052(3550)7972

狂言共同社
鹿 今 井 大 佐 井
見 枝 上 藤 野 藤 上
政 俊 郁 靖 靖 弘 友 菊 次 郎
行 裕 雄 雄 浩 融 之 彦
〒460 名古屋市中区昭和区滝川町54
サンハウス滝川3D井上
電話 052・834・8607
FAX 052・834・8607

財団法人 鎌倉能舞台
中 森 貫 太

名古屋観世喜之
観 世 喜 正
山 本 博 通

喪中につき
年賀欠礼いたします

彰 諷 閣
名古屋市中天白区植田西二一八〇二二
電話 (〇五二) 八〇五二一三〇一
連絡先 安城市三河安城町一七一三
グレイシヤスヒラ安城
電話 (〇五六六) 七七一八二四一

栄 能 楽 舞 台
名古屋市中区栄五十六一四
電話 (三三二) 二一八三番

NHK放送予定(平成21年2月~3月)

●NHK-FMラジオ能楽鑑賞(毎週日曜日7時15分~8時)
2月22日 素謡「屋島」(再放送)観世流 岡久広ほか
3月1日 特集番組放送のため休止
3月8日 素謡「盛久」喜多流 内田安信ほか
3月15日 素謡「小塩」観世流 林寛右衛門ほか
3月22日 素謡「百万」(再放送)宝生流 三川淳雄ほか
3月29日 狂言「栗田口」大藏流 山本東次郎ほか

●NHK教育テレビ
3月7日(出) 15:00~17:00(予定)
第23回NHK能楽鑑賞会より
・狂言(和泉流)「悪太郎」シテ野村萬斎
・能(金春流)「葵上」シテ本田光洋
・狂言(和泉流)「越後掬 祝言之式」シテ野村萬斎

能楽の友

社友の能楽行

名古屋千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-798 4
FAX (052) 733-283 7
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円
1年 1800円
郵送の場合 1100円

宝生流第20代宗家 継承披露祝賀会



演能カレンダ一

◆名古屋能楽堂◆
(能・狂言演能関係)
(TEL 052-231-0088)

【2月】
21日(出) 和泉会別会・和泉元聖初舞台披露公演 (有料)

【3月】
1日(日) 富 会 演 会 (有料)
7日(日) 名古屋能楽堂3月定例公演 (有料)
8日(日) 四 学 交 流 会 (無料)
14日(出) ワンコインコンサート春を舞う (有料)
12日(出) さわってみよう!能の世界 (要整理券)
15日(日) 名古屋宝生会定式 (有料)
29日(日) 西 村 同 門 会 第 4 回 大 (無料)

故 橋岡久太郎師 50年忌追善特別公演

4月11日 名古屋能楽堂

日本芸術院会員・故橋岡久太郎氏を偲ぶ五十年忌追善特別公演がきたる四月十一日(土)名古屋能楽堂で催され、観世清和宗家も来名し舞囃子「砵」を上演する。また第2部(入場無料)として「蓮成寺」が上演される。

主催は、名古屋交協会 橋岡慈観)三交会(久田三津子)。
第一部は、午前十一時開演、能「卒都婆小町」(二度之次第)を久田三津子師が所演、前述のように観世宗家の舞囃子「砵」橋岡慈観師の仕舞「西行桜」ほか仕舞四

シテ方至生流の第二十代宗家とし宝生和英氏が継承、この宗家継承披露能が一月二十五日、名古屋能楽堂で、名古屋宝生会定式能初回により行われた。当日は宗家による「翁」はじめ能「鶴亀」「船弁慶」狂言、一調、独吟、仕舞など上演。終演後、ウエスタンナゴヤキャッスルで宗家継承披露祝賀会が催され、若い新宗家により新しい能楽界の方向を築いてほしいという期待とともに、宝生会の進運を期して交歓した。なお宝生会では記念誌を発刊した。

名古屋演劇ペンクラブ賞

久田勘鷹師が受賞

シテ方親世流・久田勘鷹師は、このほど、平成二十年名古屋演劇ペンクラブ(理事長馬場駿吉氏)による「名古屋演劇ペンクラブ賞」を受賞した。

授賞理由は、平成二十年十月十九日催された第二十回「能・久田勘鷹の会」における能「蓮成寺」赤頭の白拍子成体の演技。

加賀宝生の名品

金沢能楽美術館で展示

金沢能楽美術館(金沢市丘坂)では二月七日から四月五日まで同美術館コレクションから、唐織、摺箱、纏箱など加賀宝生の名品といわれる能楽東展を開催。観覧料一日。三百円、休館日は毎週月曜日。

番上演。
第二部は入場無料で、瀬戸勝治氏が「蓮成寺」を所演、ワキ森常好師、地頭観世清和宗家
前売り券は一万円(当日券千円増)学生五千円。申込みは久田事務所(TEL:FAX052・705・1585)、名古屋能楽堂(TEL 052・231・0088)プレイガイド(中日ビル、松坂屋、三越、愛知芸術文化センター)チケットぴあ(TEL0570・02・9999)、Pコート予約392・344)、オテイアパーク七階PG(TEL052・265・2015)

演能案内

富 耀 会

三月一日(日) 午前九時始
名古屋能楽堂

舞囃子、一調、連吟など二十数番
主催 富 耀 会
柳原富司 忠

【御来場歓迎】

名古屋能楽堂三月定例公演

三月七日(土) 午後二時開演
名古屋能楽堂

狂言 鼻取相撲 シテ 野村小三郎 7F 野口 隆行
(和泉流) 後見 奥津健太郎 後見 松田 高義

子方 倉知 益巨 天野 幸輔 百々 康治
宇高 通成 後藤 孝一郎 藤田 六郎兵衛

能 隅 田 川 高安 勝久 河村 登一郎 藤田 六郎兵衛
(金剛流) 根元 正樹

後見 豊羽 多野 良子 天野 幸輔 百々 康治
田中 春奈 地謡 竹市 幸吉 宇高 成治
後見 松野 恭憲 宇高 成治

(午後四時頃終了予定)

主催 名古屋市文化振興事業団
(名古屋能楽堂)
能楽協会名古屋支部

【資料】(前売り)
指定四〇〇〇円
自田一般三五〇〇円
学生二〇〇〇円(当日券は五百円増)

前売取扱い
名古屋能楽堂(☎052・231・0088)
プレイガイド(栄アトレチケ922・松坂屋ほか)
オテイアパーク7階PG(052・2655・2015)
チケットぴあ(0570・02・9999)
お問い合わせは名古屋能楽堂(☎052・231・0088)

★大正昭和の想いの先生方が載っている!2月20日発行

近代能楽史の研究―東海地域を中心に―

飯塚寛理人 稲山女学園大学教授 著 A5判 224頁 903円(税別)

東海地域の能楽史研究を精力的にリードする著者が、明治維新から昭和初頭までの東海地域の「近代」の能楽界について、明治維新による変革、さらに新聞・ラジオ・レコードといったメディアの影響による愛好者や興行形態の変化に着目して、この二〇年間の成果をまとめた労作。

【主な内容】序 表 章法政大学を卒業して、幕末から明治維新にかけての能楽界(東海運人物誌)に見られる能楽愛好者/「愛知運人物誌」に見る名古屋能楽界の周辺他/明治・大正期の能楽/メディアと能楽―書籍・ラジオ・新聞・ラジオの時代

大河書房 〒102-0073 東京都千代田区九段北1-7-8 関山ビル3F
TEL.03(3268)3354 FAX.03(3263)4892

さわってみよう!
能の世界!

三月十四日(土)
午後一時開演
名古屋能楽堂

笛・小鼓・大鼓・太鼓・仕舞
謡・狂言の体験

能「羽衣」の鑑賞

ハガキにて申込み(締切2月28日)
本誌②面に応募要項掲載

主催 能楽協会名古屋支部
(社)能楽協会(社)日本能楽会

名古屋宝生会定式能(第253期)

三月十五日(日) 午後一時始
名古屋能楽堂

番 組

能 雲林院 飯橋 雅介 幸 寛 福井 四郎兵衛 加藤 洋輝
相元 正樹 竹市 学

問 井上 勲次郎

後見 竹内 博子 地謡 石森 智幸 稲川 壽一
玉井 博祐 辰巳 大二郎 和久 莊太郎 水上 輝和

狂言 魚説法 シテ 佐藤 融 7F 井上 清浩
後見 佐藤 友彦

仕舞 西王母 内藤 飛能 地謡 石黒 孝
春日龍神 和久 莊太郎 稲川 壽一
辰巳 大二郎

子方 坂口 愛 竹市 学
衣装 高安 本 幸 大鼓 河村 登一郎
相元 正樹 小鼓 柳原富司 忠

後見 内藤 飛能 地謡 津田 節 佐藤 耕司
竹内 淳一 和久 莊太郎 石黒 輝和

(終了予定 五時頃)

主催 名古屋宝生会
名古屋千種区高田2-1-33 01
島田橋住宅2-1-13 30
佐藤耕司方

【入場券】
鑑賞券(全自由席) 五〇〇〇円
学生券(全自由席) 二〇〇〇円

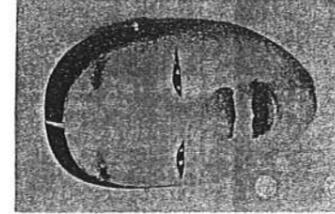
当地の各流儀・流派・結社・社中の消息を辿る

⑤

竹尾 邦太郎

一「名匠鑑賞能」⑤

――承前――
五流道成寺が先回(第三〇回)を以て無事完了。主催の田鍋惣太郎はこれを自祝して昭和三年六月一日、第三二回を自身「翁」を勤める宗子記念の乱能とし、番組に「乱能について」の題で解説をしている。



乱能とは一役を立派に勤め得る人が出演の資格あり。お能各役者が日頃の役を研究し語り。お能三方が四拍子、狂言を勤め又、三役(脇方、四拍子方、狂言方)シテ、又は他役を演じ日頃の心構へ

を发表する会で御座います。昔(維新前)は各能役者が談合して直ちに二、三日でも催す事の出来た人達で演ぜられて居ります。ですからお茶番ではありませぬ。歌舞伎や他のそれより、お茶番、お笑ひに催されるのでは全然違います。維新後東西でも年一度

は各舞台、流祖祭、稻荷祭、などに催されて居ります。当地方でも呉服町や布池町の能舞台上で毎年催して居りました。事変中は皆休みました。終戦後は私(竹)が昨年(昭和三〇年五月七日、松坂屋ホール)舞台六十年日加葬能最後の日に再開(田鍋惣太郎は「羽衣・観世」を勤めている)好評を頂きました。本年は五流道成寺宗子記念に催します次第、今後は毎年催される事になると思います。此度は東西の一流楽師各位が応援して下さい。どうか皆様にも楽しんで居ります。どうか皆様にも

そのおつもりで御覧頂ければ幸甚に存じます。(括弧内筆者)番組は一翁「田鍋惣太郎・藤田六郎兵衛(三番壺)田鍋洋一(千蔵)後藤孝一郎(面鏡)観世武雄(笛)観世喜之(小鼓頭取)高安滋郎・柴田収(脇鼓)本田秀男(大鼓)田鍋惣一郎(地頭)・舞雩子「高砂」鬼頭八郎、狂言「末廣」林盛蔵・柴田初太郎・増田一雄・仕舞「二重」笠之段」山本孝「善界」大倉長十郎、狂言「大刀奪」本田秀男・観世喜之・武雄、舞雩子「小袖當我」河村庄造・井上松次郎、小舞「宇治のさらし」加藤良久、狂言「文徳」高安滋郎・西村欽也、西尾孫太郎、舞雩子「西王母」野村太郎、狂言「引括」内藤泰二・鬼頭喜太郎、能(前)田鍋惣一郎(後)鬼頭喜信(判官)・藤田六郎兵衛(弁慶)河村総一郎(雀)檀王茂十郎(小

③面へつづく

一色神社例祭 奉納能

3月15日 一色町能楽保存会

伊勢
四百五十年の伝統を守る一色能では、地元一色神社の例祭に欠かすことなく奉納をしているが、今年はきたる三月十五日(日)一色公民館仮設舞台で開催される。一色能を継承していくために一色町能楽保存会(土屋豊八郎会長)では、現在子供教室を開き、幼児から高校生まで二十名の子供を指導、また地元の保育園の年長組四十一名にも謡曲を指導、いずれも三月十五日の奉納能に出演する。今年の演目は、国の選抜民族無形文化財に指定されている一色能をはじめ二番「狂言」一番「舞雩子」二番「仕舞」二十四番「連防」四番など合わせて三十五番が上演される。午前十一時開演。

能「狸々」(シテ石原進、ワキ久谷憲之、笛・菊川進子、小鼓・吉川広美、太鼓・石原隆明、太鼓・木形いく子)狂言「善業焼」(郡方・喜多敬、鎌倉方・喜多芳夫)問い合わせ先||一色町能楽保存会事務局/伊勢市一色町二一〇六一 電話 0596・25・6525番。

能「百萬」上演

3月8日 菊之会

京都
金剛流菊之会(廣田泰三)師主老は、春季「菊の会」を三月八日(日)金剛能楽堂で開催する。能組は、仕舞「難波」廣田泰三、能「百萬」シテ藤田泰能、ツレ金重久子、ワキ村山弘、間・丸石やすし、地謡・穂田道一、廣田幸稔、豊嶋幸洋、今井克紀、山口尚志、豊嶋晃嗣、宇高竜成、宇高徳成

狂言「子盗人」茂山十五郎 指導・金剛水護宗家、午後二時開演
正会員(年会費)一万五千元 (二回公演、優待券、粗品進呈) 当日券(全自由席)七千円、学生券五千円) 問い合わせ、申込みは、廣田泰三(京都府左京区下鴨鴨崎町128、TEL・FAX075・781・3421) なお、「広田鑑賞会」は、四月五日(日)能「隅田川」(広田幸稔)を上演、午後二時半始

さわつて みよう 能の世界!

小・中学生の能楽体験隊募集

3月14日 名古屋能楽堂

能楽協会名古屋支部・社団法人能楽協会・社団法人日本能楽会の主催により、三月十四日(土)、名古屋能楽堂で「さわつてみよう」能の世界!のタイトルで、能楽体験の企画を実施する。対象は、小学校三、六、六年と中学生とその同伴者。笛・小鼓・大鼓・太鼓・さらしに仕舞、謡・狂言を能楽堂で身近に感じとってもらいたい機会であり、主催者ではお気楽に参加して下さいと呼びかけている。 参加は無料、二百名を限定募集で、能「羽衣」の上演があり、鑑賞できる。

第四回 西村同門会 研究能

三月二十九日(日) 午前十時半開演 名古屋能楽堂

能「威陽宮」 ツレ侍女 本塚 忠子、花巻夫人 島頭 京子、シテ 衣斐 愛子、定流 正直
能「松山鏡」 松山 鏡、高安流 藤田 雅介、河村 眞之介、後藤 泰洋、加藤 洋輝
能「茶壺」 スッパ 米倉 愛、日代 井上、清治、中野 清一、佐藤 融
能「松山鏡」 松山 鏡、高安流 藤田 雅介、河村 眞之介、後藤 泰洋、加藤 洋輝

伝統文化とも能楽教室 おけいこ発表 指導 尾 敏一
高安流 師仕舞 羅生門 根元 正樹
磯 通 飯富 雅介
玉生流 学生仕舞 指導 竹内 澄子
高安流 素謡 羽衣 橋本 幸 根元 正樹

能「茶壺」 スッパ 米倉 愛、日代 井上、清治、中野 清一、佐藤 融
能「松山鏡」 松山 鏡、高安流 藤田 雅介、河村 眞之介、後藤 泰洋、加藤 洋輝
能「茶壺」 スッパ 米倉 愛、日代 井上、清治、中野 清一、佐藤 融

「入場無料 御来場歓迎」 (終了 午後三時半頃)

第31回 邦謡会・東海の能

四月五日(日) 十二時三十分開演 名古屋能楽堂

解説 東海の能 村瀬 和子
舞雩子 養老 片山 清司、河村 眞之介、上田 榎也、水波之伝、上田 敦史、竹市 学
能「朝長」 朝長 豊、高安 勝入、河村 総一郎、上田 榎也、藤田 六郎兵衛、須部 甫

狂言「酔薑」 シテ 井上 清浩、下 佐藤 融、後見 佐藤 友彦
仕舞 阿漕 瀧沢 一政、地謡 今 古 沢 正 邦、武 田 大 志
一調 歌 占 片山 眞次郎、福井 四郎兵衛

舞雩子 杜若 片山 眞次郎、河村 眞之介、三島 元太郎、片山 九郎右衛門、荒木 朝光、大野 誠、須部 甫

能「熊坂」 梅田 邦久、飯富 雅介、柳原 晋司、鹿取 香世、野村 三三郎

後見 梅田 義弘、青木 道喜、地謡 須部 謙一、本 田 勘、分 村 道 治、清 沢 一 政、味 方 文 玄

前売券取扱所 名古屋能楽堂 TEL052・231・0088 邦謡会 TEL・FAX052・231・4632 チケットぴあ TEL052・322・841・0088 入場料 全席指定席5000円

日本芸術院会員 故 橋岡久太郎

五十年忌追善別会 特別公演

四月十一日(土) 第一部午前十時、第二部午後二時三十分 名古屋能楽堂

「第一部」 午前十一時 開演
仕舞 清経 久田 勘吉郎、地謡 松山 幸親、八田 勘、梅田 嘉宏
仕舞 笠之段 山崎 眞右衛門、地謡 武田 大志、寺 澤 幸 祐、梅田 嘉宏、藤田 六郎兵衛
舞雩子 砧 観世 清和、河村 総一郎、藤田 六郎兵衛、久田 勘吉郎、山崎 眞右衛門

②面よりつぎ)

能 大槻秀夫(大鼓) 山本勝一(大鼓) 田鍋惣太郎(地頭)。

第三回は同年一〇月二七日、観世流大会で舞囃子「天鼓」大槻秀夫、能「実盛」観世喜之、高安滋郎、狂言「貫経」佐藤卯三郎、河村丘造、能「松風」貞徳、観世鏡之丞、観世武雄、宝生弥一、能「安運原・黒頭」急進之出「梅若六郎・宝生弥一、閉。

因みに、通常は春秋の二回公演(初夏が加わり三回も)が此の年、昭和三年は五流道成寺の関連もあり年間五回という特異な年である。左に本紙第五〇三号に記載の名匠鑑賞能、催会年次詳細(Ⅰ)に続く(Ⅱ)を参照されたい。舞台は全て熱田神宮能楽殿である。

第三回は昭和三年三月一六日、恒例春の宝生流大会。舞囃子「高砂」宝生九郎、能「小袖曾我」宝生英雄・辰巳孝、狂言「鐘の音」三宅藤九郎、和泉保之、能「尊清」宝生九郎、西村弘敬、能「殺生石・白頭」野口禄久、高安滋郎、大阪から寛野流齋田喜兵衛が来演。

第三回は同年一〇月二六日、春の宝生流大会と同様、昭和二年から恒例となっている金春・観世二流大会。能「俊寛」本田秀男・中村政男(成経) 宇仁田吉助(康頼)、福王茂十郎、狂言「狐塚」河村丘造、佐藤卯三郎、井上松次郎、能「定家・心味之拾子」埋留「梅若六郎・西村弘敬、仕舞二番「花置」梅若泰之「玉之段」観世武雄、舞囃子「鼓上」松間龍馬、能「熊坂・替之型」観世喜之、福王茂十郎、大阪から大鼓山本敬一郎の来演。なお「定家」は昭和一八年九月一日、田鍋守正

10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

(惣太郎の四男・昭和二年二月二日、日中戦争で戦死) 七周年祭慰霊能(観世喜之・西村弘敬、藤田六郎兵衛・田鍋惣太郎、吉田秀夫) 以来の上演。

第三回は昭和三年三月二五日、春の宝生流大会。能「巴」辰巳孝、山崎俊助、舞囃子「風山」宝生九郎、狂言「唐相撲」茂山千五郎、茂山千之丞(日本人) 茂山七五三(通称) 井上松次郎(髭捷)、能「千手」宝生英雄・野口禄久、高安滋郎、能「綾鼓」宝生九郎 畑富次、西村弘敬。

因みに現在の名寄で大蔵流の曲名は「唐相撲」、和泉流は「唐人相撲」、当地での大蔵流「唐相撲」は明治維新後と言うのも趣か、有史以来今回が初演と言えようか。しかし、これとて人数不足で当地和泉流から唐子二・下官五、髯撥を加え八名が賛助出演している。番組案内に「唐相撲は当地舞台にては明治三六年以来五六年目の出演にて演者は二五名にて此曲の装束は当今では、尾州徳川家と、京都茂山千五郎家よりありません。今回は特に茂山師の御快話により演じます次第、今後も当分は出ぬ曲でございます」とあるが、明治三六年(月日不明)の催しは徳川邸で行われたもので当地和泉流狂言共同社々中による「唐人相撲」である。シテ外地新太郎、河村健三郎、伊勢門水、河村保之助、井上鉄次郎、井上新三郎、佐藤卯三郎、井上彦四郎、河村丘造は総員二名が記録に残る。なお茂山千五郎家の装束に就いては、此の日「唐相撲」のシテを助めた茂山千五郎(昭和四年一月一五日、三世千作を襲名)が後に著わした「狂言85年 茂山千作」昭和五九年四月二七日、淡交社刊に次の記述がある。

装束では「唐相撲」のが、小道具なんか含めまして、全部そろっていただいているのは、私の家だけやと思ひます。京都でもむかしは西本願寺さんだけにしかなかつ

たんです。明治三十一年の豊大閣三百年祭のお能に「唐相撲」が出ておりますが、その折には父が西本願寺さんから拝借したんです。ところが、それを西本願寺さんが売ってしまったんです。ちりちりばらばらになつて西本願寺さんにはあらしません。それで、どうもなりませんので、家内が全部、三十人分ほどこしらえました。あれは昭和五、六年ごろやつたと思います。その時分、五条通りにはずーっと古手屋(古着屋)さんが並んでおりましたので、父が毎日のようにそこへいきまして、古い布(きれ)を買つてきては家内に渡します。それを家内が一月はどすわつたきりで縫いました。それでも、ご存知のように「唐相撲」は動きがはげしいですから、あつちは破れこつちば破れで、ずたずたになりますんで、せんぐり新しいものに替えております。

第三回は同年一〇月二五日、秋恒例の金春・観世二流大会。能「経政・替之型」梅若六郎、福王茂十郎、能「千手」郎曲之舞「観世鏡之丞、観世武雄、高安滋郎、狂言「伯母ヶ酒」野村又三郎、井上松次郎、舞囃子「玄象」大江又三郎、仕舞三番「屋島」山中義滋「殺生石」山中信之花置クルト「松間龍馬、能「卒都婆小町」一度之次第「観世喜之、福王茂十郎、粉川幹夫、能「小鍛冶」本田秀男、大鼓に谷口勝三、山本敬一郎が来演。重習「卒都婆小町」は観世喜之の当地初演という。

第三回は昭和三年五月二九日、例年春は宝生大会の翌本年は家元の都合に依り初秋に催すことになり、今回は別会。番組は舞囃子「東方朔」梅若武久、春之、能「俊寛・落葉之伝」観世喜之、小島芳雄(成経) 観世武雄(康頼) 西村弘敬、狂言「貫経」井上松次郎、河村丘造、大野弘之、独吟「四季」林恩蔵、仕舞「藤戸」柴田初太郎、能「道成寺」赤頭「梅若六郎」(53) 高安滋郎(43) アヒ野村又三郎(48) 佐藤秀雄(48) 藤田六郎兵衛(52) 田鍋惣太郎(76) 山本敬一郎(62) 鬼頭八郎(59)、地頭梅若泰之

(43) 後見観世喜之(58) 鐘後見梅若武久(50)。梅若の「道成寺」は当地初演と言ひ、小鼓の田鍋惣太郎は四七回目の出勤と言ふ。

第三回は同年九月一八日、季遅れの宝生流大会。舞囃子「春栄」辰巳孝、能「経政」野口禄久、高安滋郎、能「姑」宝生九郎、倉本雅、西村弘敬、狂言「隠狸」三宅藤九郎、和泉保之、能「船弁慶」後之出留之匠「宝生英雄・辰巳孝門、高安滋郎、京都から大鼓谷口喜代三が来演。因みに宗家宝生九郎は自身のシテ以外、能二番と舞囃子に地頭を勤めている。これまで来名の折は番組の全てに関わろうという姿勢、宗家としての責任感、率先垂範の然らしむるところであろう。

同年一〇月二日、翌日に第三九回を控え、名匠鑑賞能シリーズ唯一の番外。趣旨は、田鍋惣太郎「舞台六十年」五流道成寺・小鼓世話出版 完了記念祝賀乱能、番組は能「杖懸置」藤田六郎兵衛、井上松次郎、狂言「三人片輪」観世喜之、五木田武計、観世武雄、小島芳雄(主)、仕舞「通小町」山本敬一郎、狂言「花折」林恩蔵、大塚二、塚本秀雄

に、誰の功徳に濟された勝利で義家より恩賞に与つたもの、と弁舌鮮やかに仕形を交え滔々と語るところ見事。由緒ある此の語を幸ひに都で流行らせたのもおれに相違ない、と飛んだとばかりに手問うか」と腰を懸える。太郎冠者が得意顔で「二千石の松にこそ千歳を祝ふ後までもその名は朽ちせざりけり、と誇うのを聞かされた主は俄の怒気、恭なくも此の語は先祖が前九年の役の戦陣で吟

らシテ方総勢九名(立衆・花見奄)、能「道成寺」田鍋惣太郎(76) 田鍋惣一郎(53) アヒ鬼頭八郎(59) 西尾孫太郎(77)、観世武雄(25) 観世喜之(58) 山本勝一(35) 辰巳孝(45)、地頭山本敬一郎(62) 後見歌村彦四郎(68) 鐘後見藤田六郎兵衛(52)。

主催の田鍋惣太郎に次の挨拶がある。

私能道成寺は小鼓を初め各役勤めて頂かなくては出来ません。幸ひ喜之氏小鼓お娘話(お先代より幸清流小鼓堪能) 他の役も東西楽師皆さんお出勤頂き意外の大会になり悦んで居ります。古来より乱能は各々役一通り出来た方で催す事になって居ります。又道成寺など大曲は各本役勤められし方ならでは出演不可能です。今回のお願ふれの乱能は今後当地では一寸六ヶ敷しいと思われす。定めて私のシテはお目だると存じますが、他役は皆お立派です。どうかお懇情にすがり無事勤め得度いと祈つて居ります。御光来の程、又御声援を平にお願ひ申し上げます。右お礼を兼ね御挨拶申し上げます。

以下次号

に、誰の功徳に濟された勝利で義家より恩賞に与つたもの、と弁舌鮮やかに仕形を交え滔々と語るところ見事。由緒ある此の語を幸ひに都で流行らせたのもおれに相違ない、と飛んだとばかりに手問うか」と腰を懸える。太郎冠者が得意顔で「二千石の松にこそ千歳を祝ふ後までもその名は朽ちせざりけり、と誇うのを聞かされた主は俄の怒気、恭なくも此の語は先祖が前九年の役の戦陣で吟

また、関西の著名な能評家・沼岬雨は「大・乱能」と題して次の言葉を書いている。

近頃何でも「大」という文字をつけることが流行していますが、実際はそれにあさわしいものは余りないようです。

しかし敢えてこの文字を使ったのはこういうのが最もふさわしいと感じたからです。私も三十年来能を見つづけて、乱能も沢山見て来ましたが、乱能で「道成寺」ということは見たことは勿論聞いたことありません。

シテは勿論、各役それぞれ思い習物ですから、そんなに多くの人で専門外のことに通じることが出来るかどうかは大きな冒険なのか表現しなかつたものでしょう。

田鍋惣太郎氏という人は、人のしないことをやるという恐ろしい執念の人で、その執念がこつてこの「道成寺」になつたものでしょう。この一番だけでしたかに、大乱能という文字がゴツタリとあてはまりました。

私は今自分の作った新造語の語感に酔つています。

以下次号

に、誰の功徳に濟された勝利で義家より恩賞に与つたもの、と弁舌鮮やかに仕形を交え滔々と語るところ見事。由緒ある此の語を幸ひに都で流行らせたのもおれに相違ない、と飛んだとばかりに手問うか」と腰を懸える。太郎冠者が得意顔で「二千石の松にこそ千歳を祝ふ後までもその名は朽ちせざりけり、と誇うのを聞かされた主は俄の怒気、恭なくも此の語は先祖が前九年の役の戦陣で吟

(追善例会つぎ)

仕舞 西行 櫻 橋岡 慈 観 地頭 松山 幸親 久田 三津子 久田 勤 久田 一朗

能 卒都婆小町 入田三津子 河村真之介 藤田六郎兵衛 一度之次第 杉江 元 柳原 同忠

後見 藤谷 幸祐 武田 大志 大西 礼久 観世 清和 地頭 久田 三津子 藤田 幸祐 久田 勤 上田 公威 寺澤 幸祐 久田 勤

入場料(全自由席) 前売券 一般一〇〇〇円 学生 五〇〇円 当日券 一〇〇円増

【第二部】 午後二時三十分開演

能 道成寺 瀬戸 勝治 河村総一郎 金春 国和 赤頭 森 常好 久田 三津子 竹市 孝 観田 善博 野村小三郎 奥津健太郎

後見 橋寺 幸祐 林 宗一郎 藤谷 音彌 山階 右衛門 地頭 松山 幸親 久田 勤 津沢 政一 久田 勤 鐘後見 上田 公威 武田 大志 大西 礼久 観田 松田 善繁 伊藤 泰 伴野 俊彦 野口 隆行

※入場料無料、御来場歓迎

主催 名古屋淡交会 橋岡 慈 観 三交会 久田 三津子

に、誰の功徳に濟された勝利で義家より恩賞に与つたもの、と弁舌鮮やかに仕形を交え滔々と語るところ見事。由緒ある此の語を幸ひに都で流行らせたのもおれに相違ない、と飛んだとばかりに手問うか」と腰を懸える。太郎冠者が得意顔で「二千石の松にこそ千歳を祝ふ後までもその名は朽ちせざりけり、と誇うのを聞かされた主は俄の怒気、恭なくも此の語は先祖が前九年の役の戦陣で吟

く命がいた太郎冠者は更に主の泣き所に付け込み、「早速物を下さる所などは大殿様にとつくりで御座る」などと追従するところ、表情、口吻に心理の綾の絶妙。キリは「由無い事に落涙した」「さあ笑へ」と笑と留メ。千作・千之丞兄弟の善句「私と弟、僕と兄貴 同根異種」の狂言の花 一つ舞台に咲かせます」と、見事に花開いた。

因みに千石とは地方長官の俗称。漢代の郡の太守の禄が二千石であったからという。(29分)

【通円】 所ノ者千三郎に由ありけ茶屋について訊ね、勤められて申す旅僧(七五三)、そこに現われる茶屋坊主・通円ノ登(シテ千五郎)が生前を語り、舞う。いわゆる能掛りの舞狂言で能「頼政」のパロディ(もじり)。

能に請われ、大小前の床几に掛

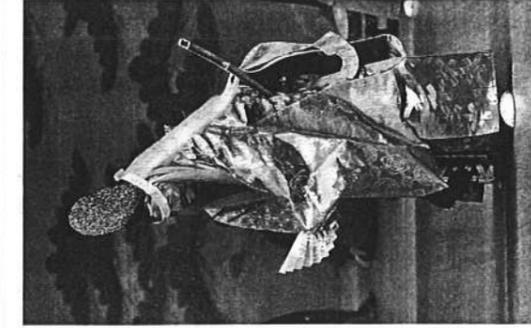
また、太郎冠者の胡貳地雷持文肩衣が熊笹茂る道中の峠を暗示し、出立となって集茶地鳴子文肩衣に替えるのは、連々何が起るからか分らぬ感し、警鐘ともたれようか。

「ちやうく」と牛を遣つて「二ノ松、「ああ吹雪が来るは」と煽られる心に小廻り二度、へたり込む所、隊列を成す十二頭の牛を眺め、改めて「こりや悉皆重荷小付きちや」と負担の重さに「ハハハハ」と嘆息を漏らす所、連を逸れた斑牛に「そこは連ぢや」と三ノ松へ戻り勾欄に足を掛け引き上げる所、スミで「あ、此の船牛めがはや書を暇いだ」と拳を三ノ松(はた)き屈んで腹かす所、など克明な写実の妙。

難路を過ぎ峠の茶屋(茂)も目前、語氣分で辿りつけば、酒は切らしたと聞かされ落胆の表情が如何にも。同情する茶屋に気付かさ

(4面へつぎ)

に、誰の功徳に濟された勝利で義家より恩賞に与つたもの、と弁舌鮮やかに仕形を交え滔々と語るところ見事。由緒ある此の語を幸ひに都で流行らせたのもおれに相違ない、と飛んだとばかりに手問うか」と腰を懸える。太郎冠者が得意顔で「二千石の松にこそ千歳を祝ふ後までもその名は朽ちせざりけり、と誇うのを聞かされた主は俄の怒気、恭なくも此の語は先祖が前九年の役の戦陣で吟



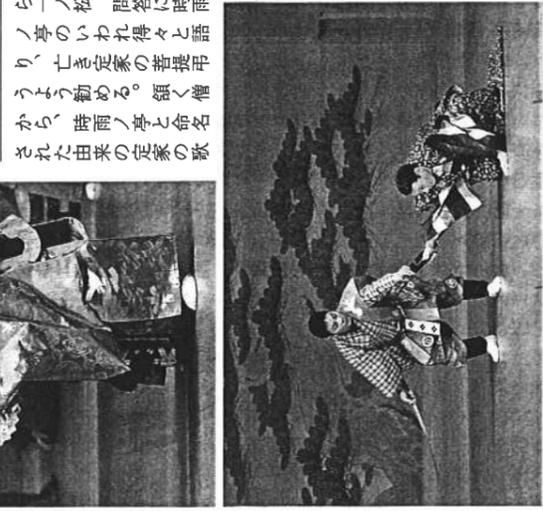
名古屋観世会定式能
④「実盛」梅田邦久
⑤「昆布売」野村小三郎・松田高義
(撮影 杉浦賢次氏)

れる迄、角樽に手を付けるなど考
えも及ばない感嘆な太郎冠者も、
茶屋から理詰めに勤められ、一旦
口を切れは忽ち酒宴、茶屋に囃さ
せ舞う酔余の舞舞も堂に入る。酔
いの勢いで気前よく木六駄を茶屋
に進上、詭気分で峠を下る辺りか
ら気分は益々昂揚、し過ぎて伯父
との間答に持ち前の機転もすんな
りとはゆかず全て露見、叱責され
て逃げ出す破目に、正邦、茫洋と
した大きな太郎冠者像をみせ上々
の抜き。(49分・11月1日・茂山
狂言会名古屋公演)

なお今回は三世十作二十三回忌
追善、各曲は茂山十五郎家三代の
順に初番は三世の子、中は孫、切
は曾孫(あきらのみ孫)と役が振
られている盛頼、泉下の三世、以
て腹すべし、これに過ぐる喜びは
なからう。

「実盛」加賀国篠原で戦
死した実盛、霊は老翁(前シテ邦
久)と化現、廻国の遊行上人(ワ
キ雅介)の説法に纏り魂の平安を
希求。頑なに聞かしていた素性が
実盛の事跡を語柄に明らかになる
ところ、ワキとの問答・掛合が素
晴らしい。就中、へ(輪廻空叙の
蘭浮の名を)また改めて名のらん
事口惜しうこそ候へとよ、とワキ
へアシラフところ、心憎きこそを
思わせる。中人はへつき世語も恥
かしとして、跡頼むこと無く失せる
のも持ち前の輝骨。

後場、跡委ねられたかに吊りワ
キ、現われる武者姿は実盛(幽霊
後シテ邦久)、最期の情景が
坦々と敵方から語られるシテ語、
首実検に驚異を塵にへ真に染めて
候、と瞑目し頂垂れるかに面クモ
ラスのが胸に迫る。正面に跪き、
左腕に首を抱く体へ洗ひて見れ
ば、と二度水を掛け凝視、へあら



「定家」北国から都に上
る僧(ワキ勝久ワキツレ正樹)は
如何にも思い立つてという趣の着
流傳。晩秋、都に残る紅葉を褒め
ている折柄、時雨に遭い、たまた
まそこが定家ゆかりの真屋とは知
る由もなく雨宿りをすれば、それ
に目が留まった里女(シテ鏡之
丞)は恰好の人が来たとはかり、
お節介にも僧に呼び掛け運どなが
ら一ノ松、問答に時雨
ノ亭のいわれ得々と語
り、亡き定家の菩提申
うよう勤める。傾く僧
から、時雨ノ亭と命名
された由来の定家の歌

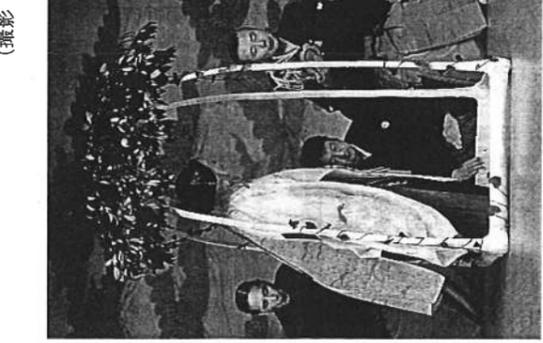
「昆布売」自身太刀を持
つは軽輩と侮られることもある
か、見栄つ張りの何来(アト高
義)、行きよりの昆布売(シテ小
三郎)を威して太刀を持たせたは
よいが、凶器が相手の手に渡った
のにはとんと気が付かない迂闊(逆
に威され腰の物を奪われ(写
真)、拳け句、舞節など様々な節
付けの売り声で昆布を売らせ、徹
底的に何来を虜囚にする。同情が
掌ろ何来に掛かる程の、昆布売の
執拗な嫌がらせが鼻に付かぬでも
ない小三郎の張り切り機。(23分)

優しや、と實績の心を打合に見
せ、クセにへ錦の袂を会稽山に纏
せし、と左袖さつと返し拍子踏む所
も鮮やか。ロンギは、地(邦弘・
勘助ら)との掛合に手塚の郎冠を
へ鞍の前輪に押しつけ(写真)、
首掻き切るところ、敢然として力
強く、手塚との組み討ちにならな
るところは、合座返シに迷れんと
する機、終始老武者の意気軒昂た
るをみせた。なお、シテ邦久は同
年五月、豊田市能楽堂開館十周年
記念公演にも演じており老練さを
遺憾なく発揮。(1時間40分)

後シテは式子内親王その人の亡
霊。夢に音を遺囑、へ外はつれな
き定家萬、と引廻し取ると、驚れ
はあるが面泥眼。柴大口・白長絹
の、床几に掛かる上品なシテ。ワ
キの語経の功德に、束縛されてい
た定家萬から解き放たれて火宅を

「文荷」若衆狂いの主
(アト友彦)、馴染のすみつ殿へ
太郎・次郎冠者(シテ融・俊
裕)に文を届けさせ。内心は主の
悪行を侮蔑している兩人も、威さ
れては主命断れず、憂き晴らして
面白可笑しく巫山戯散らして行
くこの上は、と背筋伸ばして傳に
アシラフ、へ我こそ式子内親王、
とすつと立てば、品位隠れなく、
へ真の姿は陽炎の、と静かに退り
つつ作物に寄り添う(写真)へ
苦しみを濟げ給へと、石塔(作
物)に吸い込まれる心に右へ廻
り、へ言ふかとみへて、と地一杯
に作物の後から中人。

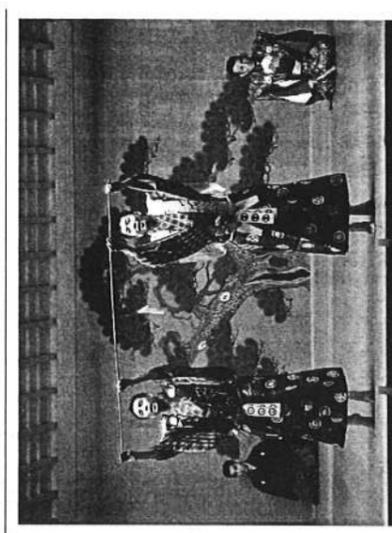
を問われ、確証は無いが詞書か
ら、と里女が一言を挙げれば、そ
の歌の心を互いに鑑賞する趣の掛
合、そして思は初回(九郎右衛
門・邦久ら)の今降る時雨から往
時に比べる荒寥たる眺めに至り、
里女は追善供養の日と僧を慕へ
誘う。力のある声量豊かなシテ
と、抗拒するワキとの問答・掛合
が惹きつける。更に、問答から作
物前に、驚き纏わる臺は式子内親
王の、萬は定家萬、と明かすと、
内親王に寄せる定家の執心を打ち
明けるシテ語が大いに聞かせ素晴
らしい。



て破ってしまうと、へ風の便り
に、と紙片をあおき出す仕末。帰
りが遅いと迎いに出る主に「これ
が小人(しようしん・若衆)の御
返事でござります」と千切れた文
を差し出す阿闍者の横着、惚けつ
いなどと口争いは序の口、詭氣分
でよしなき恋をすずが舞と「恋
重荷」のひとつくさりて茶化し合
い、へそも文は何の重荷ぞ、と有
ろろ事か開封、恋し恋しの文面
り、小石一杯では重い筈と笑い飛
ばし、拳け句、文を引つ張り合っ

出る心に作物を出ると、ワキに合
掌し、報恩の序之舞は二段目、き
れいに袖は裾ききれなくも舞はあ
くまで優雅。舞上げ、へ神楽恥か
しや、とワキに左袖で面を隠すの
が如何にも高貴な女性の含羞、キ
リはへ這ひ纏はるるや、と定家萬
を象徴的に見せる機に作物の左か
ら入つて正面に抜け、返シ向で更
に右から入り直つて安座(扇を隠
し残り留になった。小書は付かな
かったが理留。長時間弛緩すること
なく終始緊張の好舞台だった。
(2時間5分・11月2日・観世会
定例公演)

「金津地蔵」貧乏な親
(彌次郎)の意を酌み、安阿弥善
薩作の地蔵に仕立てられ、金津在
りて行く子(寺田勝蔵忠)が旨
い。田舎に着けば在所の人々の篤
い信仰を傳、早速、香花を手向け
られるが、嬉しいけれど「饅頭こ
そは食ひたけれ」とせがみ、それ
が叶うと、更に古酒をねだるなど
奇特に地蔵の通力を感じ、座像の
地蔵を立像に、の願ひ叶えんと一
回拍子に掛かつて唯せば、へ檀那
の仰せならば、と地蔵はそれに応
え、果ては一回調子に乗りに乗っ
けと子を取り戻しに来た親も踊り
しと立ち(写真)、一回法悦
に浸っている隙にまんまと子を取



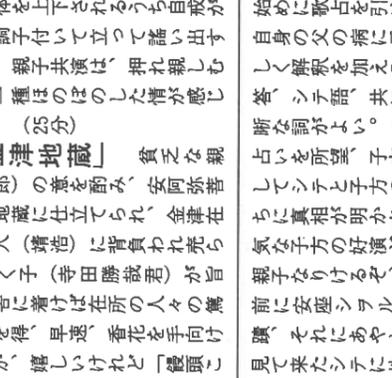
「文荷」若衆狂いの主
(アト友彦)、馴染のすみつ殿へ
太郎・次郎冠者(シテ融・俊
裕)に文を届けさせ。内心は主の
悪行を侮蔑している兩人も、威さ
れては主命断れず、憂き晴らして
面白可笑しく巫山戯散らして行
くこの上は、と背筋伸ばして傳に
アシラフ、へ我こそ式子内親王、
とすつと立てば、品位隠れなく、
へ真の姿は陽炎の、と静かに退り
つつ作物に寄り添う(写真)へ
苦しみを濟げ給へと、石塔(作
物)に吸い込まれる心に右へ廻
り、へ言ふかとみへて、と地一杯
に作物の後から中人。



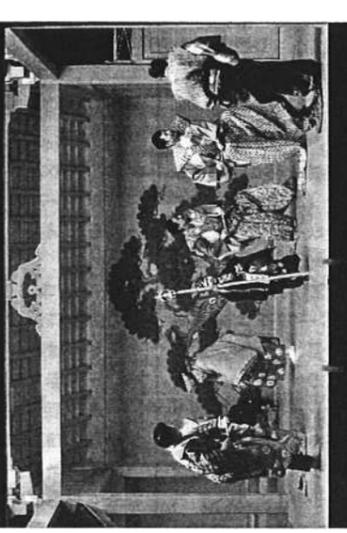
「文荷」若衆狂いの主
(アト友彦)、馴染のすみつ殿へ
太郎・次郎冠者(シテ融・俊
裕)に文を届けさせ。内心は主の
悪行を侮蔑している兩人も、威さ
れては主命断れず、憂き晴らして
面白可笑しく巫山戯散らして行
くこの上は、と背筋伸ばして傳に
アシラフ、へ我こそ式子内親王、
とすつと立てば、品位隠れなく、
へ真の姿は陽炎の、と静かに退り
つつ作物に寄り添う(写真)へ
苦しみを濟げ給へと、石塔(作
物)に吸い込まれる心に右へ廻
り、へ言ふかとみへて、と地一杯
に作物の後から中人。



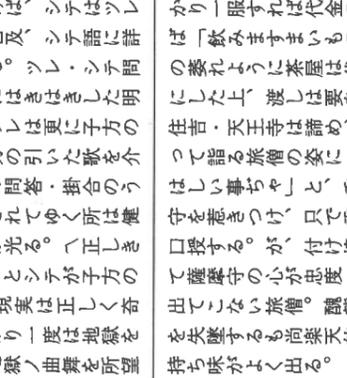
「文荷」若衆狂いの主
(アト友彦)、馴染のすみつ殿へ
太郎・次郎冠者(シテ融・俊
裕)に文を届けさせ。内心は主の
悪行を侮蔑している兩人も、威さ
れては主命断れず、憂き晴らして
面白可笑しく巫山戯散らして行
くこの上は、と背筋伸ばして傳に
アシラフ、へ我こそ式子内親王、
とすつと立てば、品位隠れなく、
へ真の姿は陽炎の、と静かに退り
つつ作物に寄り添う(写真)へ
苦しみを濟げ給へと、石塔(作
物)に吸い込まれる心に右へ廻
り、へ言ふかとみへて、と地一杯
に作物の後から中人。



「文荷」若衆狂いの主
(アト友彦)、馴染のすみつ殿へ
太郎・次郎冠者(シテ融・俊
裕)に文を届けさせ。内心は主の
悪行を侮蔑している兩人も、威さ
れては主命断れず、憂き晴らして
面白可笑しく巫山戯散らして行
くこの上は、と背筋伸ばして傳に
アシラフ、へ我こそ式子内親王、
とすつと立てば、品位隠れなく、
へ真の姿は陽炎の、と静かに退り
つつ作物に寄り添う(写真)へ
苦しみを濟げ給へと、石塔(作
物)に吸い込まれる心に右へ廻
り、へ言ふかとみへて、と地一杯
に作物の後から中人。



「文荷」若衆狂いの主
(アト友彦)、馴染のすみつ殿へ
太郎・次郎冠者(シテ融・俊
裕)に文を届けさせ。内心は主の
悪行を侮蔑している兩人も、威さ
れては主命断れず、憂き晴らして
面白可笑しく巫山戯散らして行
くこの上は、と背筋伸ばして傳に
アシラフ、へ我こそ式子内親王、
とすつと立てば、品位隠れなく、
へ真の姿は陽炎の、と静かに退り
つつ作物に寄り添う(写真)へ
苦しみを濟げ給へと、石塔(作
物)に吸い込まれる心に右へ廻
り、へ言ふかとみへて、と地一杯
に作物の後から中人。



「文荷」若衆狂いの主
(アト友彦)、馴染のすみつ殿へ
太郎・次郎冠者(シテ融・俊
裕)に文を届けさせ。内心は主の
悪行を侮蔑している兩人も、威さ
れては主命断れず、憂き晴らして
面白可笑しく巫山戯散らして行
くこの上は、と背筋伸ばして傳に
アシラフ、へ我こそ式子内親王、
とすつと立てば、品位隠れなく、
へ真の姿は陽炎の、と静かに退り
つつ作物に寄り添う(写真)へ
苦しみを濟げ給へと、石塔(作
物)に吸い込まれる心に右へ廻
り、へ言ふかとみへて、と地一杯
に作物の後から中人。

豊田御酒落狂言会
④「文荷」佐藤麟・鹿島俊裕
野村扇丞
⑤「金津地蔵」井上靖浩、寺田
勝蔵
(撮影 杉浦賢次氏)

り戻した親は、気が付かれ追い込ま
れる。統制のよくとれた出色の大
勢物だった。(11月9日・第二回
豊田御酒落狂言会・豊田市能楽
会)

「歌占」歌占がよく当た
る評判を聞き、父を尋ねる子(子
方・小林陸彦)を伴い当の度会ノ
何某(シテ博忠)に会う里人(ツ
レ飛龍、若い白髪のシテを諷
れば、廻国中に傾死したが今の容
姿で蘇生、と問答に明かされ
ば、何が無し奇蹟を信じる心。手
主に身体を上干されるうち自戒が
被れ、調子付いて立つて諷い出す
ことに。親子共演は、押れ親しむ
主従の一種はほのほした情が感じ
られた。(25分)

「金津地蔵」貧乏な親
(彌次郎)の意を酌み、安阿弥善
薩作の地蔵に仕立てられ、金津在
りて行く子(寺田勝蔵忠)が旨
い。田舎に着けば在所の人々の篤
い信仰を傳、早速、香花を手向け
られるが、嬉しいけれど「饅頭こ
そは食ひたけれ」とせがみ、それ
が叶うと、更に古酒をねだるなど
奇特に地蔵の通力を感じ、座像の
地蔵を立像に、の願ひ叶えんと一
回拍子に掛かつて唯せば、へ檀那
の仰せならば、と地蔵はそれに応
え、果ては一回調子に乗りに乗っ
けと子を取り戻しに来た親も踊り
しと立ち(写真)、一回法悦
に浸っている隙にまんまと子を取

「文荷」若衆狂いの主
(アト友彦)、馴染のすみつ殿へ
太郎・次郎冠者(シテ融・俊
裕)に文を届けさせ。内心は主の
悪行を侮蔑している兩人も、威さ
れては主命断れず、憂き晴らして
面白可笑しく巫山戯散らして行
くこの上は、と背筋伸ばして傳に
アシラフ、へ我こそ式子内親王、
とすつと立てば、品位隠れなく、
へ真の姿は陽炎の、と静かに退り
つつ作物に寄り添う(写真)へ
苦しみを濟げ給へと、石塔(作
物)に吸い込まれる心に右へ廻
り、へ言ふかとみへて、と地一杯
に作物の後から中人。

「文荷」若衆狂いの主
(アト友彦)、馴染のすみつ殿へ
太郎・次郎冠者(シテ融・俊
裕)に文を届けさせ。内心は主の
悪行を侮蔑している兩人も、威さ
れては主命断れず、憂き晴らして
面白可笑しく巫山戯散らして行
くこの上は、と背筋伸ばして傳に
アシラフ、へ我こそ式子内親王、
とすつと立てば、品位隠れなく、
へ真の姿は陽炎の、と静かに退り
つつ作物に寄り添う(写真)へ
苦しみを濟げ給へと、石塔(作
物)に吸い込まれる心に右へ廻
り、へ言ふかとみへて、と地一杯
に作物の後から中人。

「文荷」若衆狂いの主
(アト友彦)、馴染のすみつ殿へ
太郎・次郎冠者(シテ融・俊
裕)に文を届けさせ。内心は主の
悪行を侮蔑している兩人も、威さ
れては主命断れず、憂き晴らして
面白可笑しく巫山戯散らして行
くこの上は、と背筋伸ばして傳に
アシラフ、へ我こそ式子内親王、
とすつと立てば、品位隠れなく、
へ真の姿は陽炎の、と静かに退り
つつ作物に寄り添う(写真)へ
苦しみを濟げ給へと、石塔(作
物)に吸い込まれる心に右へ廻
り、へ言ふかとみへて、と地一杯
に作物の後から中人。

「文荷」若衆狂いの主
(アト友彦)、馴染のすみつ殿へ
太郎・次郎冠者(シテ融・俊
裕)に文を届けさせ。内心は主の
悪行を侮蔑している兩人も、威さ
れては主命断れず、憂き晴らして
面白可笑しく巫山戯散らして行
くこの上は、と背筋伸ばして傳に
アシラフ、へ我こそ式子内親王、
とすつと立てば、品位隠れなく、
へ真の姿は陽炎の、と静かに退り
つつ作物に寄り添う(写真)へ
苦しみを濟げ給へと、石塔(作
物)に吸い込まれる心に右へ廻
り、へ言ふかとみへて、と地一杯
に作物の後から中人。

NHK放送予定(平成21年3月~4月)

Table with NHK-FM ラジオ能楽鑑賞 (毎週日曜日 7時15分~8時) and program details for 3/29, 4/5, 4/12, 4/19, 4/26.

演能カレンダー

名古屋能楽堂

(能・狂言演能関係) (TEL 052-231-0088)

Calendar table for 演能 with dates from 3/29 to 4/25 and event names like 西村同門会, 東海の能, etc.

能楽の友

発行能楽の友社 名古屋千種区千種2丁目18-18 (郵便番号 464-0858) 電話 FAX 振替口座 購読料 送料 郵送の場合



和泉流狂言方・野村小二郎氏は、平成二十年度名古屋芸術奨励賞(個人)を伝統芸能・狂言で受賞した。

平成20年度

名古屋市芸術奨励賞

狂言方 野村小二郎氏受賞

演能は、解説・村瀬和子(詩人)。

豊田市能楽堂では、豊田市能楽堂四月能を四月四日(土)開催、能「桜川」(シテ親世流・大槻文蔵)狂言「腰折」(シテ大槻流・茂山忠三郎)を上演する。

豊田市能楽堂四月能

4月4日 能「桜川」狂言「腰折」

狂言「腰折」(シテ祖父・茂山忠三郎、アト山伏 茂山良暢、アト太郎冠者山口耕道、後見・榊谷雄一郎)。

能「隅田川」

4月15日第12回 廣田鑑賞会能

金剛流、廣田鑑賞会能は、きたる四月十五日(水)京都・金剛能楽堂で第12回公演を開催、能「隅田川」小巻後の彩色(シテ廣田幸稔)狂言「鬼継子」(茂山十三郎)を上演する。

始曲午後一時三十分。解説 能楽評論家・權藤芳一氏。

演能は次のとおり。狂言「鬼継子」茂山十三郎、松本薫。

能「隅田川」後の彩色 シテ廣田幸稔、子方西村豊、ワキ福王和幸、ワキツレ山本順三、笛・左簿 齋弘、小鼓・林光寿、大鼓・河村大。

後見・金剛水護、宇高週成、宇高竜成、地詠・松野共憲、今井清隆、種田道一、掛川昭二、重本昌也、廣田泰能、今井克紀、宇高徳成。

料金 一般八千円、会員七千五百円、学生三千円。

主催 廣田鑑賞会、チケット販売は、金剛能楽堂075-4441-7222、京都新聞社文化センター、絵書店075-2331-1990、京都会場プレイガイド075-771-6056、廣田鑑賞会075-722-9123。

尾張徳川家の能

徳川美術館 21年度4月開講

徳川美術館では、平成21年度の能楽講座「尾張徳川家の能」を4月から開講する。

今回は「船弁慶」をテーマに、歌人尾場あき子氏のお話(4月25日)から狂言方・井上博洋氏、シテ方辰巳満次郎氏、笛方・藤田六郎兵衛氏の話と実演による充実した内容で進められる。

講座内容は次のとおり。▽4月25日(土)午後2時開講「院政期の芸能界」白拍子・帯一講師・歌人尾場あき子氏。

▽5月2日(土)午後1時半開講「能舞台に船登場」船頭一人で大奮闘!講師・狂言方泉流・井上博浩氏。

▽6月6日(土)「美しい静御前から怨霊へ」シテ寛利講師

梅原 猛「能を観る」

大槻能楽堂自主公演能

2009年大槻能楽堂自主公演能は、哲学者梅原猛氏による独特の世界観で「能を観る」解説と話が新風をもたらす鑑賞として注目される。演能および梅原氏の「お話」は次のとおり。

◇4月25日(土)午後2時開演。お話 戦線離脱者の恋 梅原 猛

能「清経」恋之喜取 シテ上田拓司、ソレ寺沢幸祐、ワキ江崎金次郎。

笛・野口伝之輔、小鼓・横山晴明、大鼓・河村大。

後見・泉嘉夫、赤松禎英、生一、知識、地詠・大槻文蔵、上田貴弘、斎藤信隆、上野雄三、山本正人、武富康之、斎藤信輔、水田雄晴。

◇5月16日(土)午後2時開演。お話 浮気な夫を養う妻の真心 梅原 猛

能「井筒」シテ片山清司、ワキ 福王和幸、ヱイ善竹隆平。

シテ方宝生流、辰巳満次郎氏。▽8月8日(土)「静の涙・押し寄せる大波」講師・笛方藤田流十一世豪元・藤田六郎兵衛氏ほか。

会場 徳川美術館講堂、定員百五十名。

受講料(税込) 一般一万円(入館料を含む)、賛助会員五千円。

申し込み 定員になり次第締め切り。

申し込み方法 往復はがき、又はFAX番号記入のうえ、左記に申し込み。

申し込み、問い合わせ 名古屋市中区徳川町1017(〒461-10023) 徳川美術館「能楽講座」係 TEL052-9355-6262、FAX052-9355-9444。

後見・片山九郎右衛門、赤松禎英、地詠・大槻文蔵、松浦信一、齋藤信隆、上野雄三、山本正人、味方玄、武富康之、斎藤信輔。

◇6月27日(土)午後2時開演。お話 捨てられた皇子の哀しみ 梅原 猛

能「蟬丸」シテ(逆髪)友枝辰世、シテ(蟬丸)大槻文蔵、ワキ 福王茂十郎、ワキツレ福王知登、豊多雅人、間・善竹隆司。

笛・野口伝之輔、小鼓・飯田清一、大鼓・山本孝

後見・赤松禎英、武富康之、長島茂、地詠・浅見真州、斎藤信隆、上野雄三、山本正人、浦田保親、寺沢幸祐、斎藤信輔、水田雄晴。

入場料 自由席 一般前売四二〇〇円、当日四七〇〇円、座席指定料五〇〇円(公演一カ月前から公演前日まで受付、大槻能楽堂にて)。

問い合わせ、大槻能楽堂(大阪市中中央区上町A番7号、電話06-6761-8055)。

日本芸術院会員 故 橋岡久太郎

五十年忌追善別会 特別公演

四月十一日(土) 第一部 午前十一時 第二部 午後二時三十分 名古屋能楽堂

【第一部】 午前十一時 開演

仕舞 清経 久田勘吉郎 地詠 藤谷山幸親 融 久田勘鶴 梅田嘉宏

仕舞 笠之段 山階彌右衛門 地詠 寺田大志 玉之段 観世芳伸 梅田嘉宏

舞囃子 砧 観世清和 河村総一郎 藤田六郎兵衛 地詠 林宗一郎 大西礼久 坂口貴信 山階彌右衛門

仕舞 西行櫻 橋岡慈観 地詠 清沢山幸親 久田勘一朗

能 卒都婆小町 久田三津子 高安勝久 河村真之介 藤田六郎兵衛 一慶之次郎 杉江元 柳原昌忠

後見 藤谷山幸親 武田大志 大西礼久 観世清和 久田勘一朗 上田公威 寺澤幸祐 久田勘鶴

入場料(全自由席) 前売券 一般一〇〇〇〇円 学生五〇〇〇円 当日券一〇〇〇円増

【第二部】 午後二時三十分開演

能 道成寺 藤戸勝治 森常好 河村総一郎 金春国和 藤原 常太郎 久田勘一朗 竹市学 館田善博

後見 橋岡慈観 地詠 林宗一郎 藤谷山幸親 清沢山一 政 久田勘鶴

後見 橋岡慈観 地詠 清沢山一 政 久田勘鶴

後見 上田貴弘 久田勘一朗 大西礼久 上田公威 武田大志 松田高義 伊藤泰泰 伴野俊彦 野口隆行

※入場料無料、御来場歓迎 主催 名古屋淡交会 橋岡慈観 三交会 久田三津子

当地の各流儀・流派・結社、 社中の消息を辿る ⑥

竹尾 邦太郎

「名匠鑑賞能」⑥

――承前――

第三九回は昭和十五年一月二三日、秋恒例の金春・観世二流大会。能「弱法師・盲目之舞」梅若六郎・福王茂十郎、仕舞「二人静」小島芳雄・観世武雄、能「井筒・物着」観世喜之・西村弘毅、仕舞「熊坂」松岡龍馬、狂言「塚草曲」和泉保之・井上松次郎、能「黒塚・白頭」本田秀男・福王茂十郎。

なお前後するが、此の前日の乱能「道成寺」について田辺惣太郎は自著「小鼓楽鑑賞」の中で次のエピソードを打ち明けている。

十月二十二日には、舞台六十年五流道成寺小鼓楽語学祝賀乱能を催しまして、観世喜之氏に小山本勝一氏に大・観世武雄氏に小・徳・辰巳孝氏に太鼓を願つて道成寺を舞わせていただきました。鐘引は藤田・金春氏で無事鐘入りも出来ました。面を掛けてからサイダーを入れて置いて下さったことを思い出して、伯母ヶ酒の太郎冠者がよろしく面を上げて飲みましたのが失敗で、鐘が上つたら全然前が真暗で、終演まで暗中模索の文字通り、とんだお笑い草でした。

また、この道成寺で小鼓を勤めた観世喜之は「乱拍子に全力を傾

注したので翌日の井筒・物着では腕が上がらなくて困りました」と後日、語るのを聞いた。
第四〇回は昭和十六年三月一日、春の宝生流大会。能「禪丸」野口祿久・辰巳孝・高安滋郎、能「隅田川」宝生九郎・内藤伸(字方)・高安滋郎、狂言「伊文字」和泉保之・河村正雄・井上松次郎・佐藤秀雄、能「表上・梓之出」宝生英雄・内藤泰二・江崎直實、大鼓の飯島佐六の来演。「放下僧」は前年春の「禪丸」と同じシテとツレの配役。
第四三回は昭和十七年一月二八日、金春・観世二流大会。能「巴」本田秀男・福王茂十郎、狂言「武蔵」三宅藤九郎・和泉保之・井上松次郎、能「野宮」観世喜之・高安滋郎、仕舞五番「善知鳥」金春信高、能「実盛」山中信之「王之段」観世武雄「二人静」小島芳雄、南条秀雄「船弁慶」大江又三郎、能「小鍛冶・黒頭別当」梅若六郎・福王茂十郎

第四一回は同年一月二二日、秋恒例の金春・観世二流大会。能「禪丸」梅若六郎・橋岡久馬・福王茂十郎、仕舞三番「花籃」観世武雄「殺生石」大江又三郎「玉之段」金春信高、能「霊林院」観世喜之・高安滋郎、狂言「文蔵」和泉保之・井上松次郎、能「熊坂」本田秀男・福王茂十郎、大鼓に大

阪から山本敬一郎の来演。「禪丸」は美色の配役。
第四二回は三十七年三月一八日、恒例の宝生流大会。能「放下僧」野口祿久・辰巳孝・江崎直實、能「隅田川」宝生九郎・内藤伸(字方)・高安滋郎、狂言「伊文字」和泉保之・河村正雄・井上松次郎・佐藤秀雄、能「表上・梓之出」宝生英雄・内藤泰二・江崎直實、大鼓の飯島佐六の来演。「放下僧」は前年春の「禪丸」と同じシテとツレの配役。
第四三回は昭和十七年一月二八日、金春・観世二流大会。能「巴」本田秀男・福王茂十郎、狂言「武蔵」三宅藤九郎・和泉保之・井上松次郎、能「野宮」観世喜之・高安滋郎、仕舞五番「善知鳥」金春信高、「実盛」山中信之「王之段」観世武雄「二人静」小島芳雄、南条秀雄「船弁慶」大江又三郎、能「小鍛冶・黒頭別当」梅若六郎・福王茂十郎

⑥面へつづく

名古屋芸術 奨励賞(個人) 野村小三郎師 表彰事由

平成20年度名古屋芸術奨励賞を受賞した狂言方・野村小三郎氏の表彰事由は次のとおり。

1976年(昭和50年)「観猿」の獲にて4歳で初舞台。以降、狂言の修業過程における孝手としての課題項目である「三番見」「那須恋」「千歳」「釣狐」「金剛」「花子」を全て披露。

1991年(平成3年)「山本安英の会」で新作狂言「彦市はなし」に参加して以降、1999年(平成11年)「国立能楽堂自主公演」で狂言「浦島」を約百年ぶりに復曲上演し、2005年(平成17年)「愛知芸術劇場演劇フェスティバル」において、A・チエホフ原作の「観葉木才狂言「娘姫愛遊戯」(おとことおんなのラヴゲーム)」を発表・主演するなど、新作や復曲・改作も手掛け、幅広く

活動している。また、2003年(平成15年)のハリウッド映画「ラストサムライ」での劇中劇の構成・演出・台本作成・演技指導・出演をするほか、他ジャンルとの交流・講演や、舞台人・田辺謙名義での舞台出演も多数あり、狂言界以外にも活動の場を拡げている。

1991年(平成3年)以降は従来の訪問上演型学校公演とは別に、各種の教育機関での体験型講習会・講演会の開催や、カルチャースタジオでの講座開設等を通じて狂言の普及、指導、伝承活動に努め、1997年(平成9年)からは直門教場を開設し、アマチュアの指導や後進の育成にも尽力している。

最近では、2008年(平成20年)に名古屋城本丸御殿PRイベント「ゆめつくり狂言会」に狂言「三本柱」「井杭」に参加するなど、東海地区を中心に東京・関西と多くの舞台を務めている。狂言方若手を牽引するリーダー的な存在であり、今後も更なる活躍が期待される能楽師狂言方である。

太子ロマン斑鳩の里 桜祭能 金剛流 能「藤戸」上演

奈良県斑鳩町では、ふるさとに根ざした伝統芸能の継承と能楽金剛流発祥の地「斑鳩の里」を知っていただくことを目的として、「太子ロマン斑鳩の里 桜祭能」を平成9年から挙行、平成20年3000年記念として、きたる4月5日(日)、奈良県斑鳩町皇留の「いかるがホール」で桜祭能を開催する。

平成21年度「太子ロマン斑鳩の里 桜祭能」。
とき 4月5日 開場午後1時30分、開演午後2時、終演午後4時予定。
主催 斑鳩町観光協会、奈良金剛会、後援 斑鳩町、斑鳩町文化振興財団、斑鳩文化協議会、斑鳩ユネスコ協会、奈良県など。

料金 前売り2000円(自由席) 当日2500円(自由席)
公演演目/能「藤戸」植田恭三(金剛流)、狂言「昆布疋」丸石やすし・茂山七五三、仕舞「加茂」豊嶋昌嗣、「綱ノ段」豊嶋幸洋。
お問い合わせ 斑鳩町観光協会事務局(奈良県生駒郡斑鳩町法隆寺1-1-8、電話07445-74-6800、FAX07445-75-9090)。
また今年度は平成20年3000年記念の年であり、この桜祭能にあわせて、奈良を祭祥の地とする芸能の認知度を高めることを目的に、光熱能面会、奈良金剛会、斑鳩町観光協会の共催により、4月3日(金)から5日(日)まで「光熱能面会」が法隆寺1センター12階で能面38点が展覧され、供覧される。

能面展についての問い合わせは、斑鳩町観光協会事務局(電話07445-74-6800番)。

演能案内 名古屋観世会定例公演能

四月十二日(日) 十二時半開演
名古屋能楽堂
後ツレ 高橋 暁一
前ツレ 武田 大志
古橋 正邦
能 賀 茂 飯富 雅介 尾 虹一 泉頭 義命
根元 正樹 後藤 嘉津幸 竹市 学
橋本 幸
問 佐藤 融
後見 梅田 嘉宏 地謡 吉沢 旭 清沢 一政
梅田 邦久 加山 幸綱 武田 邦弘
敏彦 祖父江 修一

狂言 二千石 主人 佐藤 友彦 太郎 登喜 井上 靖浩
後見 井上 菊次郎
仕舞 網ノ段 今沢 美和 地謡 晨野 路
天 鼓 八田 三津子 三 近藤 野路
村 彦希
仕舞 鉄 輪 大槻 文蔵 地謡 松山 幸親
久田 江 修一
梅田 嘉津 幸

能 隅田川 梅若 六郎 河村 総一郎 大野 誠
高安 勝久 久田 舞一郎
杉江 元
後見 武田 大志 地謡 八 須 神 孝 充 古 橋 正 邦
武田 邦弘 清 沢 敏 彦 一 政 久 田 樹 麿

附 祝 言 (終演五時頃)
主催 名古屋 観 世 会
事務所 名古屋市中区和区台町2-1-16 15
電話/FAX (052) 841-1463 2
〔入場料〕
年間指定席(年五回分) 三五〇〇円
年間自由席(年五回分) 二〇〇〇円
当日券六〇〇円

平成21年度 名古屋梅猶会定期能

四月二十五日(土) 午後一時開演
名古屋能楽堂
能 田 村 小松 勝憲
飯富 雅介 河村 真之介 大野 誠
松田 高義 柳原 富司 忠
後見 梅若 猶義 地謡 小川 晴子 梅若 基徳
岡田 晃一 井戸 香子 井戸 和男
梅若 雅一 池内 光之助
梅若 善高 梅若 善久
仕舞 実 盛 寺 岡田 晃一 梅若 雅一
網ノ段 井戸 良祐 地謡 池内 光之助
船弁慶 梅若 猶義 梅若 基徳
狂言 鬼 瓦 主 野村小三郎 太郎 登喜 藤波 徹
後見 伴野 俊彦

仕舞 弱法師 梅若吉之丞 地謡 梅若若松 勝憲
梅若若松 善久
能 杜 若 梅若 修一
高安 勝久 尾 虹一 加藤 洋輝
後藤 孝一郎 鹿取 希世
後見 井戸 和男 地謡 小松 勝憲 梅若 善久
梅若 善高 立花 香子 梅若 若松 善久
井戸 良祐 岡田 晃一
(終了予定 午後4時50分頃)
〔有料〕
前売 五十円 当日六十円 主催 梅 猶 会
名古屋梅猶会定期能
連絡所
桑名市大字西別所1-0-6 1の5
小松勝憲方
電話0594-23-4582

尾張の殿様が 観た能・演じた能 名古屋能楽通史(名古屋能楽)

平成20年度名古屋能楽通史定例公演「尾張の殿様が観た能・演じた能」の名古屋能楽通史は次のとおり。(名古屋能楽通史資料より)
1607(慶長12) 徳川 義直、尾張に封ぜられる。
1611(慶長16) 豊臣秀頼上洛。この時秀頼、義直に「町田小鼓」を贈る。
1614(慶長19) 名古屋城が完成する。狂言方・山崎五郎左衛門(元直)、尾張に召し抱えられる。
1617(元和3) シテ方・金春八左衛門(浄元)、尾張に召し抱えられる。
奈良住で御用のつと、尾張へ出勤する。
1629(寛永6) 笛方・藤田清兵衛、尾張に召し抱えられる。
1659(万治2) 二代藩主徳川光元代々の祝能が三日間城内舞台で行われ、町人も見物する。名古屋城下で行われた町人能の初め。以後代々の藩主交代の際には、必ず町入りの形で行われることとなった。
この年、大鼓方・石井弥市、召し抱えられる。
1687(貞享4) 熱田で勸進能が行われる。当地の記録に見られる最初のもの。
1688(貞享5) シテ方・田中源之丞、召し抱えられる。
1690(元禄3) 光友大納言昇進の祝能(町入り)。この時、脇師・西村庄兵衛、召し抱えられる。
1694(元禄7) 綱誠公、家督相続の祝能(町入り)。
1696(元禄9) 狂言方・早川忠三郎、正履屋いとして召し抱えられる。
1697(元禄10) 小鼓方・福井四郎兵衛、召し抱えられる。
1713(正徳3) 狂言方・野村又三郎(信明)、京都住のまま尾張に召し抱えられる。
1714(正徳4) 田中源之丞、古渡稲荷社にて一代能興行を行う。
1725(享保10) 狂言方・山崎源助、古渡稲荷社にて七日間の狂言興行を行う。
1726(享保11) 西村庄兵衛、清寿院境内にて大主に金春左衛門を招き権能。この年シテ方・寺田門治、召し抱えられる。
1731(享保16) 七代藩主宗春、初人国の祝能(町入り)。
1818(文化15) 広小路神明社にて30日間の辻能。このころ進能が行われる。当地の記録に見

⑥面へつづく

②面よりつづき
・指吸雅之助、笛の森田光春、大鼓の山本敬一郎が来演。
第四回は昭和三十八年三月十七日、春の宝生流大会。能「小袖曹我」野口禄久・辰巳孝・内藤泰二(母)。能「熊野」宝生英雄・倉本雅・西村弘敬、狂言「素袍巻」野村又三郎、井上松次郎・佐藤卯三郎、能「綾鼓」宝生九郎・畑富次・西村欽也、金沢から大鼓の飯島佐六。
第四五回は同年一〇月二十七日、金春・観世の二流。能「豊清」小返「観世喜之・榎王茂十郎、狂言「千鳥」和泉保之・井上松次郎・佐藤卯三郎、仕舞「笠之段」桜間龍馬、能「花置・篁之伝」梅若六郎・山本勝一・田鍋明宏(子方)・高安滋郎、仕舞「松風」鈴木一雄「善知鳥」大江又三郎、能「狸々乱・双之舞」金春信高・本田秀男・榎王茂十郎、大鼓に下村英一が来演。「花置」を勤めた田鍋惣太郎は自著「小鼓芸話」の中で次のように言う。

梅若六郎氏の花置、たいへん愉快に演了しようという興に乘じてへ紅葉ば散りとぶ……にカンのヲトリ二つに乙のヲトリを重ねて打ち、もみちの敷る風情と都合件われる歡喜の心持を表現しました。こうした替手は、大鼓が頼もしい相手でなければ、却つて混乱を生じますので、みだりにするものではありません。前からは予定していてもうまくゆくとはいえません。榎井五郎氏(尾州灘お抱えの鼓師の家柄)は、古書を研究して、替手を打つことが好きでした。なお、替手があつても、大鼓の方で、同じように替手を打つ場合には当方でそれをさし控えるのが、今でいうエチケットであります。両方がやつては、折角の手がとまおれのぶちこわしになつてしまいますから……。

第四六回は昭和三十九年三月十五日、恒例の宝生流大会。能「田村」野口禄久(前)辰巳孝(後)、西村欽也、狂言「末広」野村又三郎・井上松次郎・河村正造、能「羽衣・蝶巻」宝生九郎・高安滋郎、仕舞三番「竹生鳥」馬

藤富四夫「綱之段」倉本雅「黒塚」衣斐正直、能「望月」宝生英雄・内藤泰二・田鍋明宏(子方)・高安滋郎、いつものように宝生大会に大鼓の飯島佐六が金沢から。
第四七回は同年一〇月二十五日、秋の金春・観世二流大会。能「巴」梅若六郎・榎王茂十郎、狂言「群置」和泉保之・井上松次郎、仕舞「阿漕」本田秀男、能「恋重荷」観世喜之・大江又三郎・榎王茂十郎、仕舞「井筒」観世武雄、能「養上」桜間龍馬、前田茂穂・高安滋郎、大鼓に谷口勝三、小鼓に幸養太郎の来演。
第四八回は昭和四〇年三月二二日、例により春の宝生流一門、金沢からは大鼓の飯島佐六。能「籠」辰巳孝(前)野口禄久・西村欽也、狂言「墨塗」野村又三郎・井上松次郎、佐藤秀雄、能「西行巻」宝生九郎、西村弘敬、「殺生石」白頭「宝生英雄・高安滋郎」。
第四九回は別会で同年五月十五日、番組は舞囃子「養老」大槻秀夫、一調「桜川」青木恒治、山田仁三郎と大塚二二(謡)、素囃子「早舞」甕三男・田鍋明宏、眞城一・野崎太郎、能「鶴鳴小町」大西信久・高安滋郎、狂言「金風」和泉保之・井上松次郎、一調「笠之段」田鍋惣一郎・柴田初太郎と鬼頭五朗(謡)、舞囃子「阿漕」内藤泰二、一調「勸進帳」幸四次郎・辰巳孝(謡)、能「狸々乱・双之舞」山階信弘、大西信彦・西村欽也。「鶴鳴小町」の上演は明治四五年(一九一二)四月二二日、泉眼町俱樂部舞台、国謡能楽会で金剛謹之輔が勤めて以来、実に五三年ぶり。因みにワキは中村弥三郎、囃子方は藤田米次郎・榎井初太郎、谷口豊三郎。
第五〇回は同年一〇月二四日、秋の金春・観世二流大会。舞囃子「賀茂」柴田初太郎、能「放下僧」大江又三郎・観世武雄・榎王輝幸、舞囃子「三笑」永島誠二・小島芳雄・五木田武計、能「三輪」金春信高・榎王茂十郎、狂言「子盗人」和泉保之・井上礼之助・井上松次郎、一調「小童」田鍋惣太郎・本田秀男(謡)、能「道成寺」観世喜之(63)榎王茂

十郎(59)アと佐藤卯三郎(74)佐藤秀雄(53)、藤田六郎兵衛(57)後藤孝一郎(34)山本敬一郎(67)前川善雄(50)、地頭五木田武計(44)後見観世武雄(30)鐘後見永島誠二(55)。小鼓・後藤孝一郎は抜き。
第五一回は昭和四一年三月二〇日、春の宝生流大会。能「盛久」宝生九郎・高安滋郎、能「熊野」宝生英雄・内藤泰二・西村弘敬、狂言「花盗人」佐藤卯三郎・井上松次郎、能「小鍛冶」白頭「野口禄久(前)辰巳孝(後)西村欽也、いつもの様に大鼓の飯島佐六が金沢から、能二番を勤める。
第五二回は同年九月四日、別会で榎主・田鍋惣太郎は番組挨拶に

次のように述べる。
謹啓 本会も皆様の御後援に依り第五二回を迎え厚くお礼申し上げます。此の度の別会は、昨秋十一月三日はからずも叙勲授受(能楽師に生前叙勲は最初の由)悦んで居ります。いささかその自祝を含み、喜之師に翁を頼みました宛お快諾頂き、当地で正式の翁は数年振り、笛、小鼓も一家、他業師も当地で初めての方々が御座います。木賊(重習大曲)是も約十年振りです。信久師は昨年五月、本会にて「鶴鳴小町」をお勤め好評で御座いました。此の度も格別の同柄にて特にお願ひ申しました。其の他曲目役は本会独特、委ねる道すがら、未だどちらと決まらぬうち、お蔭で一腰が増える、などとお互いと言ひ合う余裕も。
茶屋は流石に年の功、勝負は後に損を残す、と止めるよう諫めるが、今や両人共「なるこ」「やるこ」の判断を仰ぐより互いの腰の物欲しさの模様。茶屋には必需品の、甲は薪、乙は炭、を賄賂に茶屋を買取にか、れば、茶屋は先づ両人に賭け物を出させ、判断を急ぐ両人を制し、昔語りの悪行が詠んだ歌「腕の男が山田に掛けし鳴子綱、引いて放ては遣子なりけぞ」と叫ぶも勝鬨に非ず、憎けな口物は先の新参者に負けた口惜し味がよく出る。「二人では使ひ足らぬ」と新参者を大勢抱える相談を太郎冠者アト正邦に持ち掛ければ、朋輩が増える太郎冠者の身は楽になる道理。抱える人数を問われ、「御分別次第」と答れば、大名は「二度にどつと六千人」と途方もない。余りに多く一気に入るに下げ、更にクワット減らして二人に。その二人も「汝ともに」で結局は一人。誰に気兼ねの無い主従の、ここに至る問答が互いに言葉の遣り取りを楽しむ趣なら、太郎冠者が連れてきた新参者(次アト茂)に、主従が語り聞かすよがしに大名の本身ぶりを誇大に吹聴する問答は互いに言葉の遣り取りを面白がる趣、上々相撲の段は、斟酌の無い新参者

◆晩秋から新春の舞台◆
「舞台歴七十五年忠二郎狂言会」と「青陽会」「金剛定期能 納会」「名古屋能楽堂定例 正月特別公演」

竹尾邦太郎

「又相撲」「隠れもない大名」などと大袈裟に名乗りはして「召使ふ者はたゞ一人」と宣言して憚らない大名シテ良暢、如何にもほ、んと天衣無縫の無邪気な太平楽、品よくおつとりした持ち味がよく出る。「二人では使ひ足らぬ」と新参者を大勢抱える相談を太郎冠者アト正邦に持ち掛ければ、朋輩が増える太郎冠者の身は楽になる道理。抱える人数を問われ、「御分別次第」と答れば、大名は「二度にどつと六千人」と途方もない。余りに多く一気に入るに下げ、更にクワット減らして二人に。その二人も「汝ともに」で結局は一人。誰に気兼ねの無い主従の、ここに至る問答が互いに言葉の遣り取りを楽しむ趣なら、太郎冠者が連れてきた新参者(次アト茂)に、主従が語り聞かすよがしに大名の本身ぶりを誇大に吹聴する問答は互いに言葉の遣り取りを面白がる趣、上々相撲の段は、斟酌の無い新参者

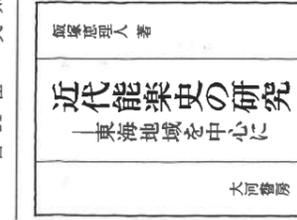
に目隠シ(まがくし・現在の猫騙シか)の手で一敗 相撲の書で対策を練つた大名が次は勝つが三度目はまた負け。義憤晴らしに太郎冠者を倒して「勝つたぞ、勝つたぞ」と叫ぶも勝鬨に非ず、憎けな口物は先の新参者に負けた口惜し味がよく出る。「二人では使ひ足らぬ」と新参者を大勢抱える相談を太郎冠者アト正邦に持ち掛ければ、朋輩が増える太郎冠者の身は楽になる道理。抱える人数を問われ、「御分別次第」と答れば、大名は「二度にどつと六千人」と途方もない。余りに多く一気に入るに下げ、更にクワット減らして二人に。その二人も「汝ともに」で結局は一人。誰に気兼ねの無い主従の、ここに至る問答が互いに言葉の遣り取りを楽しむ趣なら、太郎冠者が連れてきた新参者(次アト茂)に、主従が語り聞かすよがしに大名の本身ぶりを誇大に吹聴する問答は互いに言葉の遣り取りを面白がる趣、上々相撲の段は、斟酌の無い新参者

折々は出ぬ大曲に付き御鑑賞下さいませ。敬白。
能「翁」観世喜之、和泉保之(三番叟)大西信彦(千歳)井上祐一(面箱)、藤田昭彦、田鍋惣一郎(頭取)洋一、明宏(脇鼓)・大村良二・地頭観世武雄、舞囃子「鶴鳴」観世武雄、狂言「三人片輪」三宅藤九郎・井上松次郎・三宅右近・和泉保之、一調「花置クルヒ」幸四次郎・大西信彦(謡)、能「木賊」大西信久、吉田隆(子方)平野元章、木内十三比古・大喜多信明(ツレ)、高安滋郎、素囃子「豆舞」小島敬次郎・榎井啓次郎、眞城一・眞頭幸太郎、能「高砂」祝言之式、井田文

一・西村欽也。
第五三回は同年一〇月二三日、恒例秋の金春・観世二流大会。前月に別会があり本年度も前年同様年間三回公演、珍しく「月三題に因みて」のサブタイトルが付く。能「小管」桜間龍馬・本田光洋(ツレ)河村良信(トモ)、福王輝幸・茂山正義(アト)地頭金春・大江又三郎(謡)、能「松風」見留「観世喜之・武雄、榎王茂十郎、狂言「三人片輪」茂山千作、茂山千五郎・正義、佐々木十吉、能「融」思立之出、甕「梅若六郎・榎王茂十郎。狂言は前月と同曲。先の和泉流と今回の大藏流、自ずと比較鑑賞を促される思い。

②面よりつづき
から天保年間まで榎井仙助一座を中心とする辻能が盛んに行われる。
1827(文政10) このころ、現在、狂言共同社が継承している和泉流台本「雲形本」20冊が成る。
1828(文政11) シテ方、木下正三郎、召し抱えられる。
近刊紹介
「近代能楽史の研究」
東海地域を中心に
飯塚恵理人氏が上梓

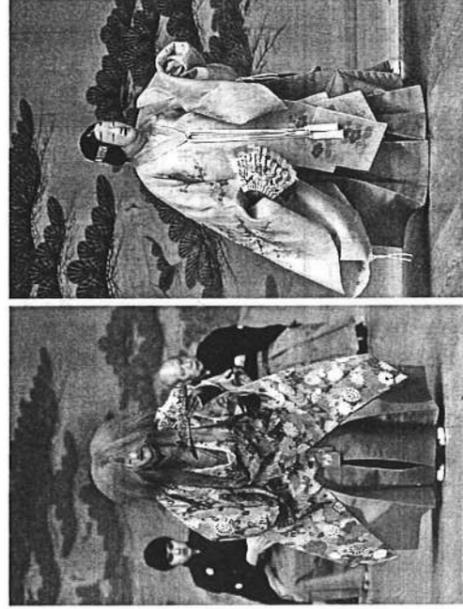
東海地方の能楽史の研究に精力的に取り組んでいる福山女学園大学教授・飯塚恵理人氏は、「近世能楽史の研究」(雄山閣、一九九九年)「近代名古屋の能楽を支えた人々」(共著、東海能楽研究会)につづいて、このほど「近代能楽史の研究―東海地域を中心に―」をことし2月に上梓、大河書房(東京都千代田区)から刊行された。(本紙2月号①面広告参照)。
著者は一九六二年米国シカゴ生まれ、一九九二年筑波大学大学院博士課程修了、言語学専攻、二〇〇〇年四月福山女学園大学文化情報学部助教授、二〇〇二年博士(文学)(大阪大学)、二〇〇八年四月福山女学園大学文化情報学部教授(現在に至る)。
主著として前述のほか「謡曲の和漢朗詠集変奏」(共著、有精堂発売、一九九三年)「幻燈能の作法と系譜」(雄山閣、二〇〇二年)刊行された「近代能楽史の研究」について法政大学名誉教授・表章氏は「研究分野の開拓とともに有用な論考や厄介な問題にあえて踏みこんだ労作が多く、今後そ



飯塚恵理人著
近代能楽史の研究
―東海地域を中心に―
大河書房

第一章 メディアと能楽
第二章 昭和初期の能楽
第三章 昭和初期の名古屋能楽界
第四章 昭和初期の「伝統芸能」
補説 近代能楽界のシステム―東京を中心に―
人名索引

らに厚味のある論考の充実と著者のこれからの研究の成果を期待する」と序文を寄せている。
同著はA5版、328頁、9030円(税込)。
大河書房/東京都千代田区九段北1-7-8 関山ビル3F。
電話03・3288・3334
FAX03・3263・4892。
著書の目次は次のとおり。
第一部 幕末から明治維新にかけての能楽界
第一章 「東海道人物志」に見られる能楽愛好者
第二章 金春朋之助安治退跡
第三章 「愛知県人物誌(正・続)」に見る名古屋能楽界の周辺
第四章 「吾輩能」の周辺
第二部 明治・大正期の能楽―数寄者の時代―
第一章 明治期の名古屋能楽界
第二章 明治中期の名古屋能楽界
第三章 夏目漱石と謡曲
第四章 数寄者の時代
第五章 泉祐三郎の今様能楽
第三部 メディアと能楽―書籍・レコード、新聞・ラジオの時代―
第一章 メディアと能楽
第二章 昭和初期の能楽
第三章 昭和初期の名古屋能楽界
第四章 昭和初期の「伝統芸能」
補説 近代能楽界のシステム―東京を中心に―
人名索引



青陽会定式能公演⑤⑥「東北」八神孝充
⑦「狸々」梅田邦久
⑧「文山殿」井上靖治、佐藤麟
(撮影・杉浦賢次氏)

③面よりつづき

「東北」旅僧ワキ正樹、都へ上り、由緒有りげな梅を愛でるところへ呼び掛ける里女シテ孝充、その梅が和泉式部お手種まで軒端の梅と呼ばれる事を知る。今に残る旧跡は花も主を慕うかに増す色香、それが和泉式部の心の現われと分らない己れを取すれば、いたわる里女、中入り前のロンキに情味。中入り地へ休らふと見えしま、に、とワキへ袖をアシラヒ「吾こそ梅のまよ、と素姓明かすと、へ木隠れて見えざりき、と微かに面クモラセ送り笛(証)に退いて行くひたすら静かな雰囲気がいよ。

後場ワキの謡詠に現われる梅ノ精は即ち和泉式部、そして和歌の徳は歌舞ノ菩薩へ解脱の後シテ、緋大口・白地長絹の薄着な姿に気品をみせ、へ和泉式部は、と袖アシラヒしてワキの前、へ成等正寛を得るぞ有難き、と拙返入ところ(字真)、いかにも法悦。和歌の徳が、浄土さながらの霊地を東北院に現出させる事を述べるウリ・サシ・クセ、クセ中へ池水に映る月影は、の麗シ麗は奇麗だが、序之舞の中、袖被クところで袖が面に掛かり、舞の流麗さを欠いたのは残念。一体は緊張の中きつちり動め、清潔な印象。(1時45分)

「文山殿」山殿甲アト融、乙を伴い日向に流された父・景清(シテ永誦)を尋ねる娘・人丸(ツレ幸穂)、着詞(ツキセリ)に戀つと、

「狸々」シテ邦久、飄逸味の狸々の酔舞、へ飲めども変わらぬ秋の夜の巫(写真)、にへ足元はよろよると、運じの巧き技藝、充て河村裕一郎君、一生懸命に勤める。大成を祈りたい。(20分・12月6日・青陽会)

「景清」トモ(ワキツレ順三)を伴い日向に流された父・景清(シテ永誦)を尋ねる娘・人丸(ツレ幸穂)、着詞(ツキセリ)に戀つと、

シテ構造。標的を取り逃がした、と甲の非を論(あげつら)うご、両者の口角泡を飛ばさんばかりの口論は掴み合いの果し合いに、が、命あつての物種、瀬戸際になれば両者互いに融通を利かせて危機の回避する可笑しさは、何の為に果し合いぞと思わせるところが味噌。拳向、この健気な姿、壮拳を人に知られず死ぬのは無念と書ルボルターシユ、「さてもさてもたゞ仮初に家を出て、山賊を仕掛して人の物を取りず」から果し合いに至る経緯、読み進めば(写真)思いやられる妻子のことに及び、感極まり泣き出す仕夫。意趣遺恨も無く、へ思へば無用の死な

地を返シ向に肩は腰に差し、へ山は松風、とワキ柱上を見上げ、へ寄する波も聞ゆるは、で立つと右の柱に両手で握まり面やや傾けて涛声を聴く、など成程の説得力。へ夕汐も差すやらん、と杖を取られたか、へさすがに我も平家なり、と藁屋を出ると琵琶法師に擬縮める。トモをワキ方から出す下掛の利である。

大声で名を呼び、激しく戸を叩くワキ、「かしましかしまし」と耳を塞ぐシテは、父と名乗らず娘を呼んだ先の苦衷から、昔の名を呼ばれる奇立ちをへ悪心は起こさじと思へば又腹立ちや、と廟で強く右膝を打つところにみせる。言目ゆえの己れの圭角、へ唯ゆるしおはしませ、とワキに合掌するお、へ目こそ暗けれど、相手の一言で人は判り、自然の風趣も目ずからわかるとう言うように直ルと、

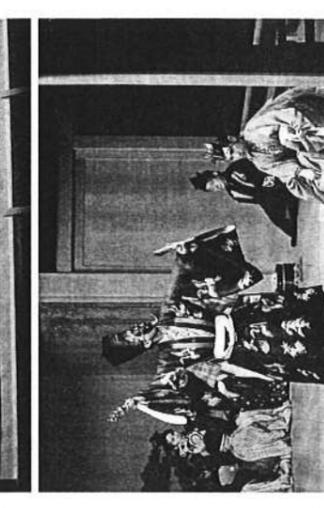
藁屋から洩れるへ松門独り閉ちて、のひとくさり。今更ながらの境涯を自嘲するかの胸のうちを肺附から搾り出す様な呻吟、先づ惹きつける。初回(三千春・通成ら)へ裏れ果てたる有様を、で引き廻シ取られると面無シ景清・沙門帽子・小袴子厚着付・貫大口・黒水衣のシテが儼然と居る。藁屋の声を聞き答めるツレ、風の音に人の気配を知る盲目のシテ、言葉を交わす二人の様子にトモは単刀直入「いかに此の藁屋の内へ物問はう」とシテと問答に。尋ね人が己れと知るも落魄の身を知られたくはないシテの苦衷は、二人を帯してからの述懐、沁々と胸を打つ。よそを尋ねて二人、ツレの意を酌むトモと里人(ワキ和幸)との問答はこ、迄の経緯から、藁屋の盲人が尋ねる当人と分つてシタルをワキに見告められるツレの素姓、そうと分つてツレをシテに合わせようのワキの勇気に至り、ワキ方向士のきはまきた詞(コトバ)の動きが小気味良く舞台を縮める。トモをワキ方から出す下掛の利である。

「豊清」トモ(ワキツレ順三)を伴い日向に流された父・景清(シテ永誦)を尋ねる娘・人丸(ツレ幸穂)、着詞(ツキセリ)に戀つと、

「豊清」トモ(ワキツレ順三)を伴い日向に流された父・景清(シテ永誦)を尋ねる娘・人丸(ツレ幸穂)、着詞(ツキセリ)に戀つと、

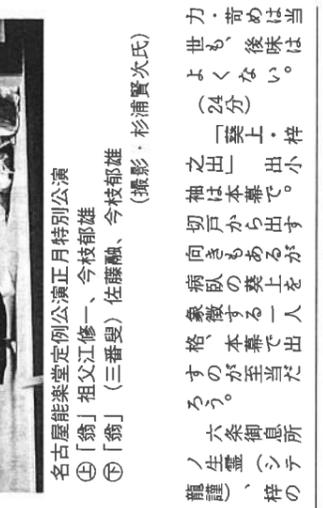
「豊清」トモ(ワキツレ順三)を伴い日向に流された父・景清(シテ永誦)を尋ねる娘・人丸(ツレ幸穂)、着詞(ツキセリ)に戀つと、

「豊清」トモ(ワキツレ順三)を伴い日向に流された父・景清(シテ永誦)を尋ねる娘・人丸(ツレ幸穂)、着詞(ツキセリ)に戀つと、



「豊清」トモ(ワキツレ順三)を伴い日向に流された父・景清(シテ永誦)を尋ねる娘・人丸(ツレ幸穂)、着詞(ツキセリ)に戀つと、

「豊清」トモ(ワキツレ順三)を伴い日向に流された父・景清(シテ永誦)を尋ねる娘・人丸(ツレ幸穂)、着詞(ツキセリ)に戀つと、



「豊清」トモ(ワキツレ順三)を伴い日向に流された父・景清(シテ永誦)を尋ねる娘・人丸(ツレ幸穂)、着詞(ツキセリ)に戀つと、

名古屋能楽堂定例公演正月特別公演
④嵐山問狂言「猿蓑」井上菊次郎、梅田邦久、武田
⑤「風山」白頭
⑥より清沢一政、(撮影・杉浦賢次氏)

た花守の老夫婦(シテ邦久ツレ幸穂)との問答のうちに、風山の桜が神木の由縁を知り、風を歌う花の名所が風山である不審を解消する。老夫婦は吉野の子守・勝手手の二神と素姓を明かすと、自然界に於ける神の摂理を説くよう

「豊清」トモ(ワキツレ順三)を伴い日向に流された父・景清(シテ永誦)を尋ねる娘・人丸(ツレ幸穂)、着詞(ツキセリ)に戀つと、

NHK放送予定(平成21年4月~5月)

NHK-FMラジオ能楽鑑賞(毎週日曜日7時15分~8時)
4月26日 楽謡「花屋」(再)親世流
5月3日 楽謡「花屋」(再)親世流

演能カレンダー

狂言「伝子」大蔵流 水曜日 14:00~14:30
(再放送)翌週火曜日 5:05~5:35
5月6日 野村四郎の能入門(1)「船弁慶」その1
5月13日 野村四郎の能入門(2)「船弁慶」その2

能楽能楽堂

(能・狂言演能関係)
(TEL 052-231-0088)

Table with columns: Date (e.g., 25日, 3日, 5日), Event Name (e.g., 名古屋梅猶会, 豊水会40周年春季大会), Time, and Price/Notes.

能楽の友

発行能楽の友社
名古屋市中区千種区千種 2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984

「名古屋駅新能」併催
全国学生能楽コンクール
応募締切り 5月31日

名古屋駅新能は、毎年親世宗家が来演して多くの市民が鑑賞して話題をよび盛会で、こころは第8回を迎え7月26日(日)JR名古屋駅・タワーズガーデン特別会場で開催される。この名古屋新能を主催する財団法人親世文庫、名古屋駅新能実行委員会では、今回新しい企画として、全国の大学の能楽クラブを対象に初の「全国学生能楽コンクール」を開催、優秀校を表彰するとともに、第8回名古屋駅新能の会場で、エキシビジョン演技の披露が行われる。この公開演技は約2000人の前で披露するもので、能楽曲クラブをもつ各大学の学生にとって大きな刺激になるものと期待され、日本のど真中、名古屋からの伝統芸能の発達としても注目と期待がよせられており、企画の発表とともにすでに九州の大学からも参加の申出が寄せられている。

名古屋駅新能は、毎年親世宗家が来演して多くの市民が鑑賞して話題をよび盛会で、こころは第8回を迎え7月26日(日)JR名古屋駅・タワーズガーデン特別会場で開催される。この名古屋新能を主催する財団法人親世文庫、名古屋駅新能実行委員会では、今回新しい企画として、全国の大学の能楽クラブを対象に初の「全国学生能楽コンクール」を開催、優秀校を表彰するとともに、第8回名古屋駅新能の会場で、エキシビジョン演技の披露が行われる。この公開演技は約2000人の前で披露するもので、能楽曲クラブをもつ各大学の学生にとって大きな刺激になるものと期待され、日本のど真中、名古屋からの伝統芸能の発達としても注目と期待がよせられており、企画の発表とともにすでに九州の大学からも参加の申出が寄せられている。

12世野村又三郎 3回忌追善
狂言やるまい会名古屋公演
5月31日 名古屋能楽堂

故野村又三郎氏は、多年にわたって名古屋狂言界の発展に尽力、能楽協会名古屋支部長の要職をつとめ、芸術祭賞受賞、法政大学による催花賞など受賞、平成十九年十二月二十二日八十六歳で逝去された。このたびの第52回やるまい会公演は故人の三回忌追善会催しとして行われ、野村鷹、野村万作師らも来演、狂言「二百石」「祐善」「呂運」「晝」などが上演される。演能 5月31日(日)午後一時三十分開演、会場「名古屋能楽堂」。後援 財団法人名古屋市文化振興事業団
入場料 前売A券七〇〇〇円(正面指定席)、B券五五〇〇円、学割四〇〇〇円
入場券取扱い、野村事務所TEL

豊水会40周年春季大会
5月3日(祝日) 午前九時半始
名古屋能楽堂

豊水会40周年春季大会
五月三日(祝日) 午前九時半始
名古屋能楽堂

豊水会40周年記念大会
幸謡会
五月五日(祝) 午前10時始
名古屋能楽堂

東海翼会大会
五月六日(水) 午前10時始
名古屋能楽堂

東海翼会大会
五月六日(水) 午前10時始
名古屋能楽堂

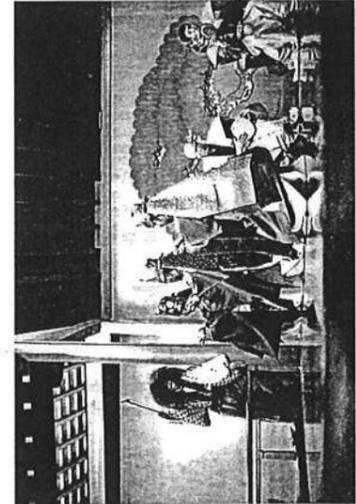
当地の各流儀・流派・結社 社中の消息を辿る

竹尾 邦太郎

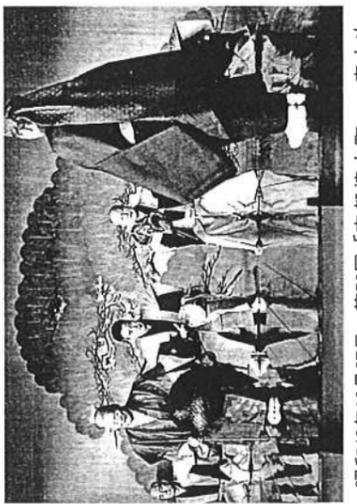
「名匠鑑賞能」⑦

第五四回は昭和四二年三月一九日、恒例春の宝生大会。能「忠度」辰巳孝(前)野口久(後)西村欽也、能「景清」宝生九郎、倉本雅(ツレ)内藤泰二(トモ)高安滋郎、狂言「茶梅恋」井上礼之助、佐藤卯三郎、井上松次郎、能「黒塚・白頭」宝生英雄・高安滋郎、例年通り大鼓の飯島佐六が金沢から来演。

第五五回は同年一〇月二三日、秋の金春・観世二流会同会。能「花月」金春信高・福王茂十郎、仕舞「鶴亀」猶谷武雄、一調「女郎花」田辺惣太郎、大江又三郎(ツレ)仕舞二番「能虎」五木田武計、南条泰雄「殺生石」松岡龍馬、能「班女・毎之伝」権若六郎



昭和43年5月26日、第57回「道成寺・赤頭」⑥より片山博太郎・宝生閑・野口教弘・工藤和哉・下村英一(大鼓)、田鍋洋一(小鼓)



昭和43年10月27日、第58回「卒都婆小町・一度之次第」⑥より塚本秀雄(後見)、観世喜之(シテ)、谷口勝二(大鼓)、田鍋物太郎(小鼓)、福王茂十郎(ワキ)、藤田六郎兵衛(笛)

古式「観世喜之・武雄(ツレ)吉田隆(子方)福王茂十郎、京都から大鼓の中村亨道・中村喜彦、小鼓の藤田善一が本会初来演。今回その能組について沼津雨は「能の三態」と題し次のように解説する。

名匠鑑賞能の特徴は、曲と人と調和と変化にあります。「花月」に狂言小謡や、能以前

から歌われていた小歌が入っているのは、いかにも初期能楽を見るような大らかな情趣があります。その意味から、最古の能として、その古拙、素朴さを信楽として、その金春流には全くうつつけのものであります。宗家信厚師が、青年時代からのかたくなまでの流儀傳承による堅さに円満さが加わっ

⑦ 面へつづく

源氏供養

舞踊子「源氏」(中島時志)「松風」(福川寛子)

舞踊子「歌占」(中島時志)「松風」(福川寛子)

舞踊子「源氏」(中島時志)「松風」(福川寛子)

舞踊子「源氏」(中島時志)「松風」(福川寛子)

素謡「隅田川」
ワキ 酒井 徳夫
シテ 正昭 中村 計
シテ 徳夫 正昭
シテ 酒井 徳夫

素謡「是界」
ワキ 渡辺 興作
シテ 竹内 貞雄
シテ 渡辺 興作

素謡「松風」
ワキ 神尾 幸子
シテ 長尾 幸子

素謡「満仲」
ワキ 大島 寛子
シテ 岩田 義子

舞踊子「加茂」(雲雀山)「大江山」(小笠)「花月」
舞踊子「加茂」(雲雀山)「大江山」(小笠)「花月」

素謡「二文酒」
ワキ 井上 清浩
シテ 太郎 井上 清浩

素謡「お用の尼」
住持 井上 菊次郎
尼 佐藤 友彦

素謡「西行桜」
ワキ 星野 猛
シテ 松村 晋也

素謡「俊成忠度」
飯富 雅介
河村 総一郎

素謡「定家」
朝川 知勇
一調 鐘ノ段 足立 知子

青陽会定式能 (第533期)

五月九日(土) 十二時半開演
名古屋能楽堂

舞踊子「屋島」久田 勤
仕舞「屋島」久田 勤

素謡「桜川」
ワキ 杉江 元
シテ 杉江 元

素謡「頼政」
ワキ 久田 勤
シテ 久田 勤

素謡「杭か人が」
ワキ 今枝 郁雄
シテ 今枝 郁雄

素謡「融」
高安 勝久
河村 総一郎

佐藤友彦舞台生活60年記念 狂言鳳の会第51回公演

五月十日(日) 午後二時三十分始
名古屋能楽堂

解説 名古屋女子大学教授 林 和利

新作狂言「二文酒」
太郎 井上 清浩
妻 今枝 郁雄

新作狂言「お用の尼」
住持 井上 菊次郎
尼 佐藤 友彦

狂言「武悪」
武悪 佐藤 友彦
主人 今枝 郁雄

入場料(全席指定)
A座五〇〇〇円 B座三三〇〇円
学生会二〇〇〇円
会員A座四〇〇〇円 会員B座二五〇〇円
チケット取扱
チケットぴあ 052-970-0299
Pコトピア 052-224-224
名古屋能楽堂 052-223-1008
名古屋市文化振興事務局プレイガイド 052-265-2015
井上菊次郎宅 052-834-8607

第17回 恵美寿会

第一日 五月十六日(土) 午前十時始
第二日 五月十七日(日) 午前十時始
名古屋能楽堂

第一日 番組 午前十時始

舞踊子「松風」
ワキ 前田 和子
シテ 前田 和子

舞踊子「安宅」
ワキ 後藤 孝一
シテ 後藤 孝一

舞踊子「雲林院」
ワキ 柳原 富司
シテ 柳原 富司

舞踊子「班班」
ワキ 藤田 六郎
シテ 藤田 六郎

名古屋観衛会

五月二十四日(日) 十一時始
名古屋能楽堂

舞踊子「松風」
ワキ 前田 和子
シテ 前田 和子

舞踊子「安宅」
ワキ 後藤 孝一
シテ 後藤 孝一

舞踊子「雲林院」
ワキ 柳原 富司
シテ 柳原 富司

舞踊子「班班」
ワキ 藤田 六郎
シテ 藤田 六郎

舞踊子「天鼓」
ワキ 池内 佐和子
シテ 池内 佐和子

源氏供養

舞踊子「源氏」(中島時志)「松風」(福川寛子)

舞踊子「源氏」(中島時志)「松風」(福川寛子)

舞踊子「源氏」(中島時志)「松風」(福川寛子)

舞踊子「源氏」(中島時志)「松風」(福川寛子)

素謡「隅田川」
ワキ 酒井 徳夫
シテ 正昭 中村 計
シテ 徳夫 正昭
シテ 酒井 徳夫

素謡「是界」
ワキ 渡辺 興作
シテ 竹内 貞雄
シテ 渡辺 興作

素謡「松風」
ワキ 神尾 幸子
シテ 長尾 幸子

素謡「満仲」
ワキ 大島 寛子
シテ 岩田 義子

舞踊子「加茂」(雲雀山)「大江山」(小笠)「花月」
舞踊子「加茂」(雲雀山)「大江山」(小笠)「花月」

素謡「二文酒」
ワキ 井上 清浩
シテ 太郎 井上 清浩

素謡「お用の尼」
住持 井上 菊次郎
尼 佐藤 友彦

素謡「武悪」
武悪 佐藤 友彦
主人 今枝 郁雄

素謡「西行桜」
ワキ 星野 猛
シテ 松村 晋也

素謡「俊成忠度」
飯富 雅介
河村 総一郎

素謡「定家」
朝川 知勇
一調 鐘ノ段 足立 知子

名古屋能楽会

五月二十四日(日) 十一時始
名古屋能楽堂

舞踊子「松風」
ワキ 前田 和子
シテ 前田 和子

舞踊子「安宅」
ワキ 後藤 孝一
シテ 後藤 孝一

舞踊子「雲林院」
ワキ 柳原 富司
シテ 柳原 富司

舞踊子「班班」
ワキ 藤田 六郎
シテ 藤田 六郎

舞踊子「天鼓」
ワキ 池内 佐和子
シテ 池内 佐和子

杜若

高安 勝久
後藤 孝一

素謡「俊寛」
ワキ 久野 幸三
シテ 久野 幸三

素謡「殺生石」
ワキ 吉田 忠良
シテ 吉田 忠良

素謡「西行桜」
ワキ 星野 猛
シテ 松村 晋也

素謡「俊成忠度」
飯富 雅介
河村 総一郎

素謡「定家」
朝川 知勇
一調 鐘ノ段 足立 知子

源氏供養

舞踊子「源氏」(中島時志)「松風」(福川寛子)

舞踊子「源氏」(中島時志)「松風」(福川寛子)

舞踊子「源氏」(中島時志)「松風」(福川寛子)

舞踊子「源氏」(中島時志)「松風」(福川寛子)

素謡「隅田川」
ワキ 酒井 徳夫
シテ 正昭 中村 計
シテ 徳夫 正昭
シテ 酒井 徳夫

素謡「是界」
ワキ 渡辺 興作
シテ 竹内 貞雄
シテ 渡辺 興作

素謡「松風」
ワキ 神尾 幸子
シテ 長尾 幸子

素謡「満仲」
ワキ 大島 寛子
シテ 岩田 義子

舞踊子「加茂」(雲雀山)「大江山」(小笠)「花月」
舞踊子「加茂」(雲雀山)「大江山」(小笠)「花月」

源氏供養

舞踊子「源氏」(中島時志)「松風」(福川寛子)

舞踊子「源氏」(中島時志)「松風」(福川寛子)

舞踊子「源氏」(中島時志)「松風」(福川寛子)

舞踊子「源氏」(中島時志)「松風」(福川寛子)

素謡「隅田川」
ワキ 酒井 徳夫
シテ 正昭 中村 計
シテ 徳夫 正昭
シテ 酒井 徳夫

素謡「是界」
ワキ 渡辺 興作
シテ 竹内 貞雄
シテ 渡辺 興作

素謡「松風」
ワキ 神尾 幸子
シテ 長尾 幸子

素謡「満仲」
ワキ 大島 寛子
シテ 岩田 義子

舞踊子「加茂」(雲雀山)「大江山」(小笠)「花月」
舞踊子「加茂」(雲雀山)「大江山」(小笠)「花月」

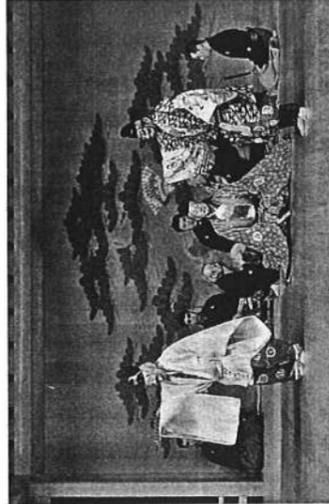
③面よりつづき

つ目は口も滑らかに歯の浮くお追従から「さ、注がせられい」と四つ目をだる図太さ、増造、活き活きと若さの発露。一方、「酒は惜しまぬ、酔はぬ程飲め」と詠めはしても伯父の醜、太郎冠者の酔態を観察する余裕には未だ若く、熱演だが此の役柄には要年劫か。饒別の素袍に参宮も忘れ、小歌機嫌の太郎冠者の、迎えに出た主とのしどろもどろの間答が中々だった。（30分）

「博奕十王」仏教各宗のせい人間がみな極楽へ行き、地獄は飢饉。憂慮する閻魔大王（アド菊次郎）が危境打開のため養族の獄卒を率い、六道の辻で亡者を持ち受ければ、掛かったのは娑婆で名うての如何様賭博師（シテ友彦）。早速獄卒に買メられ大王の前に引き出されて前科を糾され、は、井上義やかに非を言い抜けて大王を丸め込み、得手の博奕に誘い込む。抜け目ないシテと鷹揚なアド、長年のコンビが醸し出す言葉の遣り取りには俳味も。いわゆるサイコロ博奕に大王の賭ける目は、地獄の第一人者に相応しく、首位・最上を幾徴する一を指しては無い、とはかり負けても負けても一にこだわる。が、ここが如何様賭博師の真骨頂、振り出すサイコロ（写真）には一の目は無く、大王始め追従する獄卒も次々持ち身ぐるみ剥がされる始末。「浄土への道標をせい」と勝ち誇る賭博

師、ちえい、いかさまの癖に、といつそ閻魔大王が気の毒。真画の趣が横溢の世界だった。（45分・1月18日・第50回記念風の会）
「越後獅子」（能登ノ男（金桂））の方へ越後ノ舞（シテ萬蔵）が舞入するのに姉婿即ち義兄の勾当（小三郎）勾当八座頭ノ上、検校ノ下ノ位も相伴に与る。祝宴となれば、酒興に飛び出す舞のひとつさしも。所望されて「鶴舞」を舞う舞に男は勾当と賑やかに拍子をとり、ハ鴨鳴くなる深草山よ、と舞が舞上げれば、代つて勾当が「必らず笑はせらる、な」と念を押して、ハ面白の海連下りや、と盲目の舞を。應が盛り上がり舞は羯鼓を軽快に舞い、「さてさて越後の舞殿は御器用で御座る」と男をして言わしめれば、更に見たおに博された大輪の牡丹から獅子への連想、越後獅子、請け合う舞は準備に入するが、「鍋八段」のキリ同様に水車で入る鮮やか。その間の座持ちには勾当が語る「平家」、配役の妙である。「獅子の用意が出来たさうに御座ります」と太郎冠者（和憲）。
後場は太鼓の一調で一ノ松へ出る舞、舞台へ入ると笛と太鼓（六郎兵衛・洋輝）で獅子を舞う。勾当越しの大技もあり見事の一語。「何でもないこと返り居れ」「えい」と叱り留メにされる。苛立シ向から祝言の猿歌を略で舞い、ハ染しうなるこそ目出度けれ、と舞い留めた。鴛舞・羯鼓・獅子・

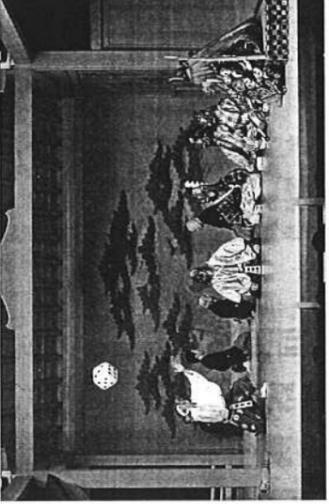
猿舞と大御馳走の大活躍は心技体充実の萬歳。（53分）
因に越後獅子は角兵衛獅子と杜の里神楽から出たものという。十八世紀末、崎崎勾当がここから取材して地唄「越後獅子」を作曲したというから、獅子舞の発祥は遙かに遡ろう。
「鐘の音」伴の尻股に黄金造の太刀を贈るのに太郎冠者（シテ万作）を鎌倉へ金（かね）の陣を臥ねにやる主（アド萬蔵）。道程を考ふる迄もなく主は当然江戸住いでは無く、近在の名字帯刀を許されている大庄屋でもあろうし、太郎冠者は従僕。主が鎌倉を相州物（正宗とその流派の作）の産地と知つて居よう、刀に無縁の太郎冠者にしてみれば鎌倉は有名なお寺のある所、鐘の音と聞いてもあながち咎められないだろう。
勿体ぶつて言いつける帯刀の身分の主、素直に自分なりにそれを受け取る太郎冠者、鐘の音を聞く擬音語の巧さは流石に年劫である。戻つて反復すれば「呆れもせぬ事を吐かし居る」と激怒の主に、あくまで朴直な太郎冠者は「頼うた御方は有異人ぢや」と小舞謡で主の気を紛らせ、許しを乞うつもりが却つて火に油を注ぎ、「何でも無いこと返り居れ」「えい」と叱り留メにされる。苛立つ主に切ない表情の太郎冠者、何人の人物像が適格に描かれた。（21分）



鳳の会「夷毘沙門」左より井上菊次郎、大野弘之、佐藤友彦
(撮影・杉浦賢次氏)



「素袍落」左より井上靖浩、佐藤雄、今枝郁雄、今枝靖雄、井上弾喜・鷺見政行・鹿島俊裕・佐藤融、井上菊次郎（アド）
(撮影・杉浦賢次氏)



「博奕十王」左より佐藤友彦（シテ）、今枝靖雄、井上弾喜・鷺見政行・鹿島俊裕・佐藤融、井上菊次郎（アド）
(撮影・杉浦賢次氏)

「六地藏」御堂に安置する六体の地藏を求め、都に出て来た田舎者（アド博彦）に近付き、よき鴨ござんなれとはかりに仏師を詐称、如才なく立ち回るスツバ（シテ万之介）。在所の期待に背かない立派なお地藏を、の願いがあるう、お地藏の持物・印相に精通する田舎者。対する欲深なスツバ、悪友三人を三体の地藏に仕立て、処を替え六体に見せる細工も、俄地藏にとつては持物・印相の知識は付け焼刃の無稽着、あつさり悪事露見する。美玉なアドに食えないシテ、性格は巧く描かれるが、どたばた喜劇になるのは否めないが、そこが味噌かも。（32分・1月24日・第11回万作を観る会）

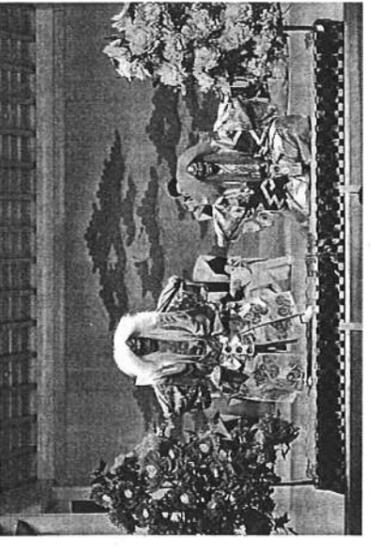
「鶴」シテは宝生流第二十代宗家を継承することになった宝生和英、その披露である。偶然として張りつめた舞台、そこへ緊張の面持ちの中にも悠揚として迫らぬ態度に入つて来るシテは、狩衣の袂をゆつたり剥くと正先へ進み、下居すると翁烏帽子の先が床に着くまで深々と拝礼、その敬虔な祈りの姿に目撃と現われる能の道への強い覚悟、大宝生流を背負つて立つ気魄も窺われ、嬉しくも頼も重々しく荘重。地の拍子あと、正先で左袖被き扇で面を掩うところ、好個の画題となる所謂翁の型も立派。舞上げ、面を外し再び正面へ。この度は段階（きざはし）やや右寄りて拝礼、深々とした平伏は先に同じ、顔に汗が滂。謹厳端正な舞台は清々しく、二十三歳、若き宝生大夫和英の歌栄を祈るや切。千歳は朗倉俊樹、三番冥は井上靖浩、何れも謹直に勤め爽快。（1時間5分・1月25日・宝生流第二十代宗家継承披露能）

「杜若」都方の旅僧（ワキ元）、名宣から我いまだ某國を見ず候程に」と重下りの意図を述べると進行を省き「やうやう急ぎ候程に」と三河八橋に着く態に沢の杜若を眺めるところ、呼掛の里女（シテ正直）は問答に伊勢物語を引き、業平の一首に昔を偲び、己が庵に誘う。この辺り奇縁にして鶴な風情も。物着に形見は業平の初冠をつけ、彼の美人童子の后の長巻をつければ、不垂する僧に「真は我は杜若の精」と明かし、更に「業平は極楽の歌舞の菩薩の化現」と業平への崇敬ぶり。伊勢物語の発端を言うクリ、初冠の由来を述べるカシを省き舞ケセは二段ケセ。二ノ上ゲ端まえ、ハ光も乱れて飛ぶ強の、とツツと運を速めて出ると、ハ雲の上ま

で、と左袖返シ雲ノ厨、美しい型だった。舞は規矩正しいといった印象で、キリのハ蟬の唐衣の、と左袖を扇に受けるように抱いて沈むところ、業平への喝仰が思われた。小僧が有る訳ではなく、省略はしない方が。（57分）
半能「石橋・大獅子」名古屋城本丸御殿復元祝賀能と銘打たれた催しに相応しい祝言能。白シテ勸鷲、赤ツレ萬宏、親子の獅子に擬せられ、紅白大輪の牡丹に戯れて華やか且つ爽快に舞う。いわゆる獅子の仕立、を象徴する赤獅子が台上から白獅子に蹴落される型が鮮やか。重厚な白に敬虔なる赤、目出度く舞い納める。獅子舞の前奏曲とも言うべき睡き所の快。（1時間5分・1月25日・宝生流第二十代宗家継承披露能）

「乱序」の離子（誠・萬津幸・総一郎・洋輝）も立派。ワキ寂照法師は勝久・高僧の品位。（20分・1月31日・本丸御殿復元祝賀能）
「舟船」「ふね」か「ふな」が、個々の場合に応じて使い分けられる語法は「にはんか」につぼんに同じ、青筋立てて言い争う程のことでもないが、曲は最も軽い平物の小名狂言で言わば初心者向け、此れを二人の老大家でしかも兄弟が演じる面白さは例えようもない。
退屈蒙きの物見も「大方は見尽した」と主「千作」、太郎冠者（千之丞）の勧めに、「西の宮は景の好い所か」と食指が動いて出掛ければ、往く手を阻む大河。渡舟を呼ぶから、と「その辺りで床

景の好い所か」と食指が動いて出掛ければ、往く手を阻む大河。渡舟を呼ぶから、と「その辺りで床
殿グセ。二ノ上ゲ端まえ、ハ光も乱れて飛ぶ強の、とツツと運を速めて出ると、ハ雲の上ま



④本丸御殿復元祝賀能「杜若」衣斐正宜、梅田嘉宏
⑤「石橋・大獅子」左より久田勘鷲、杉浦賢次氏
(撮影・杉浦賢次氏)

几に掛つて待つて下され」と太郎冠者。常には出さない床几の、この科白（主（兄）の膝を慮る太郎冠者（弟）の気持ち、胸が熱くなる。「ふなやーい」と対岸に勧う渡舟に呼び掛ける太郎冠者。「ふね」と呼べと糾す主、どちらも頑なに譲らず、遂には古歌の知識をひけらかす太郎冠者。「推参な、汝の分て古歌立てををしをる」と、腸の煮えくり返る主は太郎冠者が更に古歌を引用すれば、「暫くそれに待て」と床几を立つ。多分、座つては吐かない威儀を漸う取り戻した心で、主は差し出る太郎冠者をきつぐ咄め、叱り留メ、円転滑脱な両人の話術の巧さに改めて感服。（13分）
「彦市はなし」嘘つき名人の彦市（七五三）、天狗ノ子（あきら）を騙して隠れ蓑を奪ったはよいが、親天狗の報復が怖い。釣りになり先を思案している処、民情規察に身分が知れては、と偶々宝物庫から出た天狗の面を掛けた殿さん（千五郎）に出くわす。驚愕する彦市も、殿さんと判れば傍い平物の小名狂言で言わば初心者向け、此れを二人の老大家でしかも兄弟が演じる面白さは例えようもない。
退屈蒙きの物見も「大方は見尽した」と主「千作」、太郎冠者（千之丞）の勧めに、「西の宮は景の好い所か」と食指が動いて出掛ければ、往く手を阻む大河。渡舟を呼ぶから、と「その辺りで床

か、と彦市に声援を送る。
初演（昭和三十年十月）以来、異流共演もあつて配役は様々だが茂山千五郎家のレパートリーの観。二十三年ぶり、あきらの天狗ノ子を見たが、つやのある荘高い声に精彩があり、「おとつちゃんに言いつくるぞ」の口吻など昔に交らず（当然か）面も前と同じ質徳の愛種の創作面、いかにも利かん気の悪戯好きな人物像を再現、懐しく嬉しかった。キリは「末広かり」の型で笑し留メ。（54分）
素狂言「空論」素狂言の言葉、平成十三年の第六回「千作の芸を見る会」で高橋健郎、作の「九十九がみ」のチラシで見た。千作をイメージして書き下ろされた由で、「九十九に及ぶ老妻と業平の色狂一夜を狂言にしたた劇作」とあつたが、趣は素直に「さきがけ」の意味だろうが、素狂言とは後からの付け足しだったのでは。委嘆された作品かも知れないが、演者に消化する充分な時間が取れなかつたことは想像に難くない。そして、演出の必要から見台に台本を置いて朗読することになったのでは……。能の社中の素直さと印象が重なり、筆者も消化不良を起こした事を感じている。演者もさぞ不本意であつたのではなからうか。以後、再演を聞かない。
さて、今回は古典の名作「奈論」、浄土僧・千作、法華僧・千之丞、斯界最高齢の演者の膝を庇うことはあつても、文字通りの真の素狂言は見台など当然無く、進退も切戸。法華僧に語りかける心が僅かに見られる浄土僧に身じろぎもせず真つ直ぐを向いたま、の法華僧、自家薬籠中の言葉を繰急自在、丁々発止と舌端に転ばす西人、目を閉じれば舞台の横裏までまざと映る思ひである。先の「舟船」に続く千作・千之丞の素直らしい舞台、阿吽の呼吸は案内に言う「究極の息」を十二分に堪能した。宿の亭主は千三郎。もしこれから素狂言のレパートリーを増やすとすれば、「罪重」など倍好であろう。（43分・2月1日・第4回千作・千之丞の会・京都観世会館）

NHK放送予定(平成21年5月～6月)

5月24日	NHK-FMラジオ才能鑑賞(毎週日曜日7時15分～8時)	桜間 右陣ほか
5月31日	素謡「忠度」(再)金春流	善竹 十郎ほか
6月7日	狂言「文相撰」大藏流	関根 祥六ほか
6月14日	独吟「遊行柳」観世流	佐野 由於ほか
6月21日	素謡「小袖巻我」宝生流	香川 靖嗣ほか
6月28日	素謡「三井寺」喜多流	観世鏡之丞ほか

演能カレンダ―

◆名古屋能楽堂

(能・狂言演能関係)
(TEL 052-231-0088)

[5月]	名古梅	名古屋	観衛	会会	(無料)
24日(日)	第52回	やるま	い会	名古屋	(無料)
30日(土)	名古梅	名古屋	観衛	会会	(無料)
31日(日)	名古梅	名古屋	観衛	会会	(有料)
[6月]	名古梅	名古屋	観衛	会会	(有料)
6日(土)	名古梅	名古屋	観衛	会会	(有料)
7日(日)	名古梅	名古屋	観衛	会会	(有料)
13日(土)	名古梅	名古屋	観衛	会会	(有料)
14日(日)	名古梅	名古屋	観衛	会会	(有料)
20日(土)	名古梅	名古屋	観衛	会会	(有料)
21日(日)	名古梅	名古屋	観衛	会会	(有料)

能楽の友

発行能楽の友社

名古屋市中千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393
購読料 1年 11000円
1年 11800円
郵送の場合 11000円

名古屋能楽堂 定例公演番組 平成21年度7公演

平成21年度の名古屋能楽堂定例公演は、6月6日開催の特別公演をはじめ7月、9月、10月、12月、1月、3月の7公演が決定。今回のテーマは、「能・狂言」として、織田信長、豊臣秀吉をはじめ毛利元就、細川幽斎、朝倉義景、伊達輝宗、豊臣秀次など戦国武将と能とのゆかり、歴史ロマンの仲立ちとして、能・狂言の魅力に触れる機会として期待されている。

〔6月特別公演〕(織田信長)
6月6日(土) 開演午後二時半
能「運成寺」赤頭 片山清司(観世流)
〔7月公演〕(織田信長)
7月5日(日) 開演午後二時半
市民能楽セミナー、解説「面と装束について」(久田勘麿)
能「殺生石」久田勘麿(観世流)

狂言「磁石」井上靖浩(和泉流)
〔9月公演〕(毛利元就、細川幽斎、朝倉義景、伊達輝宗)
9月6日(日) 第一部(開演午前十時)
能「花月」長田麟(喜多流) 能「鞍馬天狗」白頭・武田邦弘(観世流) 狂言「大刀鐔」今枝郁雄(和泉流)
第二部 開演午後二時
能「経正」梅田嘉宏(観世流) 能「鉄輪」玉井博祐(宝生流) 狂言「鐘の音」野村小三郎(和泉流)
〔10月公演〕(豊臣秀吉)
10月23日(金) 開演午後六時三十分
能「野宮」衣斐正直(宝生流) 狂言「不腹立」井上菊次郎(和泉流) 前売・指定席四〇〇〇円、自由席一般三〇〇〇円
〔12月公演〕(豊臣秀吉)
12月13日(日) 開演十二時三十分

能「富士太鼓」「雪」「鶴飼」

6月20日 第3回若鯨能

能楽後継者の育成と能楽協会の若手の研究会として、平成19年に発足した「若鯨能」は、きたる六月二十日(土)名古屋能楽堂で第三回演能を行う。

この若鯨能は、愛知県文化振興基金事業「平成21年度文化庁芸術団体人材育成支援事業」として、その役割は大きい。

番組は、能(喜多流)「富士太鼓」(シテ長田郷)、能(金剛流)「雪」(シテ西郷和子)、能(観世流)「鶴飼」(シテ梅田嘉宏)の上演
十二時半始、来場歓迎。

豊嶋三千春師 古稀記念能

金剛流豊春会は、五月十七日(日)金剛能楽堂で、豊嶋三千春師古稀記念・豊春会春の能を開催。

能「雪」(シテ豊嶋三千春、ワキ梅王切登)
狂言「千鳥」(茂山置司)
仕舞「枕愁置」(種田恭三)
能「石橋」猿蓑之式(シテ豊嶋晃嗣、ワキ小林繁)

なお、古稀記念豊嶋三千春能の会は七月四日(土)東京国立能楽堂で開催される。

能「大仏供養」(豊嶋幸彦)
能「枕愁置」(豊嶋三千春)

豊田市能楽堂の7月能

7月18日 能綾鼓

豊田市能楽堂七月能は、七月十八日(土)豊田市能楽堂で開催。能(宝生流)「綾鼓」、狂言(和泉流)「二人袴」を上演する。解説豊田市能楽堂企画運営委員、柳沢新治氏
狂言「二人袴」シテ三宅近成、アド三宅右近、同・高澤祐介、アド太郎冠者・三宅右矩
能「綾鼓」シテ今井泰男、ツレ衣斐正直、ワキ森常好、アイ三宅右近

演能案内

名古屋能楽堂六月特別公演

六月六日(土) 午後二時半開演
名古屋能楽堂

能 道成寺 片山清司
高安 勝久 河村恭一郎 井上敬介
赤頭 杉江 元 柳原富司忠 藤田六郎兵衛
能 力 佐藤 融
鹿島 俊裕
後見 泉 梅田嘉宏 八神 孝充 清沢 一
久田 勘麿 地謡 本 田 孝 武 田 邦 弘
山 幸 親 祖 梅 田 邦 久
武 田 大 志 八 神 孝 充 清 沢 一
青 木 道 喜 高 橋 瞭 一
狂言後見 佐藤友彦 今枝郁雄
井上靖浩 今枝郁雄
(午後四時三十分頃終了予定)

〔前売券取り扱い〕名古屋能楽堂(TEL052-2331-0088)
プレイガイド(袋アプレケ922・松坂屋ほか)
ナナイアバール(TEL05522-2655・29015)
チケットぴあ(TEL0570-025999)
前売り 指定五〇〇〇円 一般四〇〇〇円
学生三〇〇〇円
自由席のみ当日五〇〇円増

名古屋市文化振興事業団 能楽協会名古屋支部

能と狂言の催し

六月七日(日) 午後一時半始
名古屋能楽堂

能(宝生流) 八島 表巳清次郎
狂言(和泉流) 文蔵 井上菊次郎
能に関する文学と文物の総合的研究
研究代表者 逸山一郎
(愛知県立大学教授)

〔参加無料〕
要登録 申し込み先 愛知県長久手町鹿熊
愛知県立大学日本文化学部
(締切 5月31日必着)

オセロ

六月十三日(土) 午後二時始
名古屋能楽堂

出演 善竹寛太郎、土田聡子、善竹忠英、井上菊次郎
佐藤友彦、佐藤融、井上靖浩、亀井英ほか

シスター・プロジェクトS-I
事務局長
電話03-33584-2085
FAX03-33584-2085

名古屋観世会定例公演

六月十四日(日) 十二時半始
名古屋能楽堂

能 通小町 観世 善正
観世 善之
飯富 雅介 河村 貞之介 藤田 六郎兵衛
雨夜之伝 後藤 孝一郎
後見 武田 邦久 地謡 八神 孝充 清沢 一
梅田 嘉宏 武田 邦弘
梅田 嘉宏 久田 勘麿

狂言 仏師 都の徒者 井上靖浩 田舎人 井上菊次郎
後見 佐藤 融

仕舞 芭蕉 武田 志房 八神 孝充
水無月祓 加賀 敏彦 地謡 武田 邦弘 孝充
古橋 正邦

能 海士 高安 勝久 寛 加藤 洋輝
橋本 幸 後藤 嘉津幸 大野 誠
間 佐藤 友彦
後見 梅田 嘉宏 地謡 吉 須 部 迅
武田 志房 武田 大志 幸 親 祖 梅 田 邦 久
加藤 洋輝

附 祝 言 (終演四時半頃)

〔有料〕
当日券六千円
主催 名古屋観世会
事務所 名古屋市中区和区台町2-16
TEL/FAX052-841-4632

木藤夫・波多野敬、豊嶋三千春(以上シテ方)太鼓に安福春雄、太鼓の前川善雄が来演。

第六五回(観念)は同年一〇月二四日、舞囃子「養老・水波之佐」大江又三郎、能「小鍛冶・熊頭」泉嘉夫(前)大槻文蔵(後)西村欽也、高安勝久、狂言「狐塚」井上松次郎、井上礼之助、在野卯三郎、能「定家」大槻秀夫、西村欽也、能「狸々乱・双之舞」橋岡久馬、鈴木一雄、高安勝久。他に南条秀雄、泉泰孝、小林二郎(以上シテ方)、太鼓の観世元信が来演。

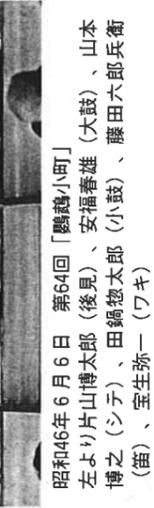
沼淵雨の番組解説に次の人物月旦がある(抄録)。

大槻秀夫 能楽師多しといえども、この人程篤実な芸風の人はいやうそうはないと思えます。「遊行柳」「木賊」「砵」「卒都婆小町」こうした曲をこゝ、数年つゞけて舞つて、そのどれもが話題になっているので、これらを得意とする各流の名匠は多いのですが、それとは又違った、それもいかにも能らしい能を見せている大槻氏に、西村弘敏・田鍋惣太郎師を配し、「定家」を求めたのは、今回の企画中の白眉といわねばなりません。

橋岡久馬 能楽界にあつて全く文字通りの異色の存在は、今更いうまでもないでしょう。この人の異色は、誰、型の独特だけでは無いのです。例えば「狸々乱」の双之舞などというものは、親子とか兄弟同門同志とか、全く呼吸の

合つたものが舞うべきものですが、一度も一緒に舞っていない、とはいえないかも知れませんが、そのような鈴木一雄氏と組む、この自信の強さは恐らく能界無比でありましょう。

鈴木一雄 先代権若万三郎秘蔵弟子として、その人柄と同じよう



昭和46年6月6日 第64回「鷗鷗小町」左より片山博太郎(後見)、安福春雄(大鼓)、山本博之(シテ)、田鍋惣太郎(小鼓)、藤田六郎兵衛(笛)、宝生弥一(ワキ)



同上 左より八木藤夫(後見)、片山博太郎(後見)、山本博之(シテ)

に円満な芸風であります。この合舞、合はないで合う、そういうとはいえないかも知れませんが、その不思議な調和の舞台が見られると思います。

なお「定家」のワキは西村欽也が代勤した。

—以下次号—

◆早春から陽春の舞台◆

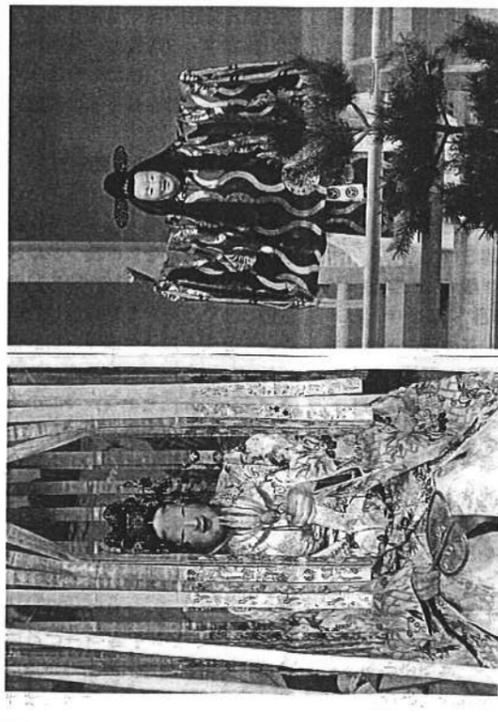
「名古屋観世会」「名古屋能楽堂定例公演」「名古屋宝生会定式能」「第四回西村同門会研究能」と「豊田市能楽堂・四月能」

竹尾邦太郎

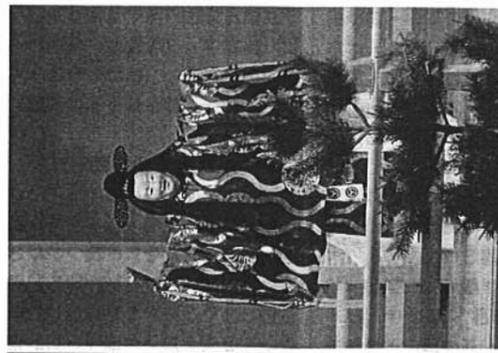
「高砂」肥後「の宮」阿蘇乃宮の神主(ワキ藤久、従者(ワキツレ元(幸)を伴い)この善悪ひ立ち」と暢気な行動は、瀬戸内を往く船旅の長閑な道行、ワキ・ワキツレ連吟は如何にも朗らか。土京の凌次、名勝高砂の浦に想うも一興を思わせる。たゞ、能作者、瀬戸内に通じる海に近い豊前「の宮」宇佐神宮の神主を何故ワキに、と思わぬでもない。

さて、浦には老人夫婦(シテ勸鶴ツレ一政)の、連吟に現在の心

境を述べるところを見始めてワキ、シテとの問答、シテ・ツレとの掛合に、高砂の松と住吉の松、国を隔て相生の松とはと置せば、自身夫婦になぞらえ、万里を隔ても、へ妹背(愛し合う女と男)の道は遠からず、とツレ嬢。当世の長距離恋愛も思われる。更に聞かせるところは、と交き付けるワキに、高砂は万葉、住吉は古今、尽きぬ歌の道は御代を崇める縁え、とシテ・ツレ掛合に語るが、氣負いがあるか、シテ謡が乱れる



観世会「楊貴妃・台留」観世清和



観世会「高砂」久田勸鶴

ところがあつて一寸残念。「高々高砂の松のめでたき調れ委しく」とワキにせがまれ下居に説くクリ・サシ・クセ。目付柱の方へ耳を欲て鐘の音を聴く上々端から竹把(サラへ)を取つて立つと、へ掻けども落葉の尽きせぬは、で右へ一度、左へ二度、二度目に慎重に掻き寄せる趣は松葉への敬意とも。クセ留めに正中ワキに向き下居、ワキに養性明かし、へ住吉に先づ、と頭上高々と上げた扇を倒して後方を指示し、立つと正面へ乗込拍子にへ小舟に、乗る心は、阿神を大きくあげ、帆に擬した袖に風を孕ませ常座へ、へ沖の方に、の返し句に袖下ろすと静かに中入。

後シテは住吉明神(勸鶴)、颯爽と一ノ松に出る威容(写真)は、舞台へ入つては二月の雪、を袖に受ける純な心気も晴れやかに、神舞三段力強く清朗に舞い上げ、天下泰平を誓うキリ、阿神きりりと巻き上テ常座へ行くところ、溢れる力感に勸鶴充実ふりをみせた。(1時間20分)

「宝の笠」別名「隠笠」。果報者の主(シテ菊次郎)の命で宝鏡への出品物を護衛のため土京の太郎冠者(郁雄)、序でに都見物

も、の浮かれ気分。宝の入手法も確かめず出たのを悔やむも後の祭、「買り買ふ物も呼ばはれば調ふ」を奏踏すれば、おまごかしに擦り寄るスツバ(友彦)。目を抜く油断のならない都の怖さを打(ぶ)ちながら、古書笠を「面白可笑しふ言ふて売りつけてやらうと存ずる」と、ちゃつかり騙しに掛かる狡猾。舌舐りせんばかりの友彦、芸功をみせる。

鬼ヶ島で鎮西八郎が朝が力勝負で鬼から奪つた隠れ笠、姿が消えるのは笠の所有権者がそれをかぶつて被験者となる時だけ、余人には見えないという効力がある、と弁舌も爽やか。戻つた太郎冠者、主にそれをかぶせるが、岩園からんや姿が見える。謀られたと何と事象を取捨しようにも「見へぬ所をそれがしも見たい」と言われ、ば最早打つ手は無い。狼狽する郁雄の表情がよい。「身共を抜きをつたな」(写真)「あの横着者」と激怒の主、事前にきちんと教えなかつた己れの非にも苛立つか。(32分)

「楊貴妃・台留」玄宗の、七き貴妃への思慕熱し難く、その魂魄の在処を探索に連れられる方士(ワキ茂十郎)漸く仙界に至り、



名古屋能楽堂定例公演「隅田川」左より宇高通成、倉知益巨(子方)、高安勝久

は「や」と硬着くと、囁々とした笛(六郎兵衛)のアシラとは奈頼尽きず、一気に蓬萊宮の世界へと舞台が墜つ。

宮から洩れる貴妃(シテ清和)の、静かに古を述懐するサシからワキとの掛合は、へ丸華の帳を押し除けて、と引通シが下ろされる所、豪華な調箱の幕帯を下げる所謂「玉簾」の慶美は正に金殿玉樓。宝生などは小書とするが、観世は替。初回(芳伸・邦弘・勸鶴ら)へ(六宮の粉黛の)顔色の無きも、で左右に聞く玉簾の典、文字通り類無き貴妃の麗姿である。恐懼平伏のワキが玄宗皇帝の近況、勸の趣を伝えれば、「げにけに汝が申す如く」とワキに面を向けるシテだが、君の情けは却つて辛く恨めしい、と直り魂を消



観世会「宝の笠」左より今枝郁雄、井上菊次郎

す、とシラルのも切ない。目的を達して帰途に当たり、君への報告に証拠をどうワキへ、「これこそ在りし形見よ」と鏡(かんざし)を手にするシテ(写真)に、類似品の無い、君と交わした言葉を求めるワキ。それもそう、と掻き立てられる古の思いに吐露する體言、へ今洩れ初むる、とシラルのが哀調の地と相違つて正に嗚咽。帰途に就くワキに、へよしさらば暫し待て、と床几を立つシテは、と宮を出ると鏡をワキに戻させ、物着に姿を整えると、一セイ・イロエを省き直ぐへそれ過去遠々、とクリ・サシに生々流転の哲理を説き、クセに己が帰途を回顧する。上り端まえ、へ哀れ憐き身の露の、と宮の柱に纏まるのは、思い胸に迫る腕力感を支えるため、へ静かに語れ裏き音、とワキにアシラつて促すように左手指スのも思いの深さ。が、へさるに、と上り端、へ(その文月の)七日の夜、と踏む拍子に交刺る万感である。序之舞はいわゆる霓裳羽衣の曲、典麗優雅なシテ宗家の気品、舞上げると鏡は再びワキに渡り、へ暇申して、と立つと一ノ松へ。シテは後ろ髪引かれるかに正中へ出、ワキに招き戻ると、平伏するワキにへさるにてもさるにても、へ君には此の世違ひ見ん事、と哀訴する様に力なく下居、へ蓬が鳥つ鳥(よも有らじ)、と目付柱の方へ視線泳がせるとへ浮



名古屋能楽堂定例公演「鼻取相撲」左より野口隆行、奥津健太郎、野村小三郎(撮影・杉浦賢次氏)

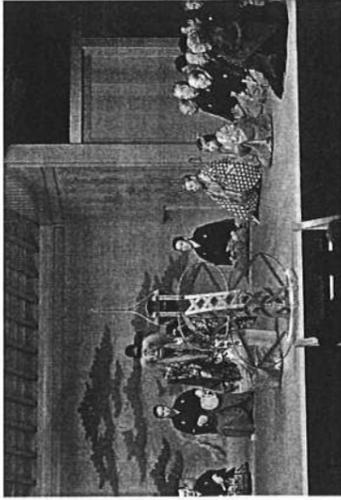
世なれども、と立ち、ワキは幕へ、シテはへ蓬萊の台に、と宮へ入り、直りと唐園扇左へ取り、阿神に抱き締めるように沈みトメた。余情惻々、哀感一人、好舞台だった。(1時間22分・2月8日・名古屋観世会)

「鼻取相撲」「敢取相撲」と同士のいわゆる相撲物の一。例によつて一人ではあまり使ひ足らぬによつて」と召使う者の新報採用を太郎冠者(アト隆行)に酷る大名(シテ小三郎)、「それはこなたのお心任せで御座る」の巻えに「一度にとつと八千人」と調子に乗る大名だが、結局、五百人がくわつと減つて二人、それも「汝とも」とあれば一人の採用、この辺り誰に気兼ねの無い主従の、あつげらんとした問答が可羨しい。太郎冠者が街遣でキャッチしたのは万能に達した男小アト健太郎、中でも相撲が得意と。しかし、取らず段にも相手が居らず、已むを得ず大名が。未知数の相手が怖いくせに強がる大名、初戦を鼻取の奇手で負ける、と、再戦は土器の要害で鼻を防御して勝利。ここで終りに、と太郎冠者に「同じくは置けと言へ」と命じるが、相手は是非にもと三戦目、突き出す右手を外され、足を暫し沈黙の不気味は、「おのれはそれに何をしてゐる」と嘆み、鬱憤晴らしは太郎冠者を倒し、「勝つたを勝つたぞ」と叫ぶが口吻は(4)面へつづく

捨て鉢。小三郎、我が儘大名の性格を描写。(40分)

「隅田川」商人(ワキツレ正久)に乗船を促す渡守(ワキ勝久)の逢ふ後、我が子の行方を尋ねる母(シテ通成)は一ノ松、さ迷う心はへうはの空、と小廻りからへ松に音する、の地(恭憲・竜成・徳成ら)のうちに舞台へ入りカケリ、囃子(六郎兵衛・孝一郎・絵二郎)と相俟つて嵐狂乱の様は陸奥とした趣もあり惹きつける。ワキとの都鳥問答があつて、へ隅田川の真まぎ、と一ノ松へ抜け、へ限りなく遠くも、と笠に手をやり舞を見込むところ、渡船を乞うのにへさりとは乗せて、とワキに手を合わせるところ、など胸のうち痛切に思われる。後鳥が狂は母をひき、船中身をしろぎもしないシテ、ワキ語の中、「終に事終つて候」で、ひっそり双シラリのシテは、船が着き下船を促されて「なうなう今の御物語は」で、漸くシラリを解き、ワキを質し問答になる。徐々に我が子の死が明らかになり、感情が昂ぶつてくるころ、クドキにへこの世の姿を母に見せさせ給へや、とワキに手を合わせるところ、など人情の機微儼やかにみせる。

へ目の前の浮世、は即ち現実、双シラリのシテに鉦を持つて立つワキ、へ既に月出での出に掛けて子方(権若丸・倉知益臣)は切戸から塚に入るが、なおも塚に掻き巻かれるシテに「母の申ひ給はんをこそ」死者は喜ぶと言ひ含めるワキ、シテは漸くシラリを解き、へ我が子の為と、鉦鼓を取る。念仏の段はシテ、ワキ連吟が金剛座付高安の縁の立派。へ幻に、と子方に気付き、櫓木を取り落して手を取り交わさんとするところ(写真)は正直に過ぎると思ったが、キリへ真雲の空もほのほのと、左手カザシテワキ柱上を眺めるところはよかつた。へ我が子と見えは、と大きく双手を拡げて塚に寄り、左手触れるとへ草花々、と右手で撫でさすり、退つて直恥とへ浅茅が原となるこそ、と目付柱石へ呆然と眺め、双シラリのま、寂々とした笛のアシラヒを聴き、吹き止むとシラリ解きトメた。余

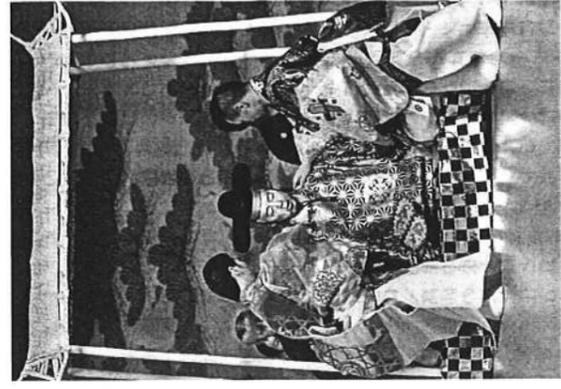


西村同門会研究会「松山鏡」左より長田隼、飯富雅介、園田光樹、松井俊介

韻囃々哀傷一人だつた。(1時間25分・3月7日・名古屋能楽堂定例公演)

「雲林院」幼時より「伊勢物語」に親しむ声屋公光(ワキ雅介)、雲夢を得、従者(ワキツレ幸・正樹)を伴ひ花の雲林院へ赴けば、日く有りけな老翁(シテ雅)に出遇ひ、手折る桜枝を咎められ、手折る心の是非を巡り古歌問答になる。こ、桜の巻の有無を言う「西行桜」に似る。是とするも非とするも共に風流の心ゆえ、へ柳桜をこき交せて都若春の錦なる、と遠くへ視線を廻らしながらスミから左へ回り常座へ至る風情、聴き深く練達のシテならこそ。ワキの素姓、来意を知ると、シテは続きの夢を見るようワキに促し、不審するワキにへ我が名を何と夕映の、と身許はかしたま、に送り笛で中人の後ろ姿にも芬囲気。

後シテは在原業平ノ靈(雅)、



西村同門会研究会「威陽宮」左より原大、衣斐正直、小林努

面中將・初冠(垂織・老懸)、石屋文厚板着付・紫指貫・白地單袴衣の瀟洒な姿、大刀は佩ない。夢枕に立ちワキの求めに語るの二条ノ后との逢瀬に交遊の舞樂のこ。クセ中、へ柴の一本柱の藤椅、と七ノ拍子踏むのは連行の跡りか。へ冠の巾子にうち扱き、では先先に佇立するが、密やかに辺り窺う心だらうか。へ降るは春雨か、と肩高くカザシテ見上げ、へ落つるは涙か、と下へ見る姿には寂寥の思も如実。シテ、心象描写に力量をみせる。序之舞は三段、織細入念に舞上げ、キリはへ山笠の羽袖、と雲ノ層に笠柱上をみる姿が奇麗だつた。(1時間31分)

「角説法」従依養に僧のお出でを願う施主(アト増造)、相僧の留守で代りに新発意(シテ懸)がお布施欲しさになつて来る。しかし、俄に鞋も読めないシテ、海辺宵で魚名に詳しいことを好む事に、言葉の鳥籠を抑揚さもそれらしく、あらゆることか臆物を嫌う仏寺に魚名尽しの説法を展開。茶目つけのシ



西村同門会研究会「松山鏡」飯富雅介

テが、アトに見破られ追ひ出される際まで、捨て台詞も魚名に茶化してしまふ強かさが盲く出た。(20分)

「桜川」貧窮に忍びず、我が子・桜子が自らを身売りした代金を、母(シテ愛)の許に届ける人商人(ワキツレ空)、シテは添えられた文(ふみ)を三ノ松で読から目を上げるが、人商人は匆匆御名残こそ惜しう候へ、の一方をらぬ哀調は若い女流のシテの感情移入の激しさである。名残惜しいのならへ何しにか(何故)、と初回(輝和・孝・耕司ら)に文を持つ左片手を放せば、はらりと垂れる文は落胆絶望の象徴ともみえる。

後場は子求め物狂となつて送る母の後日譚。今は寺住みの桜子(子方・坂口悦)、住持達(ワキ勝久ワキツレ元)の供で桜川へ観桜の旁ら、里人(ワキツレ正樹)が勧める物狂の芸も見せて貰い、図らずも母に再会する。

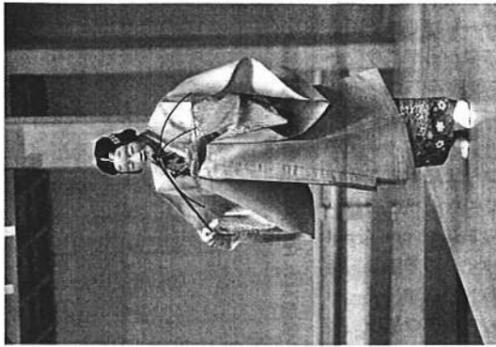
シテは面深井・横浅賀・白地褶板着付・藍地秋草文襦袢腰巻・浅黄水衣、抄網を担げ一ノ松へ出、へいかにあれなる連行人、とワキの一行に桜花の様子を問ひ掛け、散り初める花に暮る悲しみをカケりにみせる。極く幼い子方が笑いが離せず、ついシテを等閑視せざるを得ない程だつた。眼目の網之段は、地へ告は散るを怨みなる、と後鳥から抄網を取ると、へ三吉野の、で担ぎ、へ花を抄は、と抄つてへもし国栖魚や、と正先に置く抄網を見詰め、へ花も桜も雪も波も、と常座へ。へ抄ひ集め持

ちたれども、と抄網を両手に持ち集める心をみせ、へ(これは木々の花)まことは、と落胆の心で投げ捨てる時、へ我が桜子ぞ恋しき、と安座シラルところ、子方がシテの美の娘と聞き及ぶので、ひどく現実味を帯びて感じられた。子方と相俟ち、シテ、母性愛に味をみせ好演。(1時間12分・3月15日・名古屋宝生会定式趣)

「威陽宮」密かに隙を狙う隣国燕の、地図と謀叛人・機討術の首級を差し出せば、何事も望み叶える、との奏ノ始皇帝(シテ正直)の勅諭を触レル官人(アト)。早速、この時と刺客となつて燕を発つ荆軻(ワキ大)と秦舞陽(ワキツレ登)の二人。宮殿に至り、太刀・刀を預け、広丈社麗な殿中を薄氷踏む心地、最怖の素張、のうちに奥へ通り無事シテに拝謁。先づ秦舞陽が首級を上覧に供し、次いで荆軻が地図を納めた箱を供する段に、底の剣に気付かれるや、咄嗟に二人は玉座に躍り上りシテの袷袴衣の袖を握り、荆軻は剣をシテの胸に據する(写真)。泰然自若のシテは、最期に当り花傳夫人(ツレ愛)の琴を所望すれば、許されて聴く妙音は所謂「琴之段」に。魅了され夢心地の荆軻と秦舞陽、その際に玉座を飛び下りさま秦舞陽を突き転がし(切戸へ消える)、脱出するシテは後鳥座へ、右袖被さ避難の態。荆軻がへ怒りをなして、剣を投げつけるが、シテの反撃に遭つた心に切戸へ消える。キリは常座で左袖巻キ上げ右ウケ袖返シ留拍子。

登場人物は既出の他に侍女(ツレ二人)大臣(ワキツレ三人)、舞台面も賑やかに物語の展開にワキ方の活躍が大きく、テンポも軽快で劇面を見る面白さ。あまり上演されず、たまに出ても学生流が多い。ワキ方の五人は岡治郎石衛門・谷田宗二郎・森晴蔵達の後を継ぎ、主に京都で活躍する高安流の中堅、若手、村山弘が不参加だったが、洗練と力強く好演だつた。(45分)

「松山鏡」七妻の三回忌に焼香をよ松山来(ワキ雅介)、娘(子方・園田光樹)の声を聞きつけ持仏堂を開けさせれば、何か隠す気配に、さては噂に聞く継母を



豊田市能楽堂四月能「桜川」大槻文蔵



豊田市能楽堂四月能「腰折」左より山口耕道、茂山忠三郎、茂山良輔(撮影・杉浦賢次氏)

呪咀する木偶かと疑い、早々と心得を諭せば、娘は母形見の鏡と明かし、恋しい時は見るようにの言葉に、映る自分の顔を若やいだ母と思ひ込み、亡き後も身近に居る有難きを言ひ含め、不審なら鏡の前へ、と常座下居のワキへ訴える機にアシラフ。事の次第を知り、ワキは亡者の幻影に纏わる道士・本朝の故事を詩々と説き、鏡の裏体を聞かすが、なお娘の鏡信仰は拭い難く、鏡の前にシラル娘。クドキへげにや別れての、と訴える様にワキへアシラフ娘に、今は現実を直視させねばとワキ。

「御覧せよ」と居立ち、鏡を指シ(写真)裏体を明かせば、漸く納得する娘だが、へ鏡の中の姿に母を慕ういじらしさに、へ父は涙にかき替れてや、と双シラリのワキは、心を曇らせ素直でなかつた己れを恥じるかに退く。

会釈の囃子(誠・嘉津幸・真之介)で娘の夢枕にいつとき喜界から現れる母ノ靈(ツレ俊介、面鏡・横浅賀・段敷斗月か・黒水衣)、往時は全て夢、旧知は大方七く、とクリ地。正中、床几に舞台面も賑やかに物語の展開にワキ方の活躍が大きく、テンポも軽快で劇面を見る面白さ。あまり上演されず、たまに出ても学生流が多い。ワキ方の五人は岡治郎石衛門・谷田宗二郎・森晴蔵達の後を継ぎ、主に京都で活躍する高安流の中堅、若手、村山弘が不参加だったが、洗練と力強く好演だつた。(45分)

「松山鏡」七妻の三回忌に焼香をよ松山来(ワキ雅介)、娘(子方・園田光樹)の声を聞きつけ持仏堂を開けさせれば、何か隠す気配に、さては噂に聞く継母を

台前に引き出すが、玻璃の鏡に映る姿はへこはいかに、娘の功力で言葉に、驚くシテは憤然独り地獄へ、へ奈落の底にぞ、と常座で飛返つてトメた。

正にワキ方の能で、娘の挙動を疑い論ずるところ。異なる事を言う娘の誤りを正さんとするところ。辺境に居て無知にならざるを得ない娘に目を開かせるところ。何れも長大なワキの語を情感ある明晰な口跡で語る雅介に巧味、充実ぶりを示す。対する子方はシテの外派五年生というが雄気に頭張り立派、舞台を盛り上げる。シテの出番が極く少なく、ワキ方の催しでも全員初演であらう。因に当地演能記録には昭和一五年にシテ橋岡久太郎・ワキ西村弘敬がある。(52分・3月29日・第四回西村同門会研究会)

「腰折」シテ忠三郎、アト良暢・耕道。シテは祖父(おおじ)の面をつける。馴染のない土地で頻りに来演もないとすれば、演者の素(ま)が直に感じられる直面の狂言が見たかつた。「腰折」にも直面はあるが、それも演者の気持ち次第で見所の与り知らぬこと、大方は直面で演じられる狂言の中、それもたつた一番の上演に、面を必要とする少数の曲からの選曲、一考ありたい。たゞ舞台は、祖父の腰を伸ばしてあげよう、の善意からた山伏(貞樹)の行為が、無程に感感運りにならず、一所懸命にも雅気がみられ、良暢の持ち味が出て面白かつた。(22分)

「桜川」貧窮を見兼ね、身売

りをして母(シテ文蔵)を助ける桜子(子方・寺澤若庵)の後を、狂気して探し求める母は、流浪の果て常陸国は名も懐しい桜川で、たまたま近在の住僧(ワキ茂十郎)が観桜に伴う桜子と再会する。

散り初める桜に、我が子の消息を重ねる心を、無様に駆られる狂おしいカケリに目撃にみせ、網之段では、散る桜を道うように正面から面使とつ、シテ柱近く行き、へ抄ひ集め、と框外から花片を抄う心はへ持ちたれども、と左手で抄網の底をもたげて沁々見るところ(写真)、美しい型に桜子を恋う心懐をみせて素請らしい。桜子の幻相を散られ、へこれは木々の花、と抄網捨てるとへ我が桜子ぞ恋しき、と安座双シラリ。落胆まざまざと哀感強く迫り、内面描写の優れた立派な舞台だつた。(1時間22分・4月4日・豊田市能楽堂四月能)

※名古屋能楽堂演能写真
撮影・杉浦賢次氏

前号訂正
4頁2段8行目 八は片仮名のハ
3段4行目 群は郡
6段後から5行目「」は()
5段括弧は括弧
7段14行目 叫は叶

NHK放送予定(平成21年6月~7月)

6月28日 NHK-FMラジオ能楽鑑賞(毎週日曜日7時15分~8時) 観世流 観世鏡之丞(ほか) 野村四郎 今井泰男

7月5日 NHK「歌占」(再)観世流 観世鏡之丞(ほか) 野村四郎 今井泰男

7月12日 NHK「能野」(再)観世流 観世鏡之丞(ほか) 野村四郎 今井泰男

7月19日 NHK「松風」(宝生流) 大西智久(ほか) 大西智久(ほか) 堀津哲生(ほか)

7月26日 NHK「天鼓」(鶴世流) 大西智久(ほか) 堀津哲生(ほか)

7月26日 NHK「杜若」(再)(喜多流) 大西智久(ほか) 堀津哲生(ほか)

7月12日 NHK教育テレビ(15:00~17:00) 能「夜討普我・十番切」(観世流)

7月12日 能「夜討普我・十番切」(観世流)

7月12日 能「夜討普我・十番切」(和泉流)

能楽の友

発行能楽の友社

名古屋千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)

電話 (052) 731-798 4
FAX (052) 733-283 7
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円

演能力レンダ一

名古屋能楽堂
(能・狂言演能関係)
(TEL 052-231-0088)

20日(出) 能 (有料) (有料)

21日(出) 能 (有料) (有料)

2日(休) 能 (関係者)

3日(休) 能 (有料) (有料)

4日(休) 能 (有料) (有料)

5日(休) 能 (有料) (有料)

12日(休) 能 (有料) (有料)

17日(休) 能 (有料) (有料)

20日(休) 能 (有料) (有料)

25日(休) 能 (有料) (有料)

26日(休) 能 (有料) (有料)

29日(休) 能 (有料) (有料)

お洒落名匠狂言会

7月12日 名古屋能楽堂

狂言共同社主催の「お洒落(おしゃらく)名匠狂言会」は今回第10回を迎え、7月12日(日)名古屋能楽堂で開催、大藏流・山本東次郎師、和泉流・野村万作師らが来演、両流の名手が競演する。午後1時半開演。

番組は、素囃子「高砂八段之舞」和泉流狂言「ま広がり」(井上清造)

大藏流「鶴生」(山本東次郎)

和泉流「川上」(野村万作)

和泉流「盲引」(佐藤友彦)

S席八〇〇〇円、A席六〇〇〇円、B席四〇〇〇円。

後援、愛知県、名古屋市、名古屋文化振興事業団、愛知芸術文化協会(ANEI)中日新聞社。

チケット取扱いチケットぴあ TEL0570-02-99999 (Pコード:3994-930) 近くのチケットぴあスポット、ファミリーマート、サークルKサンクスでも購入できる。

名古屋能楽堂(TEL052-231-8064) ナディアパークプレイガイド(TEL052-2665-2015) 狂言共同社(TEL052-834-8607, 052-911-8784)

第8回 名駅新能

能「小袖普我」「鉄輪」

7月26日 観世宗家来演

「第8回名古屋名駅新能」は、7月26日(日)観世流宗家・観世清和師が来演して、J.R名古屋駅・タワースガーデン特設劇場で開催される。午後5時開場予定、午後6時開演。

入場は無料、ただし整理券が必要。整理券の応募方法は、往復はがきに、郵便番号、希望座数(1名まで)を記入のうえ、次の宛先へ送付。当選発表は発送をもって替える。

宛先 〒453-10024、名古屋市中村区名駅4-16、大黒寺内、名古屋名駅新能実行委員会事務局、TEL052-482-3580、応募締切、平成21年7月3日(金)必着。ホームページからも応募ができる。TEL:052-482-3580

雨天の場合は名古屋能楽堂で午後7時開演、当日午後3時決定。会場変更の場合、ホームページならびに東海ラジオ放送で午後4時ごろ告知される。

名古屋名駅新能

主催 財団法人観世文庫、名古屋名駅新能実行委員会

演能は次のとおり。(番組②面掲載)

観世流能「小袖普我」シテ久田勘鷹、ソレ久田勘吉郎

舞囃子「胡蝶」シテ久田三津子、和泉流狂言「柑子」シテ佐藤友彦、アト今枝郁雄

7月 たにまち能

7月5日 山本能楽堂

山本能楽会主催の山本能楽堂定期能「たにまち能」の7月公演は「義経会」として7月5日(日)上演される。午後1時開演。

素囃子「敦盛」(シテ山下麻乃)

素囃子「松風」(シテ森本哲郎)

仕舞「松虫キリ」(松浦信一)

能案内

「能の旅人」

のうのう能「名古屋」

七月四日(土)午後二時始 名古屋能楽堂

一管 鈴之段 街・藤田六郎兵衛 (特別出演)

熊 野 福王 和幸 河村真之介 竹市 学 福王 知登 後藤嘉津幸

後見 梅田 嘉寛 武田 文志 高橋 暉一 中所 宜夫 津沢 一政 山本 博通

観世 喜正

小高 英明

幸清流小鼓方

柳原富司忠氏 去

7月3日 告別式

幸清流小鼓方・能楽協会名古屋支部副支部長・柳原富司忠氏は、6月31日、くも膜下出血で逝去。享年62。通夜は7月2日午後6時から、告別式は3日午前10時から

今回からは名古屋名駅新能全国学生能楽コンクールも併せて開催される運びとなり、名駅新能が更なる拡がりを見せていることに協賛する一企業として大変嬉しく存じます。

この大変意義深い行事が今後も多くの皆様に親しまれることを期待いたします。

名古屋能楽堂定期公演

能・狂言でたどる天下統一の道(前篇)

七月五日(日)午後二時開演 名古屋能楽堂

解説「面と装束について」久田勘鷹

SS席指定 五〇〇〇円
A席自由 四〇〇〇円
学生自由 二〇〇〇円
チケットぴあ(自由席のみ) 0570-02-99999 (Pコード3995-428)

のうのう事務所
03-332666-11020
東京都新宿区末架町47

演能案内

「能の旅人」

のうのう能「名古屋」

七月四日(土)午後二時始 名古屋能楽堂

一管 鈴之段 街・藤田六郎兵衛 (特別出演)

熊 野 福王 和幸 河村真之介 竹市 学 福王 知登 後藤嘉津幸

後見 梅田 嘉寛 武田 文志 高橋 暉一 中所 宜夫 津沢 一政 山本 博通

観世 喜正

小高 英明

幸清流小鼓方

柳原富司忠氏 去

7月3日 告別式

幸清流小鼓方・能楽協会名古屋支部副支部長・柳原富司忠氏は、6月31日、くも膜下出血で逝去。享年62。通夜は7月2日午後6時から、告別式は3日午前10時から

名古屋市千種区千種2-19、いちやなぎ中央斎場で執り行われ、能楽関係者をはじめ多数の会葬で盛儀であった。喪主は妻貞子さん。
[写真は告別式場]

「女郎花」(今村一夫)
素囃子「遊行柳」(シテ波多野重)
仕舞「加茂」(今村宮子)「楊貴妃」(河村栄重)「鶴桐キリ」(林本大)
素囃子「玄象」(シテ山本章弘)
入場券、一般券五五〇〇円。問い合わせ、山本能楽堂/TEL06-6943-9454、FAX06-6942-5744。



首引

観 鬼 佐藤 友彦

為 朝 佐藤 融

能見 鬼 今枝 郁雄 後藤 嘉津幸

鬼 長 中島 明 今枝 郁雄

鬼 米 中島 明 今枝 郁雄

鬼 長 中島 明 今枝 郁雄

鬼 米 中島 明 今枝 郁雄

(終演予定 午後四時四十五分頃)

主催 狂言共同社

電話 052-834-8607
052-911-8784
(佐藤事務所)

前売券(全席指定)
S席八〇〇〇円
A席六〇〇〇円
B席四〇〇〇円
(当日券は前記金額より一〇〇〇円高)

取扱い チケットぴあ0570-02-99999
プレイガイド(栄アトレケケ 2・9 松坂屋ほか)
(Pコード:54428)
名古屋能楽堂(052-228-318064)
ナディアパークプレイガイド 0520265-2015

川上

男 野村 万作

奏 石田 幸雄

(後見 深田 博治)

蝸牛

山 伏 山本東次郎

主人 山本 則俊

大 蔵 山本 義太郎

(後見 藤藤 博美)

未広がり

観 鬼 井上 清浩

大 蔵 今枝 郁雄

使 大 野 弘之

(後見 今枝 清雄)

第10回 御洒落名匠狂言会

七月十二日(日)午後二時半始 名古屋能楽堂

素囃子 高砂八段之舞 大藏 河村真之介 本 加藤 洋輝 小鼓 後藤嘉津幸 笛 大野 誠

能楽協会名古屋支部

名古屋市文化振興事業団 (名古屋能楽堂)

前売 指定三〇〇〇円 主催 名古屋市文化振興事業団
自由二〇〇〇円
学生一〇〇〇円
(当日券は五〇〇〇円増)

取扱い 名古屋能楽堂(052-228-318064)
プレイガイド(栄アトレケケ 2・9 松坂屋ほか)
チケットぴあ0570-02-99999
(Pコード:3994-930)
ナディアパーク7階P.G 0520265-2015

能見 吉沢 旭 地 謡 黒田 孝 八神 孝 上田 拓司
相父 江修一 須部 南 高橋 暉一

(午後四時三十分終了予定)

当地の各流儀・流派・結社・社中の消息を辿る

竹尾 邦太郎

「名匠鑑賞会」

――承前――

先号で名匠鑑賞会は第六五回(納会)と記したが次回が予定されておき、日時も昭和四七年一月二日に決まっていた。なぜ納会となったかは催能を主催する名古屋能楽鑑賞会・主宰の田鍋惣太郎翁が昭和四六年二月四日、脳内出血のため千種区千種町茂佐義の真市民病院で逝去されたことに因る。享年満八十六歳。

昭和四六年は今回顧すると、あたかも田鍋惣太郎が死を予期していたかのように着纏として過ぎ去って行った感がある。この年、一月十七日宝生会定式能に内藤泰二「桜川」に出動、一月三十一日梅若実一三回忌追善能には梅若六郎



田鍋惣太郎氏遺影 (高辻幸一氏撮影)

と組んで一齣「松虫」を指向、二月一日四日観世会定式能初回には観世元正「草子洗小町」に出動。二月二日梅若会には梅若修一「融」、三月七日九草会に半能「融」、三月七日九草会に半能「融」、シテ観世喜之、三月二十八日恒例の中日五流能で野口樵久と一調「桜川」、四月二十五日梅若会「巨匠」をシテ大槻秀夫と。そして五月二二日の記念離子会を初日

とする田鍋惣太郎米寿記念・日加寿能が六月一九日を千秋祭に五回に亘つて催されることになる。仄聞するに、この企画は年齢を超越していた田鍋惣太郎が「来年は幾つになるな」と口にしたことから俄に実現の運びとなり、満年齢云々ということもあつた中で、昔風の呼び蔵八八歳で行なわれたと云う。これが短日月の間に企画を推進実現されたのは、惣太郎長男・幸清流嵐分・日本能楽会々員田鍋惣一郎の力が与つて大きかつたことは忘れられない。しかし田鍋惣一郎も、翌年四月八日、父惣太郎の後を追うように六五歳を一期に急逝した。感慨入りのものがある。

さて、記念能の挨拶に立った田鍋惣太郎は、八八という年齢を忘

れてしまつていたが、周囲の進めもあり、人生の里程標の一つとする意味もあつて、この祝賀能を持つたが偏に見所の昔様の御後援の賜である、と述べた後、ユーモアたっぷりに「我は私は一日を二日分に過ぎて居ります。その訳は、普通のお方は大概夕餉にお酒を召上りますが、私は朝晩お酒を戴いております。昔様には悪いのですが一日に二度の幸わせを戴いておりますので、このところ一年に二歳年齢をとつていることになります。でありますから恐らく百歳は疾うに越えているのではないかと思つております」と話し、見所はひとしきり笑いが振がり、和やかな気分が醸つて祝能に相応しかつた。

五月三〇日米寿記念・日賀寿能 第二日、番離子「翁」を喜多実・喜多長世、「道成寺」を大西信久と。六月六日、第三日には秘曲「鶴亀小町」を山本博之と。六月十五日千秋祭の乱能には目出度く「鶴亀」のシテを舞い上げる。尚、田鍋惣太郎はこれまでに世阿弥祭乱能・楽師会乱能などで慶々シテを勤めたが、これが最後の乱能となり、この年の師走一九日楽師会乱能「柳發遣」のシテは、惣太郎次男・藤田流宗家藤田六郎、

名古屋能楽堂 夏休み親子能楽教室

8月4・5日 2日間

は、「夏休み親子能楽教室」への参加を呼びかけている。主催は名古屋文化振興事業団〈名古屋能楽堂〉、能楽協会名古屋支部。開催要項、申込方法次の通り。日時 8月4日(火)5日(水)の2日間。午前10時〜午後2時30分。会場 名古屋能楽堂能舞台・けい古堂ほか。曲目 能「羽衣」内容 1日目 仕舞と謡の練習 2日目 能面体験(能面をつけて歩いてみよう) 能舞台での発表会。講師 衣装正宜、衣装美、犬塚恵(宝生流シテ方)参加費 親子1組1500円、(追加の場合 子ども1人500円、親1000円)※当日は、白足袋持参で必ず長

スポン着用のこと。☆☆☆対象 小学校3年生から中学校3年生までの子どもとその保護者募集人員 30組60人(定員を超えた場合は抽せん)申込方法 はがき住所、氏名(親子とも)、電話番号、学校名、学年、性別を記入して、次に郵送(FAAXでもよい)

締切り 7月13日(月) 当日消印有効
申込み先 〒460-1000-1 名古屋市中区三の丸二丁目一丁目一名古屋能楽堂「夏休み親子能楽教室」係
TEL 052-231-0088
FAX 052-231-8756
HP: /www.bunka758.or.jp/

十二世 野村又三郎信廣 三回忌追善
狂言也留舞会
七月二十日(月・祝)(海の日)
名古屋能楽堂
【第一部】 午前十時三十分開演
因幡堂 男 宇佐島昭子 妻 柴田 錦子

痺 生種 大徳冠者 小川 泰範 主 伊藤 泰
引茶壺 男 高村 幸子 伯 父 林 恭子
伊呂波括 ｽｯﾊﾞ 坂倉 純子 中岡の者 野村小三郎
狂言小舞 法師ケ母 妻 徳田 文三 夫 吉村由紀子
弟 堀場 将吾 兄 野村 信朗
伯母ケ酒 男 田淵 晴雄 伯 母 原 有作
柿山伏 山 伏 田端 泰衛 地 主 藤波 徹
祐善 花巻の儀 伴野 俊彦 所の者 松村 美和子
【第二部】 午後二時開演
苞山伏 通りの者 東 信彰 山 山 伏 服 山内 理洋
井杭 井 杭 伊達 義子 算何 某 奥津 健太郎
口真似 太郎冠者 田嶋 慎太郎 客主 伊守屋 善巳
魚説法 新発童 吉本 有李 檀 家 太田 育子
狂言語 那須語 伊藤 悦子
連吟 敦 盛 前田 純子 柴田 鏡 三宅 千生子
後藤 紀一 平山 小みよ 芳子

伯母ケ酒 男 伊達 義子 伯 母 松田 萬義
引茶壺 妻 加藤 圭津子 夫 野村小三郎
犬山伏 都 方 喜多 敬 儀者 方 喜多 芳夫
出 山 伏 吉村 由紀子 茶 屋 野口 隆行
家 白石 敦子 犬 磯村 美和子
【終演予定 午後五時頃】

御来場歓迎 (入場無料)
主催 也留舞会
参加 如月会
菊池みゆる会
伊勢一色町能楽保存会
謡曲信謡会
【連絡先】 野村事務所
名古屋市中区平和一丁目二十番四号
TEL (052) 35017971

兵衛の代動となった。七月四日調友会には舞離子「番知鳥」に出動、シテ梅若盛義。七月一日「能楽の友」発刊五周年記念能に「狸々乱・双之舞」シテ大槻文蔵・辰豊夫。八月一日、日本能楽会第二回名古屋公演には観世元正のシテで「半能」に出

第八回 名古屋名駅新能
七月二十六日(日) 午後六時開演
J.R.名古屋駅前タワーシアターアン
能小袖曾我 男主 武田 大志 河村真之介 竹市 学
里三郎 梅田 義宏 後藤 藤津幸
母 上田 公威 地謡 後藤 藤津幸
五郎 久田 勲 船戸 昭弘
十郎 久田 勲 船戸 昭弘
問 佐藤 融
後見 八神 孝充 梅田 邦久 地謡 須部 貞信 口賀 信一 相父 江修一 清松 一幸 上田 正弘 清沢 政 古橋 正邦
【観世流】 舞離子 胡蝶 久田三津子
【和泉流】 狂言 柑子 太郎冠者 佐藤 友彦 主人 今枝 郁雄 後見 佐藤 融
【観世流】 仕舞 雲林院 橋岡 慈観
【観世流】 能鉄輪 親世 清和 森 常好 河村 総一郎 加藤 洋輝 井上 靖信 柳原 司忠 鹿取 希世
後見 上田 公威 本田 勲 古橋 正邦 上田 貴弘 地謡 武田 大志 相父 江修一 上田 拓司 相父 江修一 上田 拓司
主催 財団法人 観世文庫 名古屋名駅新能実行委員会
【要観覧券】 申込み方法①面参照 自由席は当日先着順

第五回 名古屋青雲会
七月二十九日(水) 午後二時始
名古屋能楽堂
仕舞 笠之段 奥頭 京子 島山 孝司
富士太鼓 衣斐 愛 地謡 藤原 巴 克彦 陸言 隆
和久 飛能 内藤 久太郎
高砂 同 梅元 正樹 河村 真之介 加藤 洋輝 船戸 昭弘 竹市 学
問 飯富 雅介 佐藤 融
後見 宝生 和英 地謡 江洲 陽三 澤田 宏 衣斐 愛 地謡 金森 隆彦 高橋 憲正 嵩山 淳司 藤原 巴 克彦 陸言 隆
【来場歓迎】 主催 名古屋青雲会 後援 宝生会 名古屋宝生会
問い合わせ先 名古屋市昭和区御器所三丁目三十一番九号 御器所パーカマシオンビル 電話 052-882-5680 衣裳正宜方
【終演予定 午後四時頃】

一言でいえば、「鼓は掛声で打つ」とまでいわれるもので、鼓の御稽古に何よりも大切な事は掛声で、十分に声掛けをすれば鼓は決して打てないものです。つまり掛声は力を入れて腹から出す様にせねばいけません。これは全く誰と同様であります。誰も口先ばかりの力で、腹から力のないものは、誰になつておらぬと同様に、鼓の掛声も腹から出る力の纏つた声でなければ本当の鼓は打てません。――中略――次に大切な事は「構え」であります。鼓の構えは正座して腹に力を入れ、鼓を持つて肩に上げた姿勢は、左の手が目八分、前腕は真直ぐで肘が下らないようにします。――後略――

未枯れた秋の風情を感かせて、能「野宮」は淡々と進むが、掛声

は弱々しく、小鼓は肩に重く、肘は下がり、打つ手に勢いが無い。余程身体の調子が悪いのである。辛うじて気力だけが舞台を支えているのである。地謡座から片隣に耳打ちすると、梅田邦久が小鼓後見の後藤孝一郎のもとへ立って、急遽田鍋惣太郎と入れ替る。不図怪訝そうな表情をみせたが直ぐ納得して後見に下がった田鍋惣太郎には、自分の意志とは裏腹に体力が付いてゆかないもどかしさの横なものが鬱鬱として起つて来るのであろうか、それとも愛弟子を氣遣うのだろうか、後藤孝一郎の背中無心に拍子を取っているのが痛々しく思われ、能楽師の執心のようなのを垣間見て慄然とさせられた。

「②面よりつづき」
ちゃんでした。築屋に戻つてから御養業にと万華を差上げたことがありました。昭和二年四月二日、名古屋市池田能楽堂(第二次大戦により消失)で行われた観世流二四世宗家左近の養子披露でのことである。各役はワキ高安滋郎・笛一禮操二・小鼓田鍋惣太郎・大鼓谷口喜代三・大鼓鬼頭八郎、シテ観世元正は八歳である。九月五日大衆能で舞囃子「龍田」を大槻秀夫と。次いで九月二日は観世左近三三回忌追善能に「清経・恋之音取」を観世元昭と。九月十九日、中部金剛会定式能には金剛殿と「三井寺」。一月一日狂言共同社結成八〇年記念和会に宝生英雄と一調「松虫」。一月二十四日、第六五回名匠鑑賞能で大槻秀夫と「定家」を。そして二月二日、昭和四六年度第五回観世会定式能での「野宮」シテ片山博太郎が田鍋惣太郎の最後の舞台である。この日、身体の工合が悪いことが予め分つていたのであろうか。後見に後藤孝一郎が終始付き切りであった。心なし顔色は蒼ざめ、構懸を運ぶ姿にも生気がないようであった。自著「小鼓鑑賞」の中、「小鼓の打ち方」について次のように述べている。

此の一段は筆者が昭和四九年(一九七四)八月一日に上梓した私家版『能・狂言』誌の第五号「華清流小鼓方田鍋惣太郎追悼号」の中の「最晩年の田鍋惣太郎」より転載した。明治・大正・昭和の三代に亘り全能楽界に巨歩を印してきた斯界の書生・田鍋惣太郎の功績は計り知れないが、没後は後継者を失い華清流小鼓の家系は絶えた。蓋し能に殉じた偉大な生涯を閉じたと言うべきだろう。小鼓の家系は絶えたが、惣太郎次男豊二郎は笛方藤田流宗家に入り、九世清兵衛を継ぎ一〇世六郎兵衛、当代の六郎兵衛は孫(前名・昭彦)、芸嬪子として一世を襲い會祖父惣太郎に劣らぬ活躍を見せていることは嬉しい。

因に第六六回の名匠鑑賞能が予定されていた昭和四七年一〇月二

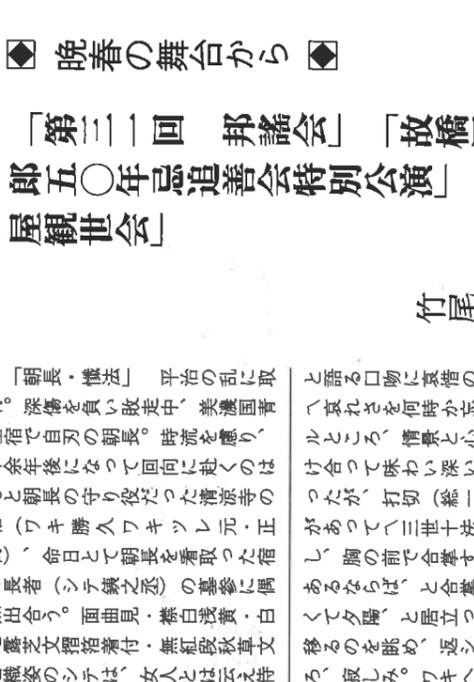
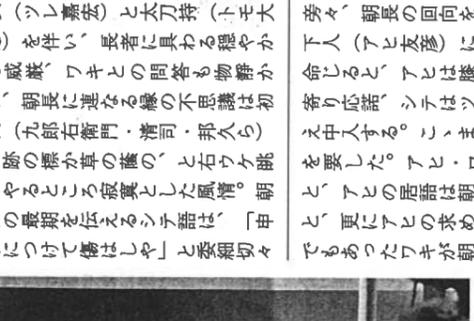
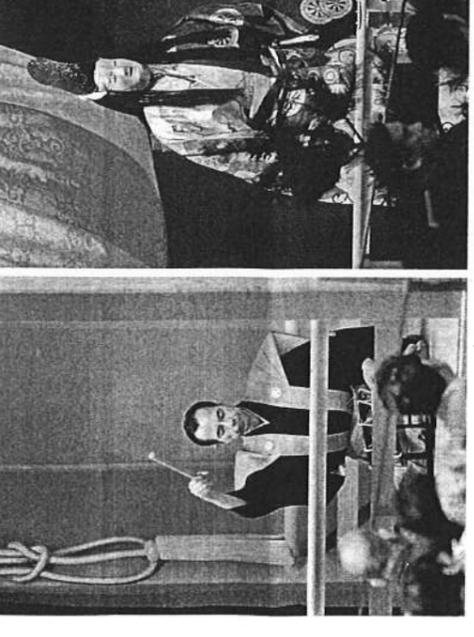
日は第一三回名古屋官古楽団宝生会連合大会が行われている。なお全上演曲目(能のみ、但し小書は省く)を左に挙げる。算用数字は上演回数。

「朝長・備法」平治の乱に取材。深傷を負い敗走中、美濃國青鷲で自刃の朝長。時流を感じ、十余年後になって回向に赴くのはも朝長の守り役だった渡邊寺の僧(ワキ勝久ワキツレ元・正樹)、命日として朝長を看取った宿の長者(シテ鏡之丞)の墓参に偶然出会う。面曲見・襟白浅黄・白地露文文箱箔着付・無紅段草文唐織姿のシテは、女人とは云え侍女(ツレ嘉安)と太刀持(トモ大志)を伴い、長者に負わる程やかな威厳。ワキとの問答も物静かに、朝長に連なる縁の不思議は初回(九郎右衛門・清司・邦久ら)へ跡の標か草の蔭の、と右ウケ眺めやるところ寂寥とした風情。朝長の最期を伝えるシテ語は、「申すにつけて傷はしや」と委細切々

以上、全一八一番(七〇曲)。また、常々一調は能と同様の心構えを必要とする、と説いていた田鍋惣太郎は名匠鑑賞能全六五回のうち三五回(四〇番)、番組に一調を入れているが、うち一九番を動めている。他は堀井五郎(一)田鍋惣二郎(七)幸内次郎(三)谷口喜三郎(一、大鼓)前川善雄(一、大鼓)青木恒治(三)田鍋洋一(一)堀井啓次郎(一)幸義太郎(一)森重明(一)幸正彰(一)。曲目は勅遣帳(八、うち別習二)笠之段(六)松虫(五)女郎花(四)三井寺(三)花筐(四、うちクルヒ三)、以下は各一、放下僧、別習夜討討我、別習歌占キリ、一調一声小管、威勝宮、鳥追舟、桜川、駒之段、三井寺(大鼓)船弁慶(太鼓)。

曲目	
10	遣成寺
8	蟬丸
7	安達原(黒塚)、小鏡治、小袖曹我
6	景清、望月
5	葉上、放下僧、松風
4	綾鼓、碓、殺生石、定家、融、熊野(湯谷)
3	通小町、花月、清経、隅田川、千手、卒都婆小町、田村、乱、土蜘蛛、経政、巴、船弁慶
2	鷗鷗小町、井筒、熊坂、恋重荷、小管、俊寛、竹生、鳥、花筐、班女、三輪、弱法師
1	海人、雲林院、熊、杜若、加茂、玄象、高野物狂、西行旅、草子洗、鷲、実盛、正尊、石橋(半能)、高砂、忠度、張良、木賊、朝長、野宮、羽衣、半部、橋弁慶、鉢木、三井寺、求塚、紅葉、夜討討我、頼政

「朝長・備法」平治の乱に取材。深傷を負い敗走中、美濃國青鷲で自刃の朝長。時流を感じ、十余年後になって回向に赴くのはも朝長の守り役だった渡邊寺の僧(ワキ勝久ワキツレ元・正樹)、命日として朝長を看取った宿の長者(シテ鏡之丞)の墓参に偶然出会う。面曲見・襟白浅黄・白地露文文箱箔着付・無紅段草文唐織姿のシテは、女人とは云え侍女(ツレ嘉安)と太刀持(トモ大志)を伴い、長者に負わる程やかな威厳。ワキとの問答も物静かに、朝長に連なる縁の不思議は初回(九郎右衛門・清司・邦久ら)へ跡の標か草の蔭の、と右ウケ眺めやるところ寂寥とした風情。朝長の最期を伝えるシテ語は、「申すにつけて傷はしや」と委細切々



「朝長」備法 ⑤観世鏡之丞 ⑥太鼓方・上田悟 (撮影・杉浦賢次氏)

「朝長」備法 ⑤観世鏡之丞 ⑥太鼓方・上田悟 (撮影・杉浦賢次氏)

「朝長」備法 ⑤観世鏡之丞 ⑥太鼓方・上田悟 (撮影・杉浦賢次氏)

「朝長」備法 ⑤観世鏡之丞 ⑥太鼓方・上田悟 (撮影・杉浦賢次氏)

◆晩春の舞台から◆

「第三二回 邦議会」 「故橋岡久太郎五〇年忌追善会特別公演」 「名古屋観世会」

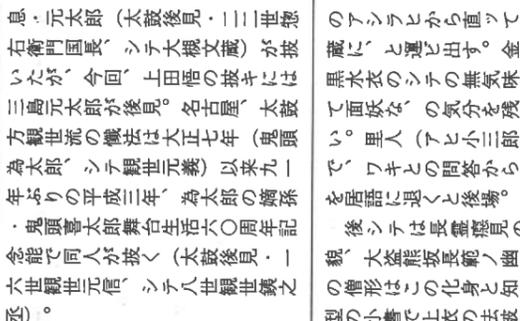
竹尾邦太郎

「朝長・備法」平治の乱に取材。深傷を負い敗走中、美濃國青鷲で自刃の朝長。時流を感じ、十余年後になって回向に赴くのはも朝長の守り役だった渡邊寺の僧(ワキ勝久ワキツレ元・正樹)、命日として朝長を看取った宿の長者(シテ鏡之丞)の墓参に偶然出会う。面曲見・襟白浅黄・白地露文文箱箔着付・無紅段草文唐織姿のシテは、女人とは云え侍女(ツレ嘉安)と太刀持(トモ大志)を伴い、長者に負わる程やかな威厳。ワキとの問答も物静かに、朝長に連なる縁の不思議は初回(九郎右衛門・清司・邦久ら)へ跡の標か草の蔭の、と右ウケ眺めやるところ寂寥とした風情。朝長の最期を伝えるシテ語は、「申すにつけて傷はしや」と委細切々

と語る口吻に哀愍の情も沁々と、へ哀れさを何時か忘れん、とシラルところ、情景と心象の描写が融け合つて味わい深い。小書は無かつたが、打切(総一郎・舜一郎)があつてへ三世上法の、と誦し出し、胸の前で合掌するとへ憐む心あるならば、と合掌を解く。へかたく夕陽、と居立つて暮へ日脚が地露文文箱箔着付、無紅段草文唐織姿のシテは、女人とは云え侍女(ツレ嘉安)と太刀持(トモ大志)を伴い、長者に負わる程やかな威厳。ワキとの問答も物静かに、朝長に連なる縁の不思議は初回(九郎右衛門・清司・邦久ら)へ跡の標か草の蔭の、と右ウケ眺めやるところ寂寥とした風情。朝長の最期を伝えるシテ語は、「申すにつけて傷はしや」と委細切々

と語る口吻に哀愍の情も沁々と、へ哀れさを何時か忘れん、とシラルところ、情景と心象の描写が融け合つて味わい深い。小書は無かつたが、打切(総一郎・舜一郎)があつてへ三世上法の、と誦し出し、胸の前で合掌するとへ憐む心あるならば、と合掌を解く。へかたく夕陽、と居立つて暮へ日脚が地露文文箱箔着付、無紅段草文唐織姿のシテは、女人とは云え侍女(ツレ嘉安)と太刀持(トモ大志)を伴い、長者に負わる程やかな威厳。ワキとの問答も物静かに、朝長に連なる縁の不思議は初回(九郎右衛門・清司・邦久ら)へ跡の標か草の蔭の、と右ウケ眺めやるところ寂寥とした風情。朝長の最期を伝えるシテ語は、「申すにつけて傷はしや」と委細切々

と語る口吻に哀愍の情も沁々と、へ哀れさを何時か忘れん、とシラルところ、情景と心象の描写が融け合つて味わい深い。小書は無かつたが、打切(総一郎・舜一郎)があつてへ三世上法の、と誦し出し、胸の前で合掌するとへ憐む心あるならば、と合掌を解く。へかたく夕陽、と居立つて暮へ日脚が地露文文箱箔着付、無紅段草文唐織姿のシテは、女人とは云え侍女(ツレ嘉安)と太刀持(トモ大志)を伴い、長者に負わる程やかな威厳。ワキとの問答も物静かに、朝長に連なる縁の不思議は初回(九郎右衛門・清司・邦久ら)へ跡の標か草の蔭の、と右ウケ眺めやるところ寂寥とした風情。朝長の最期を伝えるシテ語は、「申すにつけて傷はしや」と委細切々



「熊坂」變之型 (撮影・杉浦賢次氏)



故柳原富司忠氏 [卒都婆小町] (平成20年6月22日 幸調会能)

訃は五月三十一日、野村又二郎三回忌追善「やるまい会」の席、「呂運」が済み休臨時、柳原さんの師匠であった福井四郎兵衛さん夫妻から齎された。沈痛な福井さんの面持ちから事の重大さを知り、言葉もなかった。

思えば柳原さんとの付き合いは四〇余年になる。昭和四四年二月六日、柳原さんは小鼓方幸

柳原富司忠さんの急逝を悼む

竹尾邦太郎

清流職分披露能を催して目出度く独立、観世鏡之丞(雅喜)シテの「望月」を勤めた。新進気鋭の二二歳、その後、着々と地歩を築き昭和五四年二月二日、職分一〇周年記念能に観世浄夫(のち八世・鏡之丞)のシテで「達成寺」を、平成元年一月二十九日、職分二〇周年記念には八世鏡之丞シテで「卒都婆小町」を抜く。平成三年

には日本能楽会の第九次増員で小鼓方では大倉源次郎・曾和正博と共に重要無形文化財保持者に認定される。平成二年一月三十一日、職分三〇周年記念ではシテ梅若六郎と老女物の深奥「娘捨」

を抜く。能の啓蒙普及活動にも熱心で、主宰する社中・富羅会の雛子会の外にも名古屋学生能楽連盟に関わり、後進の指導に当たってこられたのも忘れられない。啓蒙普及と云えば、市民を対象に文化の各分野に亘る情報を提供するため、名古屋文化振興事業団が昭和五九年四月に創刊した月刊「なごや文化情報」の編集に携わる広報委員会(平成一五年、改組後は編集会議)委員を、柳原さんは平成一一年から一八年まで八年間、能楽に限らず広く古典芸能を結ぶ窓口ともなつて活躍、邦楽各家とのインタビュー記事などに健筆を揮われたことは記憶に新しい。「鼓は掛声で打つ」と言われるように、柳原さんの腹から出る声量豊かな深く力の籠った掛声はとてよかつた。享年六二歳、高齢化の当世、能楽協会名古屋支部・副支部長を失つた能楽界にとつても、当地の芸能文化にとつても、惜しみても余りある早世、せめて



故柳原富司忠氏をしのんでの会葬

もの慰めめは後継者・船戸明弘さんが立派に育て上げたこと、ただただ御冥福をお祈りするばかりである。さようなら柳原富司忠さん。安らかに眠り下さい。

⑥(面よりつづき) 長刀捌き。が、郎党みな小男即ち牛若に斬られては命あつての物種、一旦は一ノ松へ退くが郎党共の供養、と勾欄に左足掛け威勢をみせてへ折家戸を小楯に、舞台へ戻り、獅子奮迅の働きは、身を翻す飛返りにへ追つかけ、る心に膝行、更に長刀揮い切り立てるも斬られ安座。太刀・長刀では敵わぬと(長刀は後見に渡す)手捕まえてへ追つ語め捕らんとすれども(写真)、水の月の様に取られず、斬られた重傷に刀棄え、たらたら退り安座。右手で膝を抱える。キリは立つてワキに合掌して一ノ松に抜け、へ松鷹に、と下居に左手脇シ、へこそは、と立つて直り拍子は踏まずトメ。拳請らし技の切れに力を出し切つた充足感が覗えた。(一時間6分・第31回邦語会)

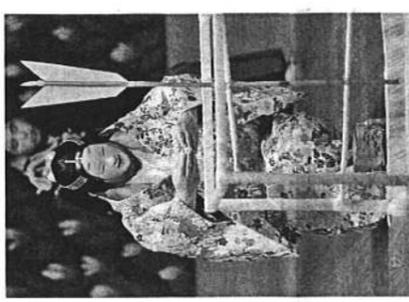
「卒都婆小町・一度之次第一」 乞食姿に成り果て、物乞いにさ迷い、疲れて路傍の朽木に坐る老小町。高野山から上京する僧が卒都婆に腰を下ろすとは、と咄めれば、昔、才媛を謳われた誇りが許さず反駁、心服させるが、好奇の

目でみる僧に素姓を知られる。憐れむ僧に懇切をこぼし、あれこれ持ち物の中味問われるうち、耐えきれず狂乱。四位少将ノ霊が悪き、物着に少将百夜通いの機をみせる事で悪き物も落ち、小町は後世を願ひ悟道に入ることを僧の前に約束、という。

囃子方(六郎兵衛・富司忠・真之介)、地謡(徳三・真弘・勘助)が座着くと、後見が本幕で床几を正中に出す。小書で先づ老残の小野小町(シテ三種子)が出、三ノ松で胸杖に小娘のち一ノ松。昔に比べる萱草の今を嘆き、人目を憚りへ月詣共に出でて行くの返シ向に運つと、舞台に入つては月の桂の川瀬舟、と右やけて眺め、へ漕ぎ行く人は誰やらん、と胸杖に凝視する姿に一人の感慨もあらう。返シ向に一足退き笠をとる。面鏡・襟白二・白摺裙着付・無紅腰巻・暗緑色緋水衣。余りに苦しいから「これなる朽木に」と床几の方を見やり、老足に杖をつきとほとほといつた風に運ば、後見の控えない床几にビタリ腰を下ろしたのが見事。冒険を選

けて床几を出さず、出しても後見が死がう演出が多いが、朽木に掛けるとなれば地べたに坐るのでなく、朽木に擬した床几を出す方が視覚に訴える力も強く良いのでは、と思う。充分に稽古を重ねた跡がみえ、老女物の披露にかけるシテの心構え、意気込みも窺え惹きつける。

高野山の僧(ワキ勝久ワキツレ元)は一ノ松で名宣、「阿倍野の里へ着きて候」と着詞、床几のシテを鼻咄めると舞台へ入り、シテとの卒都婆問答になる。朽木同然と驟すシテに逆に詰問され、浩券に関わるとはかりのワキ・ワキツレ、小難しい反論もシテに当意即ちくるところ、利かんのシテの持ち味がよく出ていて面白かつた。地のへげに本来一物なき時シテを囲む様に居たワキツレが、シテの後ろを通り地謡構に行くの余りに苦しいから「これなる朽木に」と床几の方を見やり、老足に杖をつきとほとほといつた風に運ば、後見の控えない床几にビタリ腰を下ろしたのが見事。冒険を選



名古屋観世会定例公演 「賀茂」古橋正邦 (撮影・杉浦賢次氏)

恥に耐えられず遂に、といつたところかへ狂乱の心憑きて、と杖を捨て、へなう物賜へなう、と笠を両手にワキに詰め寄るところ心構鮮やかにみせ、女流のシテならでは、物着に黒風折烏帽子・白長絹(芒・秋草・秋ノ虫文様)、四位少将百夜通いをみせる。小書の記載はないが「彩色」、へ浄衣の袴履ひ取つて、と拍子一ツ踏みイロエ、シテは再びへ浄衣の袴履ひ取つて、と誰い更に地が返す。立烏帽子を扇で指すと、へ狩衣の袖、を被くところはすつとゆかず残念。へあら苦しと笠袖を握り、へ胸苦しや、と扇を胸に当て退つてへ深草の少将、と大小前に安座。

キリはへ願ふぞ真なりける、と立ち、へ悟りの道に、と合掌、返シ向に右ウケ左袖返シ留め、拍子は踏まなかつた。被キの緊張感のある好舞台。(一時間26分・4月11日・芸術院会員故郷岡久太郎五〇年忌追善会特別公演)

「賀茂」祭神が同じ縁で賀茂明神參詣の播州室の神職(ワキ雅介ワキツレ正綱・孝)。御手洗川畔の壇に立つ白羽の矢を訝り、神水を汲みに来た里女(シテ正邦ツレ太志)に質せば、シテ語とシテ上から流れきた白羽の矢を拾ひ軒に挿すと懐胎して男子を産み、別番ノ神と顕れた、の故事を語り、更に、矢が今も神体の謂れを川の流れにまよえて説くところ、声量豊かに堂々と立派。シテと地(邦弘・勘助・修一ら)との都合はロソギの川尽し、四季の眺め時の移ろいに人生を重ね、へ神の御心汲まうよ、と下居合掌(写真)の姿に存在感をみせる。シテの知悉ぶりにワキが名を問えば、「誰とは今は愚かなり」と凛然と言いつつも、へ恥かしや我が姿、と立つところは初々しい恥らも。へよし名ばかりは、とワキへ神アシラと神隠れに退いて行くところの余情も一入。末社ノ神(アト勉)がワキを見舞い、賀茂明神の謂れを立シヤベリに爽やかに語り、三段之舞を舞つて退くと後場。

御祖神(ツレ瞭一)が地との掛合に神徳を称え、天女之舞を舞上げ、別番ノ神(後シテ正邦)を迎える心に舞へ舞へ舞して地前の床几に退くと、早笛(宇・萬津幸・敏一・義命)でシテが出る。傳丈夫のシテの舞動が実に大きく豪快



名古屋観世会定例公演 「隅田川」梅若玄祥 (撮影・杉浦賢次氏)

で胸が透く。へほろほろととどろ、の足拍子も力強く迫り、三ノ松で膝を投げ捨て留めまで目が離せなかつた。(一時間30分)

「二千石」無断欠勤の太郎冠者(アト増造)を激怒の主(シテ友彦)、京見物と分かれれば都の様子を聞きたく太刀を納める。ほつとしたアトは都に流行る謡を披露するが、シテは頰を背け害虫を噛み潰すばかり。当今ではこれをKAYとか、アトは空気が読めない。なおも得意気に誦うアトに「二千石」は家代々に伝わる門外不出の謡、とシテ。「退りをらう」と怒りに床几を下りて正先へ進み、扇を開いて置くとき合掌、アトの非礼を謡の神に詫びて床几に戻ると、此の謡が尊重される所以となった先祖が出陣の前九年後三年の役の合戦譚を滔々と語るうち、「弓矢八幡討つて捨てうと存する」と太刀振りかぶる(写真)。太手を振り泣き出すアトに泣く理由を問えば、命惜しさでなく太刀持つ手元が大殿様に酷似の懐しさで、と。

「賀茂」祭神が同じ縁で賀茂明神參詣の播州室の神職(ワキ雅介ワキツレ正綱・孝)。御手洗川畔の壇に立つ白羽の矢を訝り、神水を汲みに来た里女(シテ正邦ツレ太志)に質せば、シテ語とシテ上から流れきた白羽の矢を拾ひ軒に挿すと懐胎して男子を産み、別番ノ神と顕れた、の故事を語り、更に、矢が今も神体の謂れを川の流れにまよえて説くところ、声量豊かに堂々と立派。シテと地(邦弘・勘助・修一ら)との都合はロソギの川尽し、四季の眺め時の移ろいに人生を重ね、へ神の御心汲まうよ、と下居合掌(写真)の姿に存在感をみせる。シテの知悉ぶりにワキが名を問えば、「誰とは今は愚かなり」と凛然と言いつつも、へ恥かしや我が姿、と立つところは初々しい恥らも。へよし名ばかりは、とワキへ神アシラと神隠れに退いて行くところの余情も一入。末社ノ神(アト勉)がワキを見舞い、賀茂明神の謂れを立シヤベリに爽やかに語り、三段之舞を舞つて退くと後場。



観世会「二千石」 観より井上靖浩、佐藤友彦 (撮影・杉浦賢次氏)

氣勢殺されるばかりか父を懐かしむシテ、「さてさて急な時に哀れなことを思ひ出したなあ」と斬るのを断念するどころか、子が親に似るのは目出度い、とアトに太刀を与えれば、アトは調子に乗つて大殿様をだしに、シテの詠味につけ込み、へつらつては次々シテの持ち物を我が物にしてゆく抜け目のなさは、積極的にせびる「武悪」程ではないが少々えげつない。世代を異にするウエットなシテとドライブなアトの情が巧ますに出て上々。(25分)

「隅田川」大小前、塚は茶色引通シ。渡守(ワキ勝久)、旅人(ワキツレ元)はワキと同装でなく白大口・掛褌の姿。狂女(シテ玄彦)は面深井・襟浅黄・白浅黄紋襦袢着付・匠青色流水二水草文織袴腰巻・薄色水衣・女笠・狂

我が子を尋ね彷徨、馬路に駆られ、狂おしい心を見せるカケリが惹きつける。サシで我に返り、改めて己れを確かめ、今、何ゆえの此の行動かを自問自答。へ千里を行くも親心、とシラルところに自み潰すばかり。当今ではこれをKAYとか、アトは空気が読めない。なおも得意気に誦うアトに「二千石」は家代々に伝わる門外不出の謡、とシテ。「退りをらう」と怒りに床几を下りて正先へ進み、扇を開いて置くとき合掌、アトの非礼を謡の神に詫びて床几に戻ると、此の謡が尊重される所以となった先祖が出陣の前九年後三年の役の合戦譚を滔々と語るうち、「弓矢八幡討つて捨てうと存する」と太刀振りかぶる(写真)。太手を振り泣き出すアトに泣く理由を問えば、命惜しさでなく太刀持つ手元が大殿様に酷似の懐しさで、と。

われる。シテの膝や腰が悪かつたのであろうか、とすれば状況を考えて下船の折、ワキが介添といつた手もあるのでは、と思わぬでもなかつた。

船中は、対岸の念仏に興を示したワキツレにワキは語り馴れた口調で事の次第を語るが、シテの胸中は我が子で一杯、身じろきもせず居るのもひたすら生存を急する姿。ワキ語も終り近く、ようやく「観北白川」刃りから語り耳に入り、「人商人我を誘ひこの国まで下りて候」で面クモラスのは聞き耳をたて、後を聞き残らすまいの気持ち、変化の妙、心の繰、見事に知らせる。「終に事終つて候」と静かにシラルところは唯唯が濡れるかであり、へなうこれは夢かや、と笠を手放すと双シラルのところは慟哭であろう。「さては御身の子」と棒を手放すワキ、「此方へ御出で候へ」と促すと漸く床几を立つシテ、塚の右前方で塚を見詰めクドキである。へこの土をかへして、と大きく両手を掲ぐ様に上げた姿(写真)には死を認めきれない廃絶さ。

念仏の段は子方無し演出。子方のへ南無阿弥陀仏、は省き、子方の声聞く趣に小首をかしげ「この塚の内にて」と塚を眺めるシテ、幻を追いへ見え隠れつ、と両手を駆け仕手柱へ迫るところなど正に幻影を見る思い。キリは、へ我が子と見えしは、と呆然と塚を眺め、へ標はかりの浅草が原、と塚に寄つて両手で抱きか、えると、へ哀れなりけれ、と沈み、返シ向に立ち、シラル、直つてトメた。冷え冷えとした風が胸中を吹き抜ける思いだつた。子方の有無の是非はシテ次第と思う。(一時間18分・4月12日・名古屋観世会)

- ◇ 前号訂正
- ◇ 3頁3段13行目 あるか
- ◇ あるか
- ◇ 4頁1段5行目 達―達
- ◇ 3段20行目 相檀―相檀
- ◇ 3段28行目 仏寺―仏事

NHK放送予定(平成21年7月~8月)

Table with NHK broadcast schedule: 7月26日 FMラジオ能楽鑑賞(毎週日曜日7時15分~8時)...

演能カレンダー

Calendar table for 名古屋能楽堂 with dates from 7月 to 8月 and event details.

能楽の友

発行能楽の友社

名古屋千種区千種2丁目18-18 (郵便番号 464-0858) 電話 AX 731-7988 4 F AX (052) 733-2837 振替口座 008000-6-36393

片山九郎右衛門氏

雪号「幽雪」と「老分」

親世流・片山九郎右衛門氏は、このたび親世流・親世清和宗家より、雪号「幽雪」と、「老分」(ろうぶん)の称を授けられた。

人に与えられる称号で、片山九郎右衛門氏の永年の功績をたたえ、尊老格の氏に今回はじめて授けられるものである。

名古屋名駅新能は、ことし第8回をむかえ、伝説芸能の夏のイベントとして期待を高めているが、ことしから初の企画として「名古屋名駅新能 全国学生能楽コンクール」が併催されることになり、名駅新能当日の七月二十六日午前十時から名古屋能楽堂で全国から9大学の能楽クラブの出演で審査が行われ、当日午後5時からの名駅新能の会場で結果発表と表彰式を挙行し、最優秀大学には会場で舞いを披露する。

コンクールの審査は午前10時から次の9大学グループで行われ、模範演技として親世流宗家親世清和師の仕舞「鉄輪」が演ぜられる。

全国学生能楽コンクール 9大学が出演

金剛家能面、能装束展観

金剛家の「能面・能装束展観」が七月二十五、二十六日京都・金剛能楽堂で催される。開催時間は午前10時~午後5時、入場料は千円。

審査員は親世清和、親世芳伸、葛西敏之、豊川正弘の諸氏。賞は最優秀賞、優秀賞、審査員特別賞、中日新聞社賞など。入場無料

主催 社団法人日本能楽会 主催 社団法人日本能楽会 附祝言 後見 和久庄大郎 内藤飛能

葵 衣装 玉井博祐 袴之出 間 炭哲男 後見 和久庄大郎 内藤飛能

大般若 狂言 佐藤友彦 松田高義 後見 井上靖浩

清景 高安勝久 後見 野村四郎 松風長田 曉

観世流 藤田嘉安 祖父江修一 久田勲 高安勝久

能案内 国家指定芸能 ユネスコ・人類の無形文化遺産「能楽」 能楽特別鑑賞会 名古屋公演

暑

鳳鳴会 武田友志 房

大西智久

中

大槻清韻会 大槻文蔵

御

片山九郎右衛門 清司

何

幽謳会 片山九郎右衛門

観世清和

名古屋観世会

壺泉会 泉嘉夫

井上裕久 井上嘉介

観世喜正 高橋瞭一

名古屋観世九皇会 観世喜之

山本博通

梅若吉之丞 梅若猶義

幽花会 片山慶次郎 伸吾

名古屋昭和区山手通3-8-2 306 電話(052)8321328 55 西宮市甲陽園目神山町三二二五 電話(0798)2458

〒600-8123 京都市北区小山下花ノ木町二

大蔵流狂言 人間国宝 茂山千作の世界

八月二十日(木)午後二時始
名古屋能楽堂

解説 茂山 茂

狂言 魚説経 傳 茂山千作 檀家 茂山正邦
後見 井口 竜也

狂言 鎌腹 男 茂山千五郎 女房 茂山 茂
後見 山下 守之

主催 名古屋市文化振興事業団
名古屋 市

AS席(正面) 三〇〇〇円
A席(正面・脇正面) 二〇〇〇円
B席(中正面) 一〇〇〇円
中学生以下 五〇〇円
(全席指定)

第25回 衣斐正直後援会能

八月二十三日(日)午後一時開演
名古屋能楽堂

番組

立素 内川 飛能
立素 金川 隆士
貴之 衣斐 正充
王 坂口 愛
衣斐 正直 充

能 草紙洗 飯富 雅介 河村 真之介 鹿取 希世
間 佐藤 融

後見 寺井 良雄 地謡 竹内 孝成 佐野 水成
和久 庄太郎 竹内 上上 水川 上上 光輝 和夫 柳 優

狂言 酢薑 シ 佐藤 友彦 ト 大野 弘之
後見 今枝 郁雄

能 百 萬 橋本 幸 河村 総一郎 加藤 洋輝
間 井上 清浩 後藤 繁建 幸 藤田 六郎 兵衛

附 祝 言

後見 水野 登 地謡 平川 正文 東川 光夫
佐野 優 内森 隆士 寺井 良雄
飛能 和久 庄太郎

主催 衣斐 正直 後 援 会
事務所(〒466-1005) 名古屋 市 昭和区 御器所 3-1-23 TEL・FAX 052-882-5600

一般入場料 五〇〇〇円(限定)
学生入場料 二〇〇〇円(限定)

鳳鳴会 大会

八月二十九日(土)十二時半始
名古屋能楽堂

番組

奏謡 朝 長 塚田 照夫 佐川 勝貴
占歌「悲しきかなや」下歌「かくて夕陽」
クリ・サシ・クセ抜き

奏謡 井 筒 木本 仁之 榎木 映夫
クリ・サシ・クセ抜き

奏謡 野 宮 松井 弘 武田 友志
クリ・サシ・クセ抜き

舞臺子 二輪 高藤 光江 太鼓 安福 光雄 太鼓 加藤 洋輝
小鼓 後藤 繁津 幸 笛 藤田 六郎 兵衛

地謡 武田 祥照 谷本 健吾
佐川 勝貴 藤波 重彦

仕舞 笹之段 白石 雅彦(龍巻念)
鳥山 迪永(龍巻念) 地謡 武田 祥照
天 鼓 澤田 厚枝() 武田 宗典
横田 多津子()

能 羽 衣 山崎 佐東子 飯富 雅介 太鼓 山崎 哲生 太鼓 加藤 洋輝
小鼓 後藤 繁津 幸 笛 藤田 六郎 兵衛

後見 藤波 重彦 地謡 武田 祥照 谷本 健吾
武田 志房 武田 宗典 武田 文志

奏謡 鳩 飼 奥田 昌人 武田 文志
武田 祥照

番外仕舞 桜 川 武田 友志 地謡 佐川 勝貴
鐵 輪 武田 志房 武田 宗典

附 祝 言 (終了予定午後五時)

入場無料 主催 武田 友志 房
御来場歓迎 鳳鳴 会

幹事 笹 山 忠
瀬戸市山手町一七一一
電話・FAX 〇五六一八二〇八七四

第25回 いわむら 城址新能

8月22日開催
第25回を迎える「いわむら城址新能」は、ことし恵那市制五周年記念として、きたる八月二十二日(土)宝王和英家から来演して開催される。会場は岩村城藩主邸跡。午後四時半開場。午後五時半開演。

番組は、仕舞「花月」
「安宅」「高野物狂」▽能「羽衣」(シテ宝王和英)▽狂言「千鳥」(茂山茂)▽能「鞍馬天狗」(シテ辰巳満次郎)

前売券四千円、当日券五千円
問合せ/まち並ふれあいの館(電話 0573・43・4622)

観 芳 会

観 世 芳 伸

〒141-0004 東京都品川区東五反田1-3-14
電話(〇三)三二八〇一三六四三

怡 楽 会

山 階 彌 右 衛 門
山 階 弥 次

〒141-0004 東京都品川区東五反田1-1-10
電話(〇三)三四四二一九七〇

藤 井 徳 三

邦 話 会

梅 田 邦 久
清 沢 一
本 田 部 一
今 沢 美 和
梅 田 嘉 宏

〒466-0003 名古屋市昭和区寺町二丁目十六五
電話(〇五)八四二一四六三番

浦 田 保 浩

〒606-0814 京都市左京区下鴨芝本町58-14
電話(〇七五)七三三六八五〇

浦 田 保 親

〒603-8084 京都市北区上賀茂北門町30-3
電話(〇七五)七三三七七六四

名 古 屋 修 諷 会

梅 若 修 一

久 田 観 正 会

久 田 勤
前 野 舜 一
松 山 幸 郁 一
星 野 路 子 親 子

〒460-0001 名古屋市名東区一社3-1-10
電話(〇五二)七〇五二一五五五

松 音 会

泉 泰 孝
〒100-0001 東京都杉並区宮前四一九四
電話(〇三)三三三二八一八〇番

泉 雅 一 郎

〒201-0001 東京都江戸市野川四六八八
電話(〇三)四八八一四八五番

春 鶯 会

梅 若 善 高
〒500-0084 豊中市新千里野町三丁目18-12
電話(〇六)六八三二一七八五四〇
〒106-0003 東京都杉並区善田寺南4-27-7 900
電話(〇三)三三三二二一〇五七〇

梅 春 会

井 戸 和 祐 男
良 祐

〒545-0004 大阪市阿倍野区文の里3-16-17
電話(〇六)六六二二二二二一九

上 田 観 正 会 能 楽 堂

上 田 観 正 会 TEL 〇七八一
六九二一五四四九

上 田 貴 弘

大 公 拓 貴
介 威 司 弘

名古屋淡交会

三 橋 岡 慈 観
三 交 会
久 田 三 津 子

〒460-0001 名古屋市名東区一社3-1-10
電話(〇五二)七〇五二一五八五

武 田 謳 楽 会

武 武 田 大 志 弘
武 田 大 邦 欣 志 弘 司

財 団 法 人 鎌 倉 能 舞 台

中 森 貫 太

初 陽 会

武 田 宗 和

橋 岡 会 舞 謡 会

橋 岡 久 太 郎
* * * * *

山 上 小 宮 半 松 吉 塚 小 宮 山 島 荒 坪
岸 原 倉 内 澤 原 田 田 出 下 岸 田 木 内 * * * * *

健 美 重 年 要 友 三 郎 亮 之
登 一 富 樹 健 章 彦 功 吉 郎 亮 之

一「名匠鑑賞能」⑩

承前

訂正及び補遺 先月号で第六六回が予定されてをり、納会になったことについて書いたが、それは第六五回の番組に次回の日時があっただけで、第六五を納会とすることは当日の田鍋惣太郎の挨拶によつて既定のことであつた。筆者の私家版「能・狂言」誌の第五号より改めてそのことを左記する。

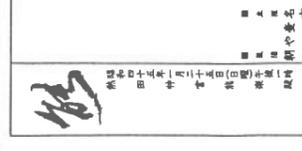
幾多の名人・上手の演能を手懸け、教々の名舞台を残して、名古屋能楽界に刺戟を与えてきた伝統ある立会能の「名匠鑑賞能」が、第六五回で終焉を迎えることは惜しみて余りあるものがある。昭和四十六年一〇月二四日、演能に先立ち挨拶に立った田鍋惣太郎は、心持緊張の面持で次のように述べた。

「戦前から今日まで、六五回を数えてきた名匠鑑賞能も、今回で一先づ終りと致したいと思いま

す。能楽界も今日この頃は忙しくなつて参りまして、東西から人を呼ぶのにもなかなか時間の調整がむずかしく、番組も作りにくくなつてきております。これまで長い間御後援いただきました見所の皆様には、誠に申し訳なく思つてをりますが、事情をお酌みとり下さいまして、お許し願いたいと存じます。ありがとうござりました」その言葉は、努めて平静に、ざつとくばらんな調子ではあつたが、それだけに一人胸中が察しられ、胸が痛んだ。

一「和島重太郎(喜多流)泉嘉夫(観世流)野村又三郎(和島流)を観る会」

和島重太郎(喜多流) 泉嘉夫(観世流) 野村又三郎(和島流) を観る会



当地の各流儀・流派・結社・社中の消息を辿る ⑩

竹尾 邦太郎

昭和四五年(一九七〇)一月二五日、表記の会が名古屋喜多流観賞会・蓮泉能友会・やるまい会の主催で五周年記念名古屋公演として行なわれる。五周年記念とあるが実は名古屋での初回、これについては第三回公演の番組に、当時、大阪芸大教授・文化財保護審議会専門委員で著名な能評家でもあつた北岸佑吉(一八七九—一九五二)が「立会能のみのり」の題で次の一文を寄せてをり、その間の事情が明かされよう。

異流の合同能というのは珍しい。観阿弥、世阿弥が能を大成させるまではむろんのこと、それからでも二座の立会能がしばしば行われていた。立会能は単なる合同能ではなく、赤の勝負であつた。喜多流の和島氏と観世流の泉氏とが合同能をはじめたのは地元の大坂が昭和二十一年からで、勢力範囲をのぼした名古屋が昭和四十

五年からだつたかと覚えている。それには昔の立会能のような真剣な芸道精進の熱意がこめられているのが当然のことながら、また相携えて能楽のたのしさを演者みづか

合同能の案内

36298)▷藤田六郎兵衛事務所(052・5771・5763) 加賀藩前田家伝来 尾山神社の能面Ⅱ 金沢能楽美術館特別展 金沢能楽美術館では、7月18日から10月12日まで、加賀藩前田家伝来の「尾山神社の能面Ⅱ」の特別展を前・後期2回に分けて開催する。主催は金沢能楽美術館「金沢芸術創造財団」、特別協力ノ尾山神社 展示会・前期:7月18日(土)〜8月30日(日)▷後期:9月5日(土)〜10月12日(月・祝)午前10時〜午後6時。 観覧料 一般・大学生300

円、65歳以上200円、高校生以下無料、団体(20名以上)250円。 ▷8月8日(土)能「小管」「阿漕」狂言「成り」解説 ▷9月5日(土)能「通小町」「馬塚」狂言「魚説法」解説 ▷8月15日(土)と9月19日(土)「加賀・能楽の伝承文芸」金沢能楽美術館「金沢市広坂1-2-26電話076・220・2790、FAX076・220・2791。 訂正」本紙6月号「寺清流・柳原團司氏逝去の記事で告別式7月3日とあるのは、6月3日の誤りでした。お詫びして訂正します。

暑中御見舞 申し上げます

笙月会 中川雅章 〒505 岐阜市長浜市地蔵寺町八ノ二九 電話0757406330番

賀水会 桑名賀水会 名鉄百貨店友の会 加賀敏彦 〒463 岐阜市守山区森孝二丁目七〇九 電話0577711844番

松盛会 小松勝憲 松舞台 〒511 三重県桑名市西別所一〇六一の五 TEL・FAX0594234582

洗心会 奥村富久子 〒606 京都市左京区水観音西町一〇 電話0757721076番

観修会 祖父江修一 〒507 岐阜多治見市日ノ出町2の2 電話0577232355番

猶恵会 熊沢恵美子 〒466 名古屋市中東区平和ヶ丘3-76

幸誦会 近藤幸江 〒444 212 岡崎市鴨田本町十一番地ノ三 電話(0564)425529

千早会 八神孝充 〒464 名古屋市中種区郷渡町3-60-11 201 電話(052)7621210番

恵誦会 二村徑布 〒445 西尾市住吉町三十一一二 電話0563572594番

桜月会 加藤春枝 〒509 岐阜市見市鼻ヶ丘3-1-113 電話(0574)641306番

宝生和英 〒170 0002 東京都豊島区巢鴨五十二三十八 電話0339151376番

近藤乾之助 〒463 岐阜市守山区森孝二丁目七〇九 電話0577711844番

名古屋屋異会 豊橋異会 辰巳満次郎 〒463 岐阜市守山区森孝二丁目七〇九 電話0577711844番

佐野由於 〒606 京都市左京区水観音西町一〇 電話0757721076番

倉本雅 〒608 神戸市東灘区田中町1-13-22 電話(078)4441546番

恵美寿会 〒616 11 京都市右京区鳴滝泉殿町一八三 TEL0754623248番 FAX0754626098番

衣斐正宜 衣斐正宜後援会 〒466 001 名古屋市中区御器所3-23-19 御器所パークマンション802号 電話(052)8821560番

宝生流 嘉宝会 〒466 001 名古屋市中区川名本町二ノ五一

司宝会 〒463 001 名古屋市中白区島田二丁目三〇一 島田無住宅十二三〇電話0525773732番

古川周子 〒463 001 名古屋市中種区西崎町三二六 電話05276211357番

金剛永謹 龍謹

廣田鑑賞会 廣田陸一 廣田幸稔

菊之会 菊扇会 廣田泰三 廣田泰能

豊嶋能の会 豊春会 豊嶋三千春

松野恭憲能の会 松野恭憲

宇高通成 徳竜成成

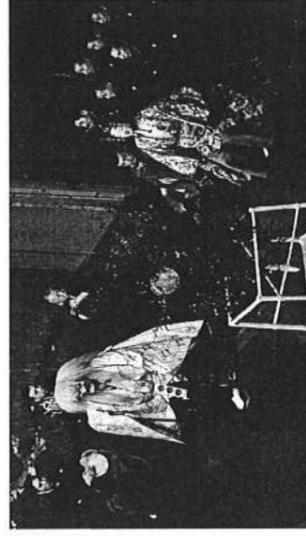
金剛流 岐阜周星会 古川周子 〒463 001 名古屋市中種区西崎町三二六 電話05276211357番

◆初夏の舞台から◆
「名古屋梅猶会」と「第五一回 鳳の会」
「金剛定期能」
「野村又三郎信廣三回忌追善 第五二回やるまい会」
および「名古屋能楽堂六月特別公演」

竹尾邦太郎

「田村」 旅僧(ワキ雅介) 桜花爛漫の都、清水寺に着くと、境内は地主権現の秘を自贖する屋敷の重子(シテ勝意)に出会う。自贖するには誰が少々元気ないが、ワキとの問答からわかれて清水寺の縁起を語るところは自慢も仄々ある。ワキが話柄を辺りの名所へ転じ、所謂シテの名所教えも傳するところは月下

の地主の秘の自慢。問答から掛合となれば、痴れるような春宵を共有するシテ・ワキ連片が良く、へ今この時かや、と互いに歩み寄り、シテがワキの肩に手をやるところには親愛の情が。クセは、へ天も花に酔へりや、と頭を取り拍子踏むところに気持ちをはみせる。地(善高・和男・光之助ら)との掛合にシテが善哉問われるロンギ



昭和47年1月23日「綾鼓」

左より和島富太郎、高安滋郎、内田安信、高辻幸一氏(撮影)

「東北」泉成佳(高砂)三島憲、能(清経)替之型(泉嘉夫・近藤幸江(ツレ)西村欽也、主後見大橋秀夫、地頭中森晶三、囃子方藤田六郎兵衛、田鍋惣太郎、寛敏一、狂言「三人片輪」野村又三郎(座)佐藤卯三郎(座頭)井上礼之助(座)井上松次郎、仕舞(喜多)「田村」松井彬「玉之段」権津忠

③面よりつづき) 二二) 生れ。二世又三郎三男。大正二四年、「あかり」にて初舞台、昭和三年「釣狐」、昭和四年「花子」を抜く。新作狂言として「檀山節孝」「唾の一声」など。又海外公演として昭和三年パリ国際演劇祭、昭和四〇年ペルリン芸術祭、ベネチア・ビエンナーレ、昭和四二年ニューヨーク東西演劇シンポジウム、昭和四三年アメリカへ野村狂言団として参

加、等の経歴がある。昭和四二年、重要無形文化財指定。和島富太郎 大正三年(一九一四)生れ。昭和二年喜多美に師事、昭和三年東京にて初舞台。昭和四年「道成寺」を初演。昭和三六年「景清」上演で大阪市民芸術賞受賞。昭和四〇年「望月」上演で大阪府民芸術奨励賞受賞。昭和四〇年に重要無形文化財保持者に認定された。大阪、名古屋、東京その他の都市で、能の普及発展に尽力している。豪放な演技は以前から定評がある。

は、へ覚束無くも、とワキへアシラヒ、へ我が行く方を、と居立ち、へ地主権現の、で直ッて立つと、へ月のむら戸を、と扇で戸を開ける型から扇置みつ、地一杯に橋懸へ入り、送り笛(鼓)で退いて行くところ、臆の雰囲気があり、前場は劇に担理と起伏なく運んだ印象。門前ノ者(アと高義)が居語にかなり長尺の清水寺の縁起を口跡爽やかに明快に語り上々。後場は清水寺を建立した坂上田村麿ノ霊(後シテ勝意)が東夷を平定したあとの後日談。面平太、黒垂・梨子打鳥帽子・襟淺黄・赤黄段置板着付・朝貫地金巻甲に裾巻文半切・紺地ベタ金法被肩脱ぎ・太刀の姿。

弘「高頭」長田驍(仕舞(観世)「舍利」殿島修二、独吟(喜多)「琴之段」二井栄逸、能「船弁藤・真之伝・波間之拍子」和島富太郎・泉真彦(子方)高安滋郎・勝久・飯富雅介・野村又三郎(アと・早義彦)、主後見長田驍、地頭大島久見、囃子方藤田昭彦、田鍋惣一郎、河村総一郎。第二回は昭和四六年一月二四日、今回から「観る会」が「合同会」となる。番組には如何にも能の啓蒙普及も目指す結社らしく、上演曲「天鼓」に取材して能の特質の一端を解明しようとする次の文章「王伯は鼓を仲々打ちにゆかない」を同人連名で記す。

能が一般のリアリズム演劇と異なる大きな特徴の一つは、後者が「事件の劇的進行」によって構成されているのに対し、前者では「人間の或る状態」を表現することによって成り立っているといえます。例を天鼓にとつてみると、この能に於いては事件の経過はワキの独り語りによって簡潔に処理され、これに対し王伯の悲歎——即ち「人間の或る状態」——が一般演劇とは比較にならない程内容

的、時間的に充分に表現され、これが前半部の主題となつてをります。この間むしろ劇的進行は停止し、専ら心情を表現することに精力が傾けられます。かくして最後に漸く鼓を打つ——即ち劇的進行が行なわれる——という行動がとられるのであります。このような構成によつて観る会の子に對する深い絆を、観る人の心に充分に蓄積させ、それが圧縮され飽和状態となつた頃に、鼓を唯一打つて、観客の精神的重圧感を解きほぐします。こうして素に人間そのものを象徴的にえがこうとしてをります。能には、殆どすべてのものに以上のような表現法がとられているといえましょう。このような能的表現の奥深い素晴らしさに私共は大きな共鳴と、尊敬をもつて努力を重ねている次第であります。

番組は能「天鼓」と和島富太郎、西村欽也、井上松次郎、主後見長田驍、地頭喜多長世、囃子方藤田昭彦、福井啓次郎、河村総一郎、助川龍夫、仕舞(観世)「山姥」近藤幸江「采女」泉泰孝「嵐山」

山中義滋、独吟(喜多)「隅田川」二井栄逸、仕舞(喜多)「雲林院」長田驍「八島」梅津忠弘、狂言「鞠猿」野村又三郎、井上礼之助(太郎冠者)野村万作(猿曳)野村武司(猿)、能「葛城」泉嘉夫・高安滋郎・勝久・飯富雅介・佐藤卯三郎、主後見殿島修二、地頭大橋文藏、囃子方富三男、田鍋惣一郎、寛敏一、鬼頭善太郎。第三回は昭和四七年一月二三日。番組は仕舞(観世)「老松」殿島修二「草子洗小町」近藤幸江、能「求塚」泉嘉夫・泉泰孝、三島憲、西村欽也、井上松次郎、主後見大橋秀夫、地頭観世静夫、囃子方富三男、福井啓次郎、寛敏一、三島太郎、仕舞(喜多)「嵐山」栗谷能夫「坂下傳」権津哲生「飛坂」長田驍、狂言「純太郎」野村又三郎、井上礼之助、佐藤友彦、仕舞(観世)「世之段」大橋秀夫「玉之段」観世静夫、能「綾鼓」和島富太郎、内田安信、高安滋郎、野村又三郎、主後見長田驍、地頭栗谷新太郎、囃子方藤田六郎兵衛、福井啓次郎、河村総一郎、三島太郎。なお求塚の前に前大阪大学総長、岡田実の講演「今後の能の在り方について」がある。

暑

中

御

伺

喜多流
和谷 栄太朗
 〒515-0073 松原市殿町一四二二三
 電話(会実)〇三三〇二番

喜多流
和谷 衡市
 〒516-0007 伊勢市中島二丁目26-12
 電話(会実)〇一五九番

長田驍後援会
 〒514-2211 津市高野屋町三三五一四六
 電話(〇五九二)〇六九七番

伊勢金春会
宇仁田吉邦
 〒516-0006 伊勢市八日市場町5-16
 電話(〇五九六)〇五二九八

本田 光洋
 〒104-0001 東京都中野区上高田二ノ五ノ二
 電話(〇三三三八)〇二六四二番

シテ方金春流宗家
金 春 安 明
 〒107-0052 東京都杉並区南荻窪三丁目17-16
 電話(〇三三三三)二二五七二番

藤田舞台
藤田六郎兵衛
 〒401-0041 名古屋西区幡下2-10-9
 TEL&FAX 〇五二五七二二三四一

清水利宣

宝 生 欣 哉

橋 本 正 樹

西村同門会
飯 富 雅 介

高 安 勝 久

福 王 茂 十 郎
知 和 幸 郎
登 幸 郎



鳳の会「二文酒」

左より今枝郁雄、佐藤融



鳳の会「武悪」

左より佐藤融、今枝靖雄

(撮影・杉浦賢次氏)

舞台へ入ると返シ句に常座、ワキにアシラヒ、再びの問答に自庵で一夜をと勤める。シテは誰も詞も選じも相愛らず美しく気持ちか籠り茶嗜らしいが、残念ながら加齢からくる身体変化(か)は如何ともし難く、背が曲り、すつきりと優美な杜若のイメージに遠く、物着で初冠(巻櫻・老戀)に小葉を翳シ、長絹・腰巻の装いとなって日藤ノ糸を結び、飾り太刀を佩いた業平を形容する美々しい出で立ちも痛々しい。

小書「恋之舞」は杜若ノ精の舞に重きを置き、シテアセイへ別れ来し、以下、伊勢物語の業平身辺の逸事を述べるクリ・サシ・クセを省くが、この度はイロエだけを抜き省かなかつた。クセは上ア端あと、へ三河の国に着きしかば、と一ノ松へ抜け、沢辺に匂う杜若を匂下下に眺め、へ(三河)水の底ひ無く契りし人の数々に、と踏む教拍子の暗合は、へ名をかへ品をかへて、と袖返スのも。更に二ノ松へ行き、飛ぶ虫がへ雲の上まで、と雲ノ層に可視化するのも面白い。舞台へ戻ると舞はいわゆる恋之舞、舞の途次一ノ松へ抜けると扇を左手に替え、匂下へ静かに寄つて右袖被く沁々水鏡を眺めること暫時、そこに業平の面影を見る心である。たゞクセにも二ノ松で型があり、重複するきらい、小書の趣め通りで良かったのでは。キリに、花も悟りのへ心開けて、と大きく両袖をパッと振ねるところは如何にも成佛成就に思えた。(1時間14分・4月25日・

名古屋権鑑会)

「二文酒」 世渡りも儘ならぬ然、太郎(シテ融)が存み助なら業君(アド郁雄)も劣らぬ酒好き、ならば好きな飲み屋商売をと美に安易な楽天的思考回路。多分、仕入れた酒はツケ、酒樽に見立てた壺桶と「煎物」の荷茶屋に似る小道具を前後に荷棒で担ぎ、店を出すか客は来ない。折角手元に有る酒、飲みたいシテだが口開けの商いに拘泥るアド。俗に無い袖は振れないと言つて、振つてみたらシテの袖には二文の銭が。これで飲ませろ、とアドに渡せば此れが口開の商い。自分ばかりでは、と今後はその二文を受取りアドにも飲ますシテ。莞爾として笑む同人(写真真)だが商いとは言い余、二文の銭が夫婦交互に渡るだけでメートルが上がる一方。酒興の小舞「瓢箪」や「七ツ子」が盲く雰囲気は上々。ただキリの歌謡へ二人の為にお酒はあるの、は失張り蛇足、見所に阿るようで嫌だが新作の宿命?(25分)

因みに二文銭は寛永一三年から万延一年(一六三六―一八六〇)にかけて鑄造された寛永通宝一枚、明治維新直後は一厘に通用したという。なお、明和(一七六四)前後は上酒一合二文、下酒一合八文、と三谷一馬者「江戸商売図説」にある。

「お用の尼」 読経三味の独身の僧(シテ友彦)の許を訪ね、番袋から種々の品を取り出し商いに掛かるお用の尼(アド靖造)、「こ、によい物がござる。お神酒でござるぞ」と別に瓢箪から酒を勤めれば、「般若湯の味こそ身に沁み

ます」と僧。酔われ雑談の末、若後家を紹介するとの甘言にまんまと乗せられる。煩惱即菩提、なると勝手な理屈をつけ呪言となれば、「いざ先づ目出度う盃事をしませう」と。この辺り「因幡屋」に酷似。

羞じらう若後家が袂衣の下から大義四杯目をせがむのに呆れ、袂衣を誂がせば若後家に成り済ましたお用の尼。「今こそ煩惱の恐ろしさを知つたぞ」と驚き「許せ許せ」と逃げる僧に「腹立ちや(どちらか)と追う尼。僧と尼といえは、布施の金銭に執着する「泣厄」は早しいだけだが、こちらは僧を好色漢と糾弾する以前に、孤獨を叩つ尼の飯腰に寝る異端者が露骨、演者の力演は買うが味は悪い。(36分)

「二文酒」 大小酒」と共に佐藤友彦の新作。以前、何度か上演するが今回は自身の舞台生活六〇年を記念する。

「武悪」 怒気を含んだ声で呼び出され、何事ならんと出る太郎冠者(靖雄)にも八つ当たりの主(友彦)の言いつけは、無事公者の武悪(シテ融)を討つてこの命令。朋輩のよしみで何とか執り成し、思い止まらそうにも主の憤怒は治まりそうもなく、主の勘気に触れてとはつちりも喰いかねず戸惑う太郎冠者、緊迫感ある冒頭のこの場が惹きつける。主の太刀を持ち意に染まぬま、武悪の許へと太郎冠者。が、相手は名づつての剛の者、騙し討ちの目算など露知らぬ武悪に機嫌よく迎えられ、ば狂う目算。謀られたと知る武悪は信する朋輩の仕打ちを恨み、腹を括り深く斬られんとする。「余り不憫さについ助け」と武悪に申し訳をする太郎冠者、気弱な一面が巧まず出て靖雄上々。命拾いのお礼参りにと武

悪、嘘と知らず討たれた武悪を憐れみ後申う為にと主、共に行き着く先は清水観音。途中、鳥辺野(平安時代の火葬場)辺で主に見岩められる武悪。泡食つた太郎冠者の懸命な執り成しで幽霊となり主の眼前に現われる武悪、痲痺は強いが怖がりの主の弱みを握れば、これ迄の鬱憤晴らしとはかり冥土の大敵様のお望み、と亡父を養う主から様々な物品を取り上げ(写真)、拳句は主をお連れ申せとて引つ立てん勢いに、逃げ出す主。「それは御尊法でござる」と追う武悪ノ幽霊、少々悪厄山嵐が過ぎると思わせる程の友彦、親の親子息の合った熱演だった。(49分・5月10日・佐藤友彦舞台生活六〇年記念公演、第51回鳳の会)

「竹生島・女体」 大小前、一鳳台上宮の作物。君に暇を願ひ、従臣(ワキツレ浩史・正彦)を伴い念願の竹生島詣に向かう臣下(ワキ茂十郎)、逸る気持ちは力強い次第の三週返シや急くような道行に。着詞から湖上に船舟を認め便船を請う一行、「女体」の小書を舟は出さず、シテとツレが逆になる。海女(シテ水護、面埋女・橋白赤・露芝文白摺着付・(赤地文台枝重桜文唐織)、漁翁(ツレ龍護、面三光尉・機浅黄・紺無地敷斗目・集茶水衣)。初回は湖の上、以下のやわらかく纏やかな話の風趣は如何にも哀閑にひらけた眺望の春景色。舟を下り、シテの上陸を女人禁制ではと咎められたに、「それは知らぬ人の言葉にて候」と抗弁の漁翁。このワキ・ツレ問答、自信に満ちた尉物に龍護の成長をみる。弁財天は女体の神、神徳あらたかな天女となつて示現し女人を差別しない、とシテの言葉を代弁する地謡からクセの中、へ利生更に怠らず、とワキにアシラヒ、へげにげにかほど疑ひも、と上ア端で直り立つとへ我は人間に非ずとて、ワキにアシラフとへ社壇の扉を、と扉で開ける型からツレの横、雀近くを通り宮の後ろから中へ、へ翁も水中に、とツレも奪へ入る。

狂言草序(市和尚靖・大・光長)となつて能力頭巾・機浅黄・

紺無地敷斗目・括袴・浅黄縁水衣のアヒ(耕運)が「斯様に候者は天女に仕へ申す者にて候」と登場、竹生島の調れ立シヤベリに伝来の宝物を紹介する。その後、秘伝の小舞「岩飛」とを舞い、へ岩底にずんぶと入りけり、とずぶ濡れに「クツサメ」と囁留メてそのまゝ、霧に入ると後場。

出端の囃子でへ山の端出づる、と引廻し取ると、面同前・黒垂・白蛇ノ天冠・緋大口・白地業替辰シ文舞衣重折の優美端麗な後シテ弁財天が床几に居る。へ弁財天とは我が事なり、と名乗り、へその時虚空に音楽聞え、の地の返シに宮を出ると選擇掛の「楽」、足拍子の多い舞は欣喜奮躍といった印象。袖披キ、袖返シ、袖巻上げ、など袖の動き美しく、麗抜い手踊麗に大きな舞は如何にも舞金剛の面目。ワキ正、袖返シ兼へ招キ、地前、床几に掛かると、早笛でツレ龍神へ湖上に出現して、と宝珠台を掲げ一ノ松、舞台へ入りワキに授けると腰から朱の打杖を抜き持ち養快な舞動。シテはへ元より衆生済度の誓ひ、の地の返シに床几立ち、地につれて舞い、へ又は下界の、とツレにアシラフとへ天女は宮中に、と正面から宮に入り、ツレは立つとへ波を蹴立て、と文字通り「乱し足」の蹴り上げる型を見せ、奪へ走り込むとシテは再び宮を出、へ天地に轟がる大蛇の形、と両袖高々巻上げて常座へ、袖振りほどき右ウケ留えた。親子饒演の美、大い上がり、ワキの牧場追らぬ風姿も亦舞台を締めた。(1時間28分)

「清水」 主と雇い人の太郎冠者に限らず、戦前は目上に威があり、怖く逆らなかつたもの。茶の湯の水を野中の清水へ汲みにやるにしても、何も「ガゴジ(鬼)が出る」という七つ下りでもなくともよさそうなものだが、言い出したら聞かない主(アド忠三郎)にささやかな謀叛を自論む太郎冠者(シテ良徳)。鬼が出たので桶を投げつけ逃げ帰ったと言えは、秘蔵の桶を、と執着するアドは太郎冠者の誓えはあつても桶の誓えは無いの論理。桶を探しに出掛けられては、と嘘を

(⑥面へつづく)

暑

中

御

伺

葵心庵舞台 尾張旭市東大塚町原田二四九三ノ二 若杉ビル(旭市役所南) 電話(〇五六一)五五〇③二三四六番 電話(〇五六一)五五〇④六九八番	亀井俊一 保忠雄 美雄	吐石会 河村総一郎 河村真之介 河村大 〒603 003 京都府北区紫野下相野町五九十一 電話(〇七五)四六二四四二五	大倉源次郎	飯島六之佐 〒920 一〇〇 金沢市香林坊2-1-8-17 電話(〇七六)二六二四四四〇	桂 後藤孝一 会 嘉津幸郎	幸友会 涛華能 福井四郎兵衛 福井良治 福井聡介
---	-------------------	---	-------	--	------------------	--------------------------------------

茂山千作 千五郎 七五三 千三郎	大蔵狂言会 大蔵彌太郎 千太郎 基誠	長生会 鬼頭義命 〒490 002 愛知県稲沢市平和町城西137 電話(〇五七)七〇一九六〇番	青耀会 上田悟 〒594 113 和泉市青葉台2-1-17-25 電話(〇七二)五(55)八五二一 名古屋 名古屋市中区栄5-1-6-1-4 稲場 栄能楽堂 電話(〇五二)二六二一八三三	呉竹会 传统文化(能楽)こども教室 寛 鋤 一	谷口正喜 〒602 0015 京都市上京区中立売通室町西入 室町スカイハイツツ610号 谷口有辞 〒520 0221 大津市緑町二四-1-10
---------------------------	-----------------------------	--	---	-------------------------------	---

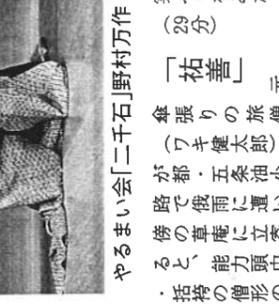


⑤面よりつづき
「三千石」 野村万作
「祐善」 元
傘張りの旅僧
(ワキ健太郎)
が都・五条油小路で俄雨に遭い傍の草庵に立寄り、能刀頭巾、拵袴の僧形の突ぶりをみた。(29分)

朔夜するのに大童のシテ。生来シテに具わる巧まざる稚気が出せながら、苦劫が生むツレの活殺自在の才気が素晴らしい。(22分・5月24日・金剛会例会・金剛能楽堂)

許しもなく穴動の太郎冠者(アド右近)を懲しめるつもりが京見物だつたと分かれば都の様子も知りたい主(シテ万作)、アドが都に流行するという論を披露すればシテの逆鱗に触れる。詠が解らず怪訝な表情のアド、シテは床几を下りて正先へ。太刀・扇を前に置くと「南無諸の大明神」と下居合巻、家伝巻の論を踏踏にしたことを詠び、アドに詠の仔細を語つた後で成敗すると凄しい見舞。「ずいっとこれに寄つて聞き居れ」とシテ、隣行して傍に寄るアド、緊迫感が。

昔、先祖が前九年後三年の役の折、陣中の酒宴に請われて祝言に詰つた「二千石」が戦勝の吉兆、八幡太郎義家から恩賞に与つた程の大事な詠、と仕方を交え語る(写真)うち自身も興奮するシテ。これをみだりに流行らせたは怪しからん。と太刀振りかぶれば双シラリのアドに「未練な者が」と泣く理由を問えば、そこは抜けないアド。泣きは、太刀持つ手許が昔、粗相をして大層様に尺八で打擲された時の手許に似、それが思い出され悲しいからと、亡父を慕う事をつこんのシテの弱みに付け込めばシテも憐れさに貰い泣き。更にアドの巧言にかまけて太刀はおろか持物まで与えてしまふ。拳向、子が親に似るは目出度い、と笑と留メに。名古屋では珍しい万作・右近の舞台。主と太郎冠者の、言葉の外にある気分、味わいが感じられる繰返の面者の充



「三千石」 野村万作
「祐善」 元
傘張りの旅僧
(ワキ健太郎)
が都・五条油小路で俄雨に遭い傍の草庵に立寄り、能刀頭巾、拵袴の僧形の突ぶりをみた。(29分)

男(シテ小三郎)が呼掛け、ワキと問答のうち一ノ松へ。ワキを見込み、草庵は祐善の宿り、我は祐善ノ亡霊、昔は我も傘張り、と明かし、月の夜、再び現われ事の顛末を語らん、と回向を願ひ下居合巻、立つと地(地頭・高巻)のうちへ軒端の竹のかさかさど、鳴る数の中、中入。

ワキが所ノ者(アと信明)を呼び出し祐善のことども尋ねると、傘張りが下手で傘をよそに求められることに狂気に至り死に、跡を祐善の宿りと呼ぶことなど、確り答える。小学校低学年の信明君、達者と言うよりは幼にして役者根性の立派。「懇に御教へ祝着に存じ候」とワキは正先へ、下居に教珠をつまぐり回向する。後シテ祐善ノ霊は先の能力頭巾を角頭巾に、拵袴を白綾着付・小格子脱ぎ下々に替へ、傘を担ぎ出る。ワキとの問答に回向を喜び、再度現われたと筆への姿勢を地との掛合に。へ御前に差し掛かり、とワキ前、傘を開き(写真)、畳むと大前へ。三ツ拍子踏みへ祐善が唐舞、と狂おしくカケリ。更に地で舞い継ぎ、地獄の底から回向によりへ南無阿彌尊の仄かに見えてぞ失せにける、と開いた傘の下に入り失せる心に詰留メ。

能がかりの舞狂言を好んだ先代又三郎の三回忌追善に嫡子・嫡孫



「三千石」 野村万作
「祐善」 元
傘張りの旅僧
(ワキ健太郎)
が都・五条油小路で俄雨に遭い傍の草庵に立寄り、能刀頭巾、拵袴の僧形の突ぶりをみた。(29分)

の手向ける「祐善」、泉下の先代、以て殿すべし。(29分)

「呂蓮」 所の大法で独り旅人には宿をしない宿主(アド万蔵)も僧(シテ萬)ゆえ通し、問答のうちに「さてもさても有難いお返しを受けてござる」と僧の生き方について感化され、出家したいと言いつつ、一時の気紛れを隠れ、家族の承諾の是非などを問ひ抑止にかゝるが、逸る宿主は女房も「はや成れと申してせがみます」と専断。真に受けた僧は、入念な手際で宿主の頭を二・三度水で洗い、剃刀を研ぐ型からジャリジャリと操音語の剃髪(写真)、状況描写が細にわたれば、法名を付ける段は、呂蓮坊と付けるに至る心理が大大かでお座なり、その対照が面白い。

食事を知らせる段になつて女房火の怒りは弁解も聞かばこそ。その目暮に責めを僧に擦り付けければ、「さては彼奴が刺りましたか」と矛先は僧に。「マイいそな



「三千石」 野村万作
「祐善」 元
傘張りの旅僧
(ワキ健太郎)
が都・五条油小路で俄雨に遭い傍の草庵に立寄り、能刀頭巾、拵袴の僧形の突ぶりをみた。(29分)

も腹欲を目に合はせをつた「南無三尊しないたり」と悔いても後の祭り、とはほとほと権鷹を退いて行く萬の背に思い万感。(30分)

「茸」 山中はいざ知らず、車が屋敷内に次々と生えてくる無気味に、山伏(シテ小三郎)を招き祈禱を頼む何某(アド高巻)。勿体ぶつた山伏が折れば折る程に押える種々な茸。敵が多勢なら、目立つために演技過剰にならざるを得ないのも必然か、と思わせる程に小三郎大奮闘。敵ある茸の中にも巨大な鬼茸(靖造)が憎々しければ、極く小さな姫茸(信明)が可憐。(16分・5月31日・野村又三郎三回忌追善・第52回やるまい会)

「道成寺・赤頭」 シテ清司、面近江女、襟白一・萌黄地金鱗着付・黒地紋尺綾着付、赤地御所



「三千石」 野村万作
「祐善」 元
傘張りの旅僧
(ワキ健太郎)
が都・五条油小路で俄雨に遭い傍の草庵に立寄り、能刀頭巾、拵袴の僧形の突ぶりをみた。(29分)

車枝葉綴文唐織重折。ワキ勝入角帽子・襟浅黄・白綾着付・白大口・紫水衣・小刀。

次第八作りし罪も消えぬべし、以下、道行の明晰な誰に、これから起り得ることの覚悟の程が。へ急ぐ心か、と權を取らないところにもあつたふたしない秘めた強い心が感じとれる。乱拍子は左廻りに七段で中ノ段、ワカを誦いつ、拍子踏み、正三直るとへ道成寺とは名付けたらや、と激しく拍子踏み急之舞へ。春風迅雷の舞三段、しなやかな女体は蛇体の変化、纏入は高く飛んで軽やかに吸い込まれた。鐘後見は遺意。

鐘が上がり始めると、とくろを巻く心に躊躇て居るのではなく、左手で鐘の縁を支え、鎌首を擡げる心か、斜に構えワキに挑みか、らんの恐ろしさ、初めて見る珍しい型である。白綾を腰に巻き、立つと鱗落を白地に巻いた蛇体は白般若・緋長袴・打杖(紐)。折りに三ノ松へ追い立てられる際、橋懸へ入る早々の鱗落シは身鞋になつた心に長袴を見事に捌き、打杖振りかぶり逆襲すれば、たちたちとなりて逃げるワキにシテ柱をきりきり巻いて威嚇する辺りの凄味も、へ折られ、と折られ、と折られてシテ。怨みの鐘をきくと脱むと執心を残し火連塵となつて日高川へ走り込むキリは舞内で飛び、ワキのユーケン留メ。

小鼓は柳原富司忠に役が付いていたが、残念なことに舞台一週間前、六二歳を二期に死去、弟子の船戸昭宏が宗家・幸義太郎の後見で立派に責を果した。泉下の師匠の胸中も慰まれる。(鐘出しから1時間57分・6月6日・名古屋能楽堂六月特別公演)

伺

御

中

暑

狂言やるまい会
野村小三郎
松田高義
野口隆行
奥津健太郎

鳳の会
林和利
井上菊次郎
佐藤友彦

狂言共同社
今井佐大
今井大佐
今井大佐
今井大佐

朝日カルチャーセンター
離子教室
小鼓 後藤孝一郎
丸栄スカイル10階

ウシマド写真工房
牛窓正勝
雅之

栄能楽舞台
名古屋市中区栄五十六
電話(二六二)一一八三番

お稽古用敷舞台
彰諷閣
濃徳先 豊中市緑丘五十五一四
山本博通
電話(〇六)六八四九一二五六
または 安城市三河安城東町一七十一
グレイシアスビル安城向
電話(〇五六六)七七一八三二

楽諷庵舞台
連絡先 名古屋市昭和三川名町一〇五
電話(八三二)三四九一五

能楽の友社
【おこわり】暑中広告の掲載にあたりましては、誌面の都合により順不同とさせて頂きましたので何卒ご理解賜わりますようお願い申し上げます。

NHK放送予定(平成21年8月～9月)

- 8月30日 NHK-FMラジオ能楽鑑賞(毎週日曜日7時15分～8時)
- 9月6日 能の音楽(5)SPの名演 解説 高桑いづみ
- 9月13日 楽謡「枯」観世流 梅若玄祥ほか
- 9月20日 楽謡「松虫」宝生流 朝倉俊樹ほか
- 9月27日 楽謡「雨月」観世流 片山九郎右衛門ほか
- 9月27日 楽謡「救生石」(再)宝生流 武田孝史ほか
- 8月26日 教育テレビ 茂山十之丞の狂言入門II(14時～14時30分)
- 8月26日 茂山十之丞の狂言入門II(15時～17時)
- 9月6日 一調一管「野守」花重蘭曲
- 9月24日 能(親世流)「三井寺」(岡山県のみ)9月7日 零時15分～2時15分)
- 9月29日 教育テレビ(14時～14時44分) 伝統の至芸:栗谷菊生(再放送9月27日23時30分)

演能カレンダ―

◆名古屋能楽堂◆

【8月】	【9月】	【10月】
23日(日) 第25回衣裳正直後援会能楽会 (有料) (無料)	6日(日) 名古屋能楽堂9月定期公演(番組①面) (有料) (無料)	10日(日) 京都市上京区烏丸通一条
29日(土) 名古屋青年会 (有料) (無料)	12日(出) 名古屋青年会 定式 (有料) (無料)	10月4日(日) 京都市上京区烏丸通一条
6日(日) 名古屋青年会 (有料) (無料)	13日(日) 名古屋青年会 秋季大会 (有料) (無料)	10月11日(日) 京都市上京区烏丸通一条
12日(出) 名古屋青年会 (有料) (無料)	21日(月・祝) 名古屋観世会定期公演(番組②面) (有料) (無料)	10月18日(日) 京都市上京区烏丸通一条
19日(日) 名古屋青年会 (有料) (無料)	22日(火・祝) 和泉流狂言大会(番組②面) (有料) (無料)	10月25日(日) 京都市上京区烏丸通一条
26日(日) 名古屋青年会 (有料) (無料)	23日(水・祝) 和泉流狂言大会(番組②面) (有料) (無料)	10月31日(日) 京都市上京区烏丸通一条

社友の音楽能行発

名古屋千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7998
FAX (052) 733-2837
振替口座 008000-6-36393

購読料 1年 1100円
1年 1800円
郵送の場合 1100円

能楽の友

観世九皇会百周年記念特別公演

能「道成寺」上演

10月3日 名古屋能楽堂

名古屋観世九皇会(親世喜之師主彦)は、観世九皇会百周年記念特別公演として、きたる10月3日(土)名古屋能楽堂で、能「道成寺」と能「狸々乱」、狂言「鐘の草」を上演する。

「道成寺」を所演する中所直夫(なかしよ のおお)氏は、1958年名古屋生まれ、東兵衛、名古屋の九皇会および縁皇会の定期公演をはじめ各地の演能に参加。豊明、中津川、岐阜に稽古場を開き、可児市でも活躍している。

能組は次のとおり。(番組②面)

能楽座 美濃加茂公演

能「隅田川」葵上上演

10月17日 美濃加茂市で

美濃加茂市では坪内逍遙生誕150周年を記念して、きたる10月17日(土)美濃加茂市文化会館で、「能楽座 美濃加茂公演」を開催する。

能楽座は平成18年度に第11回坪内逍遙大賞を受賞された観世来夫師が所属していた由緒がある。

能組は次のとおり。

能「隅田川」(シテ片山九郎右衛門、ワキ榎王茂十郎、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・曾和博朗、大鼓・山本孝)

狂言「柑子」(太郎冠者・野村万作)

能「葵上」空之祈(シテ大槻文蔵、ワキ榎王茂十郎、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・成田達志、大鼓・上野義雄、大鼓・三島元太郎)

午後2時開演。会場・美濃加茂市文化会館ホール(美濃加茂市島町2-1-5)27。入場料前売り、S席4500円、A席3000円(当日券5000円増)

舞臺子「高砂」(高橋歌一)

能「狸々乱」、双之舞(シテ観世喜之、ツレ観世喜正、ワキ高安勝)

狂言「鐘の音」(佐藤友彦、佐藤勉)

仕舞「白楽天」(弘田裕一)

「求塚」(駒瀬直也)「景清」(五木田三郎)

能「道成寺」赤頭(シテ中所直夫、ワキ森常好)

入場料②面公演案内。

問い合わせ 申込みは観世九皇会(T:01120・150・950フリースタイル)、名古屋能楽堂052・2331・0088、九皇会所属楽師。

九月能「敦盛」上演

9月5日 豊田能楽堂

豊田市能楽堂では、同能楽堂主催公演の「九月能」を九月五日(土)豊田市能楽堂で開催する。

番組は、朗読「平家物語巻第九」「敦盛最後」国井雅比古。

能(観世流)「敦盛」二段之舞、脇之語

前シテ・後シテ岡根祥人、ツレ野村昌司、岡屋祥人、北浪真裕、ワキ宝生閑、アイ井上靖浩

笛・竹市学、小鼓・船戸昭弘、大鼓・河村総一郎。午後二時開演。

入場料/全席指定(税込)正面席6000円、脇・中・正面席4000円。チケットの販売は、豊田市能楽堂(☎0565・35・8200)、チケットぴあ(☎0570・02・9999、Pコード395・429)

廣田鑑賞会能

10月4日 金剛能楽堂

金剛流「第13回広田鑑賞会能」は、10月4日(日)午後1時半から京都・金剛能楽堂(京都市上京区烏丸通一条

下ル)で開催される。

番組は、狂言「月見座頭」(善竹忠二郎、善竹隆平)

能「願」渡曲、思立之出(金剛勝久)

返(シテ藤田幸隆、ワキ高安勝)

久、間・善竹隆司、笛・杉市和、小鼓・久田舜二郎、大鼓・谷口有辞、太鼓・前川光範、地謡藤田泰能ほか。

料金 一般8000円、学生3000円、チケット取扱い/金剛能楽堂(☎075・441・7222) 広田鑑賞会(☎075・722・9123) 絵書店(☎075・231・1990) など。

小牧山新能

9月5日(土) 開催

小牧市、小牧市教育委員会、小牧山文化事業「小牧山新能」実行委員会主催による「小牧山新能」は、9月5日(土)小牧山足跡公園で行われる。

演能は午後5時45分火入れ式を挙行、午後6時開演、能(観世流)「壮若・恋之舞」(シテ梅田邦久、ワキ高安勝久)。

狂言(和泉流)「蚊相撲」(シテ井上靖浩 アド佐藤誠、佐藤友彦)

能(観世流)「安達原・息連之

演能案内

名古屋能楽堂9月定期公演

【初秋能】

9月6日(日) 2部制 名古屋能楽堂

第一部(午前10時開演)

仕舞 高砂 前田 登 地謡 廣島 芳尚 雅久
(金葉流) 加藤 英昭

能花 長月 橋本 幸 後藤 孝一郎 竹市 学
(喜多流)

出(シテ祖父江修一、ワキ飯富雅介、ワキツレ橋本幸、アイ・野村小三郎)、午後8時40分終了予定。

入場無料、なお開演前に、小牧市謡曲連盟や名古屋市立名東高校能楽研究部の出演などのセレモニーが予定されている。

問い合わせは、☎0568・76・1188。雨天の場合は小牧市市民会館。

新作能面展

第7回 名古屋博物館で

中部能面研究会(代表磯部孝雲氏)は、「第7回新作能面展」を8月26日から30日まで名古屋博物館3階ギャラリー第4室で開催する。「翁」(松垣雄)はじめ新作四十数点を一堂に出展。

入場無料。午前9時30分〜午後4時45分。最終日は午後4時まで。後援愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会

中部能面研究社事務局(名古屋市瑞穂区船原町4-16-10-12号、☎052・882・4310)。

能「鞍馬天狗」

高安 勝久 河村 真之介 加藤 洋輝
船戸 昭弘 大野 誠

後見 今泉 美和 吉 吉沢 旭 祖父江 修一
泉 薫夫 藤田 邦久 山田 幸 松山 幸 梅田 久 橋本 正邦

附祝言 (午後零時四十分頃終了予定)

能「紅葉狩」

第二部(午後二時開演)

能「紅葉狩」 伊藤 雅子 船戸 昭宏 大野 誠
(金剛流)

後見 梅田 邦久 地謡 黒田 孝寛 高橋 誠一 改
近藤 幸江 須部 人 黒田 孝 浦 充古 橋本 正邦

武田 大志 加賀 敏彦

田中 春奈 加藤 小おる
地謡 大川 磨美 熊谷 真知子

能「鉄輪」

附祝言 (午後四時四十分頃終了予定)

主催 名古屋市文化振興事業団
能楽協会名古屋支部

指定席 前売券 四〇〇〇円
自由席 前売券 三〇〇〇円
(当日券 五〇〇円増)

前売券取扱い 名古屋能楽堂(T:052・2331・0088)
アレイガイド(採アブレチケ92・231・0088)
チケットぴあ(T:0570・02・9999)
ナティアパークPG(T:052・265・2015)

後見 平塚 昭子 加藤 誠子 地謡 福田 勝彦 藤田 英毅 一領 小出 啓市
加藤 謙 藤田 勝彦 藤田 英毅 一領 小出 啓市
後見 今枝 靖雄

能「鐘の音」

第一部(午前10時開演)

能「鐘の音」 大郎冠者 野村小三郎 主人 藤波 徹
(和泉流)

後見 伴野 俊彦

王井 健祐 河村 真之介 奥頭 義命
地謡 杉江 元 後藤 嘉津 幸 鹿取 希世
橋本 高義

青陽会定式能 (第353回期)

九月十二日(土) 十二時半開演
名古屋能楽堂

能班	八神孝充 高安勝久 橋本幸 井上靖浩 梅田邦久 久田三津子	船戸昭弘 須部浦清 大志江一 武田邦弘	鹿取希世 今沢美和 美和江子
仕舞	富士太鼓	久田三津子	地謡 前野路子
狂言	膏葉煉	鹿島俊裕 後見 佐藤友彦	今枝郁雄
能	紅葉狩	杉江元正 橋本幸 井上靖浩	河村真之介 後藤藤幸 加藤洋輝
仕舞	清經	武田大志 加賀敏彦 清沢一政	須部浦清 古橋正邦 祖父江修一
通小町	三輪	梅田邦久	祖父江修一
附祝言	主権 青陽会	久田三津子 久田勤 高橋一	武田大志 武田邦弘

前売券 二、五〇〇円 当日券 三、〇〇〇円 学生 一、〇〇〇円
 入場券はチケットひあ及び各出演者宅
 電話〇五七〇一〇二一九九九(Pコート七八六・一一九)
 お問い合わせ
 名古屋市中区一丁目三番の二
 久田勤 鶴方
 電話〇五二一七〇五・一五八五

名古屋幽花会秋季大会

九月十三日(日) 午前十時開演
名古屋能楽堂

番外仕舞	杜若	若きり 片山慶次郎
善詠	玄象	比江崎孝子 石黒直子
菊慈童	長瀬弘子	野村満子
芦刈	辻子鶴子 長崎敏明	増田育三
仕舞	小胡蝶	相澤早苗 塩きり 徳岡孝二

舞臺子	狸々	神谷映里 河村真之介 前川信太郎
西行桜	村木瑛子	河村真之介 前川信太郎
連吟	素讀 賀茂	高神野敏光 清田典且 山田喜藏
仕舞	春栄	片山慶佑 片山紫乃
素讀	求塚	木村厚 宮崎晃吉 岡本耕蔵
能	小督	原大 河村真之介 曾和正博
善詠	通小町	宮崎晃吉 東山清和 石川輝夫
舞臺子	羽法師	比江崎孝子 河村真之介 前川信太郎
鉄輪	松久祐子	河村真之介 前川信太郎
連吟	龍田	山邑英之 西野宏宏 浅井兼治郎
舞臺子	雲雀山	懸英子 河村真之介 前川信太郎
花筐	石黒享子	河村真之介 前川信太郎
仕舞	高野物狂	藤原美哉子 中島佳子
籠太鼓	小田和季	小田和季
番外仕舞	山姥	片山伸吾
附祝言	主権 名古屋幽花会	片山慶次郎 片山伸吾

〔御来場歓迎〕
 名古屋能楽堂
 九月二十一日(祝) 十二時半開演
 名古屋能楽堂

名古屋観世会定例公演能

九月二十一日(祝) 十二時半開演
名古屋能楽堂

能	半菰	武田邦弘 高安勝久 船戸昭弘 大野誠
仕舞	清経	前野郁子 近藤幸江
狂言	禁野	大名 松田高義 通りの者 野村小三郎 後見 伴野俊彦
善詠	玄象	比江崎孝子 石黒直子
菊慈童	長瀬弘子	野村満子
芦刈	辻子鶴子 長崎敏明	増田育三
仕舞	小胡蝶	相澤早苗 塩きり 徳岡孝二

仕舞	歌占	上田貴弘	地謡 祖父江一政
能	邯鄲	高安勝久 河村真之介 後藤藤幸 杉江元正 橋本幸	加藤洋輝 竹市学
附祝言	主権 名古屋観世会	梅田邦久 梅田幸 加藤洋輝 敏彦 久田三津子 後藤藤幸	武田邦弘 武田大志 祖父江修一

和泉流狂言大会

(初日) 九月二十二日(火・休日)
 (二日目) 九月二十三日(水・休日)
 名古屋能楽堂

狂言組	萩大名	大 名 藤秀夫 本 屋 者 (高三) 今枝郁雄
仙師	スッパ	田舎者 木村由美子 田舎者 佐藤 融
謀生種	主人	市川光子
魚說法	新発 兼 勝	(小三) 寺田勝哉 (中三) 米倉 宏真
柑子	太郎冠者	市川 正雄 主人 市川 達雄
口真似	太郎冠者	(小三) 米倉 光希 主人 佐藤 融
樋の酒	太郎冠者	高橋 芳子 主人 小野 豊子
小舞	七ツ子	(中二) 小川 千明 (高二) 中島 知亮
鐘の音	石塚 恵子	
痺	太郎冠者	(小四) 兵藤 朝哉 主人 井上 靖浩
寝音曲	太郎冠者	佐藤 融
薩摩守	新発 兼 勝	(小五) 大内 啓輝 茶 屋 者 (中三) 米倉 宏真

能	狸々乱	高安勝久 河村真之介 後藤藤幸 杉江元正	河村真之介 前川信太郎 藤田六郎 兵衛治
---	-----	-------------------------------	-------------------------------

仕舞	蝸牛	山伏 大橋 則夫 主人 冠者 今市川 郁雄
咲嘩	太郎冠者	三各 島子 見請 井上 靖浩

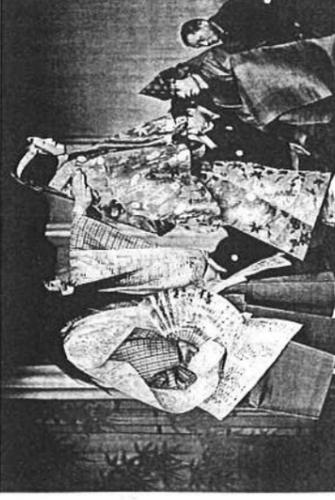
(二日目) 九月二十三日正午開演

能	鶏聾	太郎冠者 (中二) 坂田 朔 兼 勝 (高二) 中島 知亮 兼 勝 (小五) 長田 奏 兼 勝 (中二) 小川 千明	兼 勝 (中二) 坂田 朔 兼 勝 (高二) 中島 知亮 兼 勝 (小五) 長田 奏 兼 勝 (中二) 小川 千明
附子	太郎冠者	(中二) 尾崎 玄志 主人 今枝 郁雄	尾崎 玄志 今枝 郁雄
水汲	新発 兼 勝	古井 秀彦	古井 秀彦
柑子	太郎冠者	井上 靖浩 主人 井上 靖浩	井上 靖浩 井上 靖浩
舟渡	兼 勝	金子 登江 女 頭 足立 米子	金子 登江 足立 米子
鈍根草	太郎冠者	高木 美枝子 主人 牧 玉美子	高木 美枝子 牧 玉美子
盆山	阿茶 兼 勝	(小五) 長田 奏 (中二) 坂田 朔	長田 奏 坂田 朔
宗八	有徳 兼 勝	二石 生 主人 岸田 明子	二石 生 岸田 明子
仙師	スッパ	田舎者 (高三) 井上 弾 田舎者 井上 弾	井上 弾 井上 弾
文荷	太郎冠者	太田 徳子 主人 寺西 慶子	太田 徳子 寺西 慶子
犬山伏	山伏 兼 勝	増田 正幸 主人 今枝 郁雄	増田 正幸 今枝 郁雄

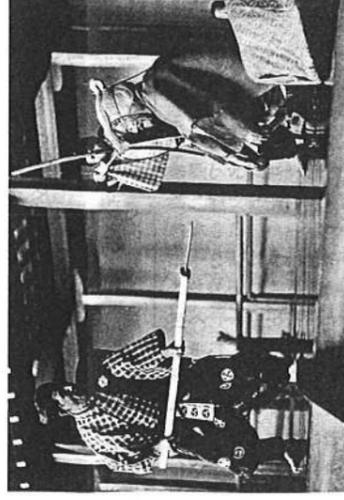
名古屋観世九阜会特別公演

十月三日(土) 午後一時開演
名古屋能楽堂

能	番組	舞臺子 高砂 シテ 観世喜正 シテ 観世喜正 舞臺子 高砂	高橋 暎一 河村 総一郎 福井 四郎 兵衛 竹市 学
---	----	--	-------------------------------------



合同会第4回「通小町」
左より和島富太郎、松井彬、西村欽也
(撮影・高辻幸一)



合同会第4回「国栖・天地之声」
左より井上礼之助、佐藤友彦、泉嘉夫
(撮影・高辻幸一)

当地の各流儀・流派・結社・ 社中の消息を辿る

竹尾 邦太郎

一 「和島富太郎(喜多流野村又三郎(和泉流)泉嘉夫(観世流)合同会)」

承前

第四回は昭和四十八年一月二八日。番組は観世流仕舞三番「難波」山中義滋「羽衣」殿島修二「屋島」三島憲・地頭泉嘉夫・能「通小町」和島富太郎・松井彬、西村欽也、主後島長田麟・地頭大島政允・囃子方寛三男・榎井隆次郎・河村総一郎、狂言「止動方角」野村又三郎・井上松次郎(主)佐藤卯三郎(伯父)井上礼之助(馬)、独吟「隅田川」二井栄逸、喜多流仕舞三番「敦盛」梅津忠弘「玉之段」大島政允「谷行」長田麟、共地、能「国栖・天地之声」泉嘉夫、近藤幸江(祝)泉嘉孝(天女)輪島元英(子方)高安滋郎、勝久、飯富雅介、井上礼之助、佐藤友彦、主後島大槻秀夫、地頭大槻文蔵、囃子方藤田六郎兵衛、後藤孝一郎、河村総一郎、鬼頭章太郎。

一月の第四、日曜日の定例「和

島・野村、泉 合同会」が昭和四十九年一月二七日、五周年の記念公演を迎え、東京から観世浄夫、喜多長世、小鼓方幸清流宗幸、幸円次郎が来演する。番組は舞囃子「養老」観世浄夫、能「景清」和島富太郎、松井彬(八丸)西村欽也、高安隆久(トモ)主後島長田麟、地頭喜多長世、囃子方藤田六郎兵衛、幸円次郎、河村総一郎、狂言「釣狐」野村又三郎、井上礼之助、後島井上松次郎、佐藤卯三郎、喜多流仕舞三番「月宮殿」梅津忠弘「養老」大島政允「山姥」大槻秀夫、喜多流仕舞「富士大鼓」喜多長世、能「熊野・村雨留」墨継之伝、泉嘉夫、近藤幸江(ツレ)高安滋郎、飯富雅介、主後島大槻秀夫、地頭観世浄夫、囃子方寛三男、幸円次郎、寛三。因に狂言「釣狐」は真伝大賀野村又三郎は一九歳で抜き、今回が七度目。

第六回は昭和五〇年一月二六日、会名が「和島富太郎(喜多流)泉嘉夫(観世流)合同会」となり、野村又三郎の名が抜け、出

演はするが主催からも外れた様である。番組は観世流仕舞四番「難波」三島憲「清経」殿島修二(二人勢)近藤幸江「放生川」泉嘉孝・地頭泉嘉夫、能「弱法師」和島富太郎、西村欽也、佐藤友彦、主後島長田麟、地頭香川清嗣、狂言「伯母之酒」野村又三郎、井上礼之助、喜多流仕舞三番「笠之段」谷大作「狂之段」香川清嗣「玉之段」長田麟、能「杜若・恋之舞」泉嘉夫、高安滋郎、主後島大槻文蔵、地頭泉嘉孝、囃子方藤田明彦、柳原富司忠、河村総一郎、前川雪(金春流大鼓方、京都から来演)

さて、いわゆる立合能を標榜して六年目に入った此の合同会も終焉を迎える事になる。事情は多々あるが、戦後二〇年にして各地能楽界が活況を呈するようになってきたこと、合同会を継げてきた各人がそれぞれ主幸する社中の会を有してをり、定例の日時での開催が難しくなってきたこと、立合能の意義を世に問う初期の目的が果たされ、一応の成果をみての発展的解消、などが考えられる。因に当時の三人の活動は次の通り。

和島富太郎 昭和三四年四月一日、主幸する「和調会」と二井間合同会とで春季大会を催し、翌年も六月一三日、夏季大会を主催。以後は「和調会」単独で昭和三十六年から六月を定例会の月とし

て昭和五〇年まで(三九、四〇、四八、四九年は休会)催会。「和調会」社中の特色は当地日本舞踊・西川流で著名な名取の西川司津・西川司女、西川長寿らが在籍していたこと。中でも西川司津はトメに能一番を握る番組一〇のうち九曲のシテを勤め異彩を放つ。昭和三四年の「遅々」以下年度順に「羽衣」「巴」「船弁慶」「竹生島」「土蜘蛛」「紅葉狩」「小袖曾我」「小鍛冶・白頭」である。なお「和楽会」と同時期、昭和三年五月三日には「喜多流観賞会」が発足、三十七年四月二八日には五周年記念能を催し、毎年、東京から喜多流宗家始め一門の重鎮が来演、和島富太郎も「小鍛冶・白頭」「石橋」「半瓶」「紅葉狩」「巴」と毎回能一番を勤める。

野村又三郎 昭和三五年五月二〇日「やまの会」を、三年後の四月一八日には併行して社中の会を発足させる。和泉流唄分の外に観世流師範の資格で「信誼会」の名のもと語る教授するので社中発表会は屢々「也留舞会・信誼会」であったり、どちらかの名を使うたりに一定しなかったが、近年は

◆仲夏の舞台から◆

「第三四回 能にしたしむ会」名 古屋観世会「第三回 若鯨能」名 古屋宝生会定式能」

竹尾邦太郎

「道成寺・赤頭」金色角帽子・襟浅黄、白綾着付、白大口、紫水衣に威儀を正した住僧(ワキ次郎)が再興した鐘の供養のこと重々しく宣言、能力(アと巨)との問答に鐘が鐘樓に吊られたこと確め、女人禁制を申し渡せば、能力はそのこと触して廻るが、ワキ「相触し申して候」の言葉はなかなか、アとは京都では珍しく和泉流が勤め、狂言後見の主(オモ)は馬丞。

鐘供養の舞台が整うと白拍子(シテ仲吾)が習ノ次第(市和)は「心得を以て」といやに見微張



合同会第5回「熊野・村雨留墨継之伝」
左より泉嘉夫、寛三、幸円次郎
(撮影・高辻幸一)

「也留舞会」で行なっている。なお「やまの会」の公演は毎年五月が定例となつてをり(但し昭和五一・五二年は年二回公演で何れも二回目は一〇月)、平成二年の今日まで第五二回を数える。泉嘉夫「産泉会」を主宰。昭和三八年二月一五日には社中の一〇周年記念大会を催し、四二年五月二八日には「産泉能友会」名で「隅田川」を勤める。翌四三年一〇月一七日には産泉能友会・名

屋初演シテを勤める。各役は南条秀雄(ツレ女)高安滋郎(ワキ武士)西村欽也、高安勝久(ワキツレ奥)、後見大槻秀夫、地頭大槻文蔵、囃子方は作曲者。「女と影」はその後、昭和四六年一〇月二三日、名古屋学生能楽連盟の主催で当地再演(熱田神宮能楽殿)される。なお、産泉会は昭和二年以後、師走公演が定着、この自家の会で泉嘉夫は毎回能一番を勤める。

(◎画よりつづき)

狂言 鐘の音 シテ 佐藤 友彦 ア 佐藤 融
後見 今枝 郁雄
仕舞 白楽天 弘田 裕一
景求 清塚 駒橋 直也
清 五木田 三郎
能 道成寺 中折 貞夫
赤頭 森 常好 河村 眞之介 加藤 洋輝
森 常太郎 後藤 嘉津幸 藤田 六郎兵衛
間 松田 重義
野村 小三郎
後見 観世 喜正 折 誠 桑田 貴志 高橋 肇一
鶴 謙 小島 英明 弘田 裕一
五木田 三郎 佐久間 一郎 清藤 和久
鐘後見 観世 喜之助 中森 健之介
狂言 鐘後見 井上 清浩 藤波 徹
今枝 郁雄 伊藤 泰

附 祝 言

主 催 観世 九 卓 会
〔入場料〕
S 正面席(後定席) 九〇〇円
A 正面席(後定席) 七〇〇円
A 脇正面席(指定席) 七〇〇円
B 正面席(自由席) 五〇〇円
B 中正面席(自由席) 五〇〇円
B 学生席(自由席) 三〇〇円
〔取扱〕
・観世九卓会(フリーダイヤル01220・150・99550)
TEL03・332250
・FAX03・3268・7331
・チケットぴあ(051・2231
9999・Pコート)057・080
0888) 0597・0808
・名古屋能楽堂(052・2351

とワカ。地との都合に切迫する好せにと思わせ面白い。物着は後見座、大鼓がアシラフが此の間、小鼓は床几を下りなかつた。鳥帽子を着けたシテは一ノ松、いわゆる執心の目付で鐘をキツと見込み心博島進、裂帛の気合で打つ激しい大鼓に呼応してするすると舞台へ入つて来るところ、見所も期待は胸がときめく。へ花の外には松ばかり、の地(慶次郎・邦弘・磯遣ら)の返シ句に大鼓が床几を下りるとスミ掛けて構える小鼓、眼目の乱拍子。シテの腰の入つたひねりの強靱さは携やかな蛇体の片鱗が、そして、踏み足拍子には、鼓を重ねるたびに徐々に力を溜め、瞬間態勢に随ひ密かな響の程が感じられる。秘めた響は遂にワカで吐露、一語一語噛み締めるように、敵視の対象は道成寺と許り踏み続ける執念に凝つた足拍子。急之舞となつて執念は一気に弾け、狂おしく舞に興奮醒めやらず、へ春の夕暮来てみれば、

せ、シテ柱に左手掛けて宿怨の鐘に目を遣るや、身を振りぎりキリと柱を巻いてゆくとところ迫力。キリは走り込みに乗へ、幕内で飛び、ワキの留め。俣丈夫のシテの蛇体は大蛇に思え、立派な舞台だった。(鐘出シから1時間49分、6月13日、第34回能にしたしむ回・京都観世会誌)
「通小町・雨夜之伝」 夏安居の傳(ワキ雅介)の許へ日参、木の実、柴を掛け近付きになる里女(ツレ喜正)、若くはなく面深井・襟浅黄、白摺着付、無紅唐織の姿に大業人手籠を持つ。抑えた語が如何にも初老の懐みなら、素姓問われへ恥かしや己が名を、と立ち去りつつワキに背を向けたま、それとなく所在を明かすのは含羞。ひとえにこれまでの行動はへ跡弔ひ給へ、の本心伝えるため、の遠慮、ワキに振り向き心のうちをみせると送り節で退いて行くところ、寂寥の気配が。
(◎画くつづ)



観世会「通小町、雨夜之伝」
左より観世喜之、観世喜正

③(面よりつづき)
里女の言辭に小町と察し、市原野へと赴く心に立つワキ、へ座敷を展べ、と下座に申うところ、小町ノ亡霊(後ツレ喜正)が出る。小面・襟赤・白摺箔着付・赤地唐織の若い女、往々、前ツレが中入せず、後見座に残り、前後を若い連面を通してしまふことがあるが、前ツレ里女が姥である以上、面・装束は替えた方がよく、今回は神経の行き届いた演出で輝しい。
小町ノ亡霊は用い、喜び、序でに授戒を請へば、小書で幕内から深草少将ノ怨霊(シテ喜之)がへいや叶ふまじ、とワキを牽制、驚くツレはへこは如何に、と幕を見込み硬直して佇立、緊張する。ロンキは、共に戒を受けよと仲裁に入るワキ。へ我は曇らじ、と自分ささよければのツレに、愚忍もこ、迄ならばとへ包めど我も、返シ句で幕を出るシテ、面覆男・黒頭・紫地綾箔(か)着付・茶織袴衣・浅黄指貫の姿。二ノ松から右手で二度招き、掛合はへ招くと更に止まるまじ、のツレに、一ノ松からへさらば傾櫃の犬となつて、舞台に入るとへ袂を取つて、ワキが四位少將と知つて百夜通いの様子を見せるよう所望すれば、小町に逢いたい一念をツレとの掛合で明かし、笠を持つとへ身一人に降る涙の雨か、と雨を避ける心に笠を翳し立廻に舞台を一取り落し、膝をついて暗闇に拾うとへかよくに心を尽し尽して、とようやくの思はへ待つ日になりぬ、と立つと笠をへ見苦し、と後

方へボーと捲てるるところに氣持ちをみせ、以下いそいそとした風情はこゝに来て情熱が怨念を驅解。へ月の歪なりとも戒めならば、と膝をつき盆に擬した扇を差し出すようにツレへアシラへば、罪業消滅、悉皆成仏。喜之・喜正、親子の肌目の細かい表現力が光る。地は志房・邦弘、勘齋ら、囃子は六郎兵衛・孝二郎、眞之介、後見は邦久・大志。(57分)
「仏師」持仏堂に安置する仏像を求め都へ上がる田舎人(アド融)、仏師の所在が分からず呼ばわつて歩くうちスツバ(シテ靖造)に捕まり、等身大の吉祥天女を購ふことに。乙(オト)の面を掛けて吉祥天女に成り代わり、所定の場所立つシテに、アドは御印相がどうも、と表に出て仏師を呼べば、慌て、飛び出して来るシテ。ああだ、こゝだ、と印相に注文を付けられるうち(写真)化粧の皮を剥がされるシテに、それを面白がる風がひよつとして有りそうなアド。他愛もない話を真面目に一生懸命にやるところに醸される講義味は博浩、融の息の合った所産。(25)
「海士」従者(ワキ勝久ワキツレ元・幸)を伴い亡母の追善に讃州志度浦に赴く房前大臣(子方・富田尚久)、彼の地で初老の海女(シテ修二)に遭い、シテ・ワキ問答に漢朗から受けた三つの宝のうち龍宮に取られた珠を海女が取り戻した故事に及び、仔細を語るうちそのときの海女が房前の生母と分かるころ、シテの明晰な詞、子方の確りした語がよい。眼目の珠之段になると、海底に飛び入るとこ



観世会「佛師」
左より佐藤融、井上靖浩(撮影・杉浦賢次氏)

ろ、珠を奪い逃げて後振り返るところ、乳の下に珠を押し纏めるところ、など具象の型をきつちり極めて精彩をみせ、我が身を犠牲にしてまで子の帝位を願う母心をクトキに、へさてこそ御身も約束の如く、と子方にアシラヒ、傳くなつた御身の母の幽霊と明かすと、母子の証はへこの筆の跡、と子方に寄つて扇を手渡し、へ今は帰らん、とシテ(写真)。シラリつ、常座で名残りを惜しみ振り返つて直ルとへ波の底に、隙をつき沈み、へ立つ波の、と立ち、送り笛(誠)で中入、余情一入。浦人(アヒ友彦)とワキとの問答からアヒは珠取りに纏わる故事を滔々と屋語に語り、管絃講を以て房前大臣の亡母を弔う旨を触ると後場。
龍女(後シテ修二)は面泥眼・黒垂・輪冠龍織・襟淺黄・白銀麟箔着付・緋紋大口(金草海波二龍ノ丸文)、唐草文紫舞衣。正中で経巻を読み、へあら有難の御申ひやな、と申し戴きイロエに経巻を巻いて子方に渡すと、後シテは報謝の早舞、流麗切れのよい舞ぶりだった。地は喜正・勘齋・正邦ら、囃子は誠・嘉津幸・鉦一・洋輝、後見は志房・嘉宏。(1時間38分・6月14日・名古屋観世会)
「富士太鼓」宮中、管絃の会に召された衆人、浅間、上手を自負する富士の出現を憎しと討ち果たす。虫の知らせに娘(子方・園田光衛)を連れ上洛の富士ノ妻(シテ融)、夫の死が現実と分か



観世会「海士」
左より祖父江修一、高安勝久、橋本幸、富田尚久(撮影・杉浦賢次氏)

り歎くシテに「亡き人の名残には形見に勝る物あらじ、是を見て心を慰め候へ」と形見の装束を取らせる臣下(ワキ正樹)。冒頭、事の経緯を述べ、シテとの問答に富士の死を伝え、シテを弔るワキの人情味がよく出れば、形見を手にしおと哀れで佳、物着に鳥兜をつけて白地鉄線文舞衣を盪折に着ると、へあら恨めしや、と俄に狂乱、へあれに妾が夫の敵、と羯鼓台に寄つて扇で太鼓を打てば、退りつ、扇を胸に当て撥ね上げるユウケン扇にへ啼る、胸の煙、が如実だった。(1時間14分)
「雪」旅僧(ワキ雅介)が津の国野田で雪に遭い晴れるのを待つところ、現われた女(シテ和子)に素姓を問えば、誰だか自分も分からずたゞ自ずから現はれたり、とワキにアシラフ。雪の精かと問えば、自分が誰だか分からない此の迷いをへ晴らし給へ、とワキにアシラフと懇願する。ワキはワキとして雪の女と言葉を交わされる不思議も法の力、と女にこの功力を疑わず成仏を、と勵まされ、へあら有難の御事や、とワキにアシ

ラヒ、初回(かおる・雅子・良子ら地謡七名全女性)のへ仏の縁を結べかし、と合掌し、立つと直ぐ短い舞クセに改めてへや、と總る心に舞う廻雪の序之舞三段楚々と舞い上げる。へ更雲も、と袖被き、キリはへ花、とツツミ扇で返シ向に立つと右ウケ留めた。残り留めでなかった。手堅く綺麗に纏まった小品は地謡が女性の優しさ、夏、一服の清涼刺だった。(39分)
「鶴岡」甲斐の石川川で鶴使ノ海翁(シテ喜彦)に出遇う旅僧(ワキ勝久)、伴う従僧(ワキツレ正樹)が二・三年前に逢い一夜接待を受けた人に酷似と言ひ話が進展。その人はすでに亡く、その時の有様を語るので跡申うてやつて、と語り出すシテ。終りに、実はその鶴使の亡者と明かされて驚くワキは、罪滅ばしに鶴使を見せよう所望、跡申うを約束する。屋語にや、緊張があつたか、「それなは夢にも知らずして...」狙ふ人々はつと寄り」が抜けたのは残念だったが、鶴之段はへこの川波念、とはつと放すところ、松明を照し川面を照らすところ、まきまきびと熟練の老藝匠の技をみせ、月退りつ、扇を胸に当て撥ね上げるユウケン扇にへ啼る、胸の煙、が如実だった。(1時間14分)
後場は閻魔大王(後シテ嘉宏、面小霞見・赤頭・唐冠・襟紺・厚板着付・金赤段半切・紺飛雲文袷衣、早衝で疾風迅雷の勢いで一ノ松に出ると、彼の鶴使は犯した殺生殺多々だが、僧に一夜接待をした功德で極楽へ送る、ときつぱり宣言、舞台に入つては強々と踏む教団子に閻魔大王の勢威をみせ、へたゞ乗の徳によりて、と奈落に沈む姿を豪快な組落シにみ

せらるなど見事だった。(1時間7分、6月20日・第三回若鯨能)

若鯨能は、昭和三二年(一九五七)以来(昭和三五五年のみ喜多流鑑賞会のため欠ける)毎年六月五日、熱田神宮大祭協賛の奉納能として熱田神宮能楽殿で無料公開され、約半世紀の間お詣りの市民にも親しまれてきたが、能楽殿が廃館の憂目をみた、ぬ、能楽協会名古屋支部が三年前に若い能楽師の研鑽の場として改めて興したものであるが、熱田まつりの時のように僅能日時は固定されず流動的。
「氷室」朝臣(ワキ勝久)、従者(ワキツレ元・正樹)を伴い丹後から流洛の途次、丹波路は氷室山まで備着すると、氷室の氷の解けない理由を聞き度いと思い里人を待つところ、氷室守という老翁(シテ清次郎)と若者(ツレ飛能)に出逢う。シテの語から氷が供御に供されることになった因、シテとツレの掛合に氷室の所在地、その環境など氷室が此処氷室山に定められた経緯を知ると、ワキはシテとの掛合にへた、世の常の雪氷は、と問ひ掛ける。へ一夜の間にも年越ゆれば、と受けるシテに、へ春立つ風には消ゆるものを、とすかさずワキ。へされば歌にも、と負けじとシテが言うの異口同音へ貫之が、とシテと同吟になるところが面白い。へ袖ひぢて、と初回(正直・孝・寿一ら)、夏も氷が解けないのは皇威の恩徳、へ君を以て主とし、とシテは秋(エブリ、さらど)を置き正中下居。クセは此地の風土を喜び、君に拝願出来るのも水ゆえ、へ然れば、と上方端からへはつ子なりぬる悲しさよ、と松明と扇を手放して面を照ラシ天を仰ぎ嘆息の風情もよかつた。
後場は閻魔大王(後シテ嘉宏、面小霞見・赤頭・唐冠・襟紺・厚板着付・金赤段半切・紺飛雲文袷衣、早衝で疾風迅雷の勢いで一ノ松に出ると、彼の鶴使は犯した殺生殺多々だが、僧に一夜接待をした功德で極楽へ送る、ときつぱり宣言、舞台に入つては強々と踏む教団子に閻魔大王の勢威をみせ、へたゞ乗の徳によりて、と奈落に沈む姿を豪快な組落シにみ

せらるなど見事だった。(1時間7分、6月20日・第三回若鯨能)
氷室の田来を立シヤベリにワキへアシラフと独りシヤベリに「雪を降らせ御目に掛け申さう」と節に掛かりハ雪を雪をふ霞をふ霞をふ、と扇で雪を招き、降ればハ雪転かし雪転かし、と雪達磨を作る要領に塊を作る仕方も面白く神慮の憂目をみた、ぬ、能楽協会名古屋支部が三年前に若い能楽師の研鑽の場として改めて興したものであるが、熱田まつりの時のように僅能日時は固定されず流動的。
「氷室」朝臣(ワキ勝久)、従者(ワキツレ元・正樹)を伴い丹後から流洛の途次、丹波路は氷室山まで備着すると、氷室の氷の解けない理由を聞き度いと思い里人を待つところ、氷室守という老翁(シテ清次郎)と若者(ツレ飛能)に出逢う。シテの語から氷が供御に供されることになった因、シテとツレの掛合に氷室の所在地、その環境など氷室が此処氷室山に定められた経緯を知ると、ワキはシテとの掛合にへた、世の常の雪氷は、と問ひ掛ける。へ一夜の間にも年越ゆれば、と受けるシテに、へ春立つ風には消ゆるものを、とすかさずワキ。へされば歌にも、と負けじとシテが言うの異口同音へ貫之が、とシテと同吟になるところが面白い。へ袖ひぢて、と初回(正直・孝・寿一ら)、夏も氷が解けないのは皇威の恩徳、へ君を以て主とし、とシテは秋(エブリ、さらど)を置き正中下居。クセは此地の風土を喜び、君に拝願出来るのも水ゆえ、へ然れば、と上方端からへはつ子なりぬる悲しさよ、と松明と扇を手放して面を照ラシ天を仰ぎ嘆息の風情もよかつた。
後場は閻魔大王(後シテ嘉宏、面小霞見・赤頭・唐冠・襟紺・厚板着付・金赤段半切・紺飛雲文袷衣、早衝で疾風迅雷の勢いで一ノ松に出ると、彼の鶴使は犯した殺生殺多々だが、僧に一夜接待をした功德で極楽へ送る、ときつぱり宣言、舞台に入つては強々と踏む教団子に閻魔大王の勢威をみせ、へたゞ乗の徳によりて、と奈落に沈む姿を豪快な組落シにみ

せらるなど見事だった。(1時間7分、6月20日・第三回若鯨能)
氷室の田来を立シヤベリにワキへアシラフと独りシヤベリに「雪を降らせ御目に掛け申さう」と節に掛かりハ雪を雪をふ霞をふ霞をふ、と扇で雪を招き、降ればハ雪転かし雪転かし、と雪達磨を作る要領に塊を作る仕方も面白く神慮の憂目をみた、ぬ、能楽協会名古屋支部が三年前に若い能楽師の研鑽の場として改めて興したものであるが、熱田まつりの時のように僅能日時は固定されず流動的。
「氷室」朝臣(ワキ勝久)、従者(ワキツレ元・正樹)を伴い丹後から流洛の途次、丹波路は氷室山まで備着すると、氷室の氷の解けない理由を聞き度いと思い里人を待つところ、氷室守という老翁(シテ清次郎)と若者(ツレ飛能)に出逢う。シテの語から氷が供御に供されることになった因、シテとツレの掛合に氷室の所在地、その環境など氷室が此処氷室山に定められた経緯を知ると、ワキはシテとの掛合にへた、世の常の雪氷は、と問ひ掛ける。へ一夜の間にも年越ゆれば、と受けるシテに、へ春立つ風には消ゆるものを、とすかさずワキ。へされば歌にも、と負けじとシテが言うの異口同音へ貫之が、とシテと同吟になるところが面白い。へ袖ひぢて、と初回(正直・孝・寿一ら)、夏も氷が解けないのは皇威の恩徳、へ君を以て主とし、とシテは秋(エブリ、さらど)を置き正中下居。クセは此地の風土を喜び、君に拝願出来るのも水ゆえ、へ然れば、と上方端からへはつ子なりぬる悲しさよ、と松明と扇を手放して面を照ラシ天を仰ぎ嘆息の風情もよかつた。
後場は閻魔大王(後シテ嘉宏、面小霞見・赤頭・唐冠・襟紺・厚板着付・金赤段半切・紺飛雲文袷衣、早衝で疾風迅雷の勢いで一ノ松に出ると、彼の鶴使は犯した殺生殺多々だが、僧に一夜接待をした功德で極楽へ送る、ときつぱり宣言、舞台に入つては強々と踏む教団子に閻魔大王の勢威をみせ、へたゞ乗の徳によりて、と奈落に沈む姿を豪快な組落シにみ

能楽の友

発行 能楽の友社
名古屋市中種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-798 8 4
FAX (052) 733-283 7
振替口座 008000-6-36393
購読料 1年 1100円
送料 1年 1800円
郵送の場合 1100円

NHK放送予定(平成21年9月~10月)
9月27日 NHK-FMラジオ能楽鑑賞(毎週日曜日7時15分~8時) 素謡「教生石」(再)宝生流 武田 孝史ほか
10月4日 素謡「巻相」(観世流)武田志房ほか
10月11日 素謡「俊寛」(宝生流)三川泉ほか
10月18日 素謡「鉄輪」(金春流)本田光洋ほか
10月25日 素謡「紅葉狩」(観世流)津村祐礼次郎ほか
教育テレビ(14時~14時30分)
9月24日 伝統の至芸:栗谷菊生 (再放送9月27日23時30分)

演能力レンダー

◆名古屋能楽堂◆	
[9月]	和泉流狂言大会 (無料)
22日(火・祝)	和泉流狂言大会 (無料)
[10月]	
3日(出)	名古屋観世九阜会 (有料)
4日(日)	邦狂言発表会 (無料)
10日(出)	乃座 (有料)
12日(月・祝)	武田謡楽会秋季大会(番組①面) (有料)
23日(金)	名古屋能楽堂10月定期公演(番組②面) (無料)
24日(出)	狂言「鳳の会」52回公演(番組②面) (有料)
25日(日)	交流会(番組②面) (有料)
[11月]	
1日(日)	名古屋金春会特別公演(番組③面) (有料)

能(金春流)「道成寺」上演

11月14日 豊田市能楽堂

豊田市能楽堂では特別公演として11月14日(土)金春流能「道成寺」を上演する。
シテは本田光洋、ワキ森常好、金春安明金春流宗家が地頭で勤める。
番組の解説は武蔵野大学教授・羽田昶氏、「道成寺縁起の絵解き」と題して、道成寺副住職・小野俊成氏の語がある。
能組は次のとおり。

「道成寺」前シテ 後シテ本
田光洋、ワキ森常好、ワキツレ館
田善博、森栄太郎
アイ井上靖浩、佐藤融
笛・藤田六郎兵衛、小鼓・観世新九郎、大鼓・河村眞之介、太鼓・鬼頭義命、後見・桜岡金記、横山紳一、中村昌弘
地謡 金春安明、吉場廣明、高橋忍、金春穂高、加藤英明、小島芳樹、金春寛和、前田登

名古屋金春会 第30回記念特別公演

11月1日 能3番上演

名古屋秀麗会、名古屋春栄会主催による「第30回記念・名古屋金春会特別公演」が11月1日(日)名古屋能楽堂で開催される。
能組は、仕舞「養老」(中村昌弘)「鹿」(定井人郎)
能「橋弁慶」(シテ金春穂高)
狂言「竹生島参」(野村小三郎)
仕舞「放下僧」(金春寛和)
「松風」(高橋忍)
能「百萬」(シテ本田光洋)
能「乱」(シテ鬼頭尚久)

午後2時開演。後援:名古屋市文化振興事業団、金春円満井会、中日新聞社
チケット料金 正面指定席五〇〇円、中ワキ自由席一般四〇〇円、学生三〇〇円
前売券取扱所 名古屋能楽堂 (TEL052・231・0088) ナディアパーク7階PG (TEL052・265・2015)
名古屋金春会(フシハラ友) (TEL052・842・7931)。

特別公演にあたり、主催者代表伏原靖二氏は次のようにあいさつしている。
名古屋金春会は、古い歴史と伝統ある会ですが、世代の交代時期に於いては、開催が困難な年があり、昭和五十五年(一九八〇年)に、当時の金春信高宗家が、地味でも毎年開催するように、との御支援を受けて以来、今年で連続開催三十周年を迎えました。
これに加え、会員の皆様、シテ方、三役方の皆様の御支援、ご協力のおかげであります。心から深く御礼を申し上げます。また先賢諸氏の皆様、故人となられました故広瀬瑞弘、松本武、塚本恵市、林鉄郎、上田利英、後藤正男、他の各位には、改めて心から感謝の意を表します。

開場午後一時三十分、開演午後二時
入場料/全席指定(税込)正面席一〇〇〇円、脇・中正面席八〇〇円(学生半額)
チケット販売場所 豊田市能楽堂(0565・35・8200)
インターネット予約 ぽぽ／＼／＼(0570・2・9999) Pコート395・431)

観世流シテ方
能澤恵美子氏逝去
8月26日告別式

観世流シテ方準戦分 熊澤恵美子氏は、かねて病氣療養中であつたが、8月24日午前4時10分多臓器不全のため逝去した。享年84歳。葬儀・告別式は8月26日午後1時から名古屋市中種区千種2のいちやなぎ中央斎場で執り行われ、能楽関係者ら多数が会葬、故人をしのび別れを惜しんだ。喪主は夫・敦氏。
故人は、観世流シテ方として猶恵会を主宰、浜松中日文化センター講師。
能「道成寺」(昭和60年、名古屋梅鑑会別会能)でシテを演ずるなど能のシテとして20数回の上演、女流能楽師として活躍した。

伊勢の伝統の 能楽まつり

9月20日開催

「第12回伊勢の伝統の能楽まつり」は、9月20日(日)伊勢市生涯学習センター(いせトピア)で開催。主催伊勢の伝統の能楽を継承する会、みえ県民文化発達運営委員会、三重県、三重県文化振興事業団。

能組は、狂言「鬼清水」(馬瀬狂言)連吟「瀧狸々」(通能)、狂言「文荷」(通能)半能「吉野舞」(一色能)はじめ一色能子供教室による仕舞26番、通能子供連による仕舞8番、一色能、通能からの独吟、仕舞など10番の上演。
継承する会事務局川伊勢市一色町一三〇六番地二、電話0596・25・6526番。

邦謡会発表会

十月四日(日)午前九時半始
名古屋能楽堂

邦謡 「求塚」「嫉捨」ほか
舞踊子 「卒都婆小町」「弱法師」ほか
主催 邦謡会 梅田邦久
名古屋市昭和区台町2-16-5
電話052・841・4632

狂言どぞる乃座名古屋公演

十月十日(土)午後二時開演
名古屋能楽堂

狂言 縄 綱 太郎 野村 萬斎 主 野村 万作 何某 野村 万之介
小舞 海 人 野村 万作 田舎者 深田 博治 新発達者 高野 和憲 参詣人 竹月 山崎 修 岡村 山崎 修 岡村 山崎 修
狂言 小 傘 僧 野村 萬斎 参詣人 竹月 山崎 修 岡村 山崎 修 岡村 山崎 修
尼 石田 幸雄

武田謡楽会秋季大会

十月十二日(月・祝)十時始
名古屋能楽堂

番外仕舞 通小町 武田 邦弘
参謡 井 筒 坂 寛美子 前川 桂子

主催 万作の会
東京都練馬区高野台5-1-25-15
電話03・39977・8778

参謡 弱法師 岡崎 千代 大田 晴代
山 姥 渡美子江子 川合 幸子 奥田えつこ
舞踊子 養 老 井田 順子 河村眞之介 加藤 洋輝 水波之伝 後藤嘉津幸 藤田六郎兵衛
古野 静 小瀬古豊代子 河村眞之介 藤田六郎兵衛 船戸 昭弘
雲林院 市川 敦子 河村 総一郎 加藤 洋輝 船戸 昭弘 藤田六郎兵衛
恋重荷 田中 篤子 河村 総一郎 加藤 洋輝 後藤嘉津幸 藤田六郎兵衛
独吟 定 家 藤岡 義晴
三井寺 井出モト子
番外仕舞 邯 鄲 吉井 順一
野 宮 片山 慶次郎
参謡 藤 戸 水田 肇子 高田さだ子 安井多鶴子
舞踊子 安 宅 斎藤 忠佳 河村 総一郎 鹿取 希世 五條之型 後藤嘉津幸
花 筐 下里 紀子 河村 総一郎 鹿取 希世 後藤嘉津幸
紅葉狩 加藤 愛郎 河村 総一郎 鹿取 希世 後藤嘉津幸
参謡 盛 久 前山 鎮男 長谷川邦彦 武田 大志 夢子出
仕舞 清 経 松陰 真彦
卷 網 井内 孝子
忠 度 川合 幸子
籠 太 鼓 山本 三三
独鼓 遊行柳 桑原 壽子 加藤 洋輝
仕舞 雨 之 段 小林 郁夫
鉄 蟬 丸 橋本 正康
藤 鉄 輪 長谷川邦彦
殺 生 石 木下 孝慈 小瀬古豊己
舞踊子 班 女 辻岡 勝洋 河村眞之介 鹿取 希世 世之伝 船戸 昭弘
野 守 渡辺 一彦 河村眞之介 加藤 洋輝 船戸 昭弘 鹿取 希世
番外仕舞 松 風 武田 欣司
番外舞踊子 融 武田 大志 河村眞之介 加藤 洋輝 船戸 昭弘 鹿取 希世
附 祝 言(高砂) (終了予定五時過)
主催 武田謡楽会 武田 邦弘 武田 大志

[御来場歓迎]

演能案内

名古屋能楽堂10月定例公演

十月二十三日(金) 午後六時半開演
名古屋能楽堂

狂言 不腹立 坊主 井上 靖浩 座主 佐藤 友彦
(須泉流) 後見 今枝 郁雄
能野宮 高安 勝久 河村真之介 藤田六郎兵衛
(全生流) 合巻留 佐藤 融
後見 五井 博 地謡 村上 茂 稲川 寿一
内藤 飛能 久野 幸三 佐藤 耕司

(午後八時五十分終了予定)

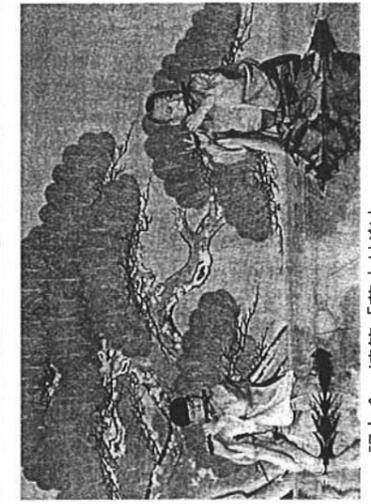
当地の各流儀・流派・結社・
社中の消息を辿る

竹尾 邦太郎

三 「調友会」 ①

「調友会」は能楽協会名古屋支部に所属する囃子方の技術向上をはかると共に囃子方の主導のもと能楽会を運営、常の催しでは演奏の機会が少ない二調や素囃子・舞囃子を出来るだけ多く出して囃子の種々相の理解、鑑賞に供しようと能楽協会名古屋支部長・田鍋惣太郎の胆照りで昭和三十七年(一九六二)七月七日、発表する。当時、囃子方の会員は笹方藤田流 藤田六郎兵衛・寛三男・鬼頭季信・小島鉄次郎・金藤準三・藤田昭彦(逸)、後に大森英三郎・鹿取希世・小鼓方幸清流 青木垣治・後藤孝一郎・田鍋惣太郎・田鍋惣一郎・田鍋洋一・福井啓次郎・福井良久、後に柳原富司忠・山口亮大鼓方石井流 西尾孫太郎・河村真一・吉田定男 大鼓方大流流 眞一 大鼓方観世流 池田茂・鬼頭八郎・鬼頭喜太郎・助川龍夫・野崎太郎・山口義郎。
初回の能組は順に舞囃子「翁」橋岡久馬・柴田初太郎(千歳)、

舞囃子「高砂」内藤泰二・小舞「鮎」和泉保之 舞囃子「胡蝶」山田仁三郎、一調「松虫」田鍋惣太郎・本田秀男(詠)、舞囃子二番「紋上」辰巳孝(唐船・盤渉)大槻秀夫、素囃子「獅子」藤田六郎兵衛・田鍋惣一郎・河村総一郎・鬼頭喜太郎、半能「船弁慶」前住之善 観世武雄、深見賀子(子方)高安滋郎・西村欽也、井上松次郎、シテ方には東西から金春・宝生・観世の各流から名手の来演がある。
第二回は翌三十八年七月六日、能組は順に舞囃子二番「養老」柴田初太郎「邯鄲」盤渉「内藤泰二」一調「春日籠神」野崎太郎・山本順之(詠)、舞囃子「山姥」大塚二、素囃子「早舞」兜 藤田昭彦・福井啓次郎・吉田定男・鬼頭八郎、舞囃子「藤戸」大槻秀夫、一調二管「班女」田鍋惣一郎・藤田六郎兵衛・辰巳孝(詠)、枹能「巨馬」山本博之・田辺明宏(子方)高安滋郎・井上松次郎、当地阪から観世流の大槻家・山本家の



調友会「草之神楽」1985・8・18より転載

当主・宝生流の探題・辰巳孝が今回も来演。なお五月一〇日以来、福井病院・福井良久院長(幸清流・福井家十代)のもとで入院療養中であった田辺惣太郎が約二ヶ月ぶりに「藤戸」の舞囃子に出勤する。
第三回は昭和三十九年七月二六日、舞囃子「加茂」内藤泰二、素囃子「神舞」小島鉄次郎、後藤孝一郎、兜 眞一、野崎太郎、舞囃子「頓政」観世武雄、連管「草之神楽」藤田六郎兵衛・昭彦(写真)、小舞二番「小原木」井上礼之助「海邊下り」井上松次郎、舞囃子「三笑」柴田初太郎・入田秀雄・河村純二、一調「勸進帳」田辺惣太郎・本田秀男(詠)、舞囃子「龍田」大塚二、一調「遊行

柳」鬼頭八郎・泉嘉夫(詠)、枹能「土蜘蛛」大槻秀夫・橋岡久共・柴田収武・祖父江修一・高安滋郎・西村欽也、高安彦彦、佐藤秀雄。
第四回は昭和四〇年六月六日、初回から終回(昭和四八年)まで七月が定例であったがこの年に限り六月、開演の前に「一声・出端の囃子について」と題し、聞き手の内藤泰二の質問に四拍子(寛三男・後藤孝一郎、河村総一郎、助川龍夫)の実技を交え観世武雄が答えるという形式で解説がある。
能組は舞囃子「竹生鳥」片岡道子、一管「琵琶」金藤準三、舞囃子「龍田」柴田初太郎、一調「女郎花」田辺惣太郎・野口禄久(詠)、舞囃子「邯鄲」長田勝、

狂言「朝比奈」佐藤友彦・井上松次郎、一調「杜若」野崎太郎・南条秀雄(詠)、舞囃子「松風」野口禄久、能「融」思立之出、今合返、兜「観世武雄」高安滋郎、佐藤秀雄。なお開演前の舞台での解説の他に能組裏面に次の解説文がある。
調友会は、囃子方の催しでございます。ベテランから

狂言 鳳の会 第52回公演
十月二十四日(土) 午後二時三十分始
名古屋能楽堂
伊文字 女通行人 佐藤 友彦 主人 今枝 靖雄
後見 今枝 郁雄

菊の花 太郎冠者 佐藤 友彦 主人 大野 弘之
後見 鷺見 政行
★「釣針」の装束着付実演
釣針 太郎冠者 井上 靖浩
後見 今枝 郁雄

三交会大会
十月二十五日(日) 午前九時四十五分始
名古屋能楽堂
番外仕舞 放下僧 小鼓 久田三津子
殺生石 久田勤吉郎
番謡 杜若 松井 輝子 梅村ひろみ
猩猩 々 篠田 武次 早川 功一
仕舞 蟬 丸 岩崎 光子
熊半 野 蔀 園 さなへ
鐘之 段 野 蔀 江崎 淳子
仕舞 鶴 亀 梅村ひろみ
熊野 野 蔀 篠田 武次
玉 雙 渡辺 きい
鞍馬 天狗 増永 悦子

ら若年の者まで、一生懸命稽古し、真面目に演奏致します。限られた時間に、種々の囃子を取合せてお聞き願えますように、番組が作つてございます。まず今回初めての試みと致しまして、一声(イツセイ)と出端(アハ)を解説し、実演します。御観能、御研究の御参考になりますればと存じます。
初番は誰方にも親しまれる曲「竹生鳥」、聴能物の囃子は清く、明るく、開幕を飾ることでしよう。八拍(ヤツバチ)を能楽に取り入れ、芸術化した囃子が羯鼓(カッソ)でございます。笛と大小鼓で囃します曲で、今回は笛の一管で奏し、軽快で面白い音色を味わって頂きます。女神を主人公とした曲のうち、最も素直で神々しい曲は「龍田」だと思います。神楽(カクラ)の舞を中心とする気品に充ちた舞囃子でございます。一調「女郎花」は、本日のもっとも価値の高い一番でございます。拙い解説を申し上げますので、たゞ御静聴をおす、め致します。名曲「邯鄲」の、夢の中で栄華が頂点を極める部分を舞囃子で致します。特に舞楽を表現する楽(分ク)の囃子は、いつも心を養育の世界に誘ってくれます。
朝比奈三郎、無常の風に誘われて真土へ赴く。六道の辻にて閻魔王と出会う。地獄へ責め落とさんとは責めあぐみ、名を聞いてヒツ

舞囃子 胡蝶 武藤 明美 井林 清一 竹加 洋輝
月市 川美保子 船戸 昭弘 竹市 学
羽衣 小森 祐子 船戸 昭弘 竹加 洋輝
仕舞 桜 川 七 後藤 阿紀
小町 戸松 花枝
秋田 忠美子
舞囃子 松風 山田 紗智子 井林 清一 竹市 学
輪 坂 井田 セツ子 船戸 昭弘 竹加 洋輝
前 山内 清智子 井林 清一 鹿取 希世
独吟 恋重荷 村瀬 忠美子
光 松見 知子
能 楊貴妃 飯富 雅介 河村 真之介 藤田 六郎兵衛
福井 四郎兵衛
問 井上 靖浩
後見 橋岡 久田三津子 八神 孝 藤谷 音彌
久田 勤吉郎 山崎 幸親 上田 豊弘
地謡 久保 信一郎 藤井 徳三
寺澤 幸祐 下川 直長

(3)面へつづく

シテ方観世流準職分 熊澤恵美子さんを偲ぶ

竹尾 邦太郎

療養中の熊澤恵美子さんの訃は八月二四日の早朝、死去されたその日、御夫君・教医博から知らされた。葬儀の日時、式次第は無奈教で、と至極平靜な電話で。覚悟をして居られたことが直ぐ分った。取り乱されないことは、取りも直さず互いの信頼の上に立つ安定した家庭であったことを窺わせた。

初めて熊澤さんの舞台を見たのは昭和四二年の名古屋梅猶会で仕舞「玉之段」、すらりとした長身の立ち姿の良さに見惚れ、寔感を見たことはないが寔感出身かと思つた程美しく、太輪の牡丹の趣があつた。品があり、誰も女性特有の、いわゆる耳に馴染まないきんきん声でない深味のある落ち着いた声質が好ましかった。

昭和四〇年二月二日、先代梅若猶義師の取立て準師範を許され、披露能で「杜若」を舞つたの

が初舞台。その時、師の一字を頂戴、猶憲会を主宰して村中を指導してこられた。昭和四七年以降、名古屋梅猶会では毎年、能一番を勤め、梅猶会に拠つて大阪、東京へも出勤、昭和五九年に一狸々へも出勤、昭和五九年に一狸々を「乱」を、翌年には大曲「遣成寺」を抜き名実ともに女性能楽師の一人となられる。平成一〇年、大阪梅猶会で「安達原・白頭」の役が付くが体調不良、後に胃ガんだつたと知るが、梅若盛彦(当時)師が代動した。此の頃から体的に能一番は無理だつたのだろうか、平成一一年から一八年まで、主舞台の名古屋梅猶会では専ら舞雛子で「松風・戯之舞」や「野宮・合掌留」「砦」など、ささや能で動めたかつたであろう口惜しさ察するに余りあるが、その舞台へも一昨年からは遂に復帰はならなかつた。

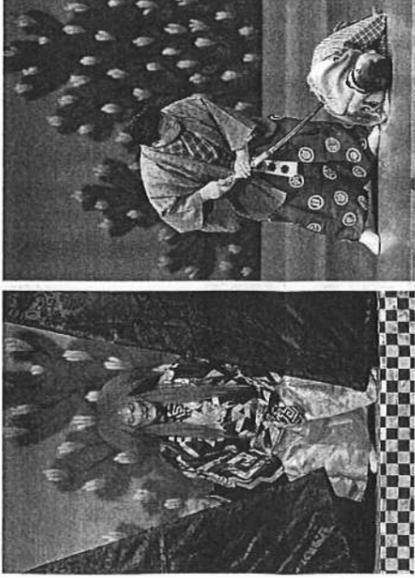
平成一六年夏、重要無形文化財

総合指定に初めて女性が選ばれることになったが、時に利あらず、熊澤さんは選に洩れた。しかし、独立以来およそ半世紀、流儀・能楽界に尽くした功で観世流の女性能楽師では珍しい準職分を宗家から贈られる。

昭和四二年の能楽協会名古屋支部には女性会員に芥川秀子・有賀滋子・飯田新子・加藤良久、熊澤恵美子・服部紗枝(何れも観世流)の諸師が名を運ねるが、今日現在、多くの女性能楽師の礎となつて一時代を画したこれらの人々も、熊澤さんを最後に全員が故人となられた。

夏目漱石に「有る程の郷揚げ入れば楯の中の句があるが、貴菊白菊に埋もれた熊澤さんの直画は名工の打つた「老女」の面そのものでつた。初舞台「杜若」の役の方々、西村欽也、先代藤田六郎兵衛・田鍋惣一郎、吉田定男、鬼頭八郎、地頭梅若猶義、後見先代梅若万三郎の諸師も皆あちら、熊澤さんもあちらで宿願の老女物を舞われることだろう。さよなら熊澤恵美子さん、心から御冥福をお祈り致します。

— 以後次号 —



七月定例公演 (市民能楽セミナー) 「殺生石」 久田勘鷗 (撮影・杉浦賢次氏)

七月定例公演 (市民能楽セミナー) 「磁石」 左より井上靖浩、今枝郁雄 (撮影・杉浦賢次氏)

◆盛夏の舞台から◆ 「能の旅人」のうのう能イン名古屋 第一回「名古屋能楽堂七月定例公演 市民能楽セミナー」第十回御酒落 名匠狂言会「豊田市能楽堂七月能」 竹尾邦太郎

「のうのう能」は観世喜正が東京で主宰する演能集団。此の度は名古屋版「のうのう能イン名古屋」名で当地の中堅雛子方、竹市学、後藤嘉津幸、河村眞之介を同人として興した「能の旅人」の第一回。「老女」の第六十四章に「千里の行も足下に始まる」とあり、俗に「千里の道も一歩より」と言われるが「能の旅人」の第一巻に「熊野・松風は米の飯」と何回でも飽きのこないものの譬えにも引用される名曲「熊野」を取り上げる。

入場時、曲の梗概、登場人物や当時の時代背景の説明、カラー写真による曲の舞台となった現在の様子、カラーイラストと解説による至れり尽せりの克明な舞台進行の一幕、シテの装束付の詳細などが満載された十二頁に及ぶ小冊子が配布され、上演前には更に舞台から主宰の観世喜正による「熊

野」のお話、雛子方による楽器の解説、装束付の美演、と美に盛り沢山、徹底的に「熊野」を楽しんで貰おうの意欲は大いに買うが、中には少々煩わしいと思う向きもあろうか。ただ能「熊野」は立派だった。

貴公子・平茶盛(ワキ和幸)の愛妾・熊野(シテ喜正)、国許から侍女・朝顔(ツレ英明)の齎す文に老母の病篤きを知ると、ツレ共々ワキの面前に罷り越し文を見せ、借金を訴えるところ、「見るまでもなし」とにくもなく断り、「それにて高らかに読み候へ」と冷や、かに言い放つワキの嵩高な態度が如何にもを思わせ、文を読むシテの、老母に成り代るその心情を切々と吐露する文之段が師父・喜之悦ずりの名詞で真感を深くすれば、薄情にも眉すら動かさず平然として聞くワキが好対照。シテの胸中を無現、いざ東山の花見

へはや御出でと、左手指してシテを促すワキ、しおしおと車に入るシテ。浴中を往く様子を描写する一セイ・サシ・上歌は雀ぎ、直ぐ地(直也・博通・醉一ら)とシテ掛合のロンギ、近付く東山はへ六道の辻とかや、で面だけでなく身体ごと向きを右に寝え眺めるところ、これからの進行に寔感も思われ、心懸りは老母のこと、へ心持をみせる。車を降り老母の無事を折念するシテに、遅いと従者(ワキツレ知登)を御堂に連るワキ。寔の始まるを聞くシテは人の心を知らぬワキへの禮やかならざる胸中、「なうなう皆々近う御参り候へ」と脇正面に融し、「何とて御堂座なども」と、いつぞ賑やかに、けしかけ挑発するかに奇立つところ面白い。思い頼に表われるのも仕方無く正中に下居、歎いても無益と分れば四辺に耳目を惹かれる事も無く、蝶が舞い驚が飛ぶなと述べるサシを雀ぎ直ぐクセ。へ寺は桂の、で居立ちへ立ち出でて、立ち舞クセに。一セイへ深き情を人や知る、と巻座で酒を汲む心に胸で拗くとワキへ酌に。舞を所望され、改めてへ深き情を人や知る、と思いを強調、シテやその保つと立ち二ノ松へ、イロエ掛り中之舞。舞の中、一ノ松の勾欄に寄つて面使に見える散る花を、老母の命に重ねて無感に駆られるシテの姿が良い。舞上げ、「なうなう俄に村雨のして」の不安はワキへのアキラとへあら心なの、と踏む二ツ拍子に。

扇面に受けた落花をこぼして短冊を取り、ひと筆で一頁認めるところも手癖麗。歌の心に感じシテの精國を許すワキの、心察りを恐れ、へたごの俣と軽く余積のま、立つて往くキリも趣が。

た、折角の小冊子も舞台で省略部分があつては充分に活かされないのでは。完演が望ましい。(一時間4分・7月4日・能の旅人 第一回)

「磁石」田金者(アド郁雄)とみれば甘言を弄して騙くらかし、裏稼業は人買いであろう宿主(小アド友彦)に売り渡す人商人

②面よりつづき

仕舞	田村	羽衣	宮	菊池	翔子
				夏瀬	隆子
				光安	久美子
舞雛子	井筒	瀬戸	勝治	上野	義雄
				久田	舜一郎
				藤田	六郎兵衛
	卒都婆	小町	加藤	寿子	上野
				久田	舜一郎
				鹿取	希世
	弱法師	後藤	弘次郎	河村	眞之介
				福井	四郎兵衛
				鹿取	希世
	頼政	早川	功一	河村	眞之介
				福井	四郎兵衛
				鹿取	希世
番外仕舞	嵐山	久田	勘鷗		

(終了予定 五時半頃)

第30回記念 名古屋金春会特別公演

十一月一日(日) 午後二時開演 名古屋能楽堂

仕舞	養老	中村	昌弘		
		辻井	八郎		
子方	金春	飛翔		嵐	楓一
	築備	連高		福井	四郎兵衛
	金春	種高		竹市	学
能	橋	弁慶			
	アイ	松田	高義		
後見	佐藤	俊之		豊田	均
	鬼頭	尚久		中村	昌弘
				加藤	剛
				中村	昌弘
狂言	竹生	島参	シテ	野村	小三郎
			下	松田	高義
				後見	伴野
					俊彦
					(三時四十分頃)
仕舞	放下	借小	金春	豊田	均
	松風	高橋	忍	佐藤	俊之
				加藤	剛
子方	玉井	売多		河村	総一郎
	本田	光洋		後藤	孝一郎
				飯富	雅介
問	野村	小三郎		鬼頭	義命
				鹿取	希世
後見	本田	芳樹		加藤	英昭
	本田	由樹		中村	昌弘
				田村	功一
				登	佐藤
				佐藤	俊之
後見	高安	勝久		河村	眞之介
				瀬戸	明弘
				加藤	洋輝
				大野	謙
後見	金春	安明		永田	善司
	本田	由樹		林	芳樹
				小島	昌弘
				功	金春
				金春	憲和
				高	廣高

主権 名古屋秀麗会 名古屋春栄会

チケット料金・申込み
①面記事参照



第10回御洒落名匠狂言会 「蝸牛」 山本東次郎 (撮影・杉浦賢次氏)



第10回御洒落名匠狂言会 「末広かり」 左より井上靖浩、今枝都雄 (撮影・杉浦賢次氏)

「殺生石」 玄翁道人(ワキ雅介)、能力(アト勲)を伴い奥州行脚から都へ上る途次、那須野ヶ原で石に飛鳥が落ちるのを見て驚

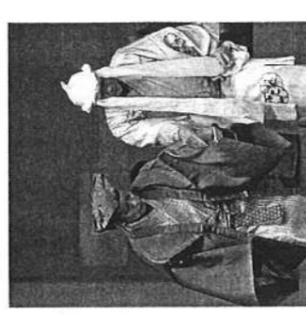
くアトに注意を促されるどころ、その石に立ち寄るな、と呼掛て出る里女(シテ勘助)。何故に、と不審するワキの舌鋒に乗せられるように橋懸を運びながら玉藻ノ前のキの間答、掛合がよい。初回(寛弘・拓同・藤一・幸親ら)となり、へまた立ち居る草の原、とシテは一ノ松からワキを見込み、へ鼻松桂の、と運び出し、この原の、で舞台に入ると、物凄まじ秋の夕べかな、と常座でワキへアシラフところ一抹の妖気が。此処へき

後場、ワキは弘子を取つてノットに立ち、作物(石)に向かい「急々に去れ去れ」と弘子で地を突くと下居、自今は成仏の身に到れ、と合掌して立つと、作物の中

から「石に精あり」と玉藻ノ前の霊、即ち殺生石(石魂(後シテ勘助)から声があり、地謡のへ像を今ぞ現す、と作物が二つに割れる(写真)。面は野十の怪異、曾ては色香で玉体を端ませはするも、幣を持たされて陰陽師に調伏される苦痛に堪らず激しく六つ拍子を踏み、へ幣帛をおつ取り、扇を右に持ち替えて台から飛び降りるところ、那須野に逃れては阿介にへ射伏せられて、扇を失とみ腹に突き立て仰け反る様に安座のころ、など、きびきびと俊敏な動きが目覚しかった。(1時間5分・7月5日・七月定期公演 市民能楽ゼミナール)

「末広かり」 元日の節会の引出物に連上する末広かりを求めさせに太郎冠者(アト都達)を都へ遣る乗継者(シテ靖浩)、しかし、骨・地紙など末広かりの属性を教えられても、それがどんな物か実体を知らぬま、太郎冠者は都でスツバ(小アト弘之)の好餌となり唐傘を掴まされる。スツバは、その買いつぶりのよい太郎冠者が、戻れば主の悪行をかうに遠い、とスツバなりの好意で主の機嫌を直す雌子物を伝授する。純朴そうな風体にも実直そうな語り口のスツバと、それに乗せられる太郎冠者の楽天的な気分が巧く絡む。代金支払いの場が大黒屋でなく西国屋であつたり、戻つて主に物を見せれば、ホイと奪取られずなど、演出は和泉流山陽派の独自。案の案の展開は権懸で雌子太郎冠者が気になり、雌子物の面白さにむすむすし出すと、機嫌を直し可々大笑する主。「これは出ずばなるまい」と相舞に(写真)は神妙な面持ちも可ましい。(40分)

「川上」 盲目の夫(シテ万作)、眼疾に靈障あらたかという川上の地蔵菩薩へ参籠すること。盲目の杖の運びの微妙は、いわゆる当今のバリア(障害物)への対応の示唆とも。「この物に躓くとははうと困つた」「今のは何であつたぞ」と杖で探り、「石段ちや」と地蔵堂に着いた事は、正先で左手に杖を持ったま、右手で嚮口の綱を握る心に振り動かして「ジャガンジャガン」と打ち鳴らし、堂内に入つては参籠の同病者達との世間話、こゝに至る情況描写が実に巧みである。



第10回御洒落名匠狂言会 「川上」 右より野村万作・石田幸雄 (撮影・杉浦賢次氏)

「蝸牛」 長寿を願うには蝸牛が効能有り、と聞く主(アト則俊)、祖父のために太郎冠者(次アト泰太郎)を蝸牛の捕獲に遣る。未だ蝸牛の実物を見たことがない太郎冠者、末広かり同様、敷に棲み、頭黒く、腰に目・時には角、大きい人程、と風性だけを教えられても実体は不明。とにかく敷に行けば、そこに棲んで居る山伏(シテ東次郎)、悉く主の説明に合致すれば、蝸牛にされた山伏は「世には興がった者があればあるものぢや」と面白くは、と無知な太郎冠者のペースに乗つて行力を発揮、太郎冠者に雌子物を囁きせ、自身はへでんむしむし、へでんむしむし、と台の手を入れて舞い(写真)ちようらかせば太郎冠者は没我の境。それを見た主が注意を喚起するも聞かばこそ、行力による雌子物でたちまち元の木阿弥、果ては主までへでんむしむしむし、に感化され三番仲好く兼、大藏流山本東次郎家独特の、硬質な台詞の持つ骨太の舞台に蓮華の確かな世界。(23分)

「首引」 姫鬼(乙・俊裕)の噂い初めに悪戯通りか、つた大藏・鎮西八郎(アト勲)をあてがつたのが親鬼(シテ友彦)の誤算。姫鬼には子方を脱けるのが一般だ



第10回御洒落名匠狂言会 「首引」 左より佐藤融、鹿島俊裕、(最後尾)佐藤友彦 (撮影・杉浦賢次氏)

「二人袴」 心許無げな伴(シテ近成)の婿入に付き添う親(右近)、舅宅の門前で訓れぬ袴を伴に穿かせて身仕度させると、後はせ、帰るつもりが太郎冠者の差し争いのうち、妻の愛の深さは別れずに居て夫が再び盲目になつても大層ない、の言葉に夫も元の脚に取まることを決心、神仏はお慈悲が深いから(一度明けた目が)と妻の楽観的な考えも無様に砕けて靈障通りに。安座双シラリの夫に妻も下居にシラルが二人の胸のうち去来するものは……。献身的な妻に男のエゴを感じさせる夫、シテとアトの間答の勘切れのよい言葉の応酬が見事なら、「なう愛しい人こちへござれ」「手を引いて給れ」(写真)「心得ました」のキリの余情忘れ難く、好舞台。(37分)



豊田市能楽堂七月能 「綾鼓」 左より今井泰男、衣斐正直 (撮影・杉浦賢次氏)



豊田市能楽堂七月能 「二人袴」 左より河路雅義、大塚出、三宅近成 (撮影・杉浦賢次氏)

「七ツ子」を舞うこととなるが、太郎冠者に尻を見られてしまい、二人は大呆する男に面目失墜、穴があらは入りたといばかりに袴の半片を担ぐや(写真)兼へ一目散。 息男二人の成長をみて活躍の場を広げてきた三宅右近家、太郎冠者・右近が代動になり少々残念だが纏まった舞台だった。(37分)

「綾鼓」 女御(ツレ正直)の姿を見初めて恋着た、ならぬ卑しい庭掃きの老人(シテ泰男)の存在を知り、恋に上下は不問、とそれを不憫と感じた女御は池畔の桂の木に縁を張つた鼓を掛けさせ、へ鳴るものを打つて鳴れば姿を拝ませようとの仰せ、この経緯を従者(アト右近)に伝える臣下(ワキ茂好)の、恭くも有難くもといった口物の滲む重々しい詞が素晴らしい。アトに呼び出され舞を手に舞台へ入る老人(シテ泰男)、臣下から委細を聞き地次第(章・淳雄・泰行ら)の地取(時の鼓を打たうよ、で舞を肩に替えると、そうでなくてささ老いの身でへ思ひを添ふる傳

同席を言われ、窮余袴を半分に取り裂き前へ当て誤魔化すも、祝喜となつて舞は肩に肩から舞を勧められ窮まる進退。右近と近成は役の上と同様親子、包容力のある老練な親が伴を盲く誘導する図式は、もつと長い舞をとの所望に「あはれ、杖」も後ろを見せず無事に舞えば、キリは目出度く三人連舞でと男のたつての願い。因縁する親も伴もともども注意散漫にならざるを得ず、倒頭太郎冠者に尻を見られてしまい、二人は大呆する男に面目失墜、穴があらは入りたといばかりに袴の半片を担ぐや(写真)兼へ一目散。 息男二人の成長をみて活躍の場を広げてきた三宅右近家、太郎冠者・右近が代動になり少々残念だが纏まった舞台だった。(37分)

「綾鼓」 女御(ツレ正直)の姿を見初めて恋着た、ならぬ卑しい庭掃きの老人(シテ泰男)の存在を知り、恋に上下は不問、とそれを不憫と感じた女御は池畔の桂の木に縁を張つた鼓を掛けさせ、へ鳴るものを打つて鳴れば姿を拝ませようとの仰せ、この経緯を従者(アト右近)に伝える臣下(ワキ茂好)の、恭くも有難くもといった口物の滲む重々しい詞が素晴らしい。アトに呼び出され舞を手に舞台へ入る老人(シテ泰男)、臣下から委細を聞き地次第(章・淳雄・泰行ら)の地取(時の鼓を打たうよ、で舞を肩に替えると、そうでなくてささ老いの身でへ思ひを添ふる傳

さ、にシラルと、切ない胸中ひしひしと伝わる。弥増す恋慕の思いに、乱れ、苦しみ、迷う心を恋べるサシからクセ。クセの前半は居クセ、人生の在り様を知りながら、なぜかそのみに迷ふらん、とシラリ、上ノ端あつと音に立たば、と立つと鼓の前へ。へ老の衣手力添へて、へ打てども、と扇で鼓を打ち、へ聞えぬは、へもしも、と地謡の呼吸にシテの拳掛が巧みに感応するところ流石に老練。鳴らぬ鼓を淫しみ、へ何とて音は出でぬぞ、とがつくり膝をつきシラル老人の哀れ。ロンキの中、へ鼓も鳴らすへ人も見えず、と居立つて左右に面使と、神でさえ思ふ仲は裂けないと聞くが何故逢える縁が、と落胆の安座に己れを恨みへ人を託ら、と双シラリ、へ斯くては何の為、に生きている意義が、と立ち、へ身を投げて、と左膝つき入水の心、返シ句に送り笛で静かに舞へ。

次いで従者が常座で悲劇的な恋の願末を立シヤベリに独白のあと、老人の入水を臣下に伝え退くと、臣下は女御に事の次第を奏上、床几を立止致に向かつて立つ女御は真心の魂、出端(幸弘・清次郎・崇志・照夫)で老人の怨霊(後シテ泰男)が出る、と一ノ松、言語に絶する執心の恨みは、へ一念瞋悪の邪怨の恨み、と踏む鼓拍子の恐ろしさ。舞台へ入つては、へ鳴るものを打つて見給へ、と鹿背柱に響え白地の打杖掻い込み、女御に迫つて袖に手を掛け引き立てんとするところ(写真)凄まじい鬼気、へ打てや打てやと、打杖振り立て、へ懲りや、と拍子一ツ強く踏むところには鈍くなき執念が籠る。女御に対する因果応報は怨霊にも。キリは悪逆と復した怨霊、へあら恨めしや恨めしや、と女御を呪詛、へ恋の淵にぞ入りにける、と女御にアシラヒ、右ウケ、胸杖に膝をつき沈んでトメた。

庭掃きの老人の女御に対する執心は、取りも直さずシテの米寿翁・今井泰男の能への求道の心、感銘した。(1時間4分・7月18日・豊田七月能・豊田市能楽堂)

NHK放送予定(平成21年10月~11月)

10月25日 NHK-FMラジオ能楽鑑賞(毎週日曜日7時15分~8時)
 11月1日 素謡「紅葉狩」(観世流)津村權次郎ほか
 11月8日 素謡「龍田」(観世流)角寛次郎ほか
 11月15日 素謡「定家」(宝生流)三川津雄ほか
 11月22日 素謡「綾鼓」(金剛流)豊嶋三千春ほか
 11月29日 素謡「船弁慶」(再)(宝生流)渡辺尚之助ほか
 11月29日 狂言「舟弁慶」(和泉流)三宅石近ほか

●NHK教育テレビ(15時~17時)
 11月8日 能「岩舟」(金春流)
 狂言「鬼瓦」(大蔵流)
 能「鷲」(宝生流)

演能力ランダー

◆名古屋能楽堂◆

10月	名古屋能楽堂10月定例公演	(有料)
23日(金)	狂言「鳳の会」第52回公演	(有料)
24日(土)	交	(無料)
25日(日)	大	(無料)
11月	名古屋金春会友会	(午前の部・無料)
1日(日)	名古屋金春会特別公演	(午後の部・有料)
	名古屋金春会定例公演	(番組①面)
	名古屋金春会定例公演	(番組②面)
	名古屋金春会定例公演	(番組③面)
5日(木)	名古屋山狂言会会定例公演	(有料)
8日(日)	名古屋山狂言会会定例公演	(有料)
14日(土)	名古屋山狂言会会定例公演	(有料)
15日(日)	名古屋山狂言会会定例公演	(有料)
19日(木)	名古屋山狂言会会定例公演	(有料)
21日(土)	名古屋山狂言会会定例公演	(有料)
22日(日)	名古屋山狂言会会定例公演	(有料)
28日(日)	名古屋山狂言会会定例公演	(無料)

能楽の友

発行能楽の友社

名古屋千種区千種2丁目18-18
 (郵便番号 464-0858)
 電話 (052) 731-798 4
 FAX (052) 733-283 7
 振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円
 1年 1800円
 郵送の場合 1100円

能「二人静」新作「舍利」

12月11日 名古屋能楽堂
 中京テレビ放送主催

中京テレビ放送主催による「名古屋御前能」が12月11日(金)名古屋能楽堂で、昼夜2部制で始めて開催される。

この「名古屋御前能」は、「名古屋祭」名古屋初、名古屋でしか見られない、養華出演旗、を纏う企画で、出演は昼の部に梅若玄、大槻文蔵、片山清司、野村小三郎による能「二人静」はじめ舞

ユネスコによる無形文化遺産 「能楽」第2回公演

12月5日 国立能楽堂

ユネスコによる無形文化遺産「能楽」第2回公演が12月5日(土)国立能楽堂で開催される。

主催は、社団法人能楽協会、協力：独立行政法人日本芸術文化振興会。

能楽は、ユネスコ(国際連合教育科学文化機関)本部において、平成13年5月、世界の無形文化遺産保護の一環として行われた第1回「人類の口承及び無形遺産の傑作の宣言」を受け、更に平成20年11月の無形文化遺産保護条約に基づき、「人類の無形文化遺産の代表的な「一覧表」に初めて登録された。

このたびの公演は、能楽が後世に伝えるべき貴重な人類の財産として広く世界に認定されたことを記念し、より優れた舞台を人々に鑑賞してもらうことを目指して開催されるものである。

能組は次のとおり。
 能(宝生流)「半部」シテ高橋章、ワキ榎王茂十郎、笛・杉市和、小鼓・亀井俊一、大鼓・柿原崇志、アイ茂山千之丞 後見宝生和英、武田孝史、地謡三川泉、前田晴啓ほか

能「二人静」(新)「舍利」

12月11日 名古屋能楽堂
 中京テレビ放送主催

能「二人静」(静御前・梅若玄、舞姫子、狂言、夜の部は、新作「舍利」舞姫子、狂言、加えて昼の部には箏曲「吉野静」(立方・藤間勤十郎)夜の部は、能と舞踊による新作「舍利」(梅若玄、藤間勤十郎)のダイナミックな所演が注目される。

「昼の部」(午後1時開演)
 舞姫子「高砂」八段之舞(片山清司、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・河村眞之介、大鼓・観世元伯)

狂言「柑子使」(柑子売・野村小三郎、亭主・奥津健太郎、太郎冠者・野村信朗)

能と舞踊による新作「舍利」(晝駄天・藤間勤十郎、足疾鬼・梅若玄、梅若玄、梅若玄)

チケット料金SS1500円、S1200円、A900円、B500円

発売所 チケットぴあ0570・02・99999(ポコ1395・848) ロンチチケット0570・084・004(1コ146222)

問い合わせ、申込みは中京テレビ事業部052・957・3333(名古屋市中区錦3-15、C-TVビル6F)

能「観世流」(観世流)「空之働」

シテ関根祥六、ワキ玉生岡、ワキツレ殿田謙吉、アイ善竹十郎、笛・一噌仙幸、小鼓・大倉源次郎、大鼓・亀井忠雄、大鼓三島元太

後見・野村四郎、関根祥人、高橋弘、地謡・観世鏡之丞、武田志厚ほか。開演午後1時30分。

入場料金(全席指定)S席二〇〇〇円、A席一〇〇〇円、B席八〇〇円、C席六〇〇円

取扱いは国立能楽堂(窓口販売のみ)チケットぴあ0570・02・99999、びあ全国各店舗、ロンチチケット0570・084・003 問い合わせ能楽協会(電話03・59225・3871)

記第30回 名古屋金春会特別公演

十一月一日(日) 午後二時開演
 名古屋能楽堂

仕舞 養老 中村 昌弘
 融老 辻井 八郎

狂言 竹生島参 シテ 野村小三郎 アト 松田 高義
 後見 伴野 俊彦

仕舞 放下僧小歌 金春 豊和
 松風 高橋 忍

狂言 百方 飯富 雅介 河村 総一郎 鬼頭 義命
 野村 小三郎 後藤 孝一郎 鹿取 幸世

能 乱 鬼頭 尚久 河村 眞之介 加藤 洋輝
 高安 勝久 船戸 昭弘 大野 誠

主催 名古屋秀麗会
 名古屋春栄会

「チケット料金・申込み」
 正面指定席五〇〇〇円
 中ワキ自由席四〇〇〇円
 名古屋能楽堂(0522・231・7038)
 名古屋金春会(0522・842・7931)

記第32回 名古屋金春流友会

十一月一日(日) 午前十時開演
 名古屋能楽堂

連鈴 鶴 亀 シテ 鈴木 靖一郎 五郎 丸 林 健功
 山田 信善 立 兼 千 村 健 人
 地謡 伏原 靖二 古 兼 林 田 信 善
 鬼 五 郎 酒 井 泰 幸
 田 三 郎 加 藤 英 昭
 十 郎 伏 原 靖 二
 五 郎 小 島 芳 樹

狂言 賞 聲 後藤 嘉津幸 大野 誠
 藤 戸 シテ 小 野 瀬 莊 樹 小 島 芳 樹
 夜 討 曾 我 河 村 眞 之 介
 後 藤 嘉 津 幸 大 野 誠
 早 打 伊 藤 泰

仕舞 春日龍神 寺田 まち子
 小 鍛 冶 神 約 谷 桂 子

仕舞 柳 野 松本 久子

仕舞 芦 崎 キリ 前田 孝登
 柏 崎 水 見 泰 子

仕舞 竜 羽 衣 キリ 箕 浦 郁 子
 田 加 藤 剛 剛

二 井 寺 連 行 豊 田 均 均
 井 尚 水 吉 容 子
 寛 願 寺 林 由 華
 田 七 後 藤 美 代 子

仕舞 六 浦 キリ 箕 浦 連
 花 月 キリ 広 瀬 雅 弘
 藤 山 は る 江

仕舞 紅葉狩 沢田 典子
 狸 々 大 野 子 賀 子

(二時二十分終了)

主催 名古屋秀麗会
 名古屋春栄会
 アソソシ謡曲部
 名古屋春蔵会
 トヨタ車体謡曲部
 O B 会

名古屋観世会定例公演能

十一月八日(日) 十二時半開演
 名古屋能楽堂

能 蝉 丸 飯富 雅介 河村 眞之介 竹市 学
 橋本 幸 後藤 孝一郎

後見 梅田 嘉宏 吉沢 孝旭 加古 正敏
 片山 清司 地謡 本八八 久田 橋正
 須部 南 祖父 江修一

仕舞 放下僧小歌 高橋 豊一 八神 孝一
 柏崎 清行 久田 勘助 古橋 江修一
 須部 南

狂言 隠 狸 太郎冠者 野村小三郎 主 松田 高義
 後見 伴野 俊彦

仕舞 女郎花 片山 清司 地謡 武田 邦一
 武田 志

能 恋 重 荷 高安 勝久 河村 総一郎 加藤 洋輝
 野村 小三郎 久田 舞一郎 藤田 六郎兵衛

後見 久田 勘助 吉沢 孝旭 清沢 一政
 梅田 邦久 地謡 高橋 豊一 片山 清司 武田 邦一
 武田 志 古橋 正邦

附 祝 言 (終演 四時半頃)

主催 名古屋観世会
 事務所 名古屋市昭和区台町2-16 15

F A E L 0 5 2 8 4 1 4 6 3 2
 F X 0 5 2 8 4 1 4 6 3 2

お問い合わせ・申込み
 名古屋能楽堂(T E L 0 5 2 2 3 1 0 0 8 8)
 又は名古屋観世会事務所

茂山狂言会名古屋公演

十一月五日(木) 午後六時半始
 名古屋能楽堂

狂言 二九十八 女 茂山七五三
 茂山あきら

小舞 貝尽し 茂山十五郎

狂言 賞 聲 茂山十三郎
 茂山千作郎
 女 房 茂山 宗彦

狂言 花 子 茂山 茂
 茂山十之丞
 女 房 茂山 正邦
 観 者 茂山 正邦

附 祝 言

「チケット価格」(全席指定) 主催 茂山狂言会
 S席八〇〇〇円、A席五〇〇〇円 京都市上京区中筋通
 B席三〇〇〇円、学生二〇〇〇円 石薬師上ル
 「申込み」茂山狂言会事務局(T E L 0 7 5 2 2 2 1 8 3 7 1)
 チケットぴあ(0570・0275・2221・8371)
 (電話03・0225・9999、Pコ1395・402)
 Pコ1395・9999、Pコ1395・402)

当地の各流儀・流派・結社・ 社中の消息を辿る

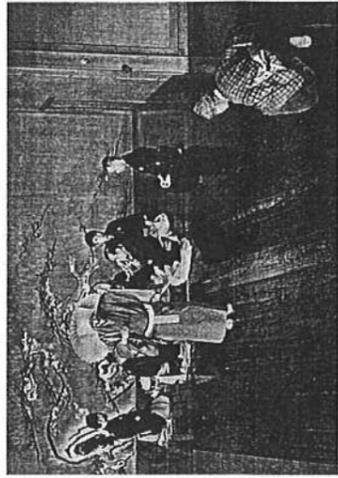
竹尾 邦太郎

三 「調友会」②

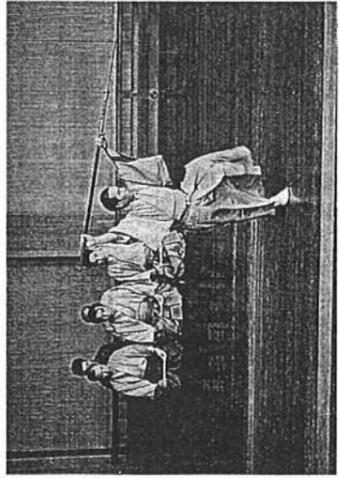
― 承前 ―

第七回は昭和四三年七月一日。能組は舞囃子二番「杜若」山田七三郎「阿漕」内藤泰二「仕舞」坂下博「柴田初太郎」舞囃子二番「船弁慶」長田勝一「龍田」山本博之「狂言」八尾「井上松次郎」佐藤卯三郎「調三番」駒之段「後藤孝一郎・山本博之(詠)」歌占「河村総一郎・辰巳孝(詠)」「春日龍神」野崎太郎「二井栄逸(詠)・能」天鼓・弄鼓之楽「山本真義・山本順之・高安滋郎・井上礼之助。大阪から山本博之一家の来演。

第八回は昭和四四年七月六日。調友会・代表の田鍋敏太郎は当日の出演者に次の案内(⑤画)を出す。能組は舞囃子六番「養老」有賀滋子(67)「八島」豊嶋三千春(30)「阿漕」粟谷菊生(47)「羽衣」梅若盛義(32)「颯」大



第11回 調友会
シテ井上礼之助
シテ左より 佐藤秀雄、佐藤卯三郎、吉田定男、福井孝幸
地囃子方(左より) 三男(撮影)



第11回 調友会
舞囃子「熊坂・働」長田 勝
山本 才、富田陽二、富田靖一、
和谷衛市、福岡周斎、二井栄逸
(撮影)

金剛流・花間会教舞台閉の会では、「五色の会」第十一回能を観る公演をきたる十二月二十三日(水)・祝花間会教舞台(岡崎市大西町奥長入47-14)で開催する。「五色の会・能を観る」(主宰羽多野良子師)は今回で第十一回目の公演、毎年愛好者多数の鑑賞で歴史の街・岡崎に古典芸能の流を醸成、期待されている。補佐は 金剛流宇高連成師。後援岡崎市教育委員会。

入場料は前売五〇〇円 当日五五〇円、高校生以下三〇〇円。問合せ0564・23・4364

仕舞「通小町」宇高連成、地謡廣田幸稔、宇高竜成、竹市幸司、宇高徳成
狂言「痺」しびり 主、野村小三郎、太郎冠者、野村信朗、後見・松田高義
能「邯鄲」シテ羽多野良子、舞臺 倉知益巨、ワキ菅安勝久、ワキツレ相元正樹、女仙王・野村小三郎、笛、鹿取希世、小鼓、後藤孝一郎、大鼓、河村眞之介、大鼓、加藤洋樹
後見、廣田幸稔、小嶋梨辺華、伊藤雅子、地謡・宇高連成、宇高竜成、竹市幸司、百々康治、宇高徳成、天野幸輔

五色の会 能「邯鄲」上演

12月23日 岡崎 朋の会主催

豊春会秋の能

京都 金剛流・豊春会は、十月十八日金剛能楽堂で、豊嶋三千春師が古稀を迎え、これを記念して「豊春会秋の能」を開催した。

能「高嶋子折」シテ豊嶋幸洋、ワキ福王茂十郎、狂言「萩大名」シテ茂山十五郎、能「乱」シテ豊嶋三千春。

松野恭憲能の会

京都 金剛流「松野恭憲能の会」は、きたる11月8日(日)金剛能楽堂で第18回能の会を開催する。

宝生のワークショップ

11月3日名古屋能楽堂
きたる11月15日(日)名古屋宝生会定式能上演の「班女」殺生石のワークショップ(鑑賞のための研究会)が11月3日(火)祝名古屋能楽堂会議室で開催される。午前10時から11時半まで、参加費無料。

問い合わせは、能楽師竹内淳子(TEL・FAX052・782・4171)和久狂太郎(TEL・FAX03・3949・7395)。

能「松風」小書一式之習(松野恭憲、ツレ豊嶋晃嗣、ワキ村山私)。午後1時30分始曲。
入場料(全席自由)前売券七〇〇円、当日券八〇〇円。取扱所「松野恭憲能の会事務局」(☎075・462・2148)ほか金剛能楽堂、絵書店、出演楽師宅。

多入島去子 近藤幸江
舞囃子 後藤孝一郎 鹿取希世

幸謡会 能

十一月十四日(土)十二時半開演
名古屋能楽堂

仕舞 難波 加藤 春枝
小部 鍛冶 前野 郁子
鍛冶 治郎 久田 三津子
鍛冶 村井 邦子

清 能

後見 武富 康之 地謡 吉沢 孝充
泉 嘉夫 須部 甫 上田 拓司

近江八景 舞囃子 自然居士

大槻 文藏 後藤孝一郎 鹿取 希世

附祝言 主権 幸 謡 会

近藤 幸江
岡崎市鴨田本町十一二三
TEL(〇五六四)二一一二五九
会員券 五十円(全席自由席)

名古屋宝生会定式能

十一月十五日(日)午後一時始
名古屋能楽堂

班女 能

竹内 淳子 飯富 雅介 河村 総一郎 鹿取 希世
相元 正樹 後藤 嘉津幸

狂言 不見不聞

大筋 野村 小三郎 主 藤波 徹
後見 伴野 俊彦

殺生石 能

和久 狂太郎 高安 勝久 船戸 眞之介 大野 義命
井上 清浩

幸謡会 能

十一月十四日(土)十二時半開演
名古屋能楽堂

仕舞 難波 加藤 春枝
小部 鍛冶 前野 郁子
鍛冶 治郎 久田 三津子
鍛冶 村井 邦子

清 能

後見 武富 康之 地謡 吉沢 孝充
泉 嘉夫 須部 甫 上田 拓司

近江八景 舞囃子 自然居士

大槻 文藏 後藤孝一郎 鹿取 希世

附祝言 主権 幸 謡 会

近藤 幸江
岡崎市鴨田本町十一二三
TEL(〇五六四)二一一二五九
会員券 五十円(全席自由席)

名古屋宝生会定式能

十一月十五日(日)午後一時始
名古屋能楽堂

班女 能

竹内 淳子 飯富 雅介 河村 総一郎 鹿取 希世
相元 正樹 後藤 嘉津幸

狂言 不見不聞

大筋 野村 小三郎 主 藤波 徹
後見 伴野 俊彦

殺生石 能

和久 狂太郎 高安 勝久 船戸 眞之介 大野 義命
井上 清浩

幸謡会 能

十一月十四日(土)十二時半開演
名古屋能楽堂

仕舞 難波 加藤 春枝
小部 鍛冶 前野 郁子
鍛冶 治郎 久田 三津子
鍛冶 村井 邦子

清 能

後見 武富 康之 地謡 吉沢 孝充
泉 嘉夫 須部 甫 上田 拓司

近江八景 舞囃子 自然居士

大槻 文藏 後藤孝一郎 鹿取 希世

附祝言 主権 幸 謡 会

近藤 幸江
岡崎市鴨田本町十一二三
TEL(〇五六四)二一一二五九
会員券 五十円(全席自由席)

名古屋宝生会定式能

十一月十五日(日)午後一時始
名古屋能楽堂

班女 能

竹内 淳子 飯富 雅介 河村 総一郎 鹿取 希世
相元 正樹 後藤 嘉津幸

狂言 不見不聞

大筋 野村 小三郎 主 藤波 徹
後見 伴野 俊彦

殺生石 能

和久 狂太郎 高安 勝久 船戸 眞之介 大野 義命
井上 清浩

附祝言

(終了予定 四時半頃)

主権名古屋宝生会

名古屋市昭林区御蔵所
3-23-19-1 観
衣 斐 正 直 方
8 8 2 5 6 0 0

TEL・FAX(052) 882・5600
TEL・FAX052・782・4171(市内方)
03・3949・7395(和久方)
又は名古屋宝生会

名匠狂言会

十一月十九日(土)
午後六時半開演
名古屋能楽堂

千鳥

大筋 藤山 十之丞 主 茂山 あきら
酒屋の亭主 茂山 五郎
後見 茂山 茂

文荷

大筋 佐藤 友彦 次郎 冠者 井上 清浩
主 野村 小三郎
後見 佐藤 融

舟渡智

船頭 野村 万作 坂 石田 幸雄
後見 高野 和憲
月崎 博夫

附祝言

TEL(〇五六四)二一一二五九

名匠狂言会

十一月十九日(土)
午後六時半開演
名古屋能楽堂

千鳥

大筋 藤山 十之丞 主 茂山 あきら
酒屋の亭主 茂山 五郎
後見 茂山 茂

文荷

大筋 佐藤 友彦 次郎 冠者 井上 清浩
主 野村 小三郎
後見 佐藤 融

舟渡智

船頭 野村 万作 坂 石田 幸雄
後見 高野 和憲
月崎 博夫

附祝言

(終了予定 四時半頃)

主権名古屋宝生会

名古屋市昭林区御蔵所
3-23-19-1 観
衣 斐 正 直 方
8 8 2 5 6 0 0

TEL・FAX(052) 882・5600
TEL・FAX052・782・4171(市内方)
03・3949・7395(和久方)
又は名古屋宝生会

名匠狂言会

十一月十九日(土)
午後六時半開演
名古屋能楽堂

千鳥

大筋 藤山 十之丞 主 茂山 あきら
酒屋の亭主 茂山 五郎
後見 茂山 茂

文荷

大筋 佐藤 友彦 次郎 冠者 井上 清浩
主 野村 小三郎
後見 佐藤 融

舟渡智

船頭 野村 万作 坂 石田 幸雄
後見 高野 和憲
月崎 博夫

附祝言

TEL(〇五六四)二一一二五九

名匠狂言会

十一月十九日(土)
午後六時半開演
名古屋能楽堂

千鳥

大筋 藤山 十之丞 主 茂山 あきら
酒屋の亭主 茂山 五郎
後見 茂山 茂

文荷

大筋 佐藤 友彦 次郎 冠者 井上 清浩
主 野村 小三郎
後見 佐藤 融

舟渡智

船頭 野村 万作 坂 石田 幸雄
後見 高野 和憲
月崎 博夫

附祝言

(終了予定 四時半頃)

主権名古屋宝生会

名古屋市昭林区御蔵所
3-23-19-1 観
衣 斐 正 直 方
8 8 2 5 6 0 0

TEL・FAX(052) 882・5600
TEL・FAX052・782・4171(市内方)
03・3949・7395(和久方)
又は名古屋宝生会

名匠狂言会

十一月十九日(土)
午後六時半開演
名古屋能楽堂

千鳥

大筋 藤山 十之丞 主 茂山 あきら
酒屋の亭主 茂山 五郎
後見 茂山 茂

文荷

大筋 佐藤 友彦 次郎 冠者 井上 清浩
主 野村 小三郎
後見 佐藤 融

舟渡智

船頭 野村 万作 坂 石田 幸雄
後見 高野 和憲
月崎 博夫

附祝言

TEL(〇五六四)二一一二五九

名匠狂言会

十一月十九日(土)
午後六時半開演
名古屋能楽堂

千鳥

大筋 藤山 十之丞 主 茂山 あきら
酒屋の亭主 茂山 五郎
後見 茂山 茂

文荷

大筋 佐藤 友彦 次郎 冠者 井上 清浩
主 野村 小三郎
後見 佐藤 融

舟渡智

船頭 野村 万作 坂 石田 幸雄
後見 高野 和憲
月崎 博夫

「能楽の友」紙に助成金

平成21年度 愛銀教育文化財団

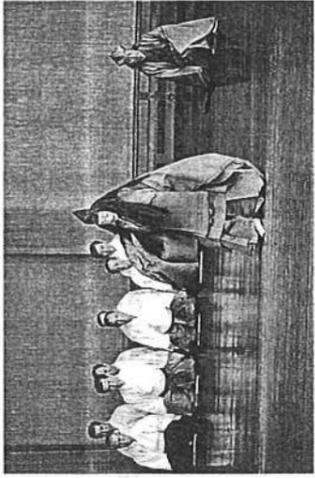
愛知銀行では、財団法人愛銀教育文化財団(小出眞理理事長)を組織して、地域の文化・教育事業を推進する個人、団体および高校生の文化・体育活動への助成、援助を図っているが、ことし第20回を迎え、多数の応募のなかから、「能楽の友」紙ほか個人7団体10組織、高校6校が選ばれ、さる10月2日午前11時から名古屋市中区栄のヒルトン名古屋5階「金扇の間」で助成金贈呈式が行われた。

席上、愛銀教育文化財団の役員紹介ののち、小出理事長は祝辞とともに、さらなる文化、教育活動の推進を期待したいと顕彰と助成の挨拶を述べた。

財団の概要
所在地 名古屋市中区栄3-14-12(愛知銀行本店内)
設立 平成2年4月1日
目的 愛知県内の各地域における教育・文化活動に携わる個人および団体への助成
なお平成21年度(第20回)の助

成および援助対象先、個人は次のとおり。

「一般助成」(個人) 11敬称略
村上正美:多様なアプローチから学習意欲向上をめざす国語指導▽加藤佳代子:声楽とヒトオド楽器(古楽器)による室内楽▽鈴木林蔵:演劇の企画・出演▽加野昭二郎:流儀を超えた能楽新聞の発行▽西村一成:絵画制作▽清水陽子:彫刻・油画・映像インスタレーション制作▽木村亮伯:木彫・油絵具彫刻制作▽稲垣知子:尾三大名の親族・相継法に関する研究
なお団体では、知多美浜松露研究会▽奥田海岸の松林の復活・活性化▽豊田市民合唱団(合唱音楽の普及と地域文化の向上)など10団体。



第111回 調友会「融・十三段ノ舞」シテ片山慶次郎、ワキ西村欽也(左より)青木武弘、橋本謙道、河村証二、杉村竹翠、前田邦久、片山博太郎、久秀雄(撮影・高辻幸一)

②面よりつづき
三郎、一調三番「駒之段」福井啓次郎・瀬尾辰之(詠)「橋弁慶」河村総一郎・和島富太郎(詠)「遊行柳」鬼頭豊太郎・辰巳孝(詠)、能「葵上・梓之出・空之祈」梅若猶義・梅若修一・高安滋郎・西村欽也、佐藤秀雄。舞囃子はシテ方五流、前々回に続き梅若猶義家門が来演。

昭和四十七年は当調友会代表の田鍋惣太郎が旧臘四日、脳内出血に因り八七歳を一期に急逝、当年になつて四月八日、惣太郎の後嗣惣一郎も父の後を追うように食道ガンを死去、休会の已むなきに至る。

昭和四十八年七月二日、田鍋惣太郎、惣一郎の父子と、昭和四五年に死去した惣太郎の一番古い弟子・青木恒治との三氏追善と銘打つ第一一回が催される。能組は連吟「海人」山田仁三郎・大塚二一・片野東四郎、舞囃子「羽法師」柴田初太郎、能「百万・法楽之舞」片山博太郎、清司(子方)高安滋郎、佐藤卯三郎、舞囃子「羽衣・盤渉」内藤繁二、一調「勸進帳」幸次郎、福岡周斉(詠)、舞囃子

「那耶・盤渉」辰巳孝、狂言「祐善」井上松次郎(写真②面)井上礼之助・大野弘之、一調「六浦」鬼頭八郎・梅田邦久(詠)、舞囃子「熊坂・勸」長田颯(写真①面)半能「融・十三段之舞」片山慶次郎(写真③面)西村欽也。

小笠方幸清流の三氏追善に東京から幸田次郎宗義が手向けの一調を勧めるが、また、田鍋惣太郎の最後の舞台となつた昭和四十六年一月二一日、名古屋観世会「野宮」のシテ片山博太郎と副地頭、片山慶次郎の兄弟がそれぞれ手向けの能を勧め、この「野宮」の半ば、体調が悪くなつた田鍋惣太郎に急遽交替した一番弟子の後藤孝一郎が此の能二番を勧めたのも床しく思われ強く印象に残る。斬新な企画で夏の名物催能だった調友会も惜しま

れながら第一一回で終幕を迎えることになった。

「調友会の足跡」
37年7月7日 舞囃子(1)舞囃子(4)素囃子(1)一調(1)小舞(1)能(1)
38年7月6日 舞囃子(4)素囃子(1)一調(2)(※一管を含む)小舞(2)能(1)
39年7月26日 舞囃子(4)素囃子(1)一調(3)(※連管を含む)小舞(2)能(1)
40年6月6日 舞囃子(4)一調(3)(※一管を含む)狂言(1)能(1)
41年7月24日 舞囃子(4)素囃子(1)一調(2)狂言(1)能(1)
42年7月2日 舞囃子(4)素囃子(1)一調(1)仕舞(2)狂言(1)能(2)ノ西尾・金森・小島三氏退善
43年7月14日 舞囃子(4)一調(3)仕舞(1)狂言(1)能(1)
44年7月6日 舞囃子(6)一調(3)狂言(1)能(1)
45年7月5日 舞囃子(5)一調(3)狂言(1)能(1)
46年7月4日 舞囃子(5)一調(3)狂言(1)能(1)
48年7月22日 舞囃子(4)一調(2)狂言(1)能(1)連吟(1)ノ青木恒治・田鍋惣太郎・田鍋惣一郎三氏追善

◆晩夏から初秋舞台◆

「日本能楽会・名古屋公演」 「人間国宝・茂山千作の世界」と「豊田市能楽堂九月能」 「名古屋能楽堂九月定例公演・初秋能・第一部」

竹尾邦太郎

「景清・松門之出」流罪の父・景清(シテ勸進)を従者(トモ修一)と尋ねる娘・人丸(ツレ嘉彦)、道行の連吟が佳。彼地に着けば、父その人とも知らず薬屋から聞こえる呻吟にも似る声。身から出た錆とはかりに自身を奇み、来し方を述懐するいわゆる松門の語に人生の深みが。初回 邦久・邦弘・正邦らへ染むべき袖の浅ざれと、沙門帽子・小笠子着付・障緑色大口・黒木衣、髷有面の景清。訪う相手は見えずとも一旦は娘と察する景清。果が娘に及ぶを怖れ、また、盲目老残の身を曝すを善しとせず追い返すところ、面右に傾け去る足音を聞く心は、父娘ゆえに名乗らずにいた苦渋の独白、地謡と相俟ち響きつける。

里人(ワキ勝久)との出遇いで、従者は里人との問答に件の食が景清と知り、事情を知つて里人は景清の近況を語り、先方へ案内を買つて出る意気込み、気合いの入つたワキ語がよい。大声で呼びかけ柱を叩く里人に、「姦し姦し」と両手で耳を掩うと、胸中穏やかならざる景清も、相手が里人であつて自虐、へ片輪なる身の難として、と薬屋の柱を両手に挟み、里人に合掌、憐み心を語り、盲目ゆえの研ぎ澄まされた神経は人の心も、自然界の移ろいも分るとばかりに、へ山は松風、と左士を眺め、潮声を右に小首傾けて聴く

と、波の音に触発されたように立ち、物語でお慰めを、と杖をつき薬屋を出ると里人に向き合ひ下居、両手をつき改めて非礼を詫びると問答になる。先刻事を承知の里人に訪ね人の有無を願される景清、娘人丸と対面すれば、父をなじりつつ傍へ寄る人丸。親の慈悲はへ子に依りけるかや、とシラレはまじしくと娘の顔を見詰め、名乗れば親が乞食と知れる苦衷、右手を娘の肩にかけるところ、娘を辛い目に合わせている景清の胸中も思われ切ない。

往時の偏狭な性(さが)のへその報いに、で相抱擁せんばかりの、父娘の顔も触れる濃密な愛情表現に吃驚したが、感極まつた激憤は離れる時も顔見交わしながら、娘に云つたばかりに古を回顧する景清、麒麟も老いては驚鳥に劣る、とがつくり安座に濃く寂しみ。娘の所望で語る源平屋島の合戦譚は床几で、重々しく語り出し思い入れたつぷりの印象は、語え随む六ツ拍子に戦場の有様。眼目の三保の合との組み討ちは、へ主は先へ逃げ延びぬ、で床几を立てつと目の離せない型の連続、中で腕の強さ、とじつと見たのが如何にもの感して面白かつた。

キリは真別の父娘、へ心さ

へ)乱れけるそや、と杖を指う景清、へはや立ち帰り、と娘を促す構に左手指し、立つとへ盲目の、と行きかゝる娘を杖で止め、左手娘の肩に掛け暫し惜しむ名残り、へさらばよ留る行くそとの、で娘は父を残し橋懸へ、この辺り情緒纏綿。景清は薬屋前、娘を見送り、二・三歩出てシラリ留メ。前半、気骨を見せた景清も娘と出逢つてからは軟化、写実に過ぎるところもあるが見応え充分だつた。(1時間23分)

「大般若」篤信家の施主(小アト弘之)の処で月例の檀家回りの僧(シテ友彦)が大般若經六百巻を読誦するところへ、これも神楽を上げにやつて来た巫女(アト高義)が鉢合わせ。読誦を邪魔され、神楽の鈴が直しと施主を介し巫女に文句を付ける僧に、勝負な巫女と神と仏は別、直しければ読誦せぬが定、と頑強。仲に立つ施主は大迷惑と思いきや、兩人の言ひ分を聞きはしてもおとり構え、成るようにしか成らないと達観している趣、持ち味が良く出る。巴むなく巫女の鈴に對抗、声高らかに読誦する僧。いわゆる転読で、全巻の読誦に代え経題と経の一部だけを読み、折本を空中で翻転させる華やかな形式で修するが、手綺麗とはゆかず、少々乱れたのは見せ場でもあるので残念。見目好しの巫女へ心が乱れたらうか。うつつを抜かした僧は、好色ぶりを発揮すると巫女の尻を追い掛け、神楽を舞い出す始末。「今度は何へ来て舞あて下され」と舌舐りせんばかりの退従に、嫌悪もあらわな巫女、神と仏、女と男、の在り様も思われ面白かつた。

(20分)

「葵上・梓之出」照日ノ巫女(ツレ博暁)が扇座に就き、後見が本舞で出て病臥の葵上を敬敷する出小袖を正先に延べて退くと、臣下(ワキツレ)も何事も無く出、葵上に憑く物の怪を呼び寄せる梓弓に掛けるよう巫女に命じる。

ここで、筋遣から言えば、臥せつて居る葵上の処へ巫女が呼ばれ、扇を圍り臣下が出、巫女に口寄せをさせる、と先づうが、ツレの出が出小袖より先というのでは不審。

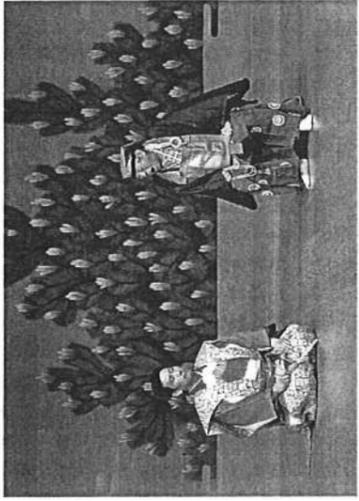
(④面へつづく)

久田観正会大会

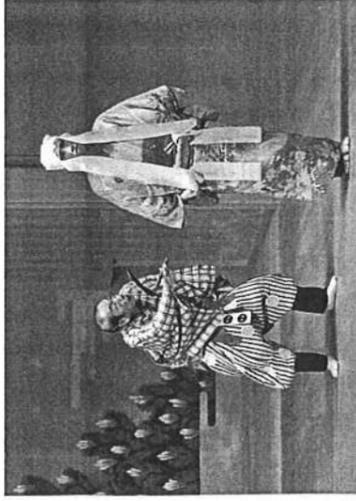
十一月二十二日(日) 午前九時半開演
名古屋 屋能楽堂

仕舞	嵐山	堤賢太郎
仕舞	清玉鶴	高木敬男
定松	家風	伊藤景義
		中里三紀子
		金井美晴
漫吟	田村	平澤貴久
		近藤利幸
素謡	百藤	鈴木久方
		小田あさ乃
		石黒道彦
		町田耀子
		池野章
		前川幸子
		久田勘鷗
能	経正	飯富雅介
		河村眞之介
		久田舜一郎
		鹿取希世
舞囃子	梅枝	志賀禮子
		河村眞之介
		久田舜一郎
		鹿取希世
雲林院	大久保由美	久田舜一郎
		鹿取希世
平成二十年年度	名古屋演劇ペンクラブ賞	
	「道成寺」赤頭 久田勘鷗 受賞式	
義経	寺澤拓海	
間山	寺澤幸礼	
	吉井善次	
	久田勘	
	藤谷善隆	
	笠岡昭雄	
	久保信一	
	梅若修一	
	上田公威	
シテ	赤坂岡田	飯富雅介
能	安宅	河村眞之介
		久田舜一郎
		竹市学
		鹿取希世
素謡	卒都婆小町	前川千鶴子
		久田勘鷗
		松山幸親
		後藤玲子
		上田貴弘
仕舞	狸塚	柴田雄次
		柴田得美子
		阿佳代子
		小田あさ乃
		後藤玲子
清柏半熊	野々	柴田雄次
		柴田得美子
		阿佳代子
		小田あさ乃
		後藤玲子
熊野	野	阿佳代子
		柴田得美子
		柴田雄次
		佐藤隆男
番外仕舞	敦盛	久田三津子
		久田勘鷗
菊慈	盛	久田勘鷗
		久田勘鷗
附祝言		——終了予定 六時頃——
		主催 久田観正会
		久田勘鷗 事務
		久田勘鷗
		TEL(〇五三)七〇五一—五八五

ご来場歓迎(入場無料)
お問い合わせ
名古屋市中区一社二一六一
久田勘鷗事務所
TEL(〇五三)七〇五一—五八五



茂山千作の世界「魚説経」 左より 茂山正邦、茂山千作 (撮影・杉浦賢次氏)



茂山千作の世界「鎌腹」 左より茂山千五郎、茂山茂 (撮影・杉浦賢次氏)

③面よりつづき
 巫女は「天澤津」と語り出し、そのアスサの呪文に「(奇り人は)今を奇り来る」と半筆で六条御息所(生霊(シテ正直))の下半身を見せるのが、いかにも幽界の一端を窺わせる趣で妙。次いで鎌を放れ三ノ松へ直つてシラリ、シラリ返して暫時、一ノ松へ出ると出小袖(袈裟)を鏡う心に見込み、二つ三つの車に法の道、と一七イを誦い、懐懐する胸中を吐露するかの陰々とした二ノ句を。大小アシラと(狐一・藤津幸)でひっそり舞台へ出るシテ、面黠眼・縁鏡・白地金襴袴着付・異地立巻・文鏡指階巻・紅白段唐織牽折の姿。小書「梓之出」で、己れの内

「魚説経」 發生を業として渡世を送る漁師の味気無さをふと思ひ、程も読めぬに安易に出家に転身するシテ千作、その融通無碍な思考回路の先は滞ることを知らない。行脚の差次、たま〜同連した檀那(アト正邦)が持仏堂を建てはしても無住で、なわれ、はそれに納まる臨機応変。さすれば着々早々、説法を求められ「何、説法をせよ」と一旦は動揺するも「磯々居直りませぬうち」と呟き一思案、後見が掛符を掛け(掛符はシテ自身の懐中から出すのでは)、檀那に床几を出させると、勿体ぶつて徐に「いで〜(鱈(さば)説法を述べんと)」と魚の名を繰り込み、秀句仕立ては言葉の抑揚も説法調に滔々と「まず説法

境を述べたる次第・サシ・下歌・上歌を省き、直ぐ誘い出された様の弓の音の出所を探るかに四辺へ面使にするシテ、へ姿なれば問ふ人もなし、と二・三歩退りシラル。通刀をもつ巫女にしか見えないうシテ、「もしかやうの人にては」と巫女に問い掛けられて、臣下は「大方は推量申して候、たゞ包まず御名のり候へ」と見えぬシテに巫女と連陰で迫る。これで正中へ出て来たシテは、娑婆に何時まで亡魂がさ迷ひ出たかを悔恨、シラルと胸中の思い吐き出すクトキ。六条御息所の怨霊を乗れ、在世、春秋の花と月も忍び寄る裏きに、へこれまで現れ出でたるなり、と巫女にアシラフところ、ふ

男は口をきく動きに出かけるつもりになるが、一早う山へ行きをれい「やい」の女屋の驚声に男の抱券を繰りつけた思ひは、腹巻せに縁で自殺する覚悟。下腹の辺りを揉みほぐし準備はするが、いざとなれば優柔不断、寸前まで行つても「どこも怪我は」「手が腫痛で」などと弱気、「一胃腹の走り立ち断念。この辺りの機微、千五郎たつぷりと大仰に見せて精彩。そこへ「やあくそれは誠に真実か」と夫が自殺するのを聞きつけた走り出た女房、思い留まるよう懇願すれば、死ぬ、と脅して女房の反応を試す男の嫌味が分らず、ならばわらはも「淵川へ身を投げ」と女房。それを聞いて男は女

キ雅介を迎えに連る。兜巾・中格子着付・白大口・萌黄地黒縹水衣・篠簿・小刀の姿。下人との問答に、他用を託けて參する、と勿体をつけるのが何となく可笑しい。ノットで藝士を加持する小聖を、袈衣の唐織にひっそりと踏まり様子を探るシテは、小聖の背後でなくスミに居るのが珍しい。立つとイノリに袈衣を胸に巻き、打ち振り上げるシテは白般若の陰しい形相に愛ひ小聖との闘争。シテ柱際で袈衣を捨てると身軽になり、柱を巻き、面切り、小聖を威嚇する物凄さも、速に折伏され、立つとへ有難さ、と合巻してトメ、堅実な舞台だった。(55分・8月16日・日本能楽会名古屋公演)

「花月」 切かされた我が子を辱ねるため發願・出家(トキ幸)行脚、都清水寺で門前(アト融)に何か面白い事と問えば、放下(天遣芝)をよくする花月(シテ郷)の売り込み役を任じているか、アとは即座に彼を呼び出す。花月は小歌に、へ身はさらさら、とアとの肩に手をやり、へ御座船も兵船も違かに、と一ノ松へ、船を追う心は雲ノ間に見送る虚脱感も。熊谷直実に追われ、前に草刈男の一行(シテ梓人ツレ・景村、昌司・梓丈)が野を分けて勢揃い。草刈の絶えぬ境を掴みしめるように、確りした連陰が素晴らしい。幸い生業と裏腹に、花籠・花苞を白布の括り紐に掛け、左手胸に押さえた姿は、常の挨拶より量があり実に華やか。また、小書ではシテが花籠を担げるところを、鎌だけをもち、刈つた草花はツレに持たせるのも理に適った演出の細心。笛を巡り、「その身にも応せぬ業」と不筆するワキに、「劣るをも腹しむな」と口跡きつぱりと反発する辺り氣品をみせるシテ。権歌牧笛の在の様を説くシテ・ワキの掛合、節尽しの初回(志勇・久広、重好ら)のうち



豊田市能楽堂9月能「教盛」二段之舞 脇之語、関根祥人 (撮影・杉浦賢次氏)

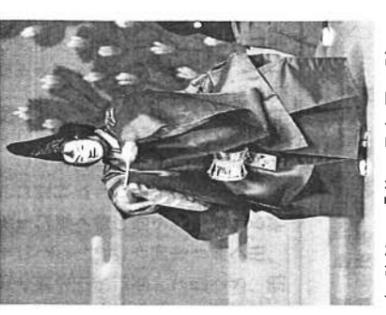


初秋能「鞍馬天狗・白頭」 前場、花月(左より) 武田邦弘、富田尚史 (撮影・杉浦賢次氏)

へ若我成仏云々、と経を連吟、中入地に茶姓更に暗示して送り笛(芝)で静かに入る。こゝで、アとの居語との重複を避けて小書「脇語」となる演出もある田だが、敢えて里人(アと講造)が出、居語に教盛討死のこと「許しくは存せぬ」とは言い条滔々と語る昂り。ついでアとの求めにワキの語る体験談は「教盛はあの渚の」と右ウケたとき、その先には茫々たる海が。抑制された沈痛な思いの語は沁々と、誓て己が行為を懺ぶかである。

後場は教盛の菩提を申うワキの待詠から一声で後シテ教盛ノ霊の出、面教盛・大口は黄色。念仏を介し、誓ての敵味方の因果は晴れて今は仏法の友、とシテ、ワキの掛合、てきばき展開し惹きつける。では、懺悔の物語を夜すがら、と茶華の儂なさは饜りの自覚に至る悲哀を述べくり・サシ・クセ、へ然るに平家、と床几を立ち舞う。へ拍子を揃へ声を上げ、と先を案じるも覚悟の真に舞う中之舞。不安なうかに勇壮に舞うが、三段を二段に早々舞上げるのは迫る危機。船で逃れる一門に

「花月」 切かされた我が子を辱ねるため發願・出家(トキ幸)行脚、都清水寺で門前(アト融)に何か面白い事と問えば、放下(天遣芝)をよくする花月(シテ郷)の売り込み役を任じているか、アとは即座に彼を呼び出す。花月は小歌に、へ身はさらさら、とアとの肩に手をやり、へ御座船も兵船も違かに、と一ノ松へ、船を追う心は雲ノ間に見送る虚脱感も。熊谷直実に追われ、前に草刈男の一行(シテ梓人ツレ・景村、昌司・梓丈)が野を分けて勢揃い。草刈の絶えぬ境を掴みしめるように、確りした連陰が素晴らしい。幸い生業と裏腹に、花籠・花苞を白布の括り紐に掛け、左手胸に押さえた姿は、常の挨拶より量があり実に華やか。また、小書ではシテが花籠を担げるところを、鎌だけをもち、刈つた草花はツレに持たせるのも理に適った演出の細心。笛を巡り、「その身にも応せぬ業」と不筆するワキに、「劣るをも腹しむな」と口跡きつぱりと反発する辺り氣品をみせるシテ。権歌牧笛の在の様を説くシテ・ワキの掛合、節尽しの初回(志勇・久広、重好ら)のうち



初秋能「花月」長田隼



初秋能「太刀薙」 今枝都雄(前) 佐藤友彦、大野弘之(右) (撮影・杉浦賢次氏)

に上りつ、と正先へ勝行して出るところなど目撃しあった。(55分)
 「太刀薙」 北野天神の祭の夜、太郎冠者(シテ都雄)と參詣に出向く主(アト弘之)、途中、通行人(小アト友彦)の持つ見事な太刀に目が留まると、「お氣に入つたならば取つて参りませうか」と飛んでもない事を言い出すシテ。「人の物を何と」とは言い条、満更でもない主、シテの言うま、護身の小刀を貰せば、早速実行にかゝる。明らかな無法は結局太刀を持つ通行人に奪われ、逆に主の小刀を取られるていたらく。小刀を取られた手前、あくまで太刀の奪取に拘るシテは、通行人の情道を狙い主と一緒に刃を捕らえようの算段。まんまと捕まはした者が縛り上げる縄がない。盗人を見て縄を縛う、の譬えそのま、(写真)とほけたシテ、朴直な主の持ち味がよく出て上々。話柄は感持しないが悪逆山獄の鬱悶気は捨て難い。(16分)

見の闖入者とされて疎外された山伏(前シテ邦弘)を旁り独り残る牛若丸(子方・尚史)。互いに言い合ふ心は、利発な子方の詞・諸に張りがあり力強く、山伏との問答が立派。花を襟に、へ此方へ入らせ給へや、と子方を介添の山伏は優にやさしく、茶姓を明かし兵法伝授を約してへ誓を踏んで、と一ノ松へ疾走、そこから歩を纏めて期する所があるを思わせ中入。後場 天狗(後シテ邦弘)は木葉付鹿茸杖の出。鬱然たる姿は、へ刃士に於ては、と素快に左袖返すとへ如堂が獄、と胸板に脾胃するところ大きい。へ風木枯、と囃子の高調に舞台へ、へ天狗倒しは、と鹿茸杖投げ捨てる音も効果。羽田圃を取り、腰長(真名公)の語りは正中床几。へ姿も心も荒天狗、と三ツ拍子強く踏み、へ師匠や(坊主と)、子方にアシラヒ、へ(大事を殺さず)伝へて、と羽田圃で子方を指シ、舞脚を抜くと、へ取り分きのかの舞の上は、と羽田圃を後見に遣して子方の長刀を取ると、へ纏れる平家を、と長刀刺きの鮮烈、へ繪巻を雪がん、と子方に長刀を戻し(写真)と、キリはへこれまでなりや、と子方に一礼、橋懸へ行けば子方は後を追つて一ノ松へ走りシテの袂を掴む。再び舞台へ戻る子方の、シテを養う姿勢が如業。シテは戻つて三ノ松、拍子一ツ踏みへ梢に翔つて、と左袖被き右ウケて留めた。重みをもせ大きな天狗だった。(1時間17分・9月6日・初秋能・第一部)

「先号の訂正」 2頁4段 フェーカスは「フーカス」
 4頁6段3行目 「負けたら要求する」は、「負けたらと要求する」

NHK放送予定(平成21年11月~12月)

- 11月29日 NHK-FMラジオ能楽鑑賞(毎週日曜日7時15分~8時)
12月6日 狂言「秀句傘」(和泉流)観世喜之ほか
12月13日 楽語「鉢木」(観世流)観世喜之ほか
12月20日 楽語「美上」(宝生流)金井雄資ほか
12月27日 楽語「朝政」(金春流)桜間金記ほか
楽語「三輪」(観世流)梅若万三郎ほか

演能力レンダー

名古屋能楽堂

Table with columns for dates (11月, 12月) and events (狂言三の会, 田観正会, 久郁会, etc.) with associated costs.

能楽の友

発行能楽の友社
名古屋千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-779 8 4
FAX (052) 733-283 7
振替口座 00800-6-36393
購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円

片山九郎右衛門氏

文化功労者顕彰
政府は10月27日、文化勲章、文化功労者の受章者を発表。能楽界から文化功労者として、観世流シテ方・片山九郎右衛門氏が受章、11月4日に東京・虎ノ門のホテルオークラで顕彰式が行われた。

名古屋能楽堂 新春謡初め

1月2日 整理券必要
初めを1月2日(土)名古屋能楽堂で開催

狂言共同社では、きたる11月29日(日)「豊田御酒落狂言会」(第3回)を豊田市能楽堂で開催する。午後1時30分開演。

名古屋市民文化振興事業団(名古屋能楽堂)能楽協会名古屋支部では、「新春謡初め」を1月2日(土)名古屋能楽堂で開催

豊田市を中心とした愛好者の方々にもぜひ鑑賞して頂きたいとの趣旨で平成19年に発足した「豊田御酒落狂言会」は今回で3回目を迎え、地元根づく狂言共同社

第3回 豊田御酒落狂言会

11月29日 豊田市能楽堂

はかハ舞囃子「高砂」(宝生流)佐藤耕司、ワキ高安勝久、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・船戸昭弘、大鼓・河村聡一郎、太鼓・加藤洋輝ハ狂言小舞「御田」(和泉流)佐藤友彦ハ舞囃子「八島」(喜多流)長田郷、笛・竹市崇、小鼓・後藤嘉建幸、大鼓・河村真之介、ハ連吟「鶴亀」(金春流)鬼頭尚久はかハ狂言「虎之語」(和泉流)野村小三郎ハ舞囃子「羽衣」(金剛流)百々麻治、笛・香取希世、小鼓・後藤孝一郎、大鼓・復鑑一、太鼓・鬼頭義命ハ舞囃子「狸々」(観世流)高橋暎、笛・大野誠、小鼓・福井四郎兵衛、大鼓・河村真之介、太鼓・加藤洋輝。

「お酒落」は狂言共同社創立の中心となった初代井上勘次郎、伊勢門水の諸師が当時流行した「傾楽部」(くらぶ)をもじり参加した「愛知酒落部」(あいちしゃらくぶ)に因っている。平成12年より名古屋で開催されている「御酒落名匠狂言会」は毎年好評を博している。

(TEL・FAX052・834・8607) 豊田市能楽堂(TEL0565・335・8200) 豊田市民文化会館(TEL0565・333・7111)

東文化小劇場 文化講演会

11月26日開催
名古屋市民文化振興事業団(名古屋市民文化小劇場、名古屋市民キヤラリ)矢田、名古屋能楽堂)では、東文化小劇場文化講演会として「天下統一の時代の能、狂言」でセミナーを開催する。講師は、「天下人秀吉が愛した能」朝日大学経営学部長教授・米田真理氏、「戦国武将と狂言」愛知淑徳大学非常勤講師・田崎未知氏、また囃子「早色」舞動

萩大名 大能者 寺田 勝哉 主人 井上 靖浩
痺 大能者 寺田 勝哉 主人 井上 靖浩
花折 新発意 佐藤 融

第3回 豊田御酒落狂言会

十一月二十九日(日)午後一時三十分 豊田市能楽堂

解説 豊田市能楽堂アドバイザー 能楽ジャーナリスト 柳沢 新治
番組は次のとおり
解説 豊田市能楽堂アドバイザー 1. 能楽ジャーナリスト 柳沢新治氏
狂言「萩大名」大名・井上靖浩、大能者・今枝郁雄、茶屋・大野弘之
狂言「痺」(しびり)大能者・寺田勝哉、主人・井上靖浩
狂言「花折」新発意・佐藤融、住持・佐藤友彦、花見客・今枝郁雄、今枝郁雄、大橋則夫、中島知亮、鹿島俊裕。

「鼓楽の会」が発足
12月20日 大阪能楽会館

大倉流小鼓方・久田舜一郎はこのたび舞台生活五十周年を記念して、後援会・松月会の支援のもと、「鼓楽の会」を発足させ、記念をきたる12月20日(日)大阪能楽会館で開催する。これと同時に門下の高橋泰子師が独立披露として半能「石橋」を上演、また、舞「三井寺」を勤め、鼓楽の会の発足を祝賀する。
主催・久田舜一郎後援会・久田松月会
観覧券は、前売A指定券1300円、B指定券10000円、2階自由席6000円、同学生席3000円(当日券はそれぞれ千円増)ただし前売券完売の際は販売されない
申し込み 郵便、電話、FAX、メールにより申し込み。
松月会 久田舜一郎/西宮市栢堂町6-30-201、電話079-8-73-6586、FAX07-

98-73-6586 久田舜一郎後援会事務局/大阪市北区芝田1-6-12「リサーチアート」内、電話06-6373-0476
大阪能楽会館(大阪市北区中崎西2-3-17、電話06-6373-1726)
「久田舜一郎師プロフィール」
能楽大倉流小鼓方、1944年生まれ。重要無形財総合指定保持者、大倉流十五世宗家・故大倉長十郎師に師事、日本能楽会会員、大阪能楽養成会講師、能楽協会大阪支部常務議員、第五回日本伝統文化奨励賞受賞、平成十九年大阪府知事表彰。社中会「松月会」主宰。(記念能書組は②面掲載)

「神楽」の上演(笛・大野誠、小鼓・後藤嘉建幸、大鼓・河村真之介、大鼓・加藤洋輝)が行われる。
入場料無料・定員349名、要整理券 問い合わせは、名古屋市民文化小劇場 電話719-0430。
同時開催として、能楽写真家協会会員・杉浦隆次氏撮影の「名古屋能楽堂定例公演写真展」が11月25日から29日(9時30分~午後7時、日曜日は午後5時まで)、名古屋市民キヤラリ矢田(名古屋市中区大幸南1-1-10、カルポ1ト東3階)で開催されている。協力・能楽協会名古屋支部。

(入場無料) (御来場歓迎)
主催 郁諷会 前野 郁子

演能案内

郁諷会大会

十一月二十九日(日)午前九時四十五分開演 名古屋能楽堂

Table listing performers and their roles for the Yufu Kai Taikai, including names like 吉野天人, 清経, 松風, etc.

当地の各流儀・流派・結社・ 社中の消息を辿る

竹尾 邦太郎

四 「麦の会」 ①

昭和四五年(一九七〇)一月二十五日に榮足した「和豊喜太郎(喜多流) 泉喜夫(観世流) 野村又三郎(和泉流)を観る会」の異流合同能については既に本誌で述べた

が、これに融発されたかのように同年秋、九月二六日、喜多流の長田麟(32)と宝生流の衣斐正直(26)が「麦の会」を立ち上げる。その初回の権能に当たり、両名は番組に連名で次のように挨拶と、抱負を述べている。

燦々と春の陽の光りに照り映え

て、まっすぐにすくすくと伸びる青い麦の姿は、雲の遣に携わる私たちに、この上ない美しさ、すがすがしさとを感じさせます。しかも、その麦は萌え出した芽を、踏まれ踏まれてこそ、立派に力強く生い育って行き、ここにもまた私たちは、深く教えられるものがあります。

を、はかりたいという念願からにほかなりません。就きましては、何卒この意図に御賛同下さいまして、恰も麦の芽を踏むお気持ちで、忌憚のない御批評と御叱正をいただき、やがて蕪熟の麦の秋を迎えることが出来ますよう、幾久しく変らぬ御指導と御援助を、切にお願い申し上げます。

昭和四十五年庚戌年

演能に先立ち、当地の著名な能評家にして能楽プロデューサーでもあつた西田三好(一九〇一―一九八五)の「本日の能について」の講演がある。因に講演は同じ題

(3)面へつづく)

狂言 神鳴 講 善竹 隆平 医師 善竹 隆司

一調 弱法師 狂 大坪喜美雄 大倉源次郎

後見 大槻文蔵 貴康 今村哲朗 山本正人 寺澤幸祐 水田雄雄 上田久田 貴弘 藤田六郎兵衛

能安宅 福王茂十郎 久田殊一郎 藤田六郎兵衛

仕舞 草子洗小町 寺澤杏海 久保信一朗 玉之段 八田三津子 地謡 久山本信一 老松 寺澤忠芳 寺澤幸祐

対談 「本日の能について」 評論家 池内厚郎 作家 玉岡かおる

十二月二十日(日)午後一時始 大阪能楽会館

鼓楽の会

舞台生活五十周年 「久田舜一郎後援会」

豊田市能楽堂

狂言づくし

豊田市能楽堂では、12月20日(日)、野村万蔵家勢揃いによる「狂言づくし」を上演する。

番組は、「鬼瓦」(シテ・野村祐丞、アト・吉住謙)「薬」(雀

・竹市孝、小鼓・後藤孝一郎、大

鼓・河村総一郎、太鼓・鬼頭義

念)「庵の梅」(シテ・野村萬、

アト・野村鳳丞、立衆・小笠原

匡、野村小三郎ほか)「牛盗人」

(シテ・野村万蔵、アト・野村萬

ほか)。

午後二時始、入場料/正面席六

〇〇〇円、脇・中正面席四〇〇〇

円。豊田市能楽堂 ☎0565・3

5・8200番。

〈終演予定 五時過ぎ〉

〈台後見〉 水田雄雄 藤田六郎兵衛 今村哲朗

後見 上田貴弘 久保信一朗 梅若 齋 吉井基晴 地謡 長山三三 上田拓司 梅若 善久生 知哉

半能 石橋 江崎 敬三 高橋泰王子 野口傳之輔

一調 一声 三井寺 大槻 文蔵 八田隆孝子

舞囃子 松風 寺澤 幸祐 荒木 舞光 赤井 啓三

名古屋大学観世会

定期自演能

十二月十二日(出) 午後一時始

名古屋能楽堂

能 「天鼓」

狂言 「因幡堂」

舞囃子 「賀茂」「七騎落」ほか

〔無料〕

能と舞踊による新作

舎利 兼真天 藤間勤十郎 足疾鬼 梅若 文祥

狂言 柑子儀 世元 野村小三郎 世元屋の若主 奥津健太郎 大徳 野村 信朗

舞囃子 天鼓 大槻 文蔵 河村鳳之介 観世 元伯 藤田六郎兵衛

〔夜の部〕

二人静 殿田 謙吉 河村鳳之介 藤田六郎兵衛 後藤 嘉津幸

能 古野静 芳 藤間勤十郎

寝音曲 太郎冠者 野村小三郎 主 奥津健太郎

狂言 寂音曲 大徳 文蔵 梅若 文祥

高砂 片山 清司 河村鳳之介 観世 元伯 藤田六郎兵衛

〔昼の部〕

番組

十二月十一日(金)

名古屋御前能

主催 名古屋市文化振興事業団

〈名古屋能楽堂〉

能楽協会名古屋支部

指定席 前売券 四〇〇〇円

自由席 前売券 三〇〇〇円

(当日券 各五〇〇円増)

前売券取扱い 名古屋能楽堂 (TEL052・2331・0088)

アレイカイト (栄アレイカイト92・松坂屋池)

チケットぴあ (TEL0570・02・9999)

ナディアパークPG (TEL052・2655・2015)

能三輪 衣斐 愛 観富 雅介 河村総一郎 加藤 洋輝 後藤 嘉津幸 大野 誠

狂言 井杭 井杭 野村 信朗 何某 松田 高義 亀田 野村小三郎

舞囃子 邯鄲 羽多野良子 河村鳳之介 加藤 洋輝 榎井 四郎兵衛 竹市 学

仕舞 願 長田 曉 地謡 長谷和谷 衛市 加藤 領一

仕舞 松風 廣瀬 雅弘 地謡 小島 英昭 金春 永田 者司 前田 登樹

後見 相父 江修一 地謡 本田 孝充 加藤 正徳 梅田 邦久 藤田 孝幸 古賀 敬一 藤田 孝幸 清武 邦久 藤田 孝幸 清武 邦久 藤田 孝幸 清武 邦久

能田村 武田 大志 高安 勝久 橋本 幸樹 佐藤 融 後藤 孝一郎 竹市 学

十二月十三日(日) 十二時半開演

名古屋能楽堂

名古屋能楽堂十二月定例公演

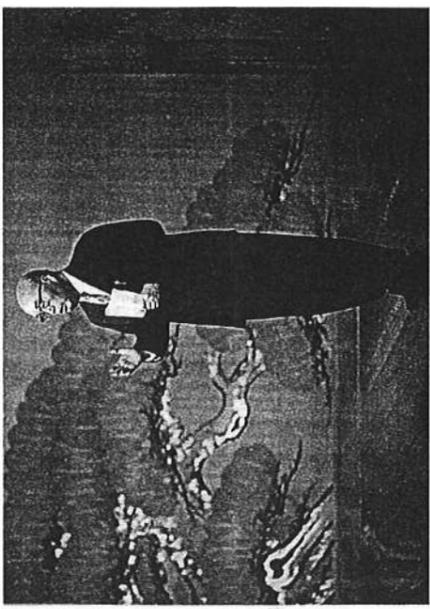
昭和45年9月26日（第4土曜日）午後2時 始非 一般招待
品 楽 会

熱田神宮能楽殿 直 正 新 日
熱田 衣 中
宮坂町1 驛 田 中
区 長 後
熱田市熱田区宮坂町1 驛 田 中 長 後
名古屋市長後

で第五回を除く初回から第一回まで毎回行われた。初回の能組は、仕舞「難波」内藤泰二（宝生）独吟「鐘之段」二井栄逸（喜多）、能「藤」衣斐正直・西村欽也・井上礼之助、仕舞二番「笠之段」倉本雅（宝）「殺生石」大高政允（宝）、狂言「文荷」佐藤友彦・大野弘之・井上松次郎、仕舞「美盛キリ」和島富太郎（宝）、「調一声」小菅「田鍋惣太郎」辰己孝（謙）、能「熊坂」長田駿・高安滋郎・佐藤秀雄、なお後見、地謡の記載がないのは不備。

第二回は昭和四十六年九月八日、講演のあと、独吟「大江山」二井栄逸、仕舞「班女」内藤泰二、能「枕懸置」長田駿・高安滋郎、仕舞二番「高野物狂」倉本雅（是界）梅津忠弘（喜）、狂言「磁石」野村又三郎・井上松次郎・井上礼之助、仕舞「遊行柳」辰己孝、一調「幸之段」田鍋惣太郎・和島富太郎（謙）、能「女郎花」衣斐正直・竹内澄子（ツレ）西村欽也、佐藤秀雄。

第三回は昭和四十七年十一月五日、講演のあと、仕舞「巻網キリ」内藤泰二、独吟「龍太鼓」二井栄逸、能「田村」衣斐正直・高安滋郎・井上松次郎、仕舞二番「竹生島」梅津忠弘「山姥キリ」和島富太郎、狂言「仏師」野村又三郎・佐藤秀雄、仕舞二番「葵



能楽プロデューサーとして活躍した西田三好氏

上「倉本雅」阿漕「辰己孝」、能「羽衣」龍留「長田駿」西村欽也。

第四回は昭和四十八年一月八日、今回はこれまで仕舞や地謡、一調などで此の会を応援してきた先輩、師匠筋に当たる和島・辰己の両師に能を舞って戴くという企画。次の挨拶がある。

表の会が發足いたしましたから、早くも三年を経過致しました。此の間、多大の御後援を賜り、厚く御礼申し上げます。さて、いつもは私達二人の幸につきて、日頃の精進の成果を御披露して参りましたが、今回はいささか趣きを興にして、喜多流の和島富太郎師と宝生流の辰己孝師の能を御高覧いただく事になりました。何卒、両師の模範的な舞台を心ゆくまで御観賞下さいませと同時に、今後も表の会に対しまして旧の御支援を賜りますよう、偏にお願い申し上げます。

表の会 喜多流 數分 長田 駿
宝生流 數分 衣斐 正直

能組は講演のあと、舞雌子「岩船」衣斐正直、能「花月」と和島富太郎・西村欽也、野村又三郎、仕舞「鶴」倉本雅、狂言「不見聞」野村又三郎、井上松次郎、井上礼之助、舞雌子「松風」長田駿、能「鉄輪」辰己孝・高安滋郎

・高安勝久（ワキツレ）
佐藤秀雄、
「花月」の頭に大島政允、「鉄輪」に馬場富四夫の来演。
昭和四十九年度は休会で第五回は翌五〇年十一月三日。能組は舞雌子「高砂」竹内澄子、独吟「杜若」二井栄逸、能「小菅」衣斐正直・水上輝和（ツレ）広鳥克栄（ト）

以下次号

◆仲秋の舞台から◆

「青陽会」第十回宇高青巖能之会
「名古屋観世会定例公演」と「第十二回ごさる乃座」

竹尾邦太郎

「班女」美濃國野上の長（アと友彦）、抱える遊女花子（シテ孝亮）が帰途の吉田少将との再会を約し、交わした形見の扇にうつつを抜かすを見兼ね呼びつけるところ、背立つて花子が座着くや扇裏から走り掛かり、扇を邪険に奪い取る殺気。待ち構える長の前に花子が引き寄せられる図でないのが珍しい。放逐を告げられ、愛しげに扇を抱き上げる花子はひたすら風が過ぎるのに耐えてをり、恐に殉ずる強かさは希望に思えた。後場、東国からの帰途、吉田少将（ワキ勝久）が花子のことを従者（ワキツレ幸）に尋ねさせるところ、長でなく里入（アと清造）

が出た。昂ぶる怒慕の情に花子が目指すは都、唐織跣下駄の狂女の姿はへ人知れずこそ思ひ初めしか、と無りにも思えるカケリの狂蹠。少将との偶然の出会い、礼、「面白う狂ひ候へ」と少將の従者にけしかけられ、「うたてやなあれ御覽せよ」と右へ見る姿が佳く、班女の故事に我が身を重ね、へ國の月を眺めん、と正中下居のところ一入の哀感。クセに一、松勾欄に寄り、扇を抱きしめて立ち尽くして其方の空よ、と薄く右へ見るところ、少将への思慕を素直にみる思い。舞台へ戻り、あのお松をこそ、と扇で一ノ松を指さし「我が待つ人よりの音信を、とシ

ワリ、へせめてもの形見、の上で端でシラリ解くと、諦観の色濃い花子の胸中を地、邦弘、勘助、修（一ら）が活写。中之舞から地との掛合に「持したる扇」を見詰めれば甦る結果は忘れ得ぬ恋。扇を見咎めて少將が従者を連れ、へ人に見する事あらじ、と体を振し背を向け扇を懐中する花子。それでは、とばかりに己れの扇を持たせれば、開いて沁々見詰める花子（写真）は、何よりも武家の鎌倉を象徴する戦の馬、公卿の都を象徴する庭園の巨石、動と静、晝と夜に底流するこの対照が面白かつた。（25分）

「能楽」と特別デイナーショー
聖夜蠟燭能 12月24日
名古屋東急ホテル

12月24日のクリスマス・イブになんて、能楽鑑賞と特別デイナーショーの「聖夜蠟燭能」が名古屋東急ホテルで催される。企画は名古屋東急ホテル（名古屋市中区栄4-16-8）、協力、名古屋開府400年記念事業実行委員会。会場は同ホテル3階ヴェルサイユの間。開演は午後6時30分。全席二万八千円（会員価格二万五千円）。予約、問い合わせは、同ホテルデイナーショー係（TEL 052・251・5200）

演能は次のとおり。
舞雌子「葛城」大和舞、久田三津子はか。
能「葵上」空之折、シテ久田勘

鷹、ワキ森常好、間狂言・野村小三郎、笛・藤田次郎、小鼓・大倉源次郎、大鼓・河村真之介、太鼓・上田慎也、後見、梅若猶彦、地頭、武田邦弘。
半能「石橋」大獅子、シテ白獅子・久田勘、赤獅子・久田勘吉郎ほか。

源氏物語絵巻
徳川美術館特別公開
徳川美術館では、11月21日(日)から29日(日)まで同館所蔵の国宝「源氏物語絵巻」のうち「竹河」と「裏巻」を特別公開する。

ナディア狂言セミナー
12月4日 青少年文化センター
名古屋の若手狂言師による狂言の世界「ナディア狂言」は、きたる12月4日(日)、狂言「權経」を場面ごとに分解して解説を交えながら上演するユニークな「セミナー」を開催。小舞「一晚」「七つ竹の葉の」と前に立つ上臈と受け

しに吸い寄せ、石吸膏薬の名を賜わつたと豪語。それならばと二人は荒唐無稽な薬種を明かし、結局互いの膏薬の吸わせ較べに。多彩な枝の応酬はねじり引きやらしやくり引き（写真）、遂には「石に蹴踏いた」と扱けたアトを尻目に「勝つたぞ勝つたぞ」とシテ、「やるまいぞ」と言うアト、向こいう意気強い二人の舌戦が聞き応えなら、吸い較べの力業も見応え。そして何よりも武家の鎌倉を象徴する戦の馬、公卿の都を象徴する庭園の巨石、動と静、晝と夜に底流するこの対照が面白かつた。（25分）

「紅葉狩」紅葉狩に酒宴を張る上臈（シテ幸親）に侍女（ツレ路子・葉宏・博）、折柄通り掛かる平維茂（ワキ元）と従者（ワキツレ正樹（幸））の一行、上臈達の裏を知り下馬、麓らぬよう隘道を行くつもりが雑茂、色仕掛けの企みに待ち受ける上臈に杖を取られ、まんまと酒宴に引き込まれるところ、所が委ねれば当世でも歓楽の巷では、にやりとさせられる。クセは劇の場、へ乱る、節は竹の葉の、と前に立つ上臈と受け

青陽会定式能 (第53期) (第4回)
十二月十九日(日)十二時半始
名古屋東急ホテル
組
仕舞 巻山 絹 焼 星 今 地 久
野 近 久 田
子 藤 藤 野 藤 江
子 子 子 子 子 子 子 子
能 鉢 木 杉 相 河 後 竹
鉢 木 江 元 村 藤 市
木 相 元 正 村 藤 幸 市 幸
間 佐 融 後
今 井 井 上 井 上 弾 喜
井 上 井 上 井 上 井 上 弾 喜
後見 八 八 八 八 八 八 八 八
梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅
田 田 田 田 田 田 田 田
邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦
弘 弘 弘 弘 弘 弘 弘 弘
地 須 須 須 須 須 須 須 須
謡 部 部 部 部 部 部 部 部
松 山 幸 親 梅 田 藤 田 藤 田 藤 田
高 武 高 高 高 高 高 高 高 高
橋 田 橋 田 橋 田 橋 田 橋 田 橋 田
謙 一 謙 一 謙 一 謙 一 謙 一 謙 一 謙 一
後見 佐藤 融

武田 大志
高安 勝久
今枝 郁雄
今枝 美和
梅田 邦久
地 謡
星野 路子
黒田 博
前野 郁子
加賀 敏彦

能 鉢 木
久田 勘助
久田 勘助
杉江 元正
相元 正樹
佐藤 融
今井上 井上 弾喜
後見 八 八 八 八 八 八 八 八
梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅
田 田 田 田 田 田 田 田
邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦
弘 弘 弘 弘 弘 弘 弘 弘
地 須 須 須 須 須 須 須 須
謡 部 部 部 部 部 部 部 部
松 山 幸 親 梅 田 藤 田 藤 田 藤 田
高 武 高 高 高 高 高 高 高 高
橋 田 橋 田 橋 田 橋 田 橋 田 橋 田
謙 一 謙 一 謙 一 謙 一 謙 一 謙 一 謙 一
後見 佐藤 融

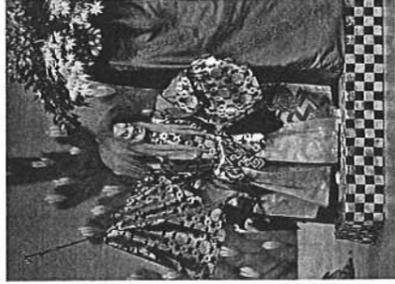
仕舞 卷山 絹 焼 星 今 地 久
野 近 久 田
子 藤 藤 野 藤 江
子 子 子 子 子 子 子 子
能 鉢 木 杉 相 河 後 竹
鉢 木 江 元 村 藤 市
木 相 元 正 村 藤 幸 市
間 佐 融 後
今 井 井 上 井 上 弾 喜
井 上 井 上 井 上 井 上 弾 喜
後見 八 八 八 八 八 八 八 八
梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅
田 田 田 田 田 田 田 田
邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦
弘 弘 弘 弘 弘 弘 弘 弘
地 須 須 須 須 須 須 須 須
謡 部 部 部 部 部 部 部 部
松 山 幸 親 梅 田 藤 田 藤 田 藤 田
高 武 高 高 高 高 高 高 高 高
橋 田 橋 田 橋 田 橋 田 橋 田 橋 田
謙 一 謙 一 謙 一 謙 一 謙 一 謙 一 謙 一
後見 佐藤 融

7時。会場1（ナディアパーク 階）青少年文化センター第1スタジオ
入場料11（前売りのみ）千円。
当日券はない。
チケット取り扱い/ナディアパークプレイガイド（ナディアパーク7階）電話052・2665・2015 / ナディア狂言連登委員会・TEL 090・4401・4932。
出演は佐藤融、井上清浩、今枝郁雄、今枝清雄、鹿島俊樹。

主催 青 陽 会
お問合せ 名古屋市中区二社三の二六二 久田 勘助 方
電話052-705-170 51-15815

附 祝 言
武田 大志
高安 勝久
今枝 郁雄
今枝 美和
梅田 邦久
地 謡
星野 路子
黒田 博
前野 郁子
加賀 敏彦

仕舞 嵯 嵯 古 武 幸
柏 崎 橋 黒 武 清 幸
善 界 若 田 高 橋 藤 藤
梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅
田 田 田 田 田 田 田 田
邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦
弘 弘 弘 弘 弘 弘 弘 弘
地 須 須 須 須 須 須 須 須
謡 部 部 部 部 部 部 部 部
松 山 幸 親 梅 田 藤 田 藤 田 藤 田
高 武 高 高 高 高 高 高 高 高
橋 田 橋 田 橋 田 橋 田 橋 田 橋 田
謙 一 謙 一 謙 一 謙 一 謙 一 謙 一 謙 一
後見 佐藤 融



青陽会定式能「紅葉狩」
松山幸親
(撮影・杉浦賢次氏)



青陽会定式能「班女」
八神孝亮
(撮影・杉浦賢次氏)



青陽会定式能「青葉焼」
(左より) 鹿島俊裕・今枝郁雄
(撮影・杉浦賢次氏)

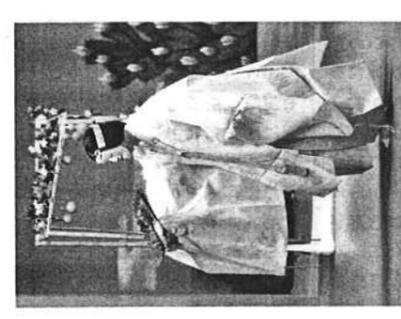
無風折烏帽子・襟淺黄・厚板着付・白大口・赤黒袴衣の行家(ワキ茂十郎)、名言から勅意を体する心構え謹直に、舞台が引き締まる。一声(市和・博朗・喜彦)で小町(シテ通成)の出。櫻宿着付・無風折烏帽子・水衣・女笠・杖、面は自作の小町老女という。

勅意に足る歌の不毛に昔日の盛名を慕い、老いて消息も乏しい小町を憐れみ、慰めの一言を新大納言行家に託し、返歌の出来次第で改めて勅題を与え、詠ませた一言を勅撰集に採りたい筈。

「鷹鷲小町」金剛流は「鷹鷲小町」を三老女の「一」とする。自家の会の第十回を記念する宇高通成の披き。

「鷹鷲小町」金剛流は「鷹鷲小町」を三老女の「一」とする。自家の会の第十回を記念する宇高通成の披き。

昔遊へ身は一人の遊戯は容色衰え命最らえはへ飽き果てたり、と、ふと右ウケルところ寂寥感が。小町を尋ね行家、出逢つて問答に互いの身元が分かれば、初問(永護・恭慈・道一)は少々饒舌に小町の住む世界を明かすが、また、気持ちが高まってゆく辺り、地謡の強写力の織細、即ち、一ノ松でへ東に向へは有難や、と片合巻で石山の観世音を拝むと一転、へ勢多の長橋、を勾欄にみて我が身になぞらえるところなど心象風骨を的確に伝える。本題に入る行家、問答に帝から御詠の一首を賜わつたと知り恐懼する小町は、恭しく襷紙を敷き、展げて目を近視させるところ、「いかにも高らかに遊ばされ候へ」の語調には昔ての盛名の矜持が窺え、面を伏せての聴くと「あら面白の御歌や候」と喜ぶが、返歌の必要に迫られ胸中に陸る昔日の才気、こゝに鷹鷲返しを詠う行家との掛合は、氣力充実、満々の自信をみせるが、紀憂はへ帝の御歌を慕ひ参らせて詠む時は、天の異れ、左手を床につき叩頭するが、和歌の連なら神も許容、へ貫からずして高位に交はるといふ事、と行家にアシラフところへただ和歌の徳、と歌よみの自負をみせる。更にクリ・サシで鷹鷲返しを詳説すると、居クセは歌に触発される懐旧の情、才色を持て難



観世会「半部」
武田邦弘

された昔を感ぶも我に返ればへ今憔悴と落ちおれて、とシラルの切ない。気分を変えさせようとする行家から業平が和歌の神を祀る玉津島神社で舞つた法楽の舞を舞うよう勧められ、杖に纏つて立つと物着。黒風折烏帽子・胡黄長絹を着る。へ玉津島に参りつ、と正中下居に選擇、立つとへ木賊色の狩衣に、と左袖持ちて眺め、へ風折烏帽子、と扇で頭を指すと業平と成り代わる心、右へ廻り常座、序之舞に。舞半ば、正中下居にクツロギ、左膝抱え面伏せるところには業平の面影も去来する思ひか、三段で舞上げる。老いにこたわる地との掛合、へ(時人)を待たぬ習ひとは)白波の、と大きく打合、へあら恋しの昔やな、と扇を胸に当て退りつ、左手でシラルの如く何にも昔が胸に迫る風情。へかくへさらはと言ひて、と小町も後見から杖を取つて立つ。キリはへ杖に纏りてよると、正中へ、へ



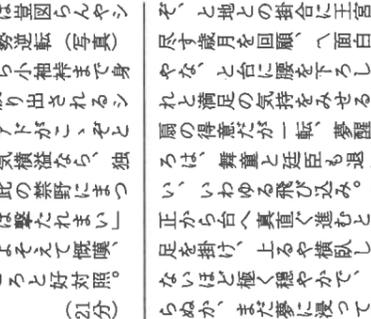
観世会「禁野」
左より 野村小三郎・松田高義
(撮影・杉浦賢次氏)

「禁野」隠れもない射手で「禁野」と広言する大名(シテ高義)、自身弓矢を持つのは大名の活券にか、わるとばかり、またまたま遣を急ぐ通行人(アト小三郎)を脅して持たせ、俄家来に仕立てやつて来た処は、あろうことが禁野区。咎めるアトに、だから人は誰も来ず、鳥も集まつてくる、と囁く横着。が、目敏くアトが獲物を見つけてもシテはうろろするばかり。見兼ねたアト、シテから



観世会「邯鄲」
観世儀之丞

へ迷に知らでもあるべきに、と踏む拍子には、も上花の名を答えずはそのま、光源氏との縁は無かつたろう、と断定する気持が表われ面白。序之舞の中、右袖被キ袴かに退つて押し上げられた半部の下に入り、暫時佇む姿は正に夕顔の花の精。キリはへ告げ渡る東雲、と雲ノ扇、へ(また半部の)内に入りて、と作物へ入り、へ(そのま、敬とそなり)にける、と後ろへ出、トメた。(一時間25分)



観世会「邯鄲」
左より 杉江元・味方和・観世儀之丞
(撮影・杉浦賢次氏)

「邯鄲」宿ノ女王(アト小三郎)と問答のあと鷹生(シテ儀之丞)は台に上ると杖を見下ろし「さてはこれなるが」と暫し見詰め(写真)、へ復讐の巻を、と襟元を掻き合わせる心に両袖を抱くと横臥。夢の中、勅使(ワキ勝久)が床を二ツ打つと、がばと飛び起きたように見えたのが、文字通りへ天にも上る、心地を印敷け、へ玉の御簾に、入る姿は刃りを私へ威風。台に上ればそこは金陵玉楼、へ日月輝し、と双手をゆつたり上げるところには、時を長からしめている此の境遇を謳歌するか。即位五十年に更なる長寿をもたらす酒を勧める廷臣(ワキツレ元)、酌に立つた舞童(子方・味方和)のきびきびした風流の舞が長く、鷹生も舞臺の舞にそ、られ、右袖脱ぐと、では自分も、の気分は唐園圃で軽床を打ち、立つと選擇掛の衆(がく)を。狭い一層台上を悠々と舞い、空下りは右手で柱を握り六ツ拍子踏むや左足下ろし、すつと引き上げる。一旦、後ろ向きに台に懸掛け、立つと杖を廻つて舞台に入り舞続け(写真)、舞上げると、へいつまで

掛かる主に、元々忠実な太郎冠者は呆気ない位あつたりと機嫌を直し、命じられるま、に纏を縋い出せば、戻つてきた嬉しさは気分を社くま、何某方の悪口雑言。太郎冠者の機微細やかな性格描写も絶妙な筆致の力演。(38分)

「小車」御堂を建立して住僧を求め田舎者(アト博達)、出遭つたのが博達で食い詰めて僧体に身を置し悪事を企む二人組、俄新發意(小アト和憲、能刀頭巾・禰野斗目・半袴・浅黄十徳・雄ヲ担グ)と僧僧(シテ萬斎、角頭巾・無地靴斗目・黒長衣)。そうとは驚知らず、早速出遭して在所の人々(晴夫・牧樹・修一・聡史・尼(幸雄)を集め御堂供養。法事に当たり、功德に与るには施物を、と升告げやかな僧は、読経もどきも鮮やかに萬斎の独壇場。予ての策駒通り、賭場で進行の小話へ昨日通る小僧が今日も通り候へあれ見さいたよこれ見さいたよ、に強弱抑揚うなりを付けへなもつた、を加え如何にも纏らしく唱え出せば、純朴な在所の人々はてんでに喜ばせ。それを横目に眺めながら巡りするうち、連なる人々も次第に踊り念佛の法悦境は忘我の境。隙をみて施物を掠め取り逃げる二人に「やるまいぞ」と追う人々。独り、遅れた尼、「エエ腹立ちや腹立ちや、孫にも連らぬ小袖を禿僧坊主に盗られた、腹立ちや腹立ちや」の口惜しさは深刻。万作家二門の大動物の好舞台だった。施物を詐取するところは「仁王」に似る。(38分・10月10日・第12回こさる乃座)

- 〔先号の訂正〕
- 3頁4段 「最清」は「景清」
 - 4頁2段 2行目 何時さては何時からこのよう
 - 4頁4段 後ろから7行目 在の襟は在り様
 - 4頁8段 19行目 黄名公は黄石公

NHK放送予定(平成21年12月~平成22年1月)

- 12月20日 素謡「賴政」(金春流) 桜間金記ほか
- 12月27日 素謡「三輪」(再)(観世流) 梅若万三郎ほか
- 1月10日 素謡「巴」(観世流) 坂井音重ほか
- 1月17日 素謡「通盛」(観世流) 藤井徳三ほか
- 1月24日 素謡「郎郷」(宝生流) 亀井保雄ほか
- 1月31日 素謡「善知鳥」(再)宝生流 小倉敏克ほか

演能力ランダー

名古屋能楽堂

- (能・狂言演能関係)
(TEL 052-231-0088)
- 19日(出) 青陽会 定式能 (有料)
 - 2日(出) 名古屋能楽堂新春謡初め (要整理券)
 - 3日(日) 名古屋能楽堂正月特別公演 (有料)(番組①面)
 - 9日(出) 名古屋学生能楽連盟 (無料)
 - 11日(月) 名古屋清韻会 (無料)(番組②面)
 - 17日(日) 第53回狂言鳳の会 (有料)(番組②面)
 - 24日(日) 名古屋宝生会定式能 (有料)(番組②面)
 - 31日(日) 万作を観る会 (有料)(番組③面)

NHKテレビ新春能狂言

- 教育テレビ (7:00~8:00)
- 1月1日(金) 観世流「屋島」 弓流・素勳 梅若女 祥、村瀬純ほか
 - 1月2日(土) 大藏流「魚説法」 茂山千作ほか
 - 和泉流「舟渡蟹」 野村万作・野村万斎ほか
 - 1月3日(日) 金剛流「巻網」 金剛永謙、福王茂十郎 ほか
- NHK-FM新春謡曲狂言
(11:00~11:50)
- 1月1日 観世流「高砂」 片山幽雪(片山九郎右衛門改め)
 - 1月2日 和泉流「夷毘沙門」 野村 萬ほか
 - 大藏流「三本柱」 山本東次郎ほか
 - 1月3日 宝生流「東北」 三上 泉ほか

学生能・狂言の会

- 1月9日(土) 午前十一時始
名古屋能楽堂
- (金剛流) 舞囃子 「竹生島」 「小管」
 - (観世流) 舞囃子 「胡蝶」 「鞍馬天狗」
 - (宝生流) 舞囃子 「絃上」
 - (和泉流) 狂言 「樗縵」 ほか
- 主催 名古屋学生能楽連盟
電話 090・73004・1102

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社
名古屋千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-798 4
FAX (052) 733-283 7
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円
1年 1800円
郵送の場合 1100円

観世寿夫記念 法政大学能楽賞

表 章 氏 受 章 宝 生 欣 哉 氏

法政大学(増田壽男総長)は、一九七九年(昭和五四年)に「観世寿夫記念法政大学能楽賞」を設

定し、すでに三十回の贈呈を重ねているが、平成二十一年度も各方面の識者の推薦による候補者について、選考委員(徳安彰法政大学国際学術支援本部担当事務理事、野村鳳、みなもとごろう、松本雅、西野泰雄、坂本勝、山中幸子)が慎重に審議した結果、第三十一回の受賞者として、能楽研究者・表彰氏(二)宝生流ワキ方・宝生欣哉氏(三)を決定した。

而氏の受賞理由は次のとおり。
〔受賞者〕
〔贈呈理由〕氏は50年以上にわたり能楽研究を牽引し、常に新たな問題提起と発見をおこなってきた。その研究意欲は80歳を越えてなお衰えを見せず、近著「観世

流史参究」においても最先端の研究成果を問うている。能楽研究が学問分野として確固たる位置を占めることになったのも、氏の活躍に負うところが大きい。
〔受賞者〕
宝 生 欣 哉 氏
〔贈呈理由〕能楽協方として研鑽を積み、新界では「若手」といわれる時代ながら、重要な舞台になくはならぬ存在である。言葉の明晰さや力強さにはかねて定評があつたが、近年は技術的に成熟し、脇の本分を守りつつも役の性を十分に理解した的確な演技によりつて「垣尾」「鏡姿」等の大曲をはじめ数々の充実した舞台成果を挙げている。
〔※催花賞②面掲載〕

鳳の会では最終公演にあたり次のようにあいさつしている。
「鳳の会」は、林和利(名古屋

女子大学教授)、井上勲次郎、佐藤友彦の3人を同人として、平成4年に結成、以来毎年3回の公演(平成15年からは公開講座も開催)を継続してきた。当地で催される狂言会は、「お洒落名匠狂言会」を始め、数多くあるが、いずれも年1回の開催であり、年3回の定期公演を続けてきたのはこの「鳳の会」が唯一である。毎回林和利氏による上演曲の解説、ロビ

第53回 鳳の会最終公演 1月17日 名古屋能楽堂

の義勇着付け表演、そして終演後は、演者を囲んで観客と歓談する〈演者と語るQ&A〉など企画にも工夫をこらし、大盛好評を頂いてきた。
本年1月には第50回記念公演を開催、記念誌「鳳」を刊行、大きな節目を迎えることができた。

これをひとつの区切りとして、第53回「鳳の会」を最終公演として、私たちが新たな出発を図ることになりました。最終公演は「想出のあの曲をもう一度!」としてこれまでの上演曲のうちから最も人気の曲を三曲選んだお届けすることとしました。本当に有難うございました。

名古屋能楽堂

新春謡初め

平成二十二年一月二日(土)
午後一時~二時半
名古屋能楽堂

- 連吟 四海波 (観世流) 久田 勘助 他
- 舞囃子 高砂 (宝生流) 佐藤 耕司
ワキ 喜安 勝久
大鼓 河村 総一郎 太鼓 加藤 久
小鼓 船戸 昭弘 笛 藤田 六郎兵衛
- 狂言小舞 御田 (和泉流) 佐藤 友彦
- 舞囃子 八高 (喜多流) 長田 郷
大鼓 河村 眞之介 笛 竹市 学
小鼓 後藤 豊彦 幸
- 連吟 鶴亀 (金春流) 鬼頭 尚久 他
- 狂言語 虎之語 (和泉流) 野村 小三郎
- 舞囃子 羽衣 (金剛流) 百々 康治
大鼓 鹿 敏一 太鼓 鬼頭 義命
小鼓 後藤 孝一郎 笛 鹿取 希世
- 舞囃子 狸々 (観世流) 高橋 暁一
大鼓 河村 眞之介 太鼓 加藤 洋輝
小鼓 福井 四郎兵衛 笛 大野 誠

入場料(要整理券)

主催 (株)名古屋市文化振興事業団
(名古屋能楽堂)
(社)能楽協会名古屋支部

問合せ 名古屋能楽堂
(TEL)052-231-1008
名古屋市中区丸の内1-1-1

名古屋能楽堂正月特別公演

「能・狂言でたどる
天下統一の道(前篇) 豊臣秀吉
平成二十二年一月三日(日)
午後二時開演
名古屋能楽堂

能 翁 翁 橋田 邦久 三番 豊野 村 小三郎
面箱 佐藤 龍
千歳 吉沢 旭

能 養 老 前フレ 八神 孝充
後フレ 松山 幸親
清沢 一政
殿 福元 雅正 河村 眞之介
後藤 雅介 船戸 昭弘 加藤 洋輝
橋本 幸 後藤 豊彦 幸 福井 聡介 竹市 学

後見 武田 邦弘 地謡 黒田 博
加賀 敏彦 須藤 久江 高橋 一
武田 大志

狂言 筒竹筒

松田 高義 野口 隆行
豊津 健太郎
後見 佐藤 融
地謡 伊藤 小三郎
後藤 敏彦

(午後五時五分頃終了予定)

主催 名古屋市文化振興事業団
(名古屋能楽堂)
能楽協会名古屋支部

入場料||前売指定 五〇〇〇円(能楽堂のみ取扱い)
前売一般 四〇〇〇円(当日四五〇〇円)
学生前売 三〇〇〇円(当日三五〇〇円)
取扱所||名古屋能楽堂(052・231・0088)
チケットぴあ 0570・021・9999
市内プレイガイド、ナディアパーク階PG
(052・265・2015)

当地の各流儀・流派・結社・ 社中の消息を辿る

竹尾 邦太郎

四 「妻の会」 ②

第七回は昭和五二年(一九七
七)七月一六日。この回から創立
者の一人、室生流・衣斐正直が抜
け、先回(第六回)に客演した観

世流・久田徹二が参入、創立者の
長田颯と主権することとなる。こ
れまで同様、西田三好による「本
日の能について」の解説があり、
能組は独吟「禪之段」二井栄逸、
能「半部」長田颯・西村欽也・佐
藤友彦・地頭大島久見、仕舞三番
「女郎花」久田秀雄「笠之段」上
田照也「遊行柳」大島久見、狂言

「二九十八」井上松次郎・井上礼
之助、能「安達原」久田徹二・高
安滋郎・飯富雅介・大野弘之、地
頭上田照也。
第八回は昭和五三年六月二五
日。先回、「安達原」で副地頭を
勤めた泉嘉夫が客演する。能組は
「本日の能について」の解説のあ
と、独吟「山姥」二井栄逸、仕舞
三番「経正」祖父江修一「菊慈
重」前野郁子「殺生石」高橋瞭
一、能「俊寛」泉嘉夫・清沢一政
・須部甫・高安勝久・井上松次郎
・地頭久田徹二、仕舞四番「老
松」河村鉦二「笹之段」殿島修二
「雨之段」塚本秀雄「笠之段」久
田秀雄、能「井筒」長田颯・西村
欽也・井上松次郎、地頭大島久

見、仕舞二番「花笠」上田照也
「藤戸」大島久見、狂言「酢薑」
佐藤友彦・大野弘之、能「船弁
慶」久田徹二・河合雄一郎(子
方)西村欽也・飯富雅介・井上礼
之助・地頭上田照也。
第九回は昭和五四年六月二三
日。今回は観世流・梅田邦久の客
演があり、「本日の能について」
の解説のあと、能「貴清・松門之
出」梅田邦久・清沢一政(ツレ)
須部甫(トモ)西村欽也、地頭上
田照也、仕舞三番「遊行柳」久田
秀雄「鐘之段」塚本秀雄「船歌」
殿島修二、独吟「禪丸」二井栄
逸、狂言「磁石」井上松次郎・井
上礼之助・野村又三郎、能「湯谷

③(面へつづく)

東海テレビ文化賞 河村総一郎氏受賞

東海テレビ放送は、地元の文化
や学術、産業などで功労のあった
人に贈る「第42回東海テレビ文化



賞」に、能楽大政方、河村総一郎
氏(七六)の授賞を決定、11月27
日東海テレビ本社で顕彰式が行わ
れた。
同文化賞は河村総一郎氏のほか
陶芸家・加藤幸兵衛氏(六四)、
名古屋市立大学大学院教授・都健次
郎氏(六〇)、宮大工・石神敬祐
氏(六九)の諸氏が受賞された。
なお、河村総一郎氏は、平成21
年度「催花賞」を受賞している。

催花賞 権藤芳一氏受賞

法政大学は、服部康治氏からの
親世九郎家文庫受贈を記念し
て、一九八八年(昭和六三年)四
月に「服部記念法政大学能楽振興
基金」を設立し、同基金に基づく
事業の一つとして、能楽三夜の功
労者及び能楽の普及・発展に貢献
の大きい個人・団体を顕彰する
「催花賞」を設定、各方面の識者
から推薦された候補者について、
法政大学能楽研究所と能楽賞選考
委員とが慎重に選考した結果、受
賞者として権藤芳一氏(ごんどう
よしかず)を決定した。

権藤芳一氏
氏は長年にわたって京都観世会
館の事務局長を勤め、能の公演の
現場に携わることも、能をはじ
めとする古典芸能全般の評論と普
及に大きな役割を果たしてきた。
東京偏重の能楽界にあつて、関西
における能狂言の公演についての
情報発信を一貫して続けてきた功
績は大きく、その成果をまとめた
近著「戦後関西能楽誌」は、戦後
の関西能楽界の動向について貴重
な報告である。

秋季菊之会 能「鉢木」上演

京都 金剛流・秋季「菊之会」
は、十二月十三日(日)午後二
時から金剛能楽堂で上演。
能組は次のとおり。
仕舞「寒盛」(廣田泰三)
能「鉢木」(シテ廣田泰能、ツ
レ豊嶋晃嗣、ワキ村山弘、ワキツ

レ小林努、笛・杉信太郎、小鼓・
吉阪一郎、大鼓・谷口有祥、間・
茂山逸平、松本薫、後見・金剛永
謙、廣田幸稔)
地謡 今井清隆 宇高道成、種
田道一、今井克紀
狂言「鉢太郎」(茂山七五三)
茂山逸平、丸石やすし、後見山下
守之)
なお「菊之会」22年度公演は、3
月14日(日)能「源氏供養」(廣田泰
能)を上演。

加賀宝生の名品Ⅱ 4月11日まで開催

金沢能楽美術館では、同館のコ
レクションによる「加賀宝生の名
品Ⅱ」の展示会を11月28日(土)から
明年4月11日(日)まで開催してい
る。
コレクション展には、金沢市の
無形文化財に登録されている名品
で、儼かな古様をしめす能面(父
尉)、室町時代をはじめ、彩り華
やかな能楽東紅地華装(くまじさ
いわびし)に権折枝文庫織(つば
きおりえだもん)からおりし江戸
時代Ⅱなどが紹介されている。
※会期中展示替えが行われる。
開催時間/午前10時~午後6時
休館日/毎週月曜日(休日の場合
はその翌日)
臨時休業:平成21年12月29日(火)

金沢能楽美術館 コレク
ション
入場料/一般・大学生300
円、65歳以上200円、高校生以
下無料、団体(20名以上)250円。
なお、石川県立能楽堂で毎月開
催されている金沢能楽会定期能に
ついて、次の日程で能楽解説講座
が行われる。
1月17日(日)午後1時~2時半
能「八島」「胡蝶」狂言
2月14日(日)午後1時~2時半
能「養老」「百万」狂言
3月6日(土)午後1時~2時半
能「羽衣」「野守」狂言。

名古屋清韻会

一月二五日(成人の日)
午前九時半始
名古屋能楽堂

素謡 玉鬘 久保田和代 安藤美奈子
井筒法師 中原基夫 佐藤尚雄
佐藤加代子 浅井博子

仕舞 経正 久野洋子
笠之段 鶴岡良久
玉之段 安井美智子
采女 佐橋由美子
馬場英子

舞獅子 松浦佐用姫 川崎あきえ 飯島 鮎一 観世 元伯
乱 山本淳子 飯島 鮎一 観世 元伯
後藤 嘉津幸 竹市 学

素謡 鸚鵡小町 泉頭貫代子 宝生 閑
一調一管 江口 渡辺 節子 後藤 孝一郎
藤田 六郎兵衛

舞獅子 小塩 御牧 紀代 飯島 鮎一 観世 元伯
杜若 古井 佐季 飯島 鮎一 観世 元伯
後藤 孝一郎 鹿取 希世

仕舞 自然居士 谷口 寛子
天鼓 加藤 新一郎

連吟 玄象 中村 貴大 中村 大豊
能野宮 藤田 幸子 河村 総一郎 後藤 孝一郎 藤田 六郎兵衛
宝生 閑 井上 清浩

舞獅子 善知鳥 加藤 美智子 河村 眞之介 大野 誠
カケリ入り 後藤 嘉津幸
藤 融 杉浦 善康 船戸 眞之介 鹿取 希世
藤 戸 佐久間 美親 船戸 眞之介 鹿取 希世

江野島 加藤 千一 河村 眞之介 加藤 洋輝
福岡 克彦 船戸 眞之介 大野 誠
船戸 眞之介 船戸 眞之介 大野 誠

仕舞 難波 大槻 文藏

(終了五時半頃)
主催 大槻清韻会
〔入場無料〕
〔ご来場歓迎〕

狂言 鳳の会最終公演

一月十七日(日)午後一時三十分開演
名古屋能楽堂
〔解説〕名古屋女子大学教授 林 和利

素謡 宗論 浄土僧 佐藤 友彦 信屋 鹿島 俊裕
法華僧 井上 清浩

狂言 素袍落 大郎冠者 佐藤 友彦 伯父 今枝 郁雄
水鏡冠者 佐藤 融 主人 今枝 清雄
後見 鹿島 俊裕

狂言 棒縛 大郎冠者 佐藤 友彦 主人 今枝 清雄
水鏡冠者 佐藤 融 後見 井上 清浩

〔入場料〕(全席指定)
A席五〇〇〇円、B席三三〇〇円
学生二〇〇〇円
会員A席四〇〇〇円
チケット取扱い
チケットぴあ(05570-052-3392-99)
Pコ170-3392-1199
Pコ170-3392-1199
名古屋能楽堂(0522-23392-8)
名古屋文化振興事業団アレイカイト(0522-265-2415)
井上松次郎宅(FAX0522-834-8607)

縁若と語らう"Q&A"

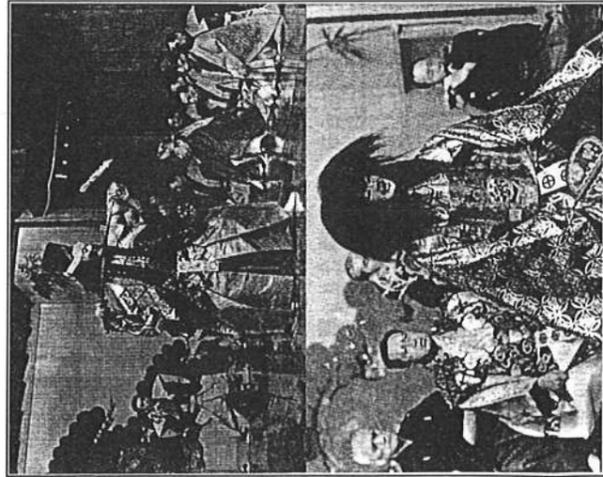
終演後会場で、佐藤友彦を囲んで歓談します。
お茶席の狂言に関する質問・質問に直接お答えします。

名古屋宝生会定式能(第54期)

一月二十四日(日)午後一時始
名古屋能楽堂

仕舞 卷絹 衣斐 正直 佐藤 耕司
内藤 飛能 地謡 稲川 満次郎
尾田 大二郎

高野物狂 子方 佐藤 健太郎 観世 元伯
會本 雅 飯富 雅介 河村 眞之介 鹿取 希世
後藤 嘉津幸
問 井上 清浩



大阪文化祭参加 麦の会

■と き 昭和54年10月13日(土)
AM11:00開演
■と ころ 大阪市東区上町1-2
大榎能楽堂 TEL 06-788-9478
大榎能楽堂 重多流 長田 駒 柳世流 久田徹二
主催 麦の会 協賛 新大阪本社・読売テレビ放送
主 後 援 読売新聞大阪本社・読売テレビ放送

②面よりつづき)
・三段之舞「長田 藤田直輝
(ツレ) 西村欽也・飯富雅介・地
頭大島久見・仕舞三番「砵」上田
照也「大江山」大島政允「三輪」
大島久見・能「鉄輪」久田徹二・
森博蔵・飯富雅介・野村又三郎・
地頭上田照也・京都から森博蔵の
来演。此の年、長田 久田徹二
の「麦の会」は地元・名古屋を離
れ十月二三日、久田徹二の師・神
戸在住の上田照也の客演を得て大
阪文化祭に参加する(資料参考
照)。能組は能「八島」長田 藤
高林由二(ツレ)植田慶之亮(ワ
キ)茂山正義(アヒ)後見和島富
太郎・高林日牛口二・地頭大島久
見・囃子方は赤井登三・大倉長十
郎・吉田太郎・仕舞四番「祝」
藤谷政二「知草」笠田稔「松風」
泉嘉夫「船橋」山中義滋・能「班
女・笹之伝」上田照也・中村弥三
郎(ワキ)茂山千五郎(アヒ)後
見山中義滋・山田義高・地頭泉嘉
夫・囃子方は赤井藤男・荒木照雄
・辻芳昭・仕舞四番「松虫」高林
白牛口二「玉之段」大島政允「天
鼓」和島富太郎「通小町」大島久
見・狂言「清水」茂山正義・茂山
千五郎・能「郡邸」久田徹二・藤
谷章弥(子之)江崎金治郎(ワ
キ)江崎雄雄・三木栄信(ワキツ
レ)和田英基・長川正彦(コシ)
松本薫(アヒ)後見泉嘉夫・藤谷
政二・地頭上田照也・囃子方は藤
田昭彦・久田舞一郎・山本孝・三
島元太郎、三役は藤田昭彦を除き
全て京阪神在住。文化祭で賞に与
ったかどうかは知らない。



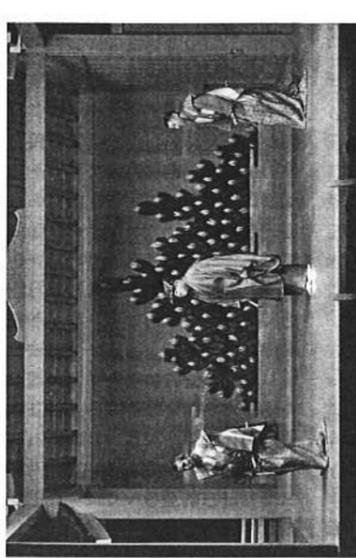
第一〇回は昭和五五年七月五
日、先回「景清・松門之出」で客
演した梅田邦久(49)が「麦の
会」の同人となり、「麦の会」は
長田・久田・梅田の三者が主催す
ることになる。西田三好の解説の
あと、能組は能「頭取」長田 藤
西村欽也・飯富雅介・井上松次郎
・地頭大島久見・仕舞六番「大江
山」殿島修二「井筒」塚本秀雄
「鶴之段」河村鉦二「鉄輪」久田
秀雄、「花籃」大島政允一船弁

◆秋酣の舞台から◆ 「豊春会・秋の能」 「名古屋能楽堂十月 定例公演」 「第五二回・鳳の会」と「第 三〇回記念名古屋金春会特別公演」

竹尾邦太郎

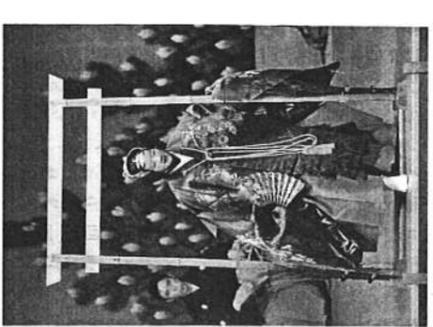
「萩大名」遺園に隠れもない
大名(シテ千五郎)大名烏帽子・
襟赤・紅白段駈斗目着付・黒地髷
大紋袴袴袴・小刀の美々しいよそ
ゆき出立。水の在京の気遣らしに
何処ぞへ遊山を、と太郎冠者(ア
ト茂)に持ち掛ければ、大方は見
尽したとあって珍しい処と言つて
は、と案内されたのが予て太郎冠
者が艱意の庭持ちの亭主(次アト
千之丞)邸。ゆるりと庭見物をす
るうち、「あれは何ちや」と目に
留まる物へ好奇心も旺盛に筆置稿
落な大名ふりを發揮、太郎冠者に

たしなめられては誤りを正し、亭
主に言い纏うこと再三。この辺り
シテとアト、父子来演の阿吽の呼
吸、テンボ快調。また梅の古木よそ
「こぼく」と聞き誤り「こぼく」
と正され、殊更本声で何かねちね
ちと「こ・は・く」と反復すると
ころが対話の中で突出、大名の嫌
味も。そして、秋の庭の景は宮城
野の萩、趣味人の常として歌に好
ぶさかではなく、歌を強要するま
らいが。それを危惧した無趣味の
大名、太郎冠者の介添を頼りに一



能楽堂定例公演「不腹立」
佐藤友彦・今枝郁雄
(杉浦賢次氏撮影)

直ものにしたつもりで踏みは案の
定。太郎冠者任せの無頓着に作歌
を軽んぜられ、面子を潰された思
いの亭主は執拗に下の句を要求す
る。千之丞の粘りこき光る。キリ
は「今忍ひ出いた」と下の句を
「太郎冠者の向ふ雁と鼻の先」と
付け、「面目もおりない」と大名
の殊勝。「と鼻の先」まで付ける
のは千五郎家独特か、「萩の花」
を「雁の鼻」と当てれば理だが珍
しい。(30分)
「乱」孝ゆえに靈夢を授か
り、市で酒を買い富を得た高風
(ワキ弘)、酔顔を見たこともな
く海中の狸々、シテ三千巻)を名
のり酒壺を抱え海へ帰つた客を待
とう、ときつぱり爽やかな名直が
よい。下り端(促美・高靖・大・
光長)で二ノ松岡欄に出たシテは
頭を振り、扇開き舞台へと運ぶ。
装束が赤すくめで無く、唐織が萌
黄と赤の段なのが珍しく思った。
へおひせぬや、以下、地(雅彦・
敏文ら)との掛合は八声の葉の笛
を、吹くと舞へ。舞は中之舞から
直り乱。足使いの繊細微妙は膝を
むところを鞋やかにスキップを踏
む印象。両足爪先立ち、横へ弧を
描き流れ、水上をはつむ様な流し
足、波浪を蹴り上げる心の乱し
足、と舞金剛の面目躍如。大小前
で舞上げ安座、へありがたや、と
ワキにアシラヒ、へ夜も尽きじ、
と直つて立つと切地、へ竹の葉の
酒、を掬つて飲む型からへ酌めど



定例公演「野宮」
衣斐正直

も尽きず、と飲め
ば、へ秋の夜の
盃のハネ駒はも
う要らないの心
か。へ足立はよろ
くとへ酔ひも進
ぬは、で頭を取る
のはへ東雲はや
く、明ける心、へ泉はそのまま、
にシテが留メ拍子。(41分・10月
18日・豊春会秋の能・金剛能楽
堂)
「不腹立」學を建立はしたが
仕舞が居らぬとあつて街道へ僧を
探しに出る施主(アト友彦・郁
雄)、出遇つた行脚の僧(シテ靖
造)に打診、行き先を問うは「愚
僧は風に木の葉の任すが如くに
候」などと名傳めく言辭に惹かれ
の施主二人。畏怖もあろうか、上
がつてしまい、傳たる人体に「も
もし経はお読みなされますか」
の問い。大方の経は語んずるが
「もし経」は知らぬ、の答えに名
僧の資質を勝手にみてしまうの
か、次いで「手はし書かせられま
するか」の問いには「蚯蚓のぬた
くつた様なことは」と答える僧
に、併どもの手習の師匠を、の願
いは当然としても、何れは墨跡を
ねたり兼ねないを思わせ、面白
い。しかし丁寧な応対もこゝま
で、名を問われしどころもどろの
僧、苦し紛れに「不腹立ノ正直
坊」と名乗つたが運の尽き。人と
生まれて腹の立たぬ事は無から
う、と施主二人は「張損ひの陣子
骨か?」「腹張けの無熱坊か?」
などと散々に揶揄、当世にもみら
れる華巫山戯が重たい苛めになる
典型的なケース。シテが憎めない
キャラの上、アトの挑発が少々執
拗、後味はよくない。
「野宮」合掌置「長月七日、
たまく野宮を訪れた旅僧(ワキ

勝久)が神さびた宮居に憩うとこ
ろ現われる里女(シテ正直)、物
寂しい野宮の景色に移ろう我が身
を重ね、仮の世に往来する身を恨
む心懷を独白するシテのサシ。下
歌・上歌を省き、直ぐワキとの問
答となつたので、今日は御事ゆ
え支障ありお戻りを、の素気無
さを感じたが、世帯人の僧として気
を許して里女、問答・掛合に今日
の日は光源氏が訪ね来て垣(結
界)の内に神を揮して帰つたこと
を回顧、荒れ果てた宮居の行まい
を初回(乾之助・光夫ら)が描写
する。鳥居に向かう里女は正中に
下居、木ノ葉を手向け合掌すると
へものはかなしや、と立ち、小柴
垣を眺め、へあら淋しこの宮所、
と面壁とするところ、寂寥の思い
を地謡が沁々と活写する。更に御
息所の謂れをワキにむかれ、へそ
もく、とクリ地でシテは大小前
の床几に掛かるのが觀世と異なり
珍しい。ケセ上ケ端へその後柱の
御殿ひ、あとへ(身は浮草の)奇
辺なき、で立ち、へ行方も鈴鹿
川、とスミ近く。へ八十瀬の波
に濡れくず伊勢まで誰か思は
ん、の面壁とは誰か思い起こして
くれる人が、と見廻す心か。へ心
こそ怨みなりけれ、と下居にシラ
ルと直つてロンギ。こゝでワキを
代弁する地との掛合に御息所はへ
我なり、と漸く孝経明かしワキへ
アシラフと中人地、へ黒木の鳥
居、を眺めへ立ち隠れ、と何かそ
そくさした感じに運ををはやめた
が、返り句に大小前から構懸へ、
送り笛(六郎兵衛)で入る。代つ
て里人(アヒ融)が居語に聞き及
ぶ六条御息所の消息を懇切に語
り、跡を尋うようワキに勧めて退
くと後場。
ワキの弔いに緋大口・紫長絹の
④面へつづく)

能 士 蜘蛛 橋本 守 正 齋 河村 総一郎 加藤 洋輝
間 井上 靖治 鹿島 俊裕 中島 知亮
後見 辰巳 清次郎 地 謡 竹内 久仁七 内 藤 飛 能
佐藤 耕司 石 森 智 幸 加 賀 山 善 治 久 野 幸 三
金 森 良 充 加 賀 山 善 治 久 野 幸 三

狂言 隱 狸 佐藤 融 佐藤 友彦 後見 大野 弘之

トモ 田口 将成
小藤 衣斐 愛成
頭 和久 狂太郎
玉井 博祐
橋本 正 齋 河村 総一郎 加藤 洋輝
間 井上 靖治 鹿島 俊裕 中島 知亮
後見 辰巳 清次郎 地 謡 竹内 久仁七 内 藤 飛 能
佐藤 耕司 石 森 智 幸 加 賀 山 善 治 久 野 幸 三
金 森 良 充 加 賀 山 善 治 久 野 幸 三

附 祝 言 (終了予定 十六時二十分頃)

主 権 名 古 屋 宝 生 会
問 合 せ 名 古 屋 市 昭 和 区 御 殿 筋 3-23-19-1 御
電 話 T A X 0 5 2 2 8 8 8 2 : 5 6 0 0
衣 斐 正 直 方

【有 料】
当日券 五〇〇〇円
会員券 4枚綴 (年間通用)
一八〇〇〇円

第12回 万作を観る会
一月三十一日(日)午後三時開演
名古屋能楽堂

解説 林 和利

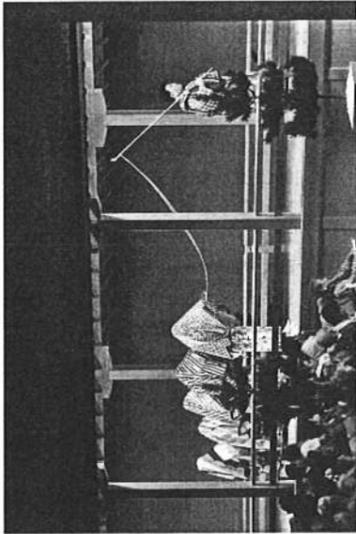
養 老 大 鼓 河 村 眞 之 介 太 鼓 加 藤 洋 輝
水 波 之 伝 小 鼓 後 藤 嘉 津 幸 笛 竹 市 学

狂言 無布施経 権 野村 万之介 舞主 石田 幸雄

狂言 歌 仙 僧 佈 本 人 丸 野 村 万 作 果 報 者 野 村 小 三 郎
僧 正 暹 昭 野 村 萬 齋 在 原 業 平 太 郎 冠 者 野 口 小 三 郎
小 野 小 町 高 野 田 深 田 健 太 郎 行 脚
清 原 元 輔 石 田 幸 雄 月 崎 和 齋 夫 博 古 治

主 権 な こ や ・ 万 作 の 会
T E L 0 3 - 3 9 9 9 7 - 8 7 7 8

【入 場 料】 S 席 八 〇 〇 〇 円、 A 席 七 〇 〇 〇 円
B 席 六 〇 〇 〇 円
電 子 チ ケ ッ ト び び び T E L 0 5 7 0 - 0 2 - 9 9 9 9
券 ア レ チ ケ 0 2 (三 越 地 下 鉄)
問 合 せ 専 用 0 5 2 2 - 9 5 3 3 - 0 7 7 7



井上靖浩

鳳の会「釣針」

③(面よりつづき)
後シテ六条御息所の出、この度は何か力無くとはく選ブ印象を受けたが、車争いに、へばつと寄り、と走つて振り返りへ人々長柄に取りつき、と左右の袖をさごと返すところ鮮やか。舞になると、宝生では袖を巻き上ケルところを被イタのが珍しかった。因に柳澤英樹著『宝生九郎伝』『三十番の整理と型の改正』の中に次のようにある。

前略、その一例を挙げれば、序之舞や中之舞などに右袖を抜く型はその長絹の袖の露が天冠や烏帽下に引掛つた時に後見が立つて直すのが間に合はぬと往々失態を演ずる事があるので、彼は袖を抜く型は凡て巻き上げる型に改正して了つた。これならば醜態を演ずる虞は絶対ない。

序之舞を舞上げへ小柴垣、以下の型とこは、へ風注々たる、と鳥居へ進み、左袖返シ鳥居の奥を見つ、退り、へ懐かしや、とシヤルところ、往時を回顧して一人の感慨が。被之舞となると小書で舞のトメに鳥居前に下尻、扇を置き合撃する。立つとへ此処は元より、と左手で鳥居に掴まり右足を鳥居の外へ一寸出し(写真)て引くと退る。へ神は受けずや、と指シ廻シ、左へ廻つてへまた車に、と常座の方へ兼込拍子、へ火宅の門をや、とつ、と常座へ行きへ出でぬらん、と直つて右袖返シへ火宅の門、で左袖も返シ、右ウケ留

メ拍子を踏んだ。シテは堅実な舞台だったが、本三番目のもつ綱やかな、陰影に富んだ優しさは余り感じられなかった。(1時間49分・10月23日・名古屋能楽堂10月定例公演)

「伊文字」主(アド尊雄)、生活を共にする太郎冠者(小アド融)に「そちが知る通り未だ定まる妻がない」と泣きつて切り出すのも異なところだが、そこが狂言。主、太郎冠者を伴い清水観世音に妻乞いを祈願、靈夢の告げに現われた女(シテ友彦)に太郎冠者を交渉に連れれば、女は「恋しくは問うても来ませ伊勢の国、伊勢寺本に住むを妾(わらは)は」の歌を残し消えてしまう。誰めきれない主、頼りは太郎冠者が覚えている「問うても来ませい」までの言葉。歌の上と察して太郎冠者、歌関を構えて通行人に下の句を継がせるよう主に進言、初めは迷惑した主も己れのため、建てた関所(写真)は当世なら差詰め非常線であろう。先づ引つ掛かつた通行人(シテ友彦、一人二役は本曲だけ)に太郎冠者が委細を話し、無理矢理協力を求めれば、不承ぐの通行人も徐々に言葉遊びを興がり掛つてしまう。歌は調子、リズムのもの、節を付け朗誦するうちに想像力も喚起され、纏れた糸がほぐれる様に一言が繋つてくる面白さ、友彦・融の父子、息の合ったところをみせる。一言が完結すれば互いに名残りを惜しむベソス捨て難く、トメは目出度くシヤギリ留メ。



井上靖浩

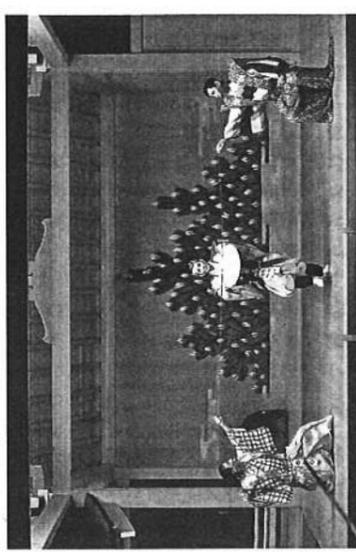
鳳の会「釣針」

「菊の花」主(アド尊雄)、太郎冠者(シテ友彦)の無断外出を叱責すれば、京内参りと知って興を覚

え、許して都の様子を話させる。手討ちを免れ安堵して調子づく太郎冠者、北野天神の雀と鳥はチチと鳴きコカアと鳴くから親子だ、などと軽口を叩き、くだらんと主に一蹴されて語る仕方話。

菊の花を頭に挿して北野から祇園への途次、「さてくおかしき男が」と見合めた上臈が「都には所は無きか菊の花、茫茫頭に咲きぞ乱る」と歌に詠むので、隣隣返しに返歌をしたら、痛く気に入られて祇園へ誘われるが、幕張り巡らした一つで待つも一向に案内されない。勝手に中へ入れば、下女に邪魔扱いされて就いた席は下足端。料理や酒の膳は目の前を素用と飛び出せば追いつけて来る下女。掴み掛かり、出せと迫るのを漸く振りほどき、懐中から緒太の金剛太い鼻緒の太形で丈夫な草履、金剛力士すなわち仁王が履かゆえを返しました、と太郎冠者文字通りの執流。畢竟すに京で盗みをしてかき、しゃあくとしていた太郎冠者の鉄面皮、怒り心頭「退りをれい」の主の一言に弘之の風格、真縁をみる。(18分)

「釣針」独身の主(アド都雄)、太郎冠者(シテ尊造)を伴い西ノ宮へ妻乞いを願願のため参観、靈夢通り釣針が長つかり、太郎冠者に妻を始らせれば、へ釣らうよ釣らうよ見目の好いを釣らうよ(写真)、と賑やかに雑しながられこれ主の好みを探ね、棄天的な気分て因に乗り主を茶化しまくる辺り、普段のなごやかな主従の関係も窺えて可笑しい。最初の釣果に早速盗事を、と主が女人共々切戸へ消えたと、次いで太郎冠者も主が同意の妻探し、被衣の中を覗き込み、次々に五人の品定め。またましのが、と目星を付



鳳の会「伊文字」

けたのがすらりとした長身(後裕)、媚態は示すが恥ずかしがるを強引に被衣を取れば岩園らんや醜女。面喰らう太郎冠者、背後から覆い被さる様に抱きつく(写真)のを振り払い「恐ろしや恐ろしや」と逃げ出す。誰でもよい、と言わんばかりの当節の嬉活とやらを皮肉るか。(37分・10月24日・第52回鳳の会)

「橋弁慶」何事もなく弁慶(シテ穂高)の出、直面、金入沙門帽子・白木口・縞水衣の姿。満願の日、巫刺詠に十禅寺へ出向く旨、伴う従者(ツレ邊)に申し渡せば、化生の者が現われる由、思い止まるよう進言されて一旦はそのつもりになるも、恐れるは無念、逆に退治せん意氣軒昂、志氣を鼓舞するかの早鼓中入。短い前場だがツレとの問答の力強さに傳丈夫のシテ、鋭気をみせる。代つて早打(アド高義)が五糸の橋に出没する怪しい少年の殺傷沙汰の噂を立シャベリに退くと後場。牛若丸(子方・飛翔)白鉢巻・襟赤・紅人厚板着付、白緩被衣の姿で五糸の橋の袂はワキ座、へ通る人を待ち居たる、と二ノ松に現われる弁慶(後シテ)、面大癡見・長靴頭巾・白地丸文尺纏着着付・金地立湧又半切・金地雲板文拾法被(袖折込)に身を固める武装は辺りを払う威容。前後のシテが同一人物で時間差も積々半日、何故面をつけたのか不審、傳丈夫のシテなら沙門帽子を袈裟頭巾に

やろうと牛若丸は弁慶の長刀の柄元をへはつし、と蹴り上げる。へすは親者よ、と弁慶、華々しい斬組になる。縦横無尽、長刀を大きく使ひ弁慶に牛若丸の子方・飛翔君、名は体を現わすとか、太刀捌きも鮮やかに敏捷に渡り合い、繩を舞弄しう弁慶にへ躍り上つて足ら皮肉るか。(37分・10月24日・第52回鳳の会)

「橋弁慶」何事もなく弁慶(シテ穂高)の出、直面、金入沙門帽子・白木口・縞水衣の姿。満願の日、巫刺詠に十禅寺へ出向く旨、伴う従者(ツレ邊)に申し渡せば、化生の者が現われる由、思い止まるよう進言されて一旦はそのつもりになるも、恐れるは無念、逆に退治せん意氣軒昂、志氣を鼓舞するかの早鼓中入。短い前場だがツレとの問答の力強さに傳丈夫のシテ、鋭気をみせる。代つて早打(アド高義)が五糸の橋に出没する怪しい少年の殺傷沙汰の噂を立シャベリに退くと後場。牛若丸(子方・飛翔)白鉢巻・襟赤・紅人厚板着付、白緩被衣の姿で五糸の橋の袂はワキ座、へ通る人を待ち居たる、と二ノ松に現われる弁慶(後シテ)、面大癡見・長靴頭巾・白地丸文尺纏着着付・金地立湧又半切・金地雲板文拾法被(袖折込)に身を固める武装は辺りを払う威容。前後のシテが同一人物で時間差も積々半日、何故面をつけたのか不審、傳丈夫のシテなら沙門帽子を袈裟頭巾に

替えるだけで充分では。西塔の武蔵坊弁慶の荒法師ぶりを強調するか。石突トんと突き、闇を切り裂く長刀の一閃、試して悠揚坦らず出ると、へ癒しや、と牛若丸被衣深々と弁慶に近づき、密と控えるを見咎めて弁慶、立廻に。立廻は闇中の模様、所謂タンマリの趣は、相手を女と思ひ話し掛けるのも、と躊躇を見逃せば、からかつて

秀句になり、それが聞きものと主の気を惹く。それへを順に、「起つてす」「狂ぬです」「去るです」「帰るです」と披露するところ、如何にも猪口才な小三郎に鬱開気。が、口縄とは問われ、はてさて困惑の太郎冠者、何とか誤魔化そうにも堅い主には通じない。拳句は若しゆるれの「ぬらくです」に「あの釜体も無い、退り居れ」と主の怒声、高義に威。(15分)

「百万」拾った童(実ば百万の息、子方・亮多)を伴い童の母・百万を尋ねる僧(ワキ雅介)、大念仏で人の出盛る清涼寺へ。其処で狂おしく隣り念仏に没我の女人は母・百万(シテ光造)と童に指摘され暫く様子を窺ううち無事に母子の再会が果たされる。

先づ子方とワキが出、ワキが門前ノ者(アヒ小三郎)を呼び出し、童の懇みに何か面白し事は、と問えば百万という女物狂を紹介、彼女が現われる間、アヒが戯れに念仏誦をしていると姿を見せるシテ、よう性懲りもなくいつた様子で「あら悪の念仏の節や候」と咎める様に毎(弊付)でアヒの肩を打てば、「蜂が刺いた」と大仰に飛び退くアヒ、束の間のとやかな空気は車之段へ。地(汎・廣明ら)との掛合のへ南無阿弥陀仏の知れるような春の長閑さも次第に狂気めき、毎之段になって狂気は更に、へ古りたる烏帽子、を毎で指すところには、長年の心労に耐え続ける象徴をみる。その様子を眺め、母では、とワキに執り直しを頼む子方にワキはシテと問答。シテの業性が明らかになつてくるところ、シテの心情を知り助ますワキの言葉に、「癒しき人の教化かな」と感謝のシテ、勇気づけられて「法楽の舞を舞ふべきなり」と積極的な力強い詞が利く。クセ中、へかへり三笠山、と舞を指シ、へ佐佐の川を、と橋へ奔るとへ影映す、と水鏡を見る姿の哀感が印象的。へかへり三笠山、と二ノ松から戻り、二日に任せて行く程に、と正中、三ツ拍子に嵯峨野清涼寺に着いた心。四辺の景、この寺の有難さを繋けて地とクセ舞で描写。へあら我が子恋

平成22年度 梅猶会大阪定期能公演

◇第1回 1月17日(日)11時始 大阪能楽会館	仕舞 梅若吉之丞 梅若修一 梅若善久 井戸良祐 越知孝彦
能 高 砂 八段之舞 梅若 善久 狂言 呼 声 善竹 隆平 能 田 村 長時 長床 井戸 和男 仕舞 梅若吉之丞 梅若 徳義 團枝 良雄 梅若 雅一	能 郡 野 梅若 徳義
◇第2回 6月5日(土)12時半始 大阪能楽会館	仕舞 梅若 善高 池内光之助 立花香寿子
能 景 清 梅若吉之丞 狂言 佛 師 善竹 隆司 能 梅 枝 梅若 修一 仕舞 梅若 善高 赤瀬 雅則 梅若 基徳 小川 晴子	能 二 輪 井戸 良祐 仕舞 狸々 梅若吉之丞
◇第3回 9月4日(土)12時半始 大阪能楽会館	能 卷 絹 池内光之助 狂言 無布施経 茂山千之丞 能 井 筒 立花香寿子

「入場料」前券四五百〇〇円(当日五〇〇円)▽学生 前券二五〇〇円(当日三〇〇円)▽年間会員券(4枚綴り)一六〇〇〇円

※各券はすべて自由席。年間券は一度に何枚でも使用可能。申し込みは出演各能楽師、吉田書店、公演会場、ロロソシナケット(エコービル539116)

定期能連絡所 梅若 善高方(〒5601000 84、豊中市新千里南町3-18-112 電話06・68331・7854)

つて頭上に掲げるのが珍しく三ツ拍子踏んだ。御酒に興じるま、舞い戯れる風情は、扇高く掲げスミからワキ前、逆にワキ前からスミへ、爪立ち弧を描く流し足が美しい。浪を蹴り上げるような足はあつたのかどうか。扇を左手に替え、正中安座、扇で面をカザスのは酔眠、へありがたや、と高風(ワキ勝久)へ向き、へ入江に柵れ立つ、でへ扇閉して出ると、へ足元はよろしくと、退り、再び安座、枕ノ扇。へ覚むると思へば、と立ち、トメは事を見込み拍子踏んだ。清新爽やかな披露だった。(40分・11月1日・第30回記念名古屋金巻会)